

佐渡金銀山  
佐渡金山遺跡（上相川地区）調査報告書

二〇〇八  
新潟県佐渡市教育委員会

# 佐渡金銀山

佐渡金山遺跡（上相川地区）調査報告書

2008

新潟県佐渡市教育委員会





# 佐渡金銀山

佐渡金山遺跡(上相川地区)調査報告書





## 序

佐渡市教育委員会では、平成15年から平成18年までの4年間、佐渡金山遺跡上相川地区の測量・分布調査を実施してまいりました。このたび、その調査成果を「佐渡金山遺跡上相川地区調査報告書」としてまとめ、刊行することになりました。

ご承知のように、相川地区は、道遊の割戸・宗太夫間歩など、平成元年まで金銀が採掘された相川金銀山を始め、江戸時代の政治拠点であった佐渡奉行所跡、鉱山都市相川の町並みなどの鉱山に係る多くの国史跡や資産が残されています。しかし、相川金銀山初期の鉱山集落であった上相川地区のように、長い年月の間に遺跡となって埋もれてしまったものも少なくありません。

上相川地区は、戦国時代末期から江戸時代初期にかけて「上相川千軒」と呼ばれる最盛期を迎え、相川金銀山の初期鉱山集落跡の遺跡であり、この集落の成立無くして現在の相川市街地の形成は無かったと言っても過言ではありません。後に初代佐渡奉行として着任した大久保長安によって、現在の相川市街地の原形ともいべき町並みの整備が行われると、上相川の人口は次第に減少していき、鉱山の歴史とともに山野に埋もれていきました。遺跡となった現在では、石垣や斜面を造成した平坦面など、当時の人々が暮らした痕跡が広大な面積で残されており、金銀山はなやかき頃の様子を現在の我々に彷彿させてくれる貴重な遺跡であると言えます。

この遺跡は、研究者の方々や一部の人々に知られていましたが、これまで本格的な調査は行われてきませんでした。このたびの調査を通して、多くの皆様に公開することができるようになったことは非常に喜ばしい限りです。今回の調査成果を通して、今後、佐渡金銀山遺跡の調査がますます発展していくための一助となることを願っています。

最後となりましたが、調査の実施にあたり、ご尽力いただきました関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

平成20年3月

佐渡市教育委員会

教育長 渡邊 剛忠

## 例 言

1. 本書は新潟県佐渡市相川小右衛門町1番地他に所在する佐渡金山遺跡（上相川地区）の平成17年度から平成18年度にかけての調査報告書である。
2. 調査は、国史跡指定の基礎資料を得ることを目的とした遺跡の範囲内容確認のための調査及びトレンチ発掘調査（一部のみ）である。
3. 調査は、平成16年度2月28日までを相川町及び相川町教育委員会が実施し、平成16年3月1日からは、市町村合併により佐渡市教育委員会が実施した。
4. 調査にあたっては、平成16年度から平成18年度に、文化庁の国宝重要文化財等保存整備費補助事業の事業採択を受けた。また、平成15年度から平成16年度の作業員雇用については、新潟県緊急地域雇用創出特別基金事業により、社団法人佐渡シルバー人材センターに業務委託した。
5. 出土・採集遺物と整理に係る資料は、すべて佐渡市教育委員会が保管・管理している。遺物の注記記号は、調査年度ごとに「H17 上相川」「H18 上相川」とし、出土地点・遺構番号・層位などを併記した。
6. 作成した挿図・図版のうち、既存の図を使用した場合にはそれぞれの出典を記した。
7. 本書の編集は、佐渡市教育委員会世界遺産・文化振興課世界遺産調査係が行った。
8. 本書の執筆は宇佐美亮・若林篤男（佐渡市教育委員会、調査員）、小田由美子（新潟県文化行政課副参事）がこれにあたり、編集は宇佐美が担当した。執筆分担は以下のとおりである。  
第Ⅰ章、第Ⅱ章1・2・3 - B・C、第Ⅲ章、第Ⅳ章、第Ⅴ章4、第Ⅵ章…宇佐美亮  
第Ⅱ章3 - A…小田由美子  
第Ⅴ章1～3…若林篤男
9. 発掘調査から本書の作成に至るまで下記の方々から多大なご教示とご協力を賜った。厚く感謝申し上げる。  
安藤正美、大橋康二、小田由美子、春日真実、鎌田直治、上林章造、北村 亮、坂井秀弥、澤田 敦、庄谷邦幸、田中圭一、永松武彦、萩原三雄、本間滯子、村上 隆、本中 眞、八木千恵子、柳平則子、矢野和之、渡邊ますみ、土地所有者の皆様、株式会社ゴールデン佐渡、株式会社TEM研究所、新潟県教育庁文化行政課、文化庁

## 凡 例

1. 本書は本文・挿図・表・図版・写真図版からなる。
2. 引用・参考文献は著者及び発行年（西暦）を文中に〔 〕で示し、巻末に掲載した。
3. 既成の地図を用いた場合は、その出典を記した。
4. 本書で用いた方角は、特に表示のある場合を除いてすべて真北である。磁北は真北から西偏約7度20分である。
5. 地形図・遺構図の縮尺は、原則として図版ごとにスケールを付した。
6. 遺構番号は、調査現場で検出された順序で通し番号を付したものをそのまま用いている。
7. 遺構記号は以下のとおりである。  
S K…土坑      P i t…ピット      S X…性格不明遺構      t…テラス状遺構  
S F…調査区内の道跡      S D…水路跡      No○…石垣
8. 遺構の土色観察・遺物の色調には「新版標準土色帖」〔小山・竹原 1967〕を用いた。
9. 土層断面に表記した水準値は、海拔標高を示している。
10. 遺物は、本文・観察表・挿図・図版・写真図版とも同一の通し番号とした。
11. 実測図は、土器陶磁器類及び土製品・小型の石製品・金属製品は3分の1、銭貨は2分の1、石磨は6分の1で掲載した。
12. 石磨の部位名称には、『佐渡金銀山 相川地区 石造物分布調査報告書』〔佐渡市教育委員会 2005〕を用いた。
13. 遺物観察表のうち、調査区の石製品に関する標記で、破損により全体の数量等が不明のものは、括弧書きで現在確認できる数量を表した。
14. 掲載史料は、原則として原本のまま引用したが、文中で上相川に関係する語句があった場合には傍点を付した。

# 目 次

|                     |    |                   |     |
|---------------------|----|-------------------|-----|
| 第Ⅰ章 序説              | 1  | 4 調査区外でみられる遺構     | 42  |
| 1 調査に至る経緯           | 1  | A 道跡              | 42  |
| 2 調査・整理体制           | 1  | B 寺社跡             | 44  |
| A 調査体制              | 1  | C 番所跡             | 44  |
| B 整理体制              | 3  | 第Ⅴ章 遺物            | 47  |
| 3 調査経過              | 4  | 1 概要              | 47  |
| A 事前調査              | 4  | 2 平成17年度調査区       | 47  |
| B 平成17年度調査経過        | 4  | A 土器・陶磁器類         | 47  |
| C 平成18年度調査経過        | 5  | B 土製品             | 49  |
| D 平成19年度調査経過        | 6  | C 石製品             | 49  |
| 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境        | 7  | D 金属製品            | 50  |
| 1 地理的環境             | 7  | E 銭貨              | 51  |
| 2 佐渡金山遺跡上相川地区の位置と範囲 | 11 | 3 平成18年度調査区       | 51  |
| 3 歴史的環境             | 17 | A 土器・陶磁器類         | 51  |
| A 佐渡島内の鉱山の概要と展開     | 17 | B 土製品             | 55  |
| B 上相川地区の歴史的環境       | 22 | C 銭貨              | 55  |
| C 佐渡金山遺跡周辺に分布する遺跡   | 26 | 4 調査区内の石製品        | 56  |
| 4 上相川地区に関する史料       | 27 | A 石材              | 56  |
| 第Ⅲ章 調査の概要           | 30 | B 分布状況            | 57  |
| 1 各年度の調査方法の概要       | 30 | 第Ⅵ章 考察            | 60  |
| A 平成17年度調査方法の概要     | 31 | 《要約》              | 68  |
| B 平成18年度調査方法の概要     | 32 | 《引用・参考文献》         | 69  |
| 2 基本層序              | 33 | 《関連絵図》            | 71  |
| 3 遺構・遺物の検出状況        | 33 | 卷末資料 上相川地区に関する史料  | 72  |
| 第Ⅳ章 遺構              | 35 | A 鉱山集落上相川の成立      | 72  |
| 1 概要                | 35 | B - 1 上相川の集落規模    | 72  |
| 2 平成17年度調査区         | 35 | B - 2 遊女町の成立      | 110 |
| A テラス               | 35 | B - 3 上相川の御米蔵     | 111 |
| B 石垣・石段             | 36 | B - 4 集落の道・坂普請    | 111 |
| C 道跡                | 36 | B - 5 上相川の絵図作成    | 111 |
| D 窪地                | 37 | C 上相川・六十枚番所       | 112 |
| E トレンチ検出遺構          | 37 | D - 1 上相川の神社      | 113 |
| 3 平成18年度調査区         | 39 | D - 2 上相川の寺院      | 114 |
| A テラス               | 39 | E 上相川の災害          | 120 |
| B 石垣・石段             | 40 | F 上相川の衰亡と奉行所の救済政策 | 121 |
| C 道跡                | 40 | G - 1 上相川の事件・事故   | 125 |
| D 水路跡               | 41 | G - 2 上相川の名主・中使   | 126 |
| E 窪地                | 42 | G - 3 その他         | 127 |

## 挿 図 目 次

|        |                       |        |                      |
|--------|-----------------------|--------|----------------------|
| 第 1 図  | 佐渡島の地質概略図             | 第 11 図 | 平成 17 年度トレンチ配置図      |
| 第 2 図  | 大佐渡地域の地質鉱床図           | 第 12 図 | 調査区内遺構分布図            |
| 第 3 図  | 佐渡島の地形と主な石切場分布図       | 第 13 図 | トレンチ遺構図              |
| 第 4 図  | 佐渡金山遺跡の分布概略図          | 第 14 図 | トレンチ 8 炉跡平面図・断面図     |
| 第 5 図  | 江戸時代の相川市街地及び佐渡金山遺跡分布図 | 第 15 図 | 調査区外 道跡・寺社・番所・石造物分布図 |
| 第 6 図  | 上相川位置図                | 第 16 図 | 絵図及び地形図からみた道跡分布図（1）  |
| 第 7 図  | 佐渡島内鉱山分布図             | 第 17 図 | 絵図及び地形図からみた道跡分布図（2）  |
| 第 8 図  | 上相川寺社分布図              | 第 18 図 | 絵図及び地形図からみた道跡分布図（3）  |
| 第 9 図  | 相川周辺の遺跡分布図            | 第 19 図 | 絵図及び地形図からみた道跡分布図（4）  |
| 第 10 図 | 調査範囲図                 | 第 20 図 | 絵図史料と現地形比較図          |

## 表 目 次

|       |              |       |             |
|-------|--------------|-------|-------------|
| 第 1 表 | 佐渡島内鉱山一覧表    | 別表 6  | 石垣・石段観察表    |
| 第 2 表 | 相川周辺の遺跡一覧表   | 別表 7  | 道跡・水路跡観察表   |
| 第 3 表 | 調査区内石製品種別比率表 | 別表 8  | トレンチ検出遺構観察表 |
| 第 4 表 | 調査区内石製品分布比率表 | 別表 9  | 土器・陶磁器観察表   |
| 別表 1  | 鉱山用語一覧表      | 別表 10 | 土製品観察表      |
| 別表 2  | 上相川年表        | 別表 11 | 石製品観察表      |
| 別表 3  | 上相川街区変遷表     | 別表 12 | 金属製品観察表     |
| 別表 4  | 上相川寺社変遷表     | 別表 13 | 銭貨観察表       |
| 別表 5  | テラス状遺構観察表    | 別表 14 | 調査区内石製品観察表  |

## 図 版 目 次

|      |                  |       |                |
|------|------------------|-------|----------------|
| 図版 1 | 調査区内遺構分布図（テラス）   | 図版 9  | 土器・陶磁器（3）      |
| 図版 2 | 調査区内遺構分布図（石垣）    | 図版 10 | 土器・陶磁器（4）      |
| 図版 3 | 九郎左衛門町跡（部分）遺構分布図 | 図版 11 | 土器・陶磁器（5）      |
| 図版 4 | 調査区内粉成関係遺物分布図    | 図版 12 | 土器・陶磁器（6）      |
| 図版 5 | 調査区内石製品分布図       | 図版 14 | 土器・陶磁器（7）、土製品  |
| 図版 6 | 調査区内製錬関係遺物分布図    | 図版 15 | 石製品（1）         |
| 図版 7 | 土器・陶磁器（1）        | 図版 16 | 石製品（2）、金属製品、銭貨 |
| 図版 8 | 土器・陶磁器（2）        |       |                |

# 写真図版目次

|       |                              |       |                        |
|-------|------------------------------|-------|------------------------|
| 写真 1  | 上相川の絵図（1）                    | 写真 22 | 道跡（4）、水路跡、作業風景         |
| 写真 2  | 上相川の絵図（2）                    | 写真 23 | トレンチ検出遺構               |
| 写真 3  | 上相川の絵図（3）                    | 写真 24 | 調査区外の旧道（1）             |
| 写真 4  | 上相川の絵図（4）                    | 写真 25 | 調査区外の旧道（2）             |
| 写真 5  | 上相川の絵図（5）                    | 写真 26 | 調査区外の遺構 鍛冶沢、大山祇神社跡     |
| 写真 6  | 上相川地区全景                      | 写真 27 | 調査区外の遺構・遺物（1）          |
| 写真 7  | 本町跡遠景、小右衛門町跡の石垣              | 写真 28 | 調査区外の遺構・遺物（2）          |
| 写真 8  | 小右衛門町跡石段、弥左衛門町跡のテラス          | 写真 29 | 調査区外の遺構・遺物（3）、番所跡      |
| 写真 9  | 弥左衛門町跡の道跡・石垣                 | 写真 30 | 幹線道跡、鉾石採掘跡、石磨石材産地（1）   |
| 写真 10 | 九郎左衛門町跡の道跡・テラス               | 写真 31 | 石磨石材産地（2）              |
| 写真 11 | 本町跡（1）                       | 写真 32 | 石磨・扣石                  |
| 写真 12 | 本町跡（2）、小右衛門町跡（1）             | 写真 33 | 石磨・石製品                 |
| 写真 13 | 小右衛門町跡（2）、番屋町跡、<br>弥左衛門町跡（1） | 写真 34 | 出土・採集遺物 土器・陶磁器（1）      |
| 写真 14 | 弥左衛門町跡（2）                    | 写真 35 | 出土・採集遺物 土器・陶磁器（2）      |
| 写真 15 | 弥左衛門町跡（3）                    | 写真 36 | 出土・採集遺物 土器・陶磁器（3）      |
| 写真 16 | 九郎左衛門町跡（1）                   | 写真 37 | 出土・採集遺物 土器・陶磁器（4）      |
| 写真 17 | 九郎左衛門町（2）                    | 写真 38 | 出土・採集遺物 土器・陶磁器（5）      |
| 写真 18 | 九郎左衛門町（3）、九郎左衛門裏町（1）         | 写真 39 | 出土・採集遺物 土器・陶磁器（6）      |
| 写真 19 | 九郎左衛門裏町跡（2）、道跡（1）            | 写真 40 | 出土・採集遺物 土器・陶磁器（7）、土製品  |
| 写真 20 | 道跡（2）                        | 写真 41 | 出土・採集遺物 石製品（1）         |
| 写真 21 | 道跡（3）                        | 写真 42 | 出土・採集遺物 石製品（2）、金属製品、銭貨 |

# 第I章 序 説

## 1 調査に至る経緯

平成9年、佐渡島に残る金銀山の重要性を世界に発信し、その保護と活用を目的として佐渡郡町村会により「佐渡金銀山遺跡調査検討準備会」（以下準備会、平成16年3月市町村合併まで）が発足した。準備会は分野ごとに調査部会が設けられ、旧市町村と協力して各種の調査を進めてきた。準備会及び関連市町村のこれまでの調査成果については、平成14年度に旧相川町教育委員会の『佐渡金銀山 相川町鉦山間歩分布調査・寺社調査報告書』、平成16年度に佐渡市教育委員会の『佐渡金銀山 相川地区石造物分布調査報告書』が刊行されている。この間、旧相川町では佐渡金銀山遺跡の調査推進を目的として、平成15年度に町長部局に佐渡金銀山課が設置されている。

こうした中で、相川地区（旧相川町）の「上相川」と呼ばれる、相川金銀山に係る鉦山集落跡は、その存在が認知されていたにもかかわらず、本格的な調査が行われてこなかったため、遺跡の規模や内容については不明な点が多く、遺跡の周知化も行われていなかった。

このため、旧相川町教育委員会では、平成15年度から平成20年度にかけて上相川地区の学術調査（遺構の分布調査・地形測量・確認調査）計画を立案し、将来的な史跡整備を視野に入れた保存目的の範囲内容確認のため、平成17年度から4年にわたる確認調査を実施することとなった。また、平成16年3月には市町村合併が行われて新たに佐渡市が誕生し、準備会及び旧相川町佐渡金銀山課、相川町教育委員会の調査を引き継ぐ形で、佐渡市教育委員会生涯学習課に佐渡金銀山室が設置され、佐渡金銀山遺跡の調査を全島規模で本格的に実施していくための体制が作られた。その後、平成18年度に組織改編により文化・文化行政を主な用務とする文化振興課として独立し、平成19年度には課名を世界遺産・文化振興課へと変更している。

## 2 調査・整理体制

### A 調査体制

平成15年9月から平成16年3月、平成16年9月から平成17年3月にかけて、分布調査・測量調査を実施する前に現地の立木竹の伐採作業を実施した。平成17年度の現地調査は、7月より11月にかけて実施した。平成18年度の現地調査は、6月から12月にかけて実施した。調査体制は以下に示すとおりである。

#### 平成15年度

|      |   |
|------|---|
| 調査期間 | 平成15年9月1日～平成16年3月31日  |
| 調査主体 | 相川町（町長 弾正俊一〔平成16年2月28日まで〕）<br>佐渡市教育委員会（教育長 石瀬佳弘〔平成16年3月1日から〕） |
| 調査指導 | 文化庁、新潟県教育庁文化行政課   |
| 総括   | 大平三夫（相川町 佐渡金銀山課長〔平成16年2月28日まで〕）                               |



大蔵 勇（佐渡市教育委員会相川事務所 生涯学習課長〔平成16年3月1日から〕）  
 柳平則子（相川町教育委員会 生涯学習課副参事  
 〔平成16年2月28日より佐渡市教育委員会相川事務所 生涯学習課副参事〕）  
 門口 栄（相川町 佐渡金銀山課補佐  
 〔平成16年3月1日より佐渡市教育委員会 生涯学習課佐渡金銀山室長〕）  
 斎藤本恭（相川町 佐渡金銀山課主事  
 〔平成16年3月1日より佐渡市教育委員会 生涯学習課佐渡金銀山室主事〕）  
 調査担当 滝川邦彦（相川町 佐渡金銀山課主事  
 〔平成16年3月1日より佐渡市教育委員会相川事務所 生涯学習課文化行政係主事〕）  
 作業員 安達和彦、安藤信義、伊藤栄次郎、岩崎治作、加賀義治、鎌田直治、根本勇三、  
 萩原広保、橋本正子、渡辺道春〔敬称略、五十音順〕

## 平成16年度

調査期間 平成16年9月1日～平成17年3月31日  
 調査主体 佐渡市教育委員会（教育長 石瀬佳弘）  
 調査指導 文化庁、新潟県教育庁文化行政課  
 総括 大蔵 勇（佐渡市教育委員会相川事務所 生涯学習課長）  
 事務局 柳平則子（同 相川事務所 生涯学習課副参事）  
 門口 栄（同 生涯学習課佐渡金銀山室長）  
 岡部欣也（同 相川事務所 生涯学習課補佐）  
 斎藤本恭（同 生涯学習課佐渡金銀山室主事）  
 調査担当 滝川邦彦（同 相川事務所 生涯学習課主事）  
 作業員 有井勝美、安藤信義、池田満、岩崎利光、鎌田直治、坂上辰巳、椎ミチ子、鈴木 誠、  
 根本勇三、本間政夫、渡辺千鶴子、渡辺道春〔敬称略、五十音順〕

## 平成17年度

調査期間 平成17年7月8日～平成18年11月17日  
 調査主体 佐渡市教育委員会（教育長 石瀬佳弘）  
 調査指導 文化庁、新潟県教育庁文化行政課  
 総括 坂本孝明（佐渡市教育委員会 生涯学習課長）  
 事務局 齋藤義昭（同 生涯学習課佐渡金銀山室長）  
 下谷 徹（同 生涯学習課佐渡金銀山室係長）  
 斎藤本恭（同 生涯学習課佐渡金銀山室主任）  
 調査担当 滝川邦彦（同 生涯学習課佐渡金銀山室主事）  
 調査員 宇佐美亮（同 生涯学習課佐渡金銀山室主事）  
 作業員 阿部喜代江、有井カツミ、安藤信義、伊藤 勲、大坂ヒサ、鎌田直治、北見光磨、  
 北見泰夫、斎藤恭真、齋藤則夫、鈴木 誠、中川つゆ子、松永チヨ、山本清孝、山本裕幸、  
 山本美恵子、渡辺千鶴子、渡辺道春〔敬称略、五十音順〕

## 平成 18 年度

|         |  |
|---------|--|
| 調 査 期 間 | 平成 18 年 6 月 5 日～平成 19 年 12 月 22 日  |
| 調 査 主 体 | 佐渡市教育委員会（教育長 石瀬佳弘〔5 月 7 日まで〕、渡邊剛忠〔5 月 8 日から〕）  |
| 調 査 指 導 | 文化庁、新潟県教育庁文化行政課  |
| 総 括     | 石塚秀夫（佐渡市教育委員会 文化振興課長）  |
| 事 務 局   | 齋藤義昭（同 文化振興課佐渡金銀山室長〔同年 10 月より世界遺産推進室長〕）<br>下谷 徹（同 係長〔同年 10 月より世界遺産推進室係長〕）              |
| 調 査 担 当 | 宇佐美亮（同 主事〔同年 10 月より世界遺産推進室主事〕）   |
| 調 査 員   | 若林篤男（同 主事〔同年 10 月より世界遺産推進室主事〕）   |
| 作 業 員   | 有井勝美、有田和美、安藤信義、大坂ヒサ、鎌田直治、北見光磨、坂本 衛、中川つゆ子、<br>松永チヨ、村尾 優、山本裕幸、山本美恵子、渡辺千鶴子、渡辺道春〔敬称略、五十音順〕 |

## B 整理体制

平成 17 年度の注記・接合・復元・遺物実測・原稿作成は、平成 17 年 11 月から平成 18 年 3 月にかけて相川支所にて実施し、3 月に調査の概要報告書を刊行した〔佐渡市教育委員会 2006〕。平成 18 年度の注記・接合・復元・遺物実測・原稿作成は、平成 18 年 12 月から平成 19 年 3 月にかけて佐渡奉行所事務室にて実施した。平成 19 年度は、主に報告書の原稿執筆・版組を行った。整理体制は以下に示すとおりである。

## 平成 17 年度

|         |  |
|---------|--|
| 整 理 期 間 | 平成 17 年 11 月 24 日～平成 18 年 3 月 31 日                                     |
| 整 理 主 体 | 佐渡市教育委員会（教育長 石瀬佳弘）   |
| 整 理 指 導 | 文化庁、新潟県教育庁文化行政課  |
| 総 括     | 坂本孝明（佐渡市教育委員会 生涯学習課長）  |
| 事 務 局   | 齋藤義昭（同 生涯学習課佐渡金銀山室長）<br>下谷 徹（同 生涯学習課佐渡金銀山室係長）<br>斎藤本恭（同 生涯学習課佐渡金銀山室主任） |
| 整 理 担 当 | 滝川邦彦（同 生涯学習課佐渡金銀山室主事）  |
| 調 査 員   | 宇佐美亮（同 生涯学習課佐渡金銀山室主事）  |
| 作 業 員   | 鎌田直治、上林章造、斎藤恭真、佐々木春美〔敬称略、五十音順〕   |

## 平成 18 年度

|         |                                       |
|---------|---------------------------------------|
| 整 理 期 間 | 平成 18 年 12 月 18 日～平成 19 年 3 月 30 日    |
| 整 理 主 体 | 佐渡市教育委員会（教育長 渡邊剛忠）                    |
| 整 理 指 導 | 文化庁、新潟県教育庁文化行政課                       |
| 総 括     | 石塚秀夫（佐渡市教育委員会 文化振興課長）                 |
| 事 務 局   | 齋藤義昭（同 世界遺産推進室長）<br>下谷 徹（同 世界遺産推進室係長） |

整 理 担 当 宇佐美亮（同 世界遺産推進室主事）  
調 査 員 若林篤男（同 世界遺産推進室主事）  
作 業 員 有田和美、大坂ヒサ、鎌田直治、坂本 衛、佐々木春美、中川つゆ子、松永チヨ、  
村尾 優、山本裕幸〔敬称略、五十音順〕

### 平成 19 年度

整 理 期 間 平成 19 年 4 月 1 日～平成 20 年 3 月 31 日  
整 理 主 体 佐渡市教育委員会（教育長 渡邊剛忠）  
整 理 指 導 文化庁、新潟県教育庁文化行政課  
総 括 石塚秀夫（佐渡市教育委員会 世界遺産・文化振興課長）  
事 務 局 齋藤義昭（同 世界遺産・文化振興課補佐）  
下谷 徹（同 世界遺産調査係長）  
金子雅晃（同 世界遺産推進係長）  
須藤洋行（同 世界遺産推進係主事）  
整 理 担 当 宇佐美亮（同 世界遺産調査係主事）  
調 査 員 若林篤男（同 世界遺産調査係主事）

## 3 調査経過

### A 事前調査

平成 15 年度から 16 年度にかけて、分布調査・地形測量の事前準備として上相川地区及びその周辺部のなかで地権者の同意を得られた地域の立木竹の伐採作業を行った。上相川地区に係る江戸時代の絵図、明治時代の地籍図等の資料調査を行ったうえで、当該範囲の分布調査を実施した。これにより上相川地区の範囲が確定し、遺跡を構成する遺構のおおまかな分布状況が判明した。この調査成果をもとに、周知の埋蔵文化財包蔵地である「佐渡金山遺跡」の一部として、同遺跡の範囲拡大を行い、周知化を図った。その後、調査の基礎資料とするために平成 16 年度に株式会社オリスに委託して、当該範囲の航空撮影による地形測量を実施し、縮尺 500 分の 1 及び 1,000 分の 1 の地形図を作製した。

### B 平成 17 年度調査経過

平成 17 年度の確認調査は、7 月から調査を開始し 11 月に終了した。調査対象は、江戸時代に本町、小右衛門町と呼ばれた範囲で、約 12,400 m<sup>2</sup>を調査対象とし、291 m<sup>2</sup>のトレンチ発掘調査を伴う確認調査を実施した。調査の結果、建物の存在を示す遺構は見つからなかったが、未使用で廃棄されたと考えられる精錬炉跡や土器、陶磁器、銭貨、煙管などの遺物が出土している。また、調査期間中の平成 17 年 8 月 1 日には、研究者・有識者による「佐渡金銀山遺跡調査委員会」が設置され、上相川地区を含む佐渡金銀山遺跡 全体の調査への指導を受けることが可能となった。

- 6 月 16 日 佐金室第 20 号により県教育委員会宛で発掘調査の着手報告（法第 99 条）を提出。
- 7 月 8 日 作業員雇用開始。調査区内の樹木伐採を開始。
- 8 月 1 日 樹木伐採・清掃の完了したテラスの写真撮影を開始。検出した石造物・石製品の撮影を

開始。

- 8 月 24 日 県文化行政課北村副参事が来跡、調査指導を受ける。第 1 回佐渡金銀山遺跡調査委員会開催を開催。
- 8 月 25 日 萩原三雄、庄谷邦幸、村上隆調査委員が来跡、調査指導を受ける。
- 9 月 1 日 調査区の樹木伐採作業が完了。
  - 9 日 トレンチを設定して遺構確認作業を開始。
  - 13 日 トレンチ 1 にてNo.44 石垣を検出。
  - 28 日 トレンチ 10 にてNo.47 石垣を検出。
- 10 月 3 日 トレンチ 8、9 にてピット各 1 基を検出。
  - 14 日 県文化行政課春日真実主任調査員が来跡、調査指導を受ける。サブトレンチ 1 でピット 1 基を検出。
  - 17 日 トレンチ 8 にて土坑 4 基・ピット 7 基を検出。トレンチ 9 にて土坑 2 基、ピット 2 基を検出。
  - 21 日 トレンチ 5 にて土坑 1 基を検出。サブトレンチ 3 にてNo.45 石垣を検出。トレンチ 6 にてNo.46 石垣を検出。
  - 26 日 トレンチ 9 にてピット 1 基を検出。
  - 31 日 トレンチの埋め戻し作業を開始。
- 11 月 2 日 調査区で検出された石製品の分布図を作成。
  - 15 日 トレンチの埋め戻し作業が完了。撤収準備を開始。
  - 17 日 現地調査終了。
- 11 月 24 日 整理作業を開始。(3 月 31 日まで)
- 12 月 13 日 佐金室第 43・44 号により新潟県佐渡西警察署長宛てで遺物発見届、県教育委員会宛てで遺物保管証を提出。佐金室第 45 号により県教育委員会宛てで発掘調査の終了報告を提出。

## C 平成 18 年度調査経過

平成 18 年度は、文化庁の指導により、当初 4 ヶ年計画であった調査期間を 2 ヶ年に短縮し、発掘調査を行わずに樹木等の下草を伐採したうえで、地表面で確認のできる遺構の調査を主体とする分布調査へと計画を変更した。これに伴い、調査面積を拡大し、調査は江戸時代に九郎左衛門町、弥左衛門町、九郎左衛門裏町とよばれた場所を対象とした。平成 18 年 6 月から開始し、同年 12 月に終了した。調査対象面積は約 22,500 m<sup>2</sup>である。

- 5 月 10 日 佐教文第 71 号により県教育委員会宛てで発掘調査の着手報告（法第 99 条）を提出。
- 6 月 5 日 作業員雇用開始。樹木伐採を開始する。テラス・石垣・道跡等の遺構について、発見順に遺構番号を付ける。
- 7 月 18 日 県文化行政課小田副参事が来跡、調査指導を受ける。
  - 30 日 日本鉱業史研究会による現地視察。
- 8 月 10 日 文化庁記念物課坂井秀弥主任文化財調査官による現地視察。
- 8 月 23 日 第 1 回佐渡金銀山遺跡調査委員会を開催。
- 8 月 24 日 萩原三雄、村上隆委員が来跡、現地指導を受ける。
- 9 月 20 日 佐渡地域振興局長による現地視察。

- 10 月 5 日 高野市長による現地視察。現場作業終了。
- 10 日 渡邊教育長、石塚課長による現地視察。
- 13 日 文化財保存計画協会矢野和之氏による現地視察。
- 19 日 報道関係者への現地公開。
- 24 日 文化財保護指導員による現地視察。
- 28 ～ 29 日 現地説明会開催。のべ 215 名の参加者が来跡。
- 11 月 1 日 第 2 回佐渡金銀山遺跡調査委員会が開催。
- 2 日 文化庁記念物課岩本健吾課長による現地視察。
- 20 日 佐渡市教育委員による現地視察。
- 12 月 12 日 株式会社セビマスによる石垣等の写真解析図化に伴う写真撮影を開始。(～ 16 日まで)
- 18 日 整理作業開始。(3 月 30 日まで)
- 20 ～ 22 日 テラス・石垣等の遺構平面図を作成。
- 1 月 10 日 佐教文第 326・327 号により新潟県佐渡西警察署長宛てで遺物発見届、県教育委員会宛てで遺物保管証を提出。  
佐教文第 325 号により県教育委員会宛で発掘調査の終了報告を提出。

## D 平成 19 年度調査経過

平成 19 年度は、確認調査を実施していないが、調査報告書作成のための指導を受けた。また、史跡指定のための資料とするため、上相川地区及び上相川の成立に関連すると想定される慶長 6 年発見と伝承がある道遊の割戸・父の割戸を含む周辺部を併せた地形測量を行い、平成 16 年度に作成した地形図との合成を行った。

- 4 月 9 日 萩原三雄委員が来跡、現地指導を受ける。
- 4 月 20 日 文化庁にて坂井主任調査官より報告書作成における指導を受ける。
- 4 月 26 日 県世界遺産登録推進室による現地視察。
- 5 月 12 日 金銀銅サミットに伴い、泉田裕彦新潟県知事、島根県大田市長、愛媛県新居浜市長、佐渡市長が現地を視察。
- 5 月 15 日 文化財保存計画協会による現地視察。
- 5 月 28 日 国立科学博物館松原聰氏による現地視察。
- 5 月 29 日 県教育次長、文化行政課による現地視察。
- 6 月 1 日 県埋蔵文化財講座に伴う現地説明会。
- 7 月 2 日 上相川地区周辺部を含めた地形測量を開始。(10 月 30 日完了)
- 8 月 2 日 文化庁本中主任文化財調査官による視察。
- 9 月 24 日 上相川現地説明会を開催。

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

### 1 地理的環境

佐渡島は、本州、北海道、九州、四国を除くと、沖縄本島に次ぐ大きさの島である。新潟県海岸（角田岬）より32km西の日本海上に位置し、面積は約855.11km<sup>2</sup>、周囲の海岸線は281.7kmを測り、山林と雑種地が島面積の80%以上を占めている。地勢は、大まかに山地、海岸段丘及び低地・台地を含む平野から成り、地形要素の複合という点で本州とほぼ同一の性質を持つことが特徴である〔式1964〕（第1図）。島中央には国中平野が広がり、北に大佐渡山脈、南に小佐渡山地が並行する形でそれぞれ長軸をNE－SW方向に延ばしている。大佐渡山脈は、標高1,173mの金北山をはじめとする1,000m近い比較的高い山並みが連続し、小佐渡山地は、標高645mの大地山をはじめとする比較的低い山並みが連続する。

佐渡島で確認される最古の岩石は、今からおよそ2～3億年前の古生代後期のものであるが、地層の大部分は火山によって形成された火山岩類及び日本海の海底で堆積した地層が重なって形成されたものである。このうち、相川金銀山が立地する大佐渡山脈を構成する地質は、古第三紀・漸新世（2300万年前）から新第三紀中新世初期（1800万年前）に堆積したグリーンタフである。また、その他の岩石として、凝灰岩、玄武岩、硬質頁岩がみられる。グリーンタフは、デイサイト（石英安山岩）や安山岩などの溶岩類とそれらの火砕岩からなる火山噴出物を主体とし、下位から入川層・相川層・真更川層・金北山層の順に堆積しているが、これらをまとめて相川層群とよんでいる。大佐渡山脈に分布する金銀鉱床の多くは、この相川層群を貫く熱水性石英脈による熱水性鉱脈鉱床（鉱脈型鉱床）で、金銀鉱床が存在する地層は、入川層（大立層）・相川層に限られる〔坂井・大場1977〕（第2図）。相川金銀山では、こうした鉱脈中に金・銀が多く集まるのが特徴で、石英岩脈の中に縞状となって混入している。こうした金銀を含有する鉱脈を俗に「銀黒<sup>ぎんぐろ</sup>」などと呼称している。

日本海が誕生した約1,700万年前には、海浸期に伴う砂岩・礫岩・シルトを主体とする堆積岩からなる下戸層・鶴子層・中山層が形成され、これらの地層が隆起運動により変形しながら海上に現れ、佐渡島が誕生したと考えられる。佐渡島が現在とほぼ同じ形状となったのは、今からおよそ数十万年前とされ、第四紀中頃になると隆起運動が活発化して、高い山地が形成され、氷期・間氷期の繰り返しによる海水面の上下運動が重なり、海岸段丘が形成されていった。こうした段丘面は、現在5段まで確認されている。国中平野は中央部が沖積層であるが、周辺部には低位段丘、中位段丘がよく発達し、加茂湖はこの中位段丘によって囲まれている。また、平野西側には真野湾に沿って八幡砂丘が発達しており、こうした砂丘列が8列確認されている〔新潟県教育委員会2000〕。

相川地区（旧相川町）は、真更川から北の部分を除く大佐渡山脈西側斜面と、南部の二見半島の大部分を含んでいる。外海府と呼ばれる海沿いの地形は、連続的に発達している海岸段丘で、海拔200m以下の部分がこれにあたる。段丘面は5～6段あり、互いに段丘崖によって隔てられている。最も下位の崖下には、隆起波食台等に由来する小規模な平地が付随し、臨海の集落とこれらを結ぶ道路のほとんどがここに立地する。大佐渡山脈の斜面を下る河川は、主な河川で38本を数え、いずれも直線的な必従谷で比較的短小で、段丘地を塊状に分断している。段丘上は、河川の上流から用水が引かれ、よく開田されている。二見半島









の七浦海岸を含め外海府海岸・大佐渡の山稜部は「佐渡弥彦国定公園」に、また外海府の海岸は「佐渡海府海岸」として国の名勝に指定されているが、主に火山岩から成る複雑な構成であり、これに激しい海食作用が加わって、様々な変化をもたらされている〔式 2002〕。また、外海府海岸には様々な火成岩が見られ、江戸時代以降、春日崎、下相川、片辺・鹿野浦海岸等に多くの石切場が点在し（第3図）、石製品の石材として利用されている。集落は、海岸沿いの海成段丘面上や河川によってわずかに形成された扇状地上に立地し、耕作地は主に集落背後の海成段丘面上に広がっている。海成段丘面は河川によって深く挟まれて独立し、舌状台地の形を呈して集落の背後に迫っている。これらの舌状台地から始まる尾根の上を南東へ進むと大佐渡山脈の主稜線を越えて国中平野へ向かうことができる。相川湾の入江もこうした侵食による堆積がある程度進んでいたと推測されるが、現在見られるものの多くは江戸時代以降における埋立てによるものである〔佐藤 1994〕。相川湾より南は二見半島と呼ばれ、外海府地域とは区別されている。第四紀の中頃に活発化した隆起運動の影響が大きい区域にあたり、段丘地形がよく発達している〔小林・神蔵 1993〕。半島は大佐渡山脈の南端にあることから、集落背後の山は緩やかで、灌漑設備が整ってから、内陸深くまで耕作地が広がっている。ここも地形の多くが台地と急斜面からなっており、集落は海岸沿いの海成段丘面に立地している。河川による侵食は、外海府地域ほど大きくない。

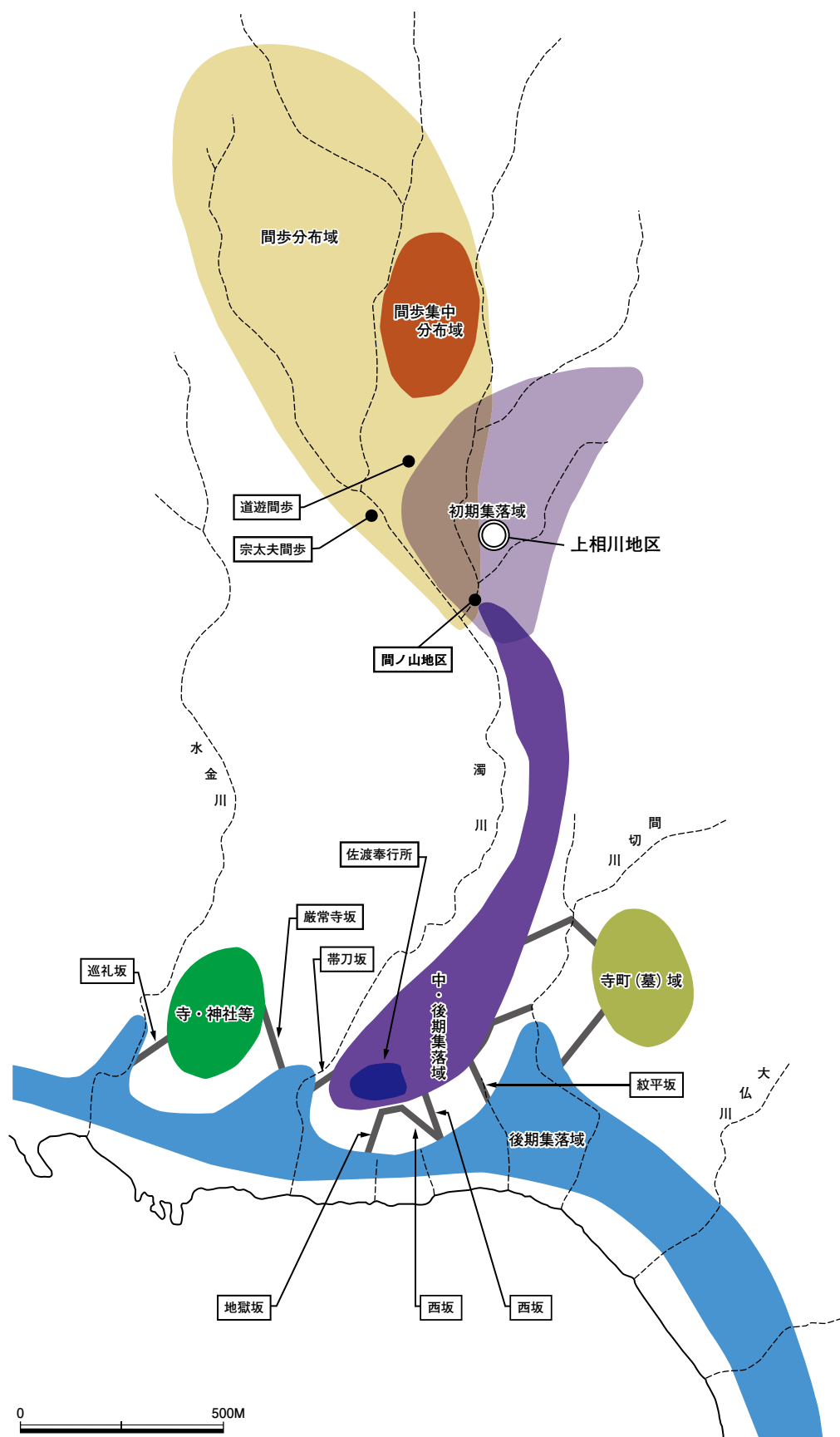
## 2 佐渡金山遺跡上相川地区の位置と範囲

相川の市街地は、海岸部の低地に沿って南北に延びる「下町」地域と、緩い傾斜をもった段丘上の東西に延びる「上町」地域からなり、T字状を呈している。さらにここより東方の山奥に「山の内」地域があり、かつて上相川や間ノ山と呼ばれる鉱山集落跡があった（第4・5図）。佐渡金山遺跡は、これら上町地域や山の内地域、さらに北東へと伸びる鉱床地域を内包した遺跡である。

佐渡金山遺跡は、道遊の割戸、父の割戸、大立堅坑、青盤間歩等を擁する鉱床地域から濁川（北沢）沿いに扇状に広がり、水金川と間切川（南沢）によってそれぞれ隔てられた2つの尾根の先端近くまでが周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲となっている。2つの尾根のうち濁川と間切川によって形成された尾根で、上町台地と呼ばれる南側の尾根は、近世初期～前期に形成される相川市街域と重なる部分が多く、尾根の先端部には国史跡である佐渡奉行所跡が立地する。また、株式会社ゴールデン佐渡の所有する佐渡金山第3駐車場付近は清右衛門町と呼ばれ、周辺一帯は間ノ山と呼ばれた鉱山集落跡である。ここより東側一帯に、上相川と呼ばれた初期鉱山集落跡があり、北東には国史跡である宗太夫間歩を始めとする鉱石採掘跡が集中している。

上相川地区は、佐渡金山遺跡の範囲内に含まれ、佐渡市上相川町、相川小右衛門町、相川柄杓町、相川奈良町に所在する。同地区は、濁川左岸の標高150～250mの高位段丘及びその斜面に立地し、東西約800m、南北約300m、総面積は約20haを測る。集落の廃絶後は山野となり、樹木が繁茂している場所も多いため、集落存立時の景観は大幅に変貌しているが、現在もテラス状遺構や石垣等の遺構、石磨や<sup>いしうす</sup>たたき<sup>たたき</sup>等の鉱山に関連する遺物が地表に散乱し、往時の町並みをしのぶことができる。

上相川地区の町域は、時期によって増減がみられるが、現地形・絵図・過去の土地更正図・地字名等から推測することができる（第6図）。周囲の沢が深いため、これを間ノ山等の他地域との境界としているようである。同地区の範囲をみると、北端には下流部の間ノ山地区で濁川（北沢）へと流入する右沢、またその右沢へ流入する丹波沢が流れ、さらに北側に国史跡の佐渡金山遺跡「道遊の割戸」を含む尾根がNW



第4図 佐渡金山遺跡の分布概略図（〔相川町教育委員会 1994〕より転載）





| 凡 例                |              |                 |              |                  |       |
|--------------------|--------------|-----------------|--------------|------------------|-------|
| — (orange) —       | 間歩分布地域       | — (purple) —    | 中・後期集落城 (上町) | — (green) —      | 寺町域   |
| — (light purple) — | 初期集落地域 (山之内) | — (blue) —      | 後期集落城 (下町)   | — (dark green) — | 寺・神社域 |
| — (black) —        | 佐渡金山遺跡範囲     | --- (black) --- | 上相川地区範囲      | ◎                | 国指定史跡 |

第5図 江戸時代の相川市街地及び佐渡金山遺跡分布図  
(国土地理院2万5千分の1地形図相川を任意に縮小して改変)



－S E方向に走り、斜面には間歩や狸穴と呼ばれる複数の鉱石採掘跡が残されている。江戸時代の史料から周辺部にある北沢や右沢の沢沿いに鉱山集落があったことがわかっている。また、右沢と丹波沢が合流する現在の右沢浄水場東側は、絵図等の資料から六十枚番所跡の推定地と考えられ、ここより上流部の右沢沿い斜面に、六十枚間歩をはじめとする鉱石採掘跡が多く残されている。これらの採掘跡は、上相川地区の存立基盤を最も端的に示すものである。東端には、右沢浄水場付近で右沢に流入する丹波沢が流れ、大佐度山脈より続く青野嶺の急斜面によって隔てられている。東端に近い場所に大山祇神社跡がある。南東端には上相川番所跡推定地と考えられるテラス状遺構・石垣があり、青野嶺を通して真野湾側の佐和田地区にある鶴子銀山跡の屏風沢へ至る西五十里道などの道路跡が残る。西五十里道は、相川と国中を結ぶ重要な幹線道路として利用されてきたもので、一部湮滅している部分があるが、旧道の面影を残している。南端には、下流部の間ノ山で濁川（北沢）へと流入する桐の木沢が流れる。西端は、急峻な斜面によって隔てられ、この斜面を下って西に進むと濁川（北沢）沿いに小さな平坦地があり、上町・下町地域へと繋がる道路跡がある。この濁川沿いの平坦地にも間ノ山と呼ばれた鉱山集落があって、上相川地区と区別されていた。上相川の集落内には、鍛冶沢が流れる。鍛冶沢は、上相川の東端、桐の木沢から分かれ、同地区内を西へ進み、途中で北西へ向きを変えて濁川（北沢）へ流入していたようであるが、近現代の開発に伴う掘削・盛土のため、下流部分は湮滅している。鍛冶沢と桐の木沢に挟まれた場所に、E－W方向に走る細い尾根がある。尾根上には専念寺、玄德寺、法花寺の寺院跡が連なり、尾根に登る石段が残る。鍛冶沢の北側は、比較的なだらかな尾根があり、上相川の東端へ続く。この尾根から、右沢、丹波沢へと落ち込む斜面は急峻であるが、丹波沢と右沢の合流点付近は、比較的平坦である。

江戸時代に街区を形成していた部分は、現在、ほとんどが山林となり、主な樹種は、タブ・シロダモ等の広葉樹、孟宗竹、篠竹の他、植林された杉等である。

上相川における街区は、現在16町が特定されている（第6図・史料11、13）。現在の佐渡金山第3駐車場の南側に間ノ山と上相川の町境となる茶屋坂と呼ばれる坂があって、そこから登ると上相川地区の奈良町・茶屋町へ至る。そこから山上へ向かい相川町、九郎左衛門町、弥左衛門町と続き、山之神町へ至る。この南側を並行する形で、相川町より山上へ向かい外記町、床屋町、鍛冶町、田町と続き、山之神町へ至る。山之神町・鍛冶沢町から南へ登ると上相川番所があり、鶴子銀山方面へ向かう。相川町から北に向かうと小右衛門町、本町と続き、本町から右沢の六十枚番所に向かう間に番屋町があって、そこから下流部にある間ノ山地区の宗徳町へ向かう道があった。茶屋町から南の法花寺跡に向かうと柄杓町があり、間ノ山地区の次助町へと向かう道があった。九郎左衛門町と本町の間には九郎左衛門裏町があり、田町・鍛冶町から南へ向かうと鍛冶沢町がある。

### 3 歴史的環境

#### A 佐渡島内の鉱山の概要と展開（第7図・第1表）

佐渡島には、多様な鉱物に関わる多くの鉱山遺跡が分布している。一般的に佐渡は「金の島」としてイメージされているが、金のみでなく、銀も多量に採掘されていたことは案外知られていない。また、銅の採掘も行われ、まさに鉱山の島といえる。大小合わせて14もの金銀鉱床が存在し〔神蔵・小林1993〕、多くの鉱山遺跡が確認されている。

佐渡では平安時代以降、こうした鉱物の採掘が継続的に行われ、各時代の採掘遺跡が残っているが、鉱

物の採掘形態も時代によって大きく変遷し、長い間の鉱山技術の変遷を目の当たりにできる希有な島といえる。以下に、代表的な金銀鉱山を概観する。

### 西三川砂金山

西三川砂金山は佐渡市笹川（真野地区）を中心とした地域に所在し、大規模な砂金採取が行われていた。

歴史的に最も古い鉱山技術形態は砂金採取で、平安時代末期に成立したとされる『今昔物語集』の巻二六、鎌倉時代初期の成立とされる『宇治拾遺物語集』巻第四に佐渡の産金についてほぼ同じ内容の記述がある。『今昔物語集』では、能登の国司の命令で、製鉄集団の長が佐渡で金を採取したという記述があり、国司が藤原実房に比定されることから、11世紀前半頃の様子と考えられる〔橘 1964〕。製鉄集団との関連から海岸部の砂鉄採取と結びついていたと考えられ、採取が行われた場所は、西三川砂金山の海岸部周辺地域であろうと推定されている〔小菅 2000、真野町史編纂委員会 1976〕。室町時代の永享6年（1434）には佐渡に流罪となった世阿弥が著した『金鳥書』に佐渡を「こがねの島」とする記述があり、砂金採取が行われていた証明と考えられる。平安時代から中世後半までの砂金採取の遺構は確認されていないが、砂金採取という技術の性格上、遺構は残りにくいものと考えられる。

中世後半からは砂金採取が盛んに行われるようになったと考えられ、文献等に散見されるようになる。「寛正元年（1460）西三川砂金山始まる。その後79年中絶して、文禄2年（1593）に再び取り立てる」と『佐渡相川志』に記録されている〔真野町史編纂委員会 1976〕。豊臣秀吉が天正17年（1589）、上杉景勝にあてた書状で、西三川の砂金についての記述があり、秀吉の「黄金太閤」としてのイメージ作り〔山室 1992〕には、西三川砂金山の砂金も大きな役割を果たしていたものと考えられる。

江戸時代に入り、増産をはかるため、砂金を含む山を掘り崩し、上流から水路を開削し、大量の水を使った砂金採取が行われた。崩落した山肌、水路や水を貯めた堤の跡が笹川を中心とした一帯に多数分布し、独特な景観を形成している。大山師味方但馬が開設した延長約12kmの水路「金山江」が部分的に残されている。

また、その技術は伝播し、北海道渡島半島に安政年間に西三川の技術者が招聘された事が、西三川の金子勘三郎家文書によって明らかになっている〔矢野 1989〕。西三川砂金山は明治5年（1872）まで操業が続けられ、その後も個人的な砂金採取が行われたことによって、長く技術が伝承された。

新穂から柿野浦に抜ける古道清水寺越えにも柿野浦木金山が存在し、新穂銀山開発以前に砂金採取が行われていたことが想定されていたが、近年株式会社ゴールデン佐渡所蔵資料の中から柿野浦木金山の絵図が発見され、西三川砂金山と同様に山を崩し、水を流して砂金採取を行っている状況を確認することができた。

### 鶴子銀山

佐渡市沢根、沢根五十里（佐和田地区）、相川羽田村（相川地区）に所在する佐渡で最初に本格的に稼がれた銀山である。相川金銀山が発見されるまでは佐渡最大の銀山であった。

16世紀の大航海時代に、南米のポトシ銀山をはじめ大規模な銀山開発が行われ、世界の産銀状況は大きく変化した。同時に中国との交易のために日本の銀鉱山も大開発され、当時世界の産銀の約3分の1が日本産であったと推定されている〔島根県教育委員会 1999〕。石見銀山や生野銀山が開発され、佐渡にもその余波が及び、多くの山師、技術者が各地の鉱山から佐渡に入っている。天文11年（1542）大佐渡山脈の低丘陵に鶴子銀山が開発された。大規模な露頭掘りや樋追い掘りによって銀・銅の採掘が行われ、遺構が広範囲に分布している。天正17年（1589）の上杉景勝の佐渡攻略は鶴子などの鉱山が目的であったと

されている。攻略後、鶴子銀山には陣屋が置かれ代官が任命された。

文禄4年（1595）には石見銀山の技術者によって当時の最先端技術であった坑道掘りが導入され、産銀量が飛躍的に増大し、「鶴子千軒」とよばれる繁栄期を迎えた。また、銀山に物資を搬入するために沢根の港が栄え、有力な廻船問屋が軒を連ねたとされている。しかし、相川金銀山の開発が本格化すると、寺院や大工町などが相川へ移転していき、鶴子銀山の鉱山集落は衰退していった。

鶴子銀山は相川金銀山と同様に、明治以降近代的な設備や技術の導入により再開発が行われ、昭和21年（1946）まで操業が続けられた。

### 新穂銀山

佐渡市新穂（新穂地区）に所在する、鶴子銀山に続いて天文12年（1543）以後、開発が行われた佐渡第2の銀山である。本格的な開発は慶長9年（1604）、徳川家康によって佐渡代官として大久保長安が任命されて以後行われた。江戸幕府によって経営され、慶長・元和・慶安にかけて繁栄し、慶安2年（1649）の大盛りを最後に衰退した。露頭掘り跡と樋追い掘り坑道が混在し、百枚間歩と呼ばれる初期の大規模な坑道跡も確認されている。新穂銀山は滝沢銀山とも呼ばれ、その繁栄は「滝沢千軒」と称された。銀山のにぎわいによって市が設けられ新穂市町が成立し、現在も新穂市街地として町並を残している。17世紀前半の最盛期には相川金銀山の大山師であった味方但馬も新穂銀山で稼ぎ、法華信者であった味方は根本寺を菩提寺とし、現在の大伽藍を寄進したとされる。新穂銀山に物資を供給した港は夷湊（現在の両津）と考えられ、『佐渡風土記』元和8年（1622）の諸番所役の納まり額によれば、相川、沢根に次ぐ額が記入され、大規模な湊であったことが伺える。夷湊からは内水面交通によって潟上まで運ばれたと考えられている〔新穂村史編さん委員会1976〕。新穂銀山は近世前半で衰退し、後には砥石を産出するようになった。

### 相川金銀山

佐渡市銀山町・下相川他（相川地区）に所在する江戸幕府の財政を支えた日本最大の金銀山である。鶴子銀山の開発を端緒として、鶴子銀山から山の稜線を越え、金銀鉱床の開発が進み相川金銀山が発見された。最初に開発されたのは六十枚間歩で、近接する傾斜地に上相川と呼ばれる初期の鉱山町が形成され、「上相川千軒」と呼ばれ、非常に栄えた。石組みと平坦面によって計画的に造成された宅地・道路・水路の跡などが遺構として現在も確認でき、吉野造りと呼ばれる斜面を利用した家並みが立ち並んでいたと考えられている。最も高所に鉱山の神である「大山祇神社」が祀られ、移住した人々とともに勧請された寺院跡も残る。当時の絵図も多数残っており、道路跡や寺社などと対比が可能である。

その後、有力な鉱脈が多数発見され、佐渡に空前のゴールド・シルバーラッシュをもたらした。国内最大級の露頭掘り跡である道遊の割戸や、国指定の宗太夫坑をはじめ、長大な坑道が多数残されている。慶長6年（1601）には、徳川家康によって佐渡金銀山は直轄地となり、佐渡は天領となった。

慶長8年（1603）、相川に本格的な町立て（都市計画）を試みた大久保長安によって、上相川から現在の相川に中心地が移り、陣屋（現在の佐渡奉行所）を中心として商人町の京町、鉱夫が居住した大工町、各種職人町などを計画的に形成した。その後、17世紀前半の最盛期には人口約5万人と推定される我が国屈指の鉱山都市が誕生することとなった。

日本の金銀山は16世紀の後半から本格的な開発が行われ、17世紀前半に繁栄し、以降急速に衰退する。相川金銀山も同様な盛衰をたどるが、大規模な南沢疎水道の開発などの国家的なプロジェクトによって、盛衰を繰り返しながらも、幕末まで江戸幕府の財政基盤であり続けた。幕末に江戸幕府は外国人技師を佐渡に派遣し、鉱山の再開発を図ったが、明治維新を迎え、明治新政府に引き継がれていった。明治時代に





第7図 佐渡島内鉱山分布図（[小菅 2000] を改変）

| No | 地区名 | 鉱 山 名   | 鉱山種別  | 時 代        | 文献史料 | 絵図資料 | 備 考                          |
|----|-----|---------|-------|------------|------|------|------------------------------|
| 1  | 両津  | 白瀬銀山    | 銀山    | 江戸         | 有    |      |                              |
| 2  | 両津  | 久知川鉱山   | 不明    | 不明         |      |      |                              |
| 3  | 両津  | 柿野浦木金山  | 砂金山   | 中世～江戸?     | 有    | 有    |                              |
| 4  | 両津  | 岩首木金山   | 砂金山   | 中世～江戸?     |      |      |                              |
| 5  | 両津  | 岩首鉱山    | 不明    | 不明         |      |      |                              |
| 6  | 両津  | 両尾鉱山    | 不明    | 不明         |      |      |                              |
| 7  | 両津  | 片野尾鉱山   | 不明    | 不明         |      |      |                              |
| 8  | 両津  | 月布施鉱山   | 不明    | 不明         |      |      |                              |
| 9  | 両津  | 野浦鉱山    | 不明    | 不明         |      |      |                              |
| 10 | 相川  | 相川金銀山   | 金銀銅山  | 江戸～平成元     | 有    | 有    | 県遺跡台帳「佐渡金山遺跡」、一部国指定史跡あり。     |
| 11 | 相川  | 茶屋平金山   | 金銀山   | 江戸         | 有    | 有    | 後に相川金銀山鉱区となる。                |
| 12 | 相川  | 小田銀山    | 銀山    | 江戸         |      | 有    |                              |
| 13 | 相川  | 田野浦銀山   | 金銀山   | 江戸・近代～昭和18 | 有    | 有    | 県遺跡台帳「小野見鉱山遺跡」、近代以降「高千鉱山」    |
| 14 | 相川  | 入川銀山    | 銀鉛山   | 江戸・近代～昭和18 | 有    | 有    | 入川鉛山とも。近代以降「高千鉱山」            |
| 15 | 相川  | 孫次郎鉛山   | 鉛山    | 江戸・近代～昭和18 | 有    | 有    | 入川鉛山の一部。近代以降「高千鉱山」           |
| 16 | 相川  | 立島鉱山    | 金銀山   | 江戸・近代～昭和18 | 有    | 有    | 近代以降「高千鉱山」                   |
| 17 | 相川  | 鹿野浦鉛山   | 金銀銅鉛山 | 江戸・近代～昭和18 |      | 有    | 近代以降「高千鉱山」                   |
| 18 | 相川  | 片辺鉱山    | 銅鉛山   | 江戸?        |      |      | 与宗鉱山・松尾鉱山とも                  |
| 19 | 相川  | 戸地鉱山    | 銀山?   | 江戸・近現代?    |      |      | カッコメ鉱山・ウノクソ鉱山とも              |
| 20 | 相川  | 戸中鉛山    | 金銀銅鉛山 | 江戸・近現代?    | 有    |      |                              |
| 21 | 相川  | 北狄銀山    | 銀山    | 江戸・近現代?    | 有    | 有    | 川内鉱山・吉兵衛鉱山とも                 |
| 22 | 相川  | 達者銅山    | 銀銅山   | 江戸・近現代?    | 有    | 有    | 小筵山鉱山とも                      |
| 23 | 相川  | 小川銅山    | 銅山    | 江戸・近現代?    | 有    | 有    |                              |
| 24 | 相川  | 大浦鉱山    | 銀山?   | 江戸         |      |      |                              |
| 25 | 相川  | 稲鯨鉱山    | 銀山?   | 不明         |      |      |                              |
| 26 | 相川  | 二見鉱山    | 銀山?   | 江戸・近現代     |      | 有    |                              |
| 27 | 佐和田 | 鶴子銀山    | 銀銅山   | 室町～昭和21    | 有    | 有    | 西五十里銀山・屏風銀山とも                |
| 28 | 佐和田 | 野坂鉱山    | 銀?    | 江戸?        |      | 有    |                              |
| 29 | 佐和田 | 真光寺鉱山   | 金銀山?  | 不明         |      |      |                              |
| 30 | 金井  | 平清水鉱山   | 不明    | 不明         |      |      |                              |
| 31 | 金井  | 白硫黄銀山   | 銀山    | 江戸         |      | 有    | 白岩尾銀山とも                      |
| 32 | 真野  | 西三川砂金山  | 砂金山   | 平安～明治5     | 有    | 有    | 県遺跡台帳「笹川拾八枚」他関連遺跡のみ周知化       |
| 33 | 真野  | 花見沢銀山   | 銀山    | 江戸         | 有    |      |                              |
| 34 | 真野  | 大須銀山    | 銀鉛山   | 江戸         | 有    |      | 県遺跡台帳「大須銀山遺跡」                |
| 35 | 真野  | 大須三貫目銀山 | 銀山    | 江戸         |      |      | 県遺跡台帳「三貫目沢鉱山跡」※大須銀山の一部か。     |
| 36 | 真野  | 滝脇銀山    | 銀山    | 不明         | 有    | 有    | ※背合銀山と同一か                    |
| 37 | 真野  | 小立大須鉱山  | 不明    | 不明         |      |      |                              |
| 38 | 真野  | 大立鉱山    | 不明    | 不明         |      |      |                              |
| 39 | 真野  | 田切須銀山   | 銀山    | 江戸・明治～大正   | 有    |      | 県遺跡台帳「田切須大野遺跡」(集落跡)、「田切須鉱山跡」 |
| 40 | 真野  | 背合銀山    | 銀山    | 江戸         |      |      | 県遺跡台帳上地点不明<br>※滝脇銀山と同一か      |
| 41 | 新穂  | 新穂銀山    | 銀山    | 室町～江戸      | 有    | 有    | 滝沢銀山とも                       |
| 42 | 新穂  | 湧上銀山    | 銀山    | 不明         | 有    | 有    |                              |
| 43 | 畑野  | 松ヶ崎木金山  | 砂金山   | 不明         |      |      |                              |
| 44 | 畑野  | 松ヶ崎鉱山   | 金山?   | 不明         |      |      |                              |
| 45 | 畑野  | 丸山鉱山    | 不明    | 不明         |      |      |                              |
| 46 | 羽茂  | 尾平川砂金山  | 砂金山   | 不明         |      |      |                              |
| 47 | 羽茂  | 清水鉱山    | 不明    | 不明         |      |      |                              |
| 48 | 赤泊  | 天狗塚鉱山   | 金山?   | 不明         |      |      |                              |
| 49 | 赤泊  | 荒町川砂金山  | 砂金山   | 不明         |      |      |                              |
| 50 | 赤泊  | 柳沢砂金山   | 砂金山   | 不明         |      |      |                              |

第1表 佐渡島内鉱山一覧表

においても相川金銀山は官営鉱山として、欧米の先進技術が導入され、日本初の堅坑である大立堅坑が開発されるなど、日本の近代化を牽引した。明治29年（1896）に三菱に払い下げられ、平成元年（1989）まで操業が続けられた。大立堅坑をはじめ、明治以降の破碎場、貯鉱舎、選鉱場、積出港などの一連の近代化遺産が現存する。

現在では、操業されている鉱山はなく、ゴールデン佐渡による「宗太夫坑」などの観光坑道が昔日の面影を伝えているのみであるが、現在、概要を説明した4つの鉱山の国指定史跡化を目指し、調査が進められている。

## B 上相川地区の歴史的環境

上相川に集落が形成される時期については、相川金銀山の開発時期が密接にかかわっている。上相川の成立時期については、年代を特定する史料がないため不明な点が多い。文献の初出をみると、『佐渡故実略記』の慶長5年（1600）に「佐州海府之内羽田村金山町登起」という記述があり（史料2）、この年、羽田村に所属していた集落が、金山町としてはじめて自治権を与えられて独立したことがわかる。しかし、これは行政単位としての成立時期であり、集落自体は、この年以前に成立していたと考えられている〔田中1986〕。

相川金銀山の成立時期について、田中圭一氏は上杉景勝から金山役の岡村源左衛門と山庄喜兵衛に宛てた文禄4年（1595）2月28日の文書「山を請て銀ほるべからざる事」という一項より、同年以降、請山が禁じられる以前に請負山という稼行形態が存在するならば、慶長期以降の請負山制のように貫・匁で表されたものと違い、鶴子銀山の百枚や相川金銀山の右沢にある「六十枚」のように枚数で呼称される鉱区は、慶長期以前ののものであると考証している〔田中1973〕。また、『撮要佐渡年代記』には慶長元年（1596）に「佐渡鮎河岩崎向山に銀涌上る」と云う記述があり（史料1）、『佐渡故実略記』などにも銀山寺に「慶長元年金山町」銘の仏具があるという記述があること（史料3）、上相川地区所在寺院で最も早い開基時期が慶長元年であること（別表3）、佐渡市二見の個人所有の石磨に、上相川の小右衛門町跡付近より運んだという「湯之奥型」「黒川型」とよばれる中世の鉱山臼が見つかることから〔佐藤1999〕、相川金銀山の開発に伴う集落の成立は、『佐渡古実略記』に記載される慶長5年よりも遡るものと考えられ、磯部欣三氏は鶴子銀山の百枚間歩開口とほぼ同時期ではないかとしている〔磯部1962〕。こうしたことから、実際に相川金銀山の採掘が始まり、上相川地区に鉱山に携わる人々が居住を始めた時期は、慶長元年（1596）前後であろうと推測される。島内の状況を見ると、前年の文禄4年（1595）には、鶴子銀山に石見銀山の山師により坑道掘りの技術が導入され、鶴子銀山が活況を呈する時期にあり、鉱山に携わる人々が他国から移住し、相川に鉱山集落を形成していったと考えられる。

慶長6年（1601）、鶴子銀山の山師三浦治兵衛、渡辺儀兵衛、同弥次右衛門によって、父<sup>てて</sup>や道遊で金銀の富鉱帯が発見され、道遊の割戸、割間歩、六十枚間歩が開かれて、相川金銀山における本格的な採鉱が開始されると、これに伴って他国からさらに多くの人々が上相川地区や周辺部の間ノ山地区に集まったと想定される。こうして最盛期を迎えた江戸時代初期には、山や斜面を段切りして平地をつくり、銀山で働く者の家が密集した大集落となり、その賑わい振りは、「上相川千軒」と呼ばれたことが『佐渡四民風俗』に記述されている（史料7）。

集落形成期における初期の上相川地区及びその周辺部の町並にみられる住居は、『佐渡年代記』や『佐渡国略記』に記述されるように、居住地周辺の樹木を伐採し、その樹木を利用した掘立の「山小屋」と呼

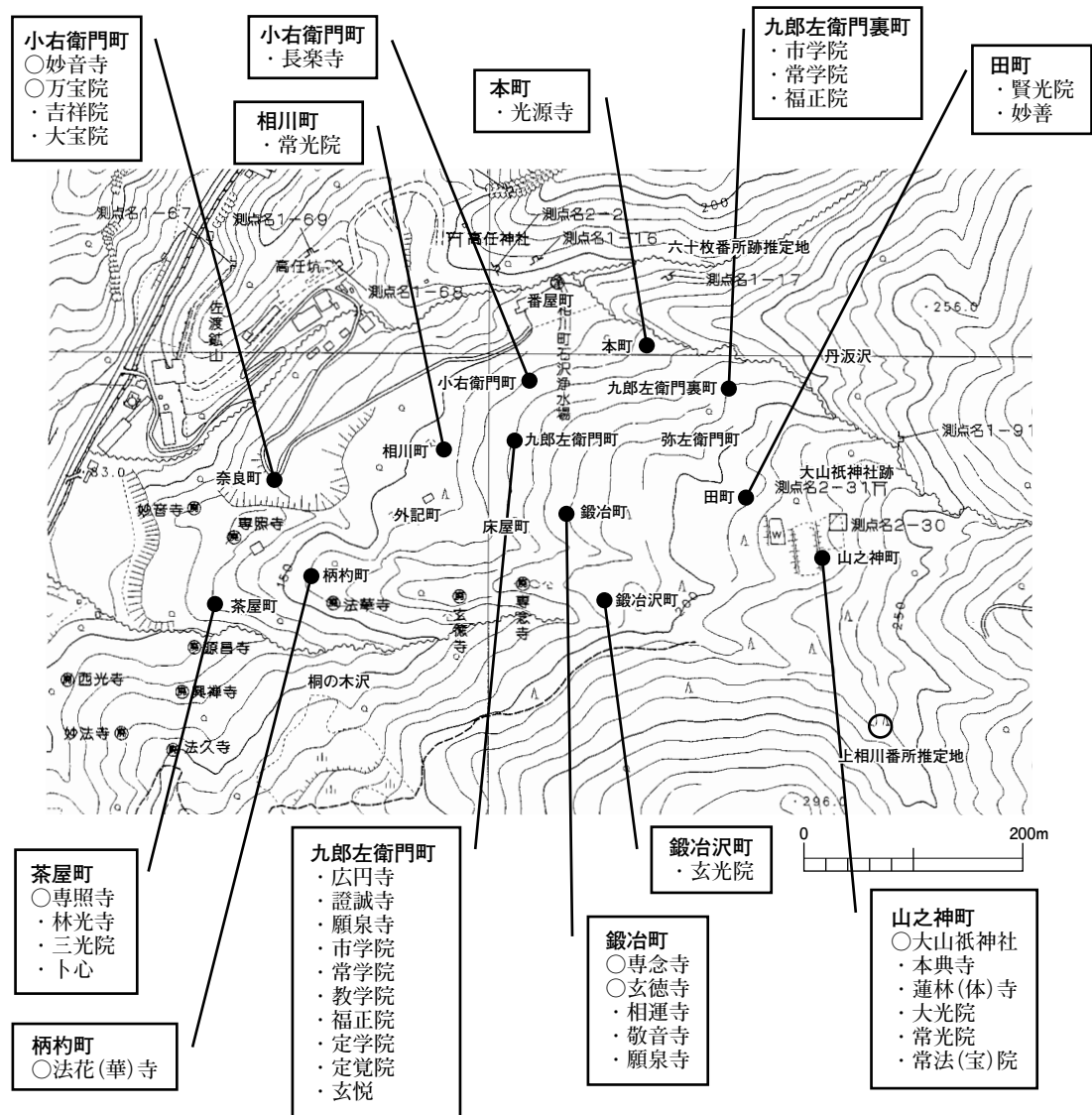
ばれたものであったが（史料4、5）、これは採掘地に近い場所にこうした山小屋を建てて鉱山の作業に従事し、鉱山が不況となると住居を壊して次の場所へ移住するという居住形態がとられたようである。後に、慶長9年（1603）、大久保長安によって鶴子銀山より陣屋（後の佐渡奉行所）が移転する頃、上町台地上に市街地が整備されると、右沢などの沢には、沢に材木を渡し、「吉野造り」と呼ばれる3階建の住居が立ち並んだと言われている。

上相川地区の人口や集落規模をみると、「上相川千軒」と呼ばれた最盛期の記録や絵図等の資料は発見されていないものの、慶安5年（1652）の「地子銀帳」（『佐渡四民風俗』）や『佐渡年代記』に、上相川地区の町は22町、家数513軒を数えたとある（史料7、8）。当時の町名には、山之神町・鍛冶沢町・鍛冶町・田町・弥左衛門町・九郎左衛門町・九郎左衛門後町・上床屋町・外記町・番屋町・本町・小右衛門町・相川町・柄杓町・茶屋町・奈良町・岩崎町・尾張町・七軒町・松入町・鍛冶町後町・田町後町の名が挙げられているが（別表3・史料7、8）、宝暦3年（1753）に成立した『佐渡相川志』には、「上相川は16町の総名で、山之神町・鍛冶沢町・鍛冶町・田町・弥左衛門町・九郎左衛門町・九郎左衛門裏町・上床屋町・外記町・番屋町・本町・小右衛門町・相川町・柄杓町・茶屋町・奈良町があった」と記されており、地子銀帳の書かれた時期から約100年の間に22町のうち6町が消滅しており、江戸時代前期以降、鉱山町が衰退していったことがわかる。

集落の成立から終末期までにおける上相川地区に居住した人々の職種については、詳細な記録史料がないため不明な点が多い。初期の上相川地区には、町名の由来となった山師たちを始め、山師のもとで買石や鉱山での作業に従事する人々、様々な商人、鍛冶職人、僧侶、山伏などが住んでいたと考えられる。『元禄七年五月田畑屋敷検地帳』（史料11）では、山伏に関連する人名や寺院名がみられるが、『安政屋敷検地』（史料13）ではこのような人名・寺院名が著しく減少していることから、江戸時代中期頃までは、こうした職種の人々も多く住んでいたことがわかる。江戸時代後期における居住者の職種については、「文政九年相川町町墨引」（写真図版5）から推測することができる。絵図に描かれた上相川地区をみると、茶屋町・奈良町・相川町・外記町・床屋町・小右衛門町・九郎左衛門町のみが表記されているため、他の町は無人となっていたと推測される。同史料に付随する記録には、家数40軒（うち3軒除地寺）、竈数40で、法花寺・専照寺・妙音寺があった。次に職種数を見ると、最も多いのが銀山大工の6軒で、次いで銀山荷揚げの5軒、敷役人・日雇取の4軒、針仕事師・寺の3軒、石撰・畑百姓の2軒とつづき、雲子荷之番・同帳付け・同板取・同鍛冶小屋・雲子・銀山たがね通・鳥越小頭・次助間歩改・名主・修験（万法院）の各1軒となっている。これらの職種名には、金銀山に関連するものが多くみられるが、「雲子」名が付けられた職種の人物は、前年に始まった佐渡奉行所の救済策である雲子間歩の古敷取明に従事していたものであろう（史料121）。また、すでに商人はおらず、明（空）地となった場所も多いことがわかる。

上相川地区における江戸～明治時代を通じて寺社の軒数は、神社1社、寺院22カ寺、修験16院で、寺院宗派をみると、浄土真宗7カ寺、日蓮宗6カ寺と多く、次いで浄土宗2カ寺、曹洞宗・臨済宗・真言宗・天台宗各1カ寺、宗旨不明2カ寺となる。

寺社の開基年代をみると、特に慶長～元和年間（1596～1624）にかけて成立したものが多いことから（別表3）、金銀山の最盛期における上相川地区の人口増加に関連したものということが指摘できる。また、検地帳等の文献史料から寺社の分布域を見ると、上相川南部の鍛冶沢から桐の木沢間にある尾根及びその周辺部に寺院が集中する範囲があるほか、山之神町周辺に集中する寺社及び山伏の所有地、九郎左衛門町に集中する山伏の所有地があることがわかる（第8図・史料11、13）。一方で、床屋町や弥左衛門町・番屋



※検地帳記載のものについて、所有地が複数町に及ぶものあり

| 凡 例 |              |
|-----|--------------|
| ○   | 寺社域の判明しているもの |
| ・   | 寺社域が不明なもの    |

第 8 図 上相川寺社分布図（[相川町 2003] を改変）

町のように検地帳等では寺社・山伏の居住した形跡が見られない町もあり、職種による居住域の住み分けが行われていたことを示唆している。

江戸時代後期、特に文化～文政年間（1804～1830）には、相川金銀山が衰退し、佐渡奉行所による上相川地区を始めとした住民救済政策も頻繁に行われるようになる（史料 114～136）。困窮者に御救米として米が支給されたことを始めとして、文化 8 年（1811）には、上相川地区の住民のため、最寄りの採掘箇所であった雲子間歩の古敷取明・青柳間歩の採掘が行われ（史料 119）、文政 2 年（1819）には、上相川の大山祇神社脇の沢に新切山 1 ヲ所を立てて、上相川住人が何人か鉱山の職に従事させている（第 8 図測点名 1 - 91・史料 126、128）。この時期に開発された間歩跡は、旧相川町教育委員会によって実施された間歩跡の分布調査によってその位置が特定されている [相川町教育委員会 2002]。

「上相川千軒」と呼ばれた賑わいをみせた上相川も、慶安2年（1649）の大水害をはじめとする災害による被害（史料105）、相川金銀山の産出量の減少等の要因によって次第に人口が減少し、江戸時代前期以降、鉾山町として賑わいをみせた地域は、下方の台地上にある上町地域か海岸部の下町地域に移る。町の人口や規模をみると、最盛期をやや過ぎたと考えられる慶安5年（1652）には、家数513軒を数えたが（史料7）、元禄7年（1694）の「田畑屋敷検地帳」では355軒（史料11）、文政9年（1826）の「相川町墨引」（写真図版5）では40軒となり、相川金銀山及び相川市街地を描いた江戸時代の絵図を比較すると上相川の町域が減少していったことがわかる（写真図版4）。明治6年（1873）には、上相川町77人、柄杓町1人、奈良町11人のみとなり〔相川町史編纂委員会2002〕、明治21年（1888）の「相川町字図」では、宅地1カ所・寺社1カ所のみとなっている。上相川の集落としての終末時期は、山之神町にあった大山祇神社が、明治33年（1900）に、上相川地区が無人的となったことを理由に、下山之神町の大山祇神社に合併していること、現存する寺の石造物や墓、過去帳に明治年間までの上相川住人の名が刻まれていることから、明治時代末にはほぼ無人となっていたと考えられる。

次に上相川集落内の町名の由来をみると、現在、所在地の判明している16町には人名・職種名・地名等から名付けられていることがわかる〔田中1968〕。山之神町は、下流部の台地上にある下山之神町と区別するために上山之神町とも呼ばれ、中世以来、この地の大岩を祀る修験者に関連した地名から名付けられた町名で、慶長6年（1601）には大山祇神社が建立されている。

鍛冶沢町は、鍛冶に関連する町名で、この地には沢鍛冶とよばれる人々が居住したと言われている（史料10）。沢鍛冶と呼ばれた人々がどのような鉄製品を製作していたのかは不明である。

鍛冶町は、鍛冶職人が居住した町で、他国（特に越前の三国、金津、越中の伏木付近）より来島した鍛冶職人が多く居住し、金銀山に関連する鉄細工物を製作しており、当地に居住した鍛冶屋は町鍛冶と呼ばれた（史料10）。

田町は、文禄以前に羽田村の百姓の人家が置かれたことに由来すると推測される町名である。

弥左衛門町は、山師の山根弥三右衛門が居住したと推測される町名である。山根弥三右衛門は、相川金銀山向山の「中使平大横相」を中心に稼いだ人物で、『川上家文書』〔相川町史編纂委員会 b1973〕第1号に所収される慶長年間の「佐州銀山諸御直山鍛冶炭渡帳」や同18号所収の「御礼衆之覚」、同第19号所収の慶長16年「御作事万入用日記」、「万臨時米覚」の中にその名をみることができる。また、同19号所収の「御作事万入用日記」では、「山根弥三右衛門」「山根弥左衛門」の名が見える。

九郎左衛門町は、人名の名付けられた町名であるが、金銀山初期の山師にその名は見えず、このため、山師の播磨九郎右衛門もしくは九郎左衛門という買石の名前ではないかと推測されている。播磨九郎右衛門は、『川上家文書』第1号所収の「佐州銀山諸御直山鍛冶炭渡帳」によると相川金銀山間ノ山の「新横相」や向山の「佐左衛門大横相」・「源左衛門平与六間歩」を中心に稼いだ人物である。

床屋町は、史料によっては上床屋町とも表記され、吹見所（精錬所）が置かれた場所である。ここで、各間歩から出た鉾石を試し吹きして品位を定め、それを表示してせり場で入札して買石が買い取っていったと推測される。

外記町は、山師の江戸外記が居住したと推測される町名である。江戸外記は、相川金銀山右沢の「右沢大横相」や間ノ山の「新横相」などを中心に稼いだ人物で、『川上家文書』第1号に所収される「佐州銀山諸御直山鍛冶炭渡帳」にその名前をみることができる。

本町は、六十枚間歩に近いことから、上相川地区の集落成立期に賑わったと推測される町名である。

小右衛門町は、山師の信濃小右衛門が居住したと推測される町名である。信濃小右衛門は、相川金銀山の「信濃小右衛門間歩」という間歩名や『川上家文書』第19号所収の「万臨時米覚」にその名前がみえる。

相川町は、現在の「相川」名の発祥となった町名で、昔は川に鮎がいたことから鮎川と呼ばれたが、鉾山の開発により鮎が死んだことにより縁起を担ぐ意味で相川に変えた、河川が行く筋も合流するため合川から転訛した等、地名の由来に諸説ある。

番屋町は、六十枚番所等の役宅が置かれた事に由来する町名である。

柄杓町は、伝説によればもともと熊野比丘尼がここに居住しており（史料25）、比丘尼が勧進の際にもつ柄杓に由来する町名である。慶長年間（1596～1615）に上相川の山崎（先）町にいた遊女が、元和年間（1615～1624）以降、柄杓町に移り、遊女町として成立したことが史料にみられる（史料22・25・26）。

茶屋町は、慶長期に茶屋が置かれたことから名付けられたと推測される町名で、柄杓町とともに上相川の歓楽街として栄えたものと考えられる。

奈良町は、奈良という地名が名付けられているが、町名の正確な由来は不明である。

前述した16町のほかに、江戸時代の史料に書かれる上相川地区の町名をみると、時期によって22～23町の名前が見える（史料8～10）。16町以外の町名では、岩崎町、山崎町、会津町、播磨町、尾張町、七軒町、松入町、九郎左衛門後町、鍛冶裏町、鍛冶町後町、田町後町、外記裏町、柄杓裏町、堺沢、新境沢の町名がみられる。これらの町名のうち、岩崎町は茶屋平ノ下、山崎町は茶屋平出崎・茶屋坂付近（上相川と間ノ山境付近）にあり（史料26）、尾張町は九郎左衛門町の沢に、境沢は桐の木沢沿いの上寺町周辺にあったといわれている（史料10）。会津町・播磨町は、「上相川一筆絵図」（写真図版2）に「アイヅ町」、「ハリマ町」と表記されており、「上相川絵図」等に描かれる町の位置と比較すると九郎左衛門裏町・弥左衛門町付近の別名ではないかと考えられる。七軒町・松入町は、「相川町々書上げ」で、すでに所在地不明となっていることが書かれており（史料10）、その他の町名の最後に～裏町・～後町と付くものは、16町の裏通りの意味合いが強いものと考えられる。これらは、会津町・播磨町を除き、いずれも短期間で名前が見えなくなることから、集落創成期及び全盛期に成立したと考えられる町が多く、上町地域や下町地域への人口流出や金銀山の衰退に伴う無人化、上相川地区内の他の町への吸収によって、消滅していったものと推測される。また、時期によっては、前述の境沢や桐の木沢対岸の次助町なども上相川と呼ばれることがある。

## C 佐渡金山遺跡周辺に分布する遺跡

相川市街地及びその周辺には、街を取り囲むような形で、縄文時代、古墳時代～江戸時代の遺跡が確認されている（第9図・第2表）。これらの遺跡は、海岸部の製塩遺跡や江戸時代の墓・磨崖仏を除き、海岸段丘上や台地上を中心に立地する。これらの遺跡の中でも、佐渡金山遺跡（15）のうち国指定の史跡である佐渡奉行所跡（20）や、市指定の史跡である金太郎窯跡（12）などを除き、発掘調査等によってその性格が明らかにされている遺跡は少ない。

縄文時代の遺跡（1～4）では、縄文時代後期の土器、石鏃、石棒、石斧などが採集される。古墳～平安時代の遺跡（4～10）では、須恵器、土師器等が採集される。古墳時代後期には、製塩土器が採集された下相川吹上遺跡（7）のように、海岸部で製塩作業が行われている。中世には、鬼ヶ城跡（5）、羽田城跡（11）のように海岸部の舌状台地や台地端に小規模な城館が築かれる。また、下戸岩陰遺跡（6）や塩焼きの痕跡とも考えられる佐渡市相川塩屋町の赤化した海浜層〔佐藤1994〕は、当時の海岸線に沿っ

て立地したものと考えられ、中世以前の人々は、海成段丘上のわずかな平坦地に居住し、段丘崖の手前まで迫る海を利用していた様子がわかる。

江戸時代に入ると金銀山の開発に伴い相川が最も発展する時代となる。国指定の史跡である宗太夫間歩や南沢疎水道等の佐渡金山遺跡に関連する遺構や構造物（18～24）の他に、海岸部には吹上海岸に佐渡奉行鎮目市左衛門の墓である県指定史跡の鎮目奉行墓（13）、鉾山臼（上磨）の石材産地である吹上海岸石切場跡（17）、富崎には線彫の磨崖仏（16）がある。段丘斜面には、金太郎窯跡、水金沢窯跡（12・14）といった陶磁器の窯跡が見られる。また、近年に佐渡金山遺跡内の県道白雲台・乙和池・相川線に沿って水路が建設された際、土中から江戸期の坑道が発見された例もあり、同遺跡では、近世以降の水害に伴う土石流に埋没していた坑道が発見されることがある。

市街地の中心部で確認される遺跡は少なく、これは、同地が金山の発展に伴う人口増によって、海岸部の埋め立てや度重なる建造物の新築・建替えによって拡大した場所であるためと推定される。特に下町地域では、17世紀初頭から18世紀初頭にかけて行われた海岸部の埋立てによって造成された場所が多く、中世以前には海浜又は低湿地が広がっていたと考えられる。しかし、近年、相川小学校の建設工事に伴って発見された下戸岩陰遺跡や、相川測候所建設工事に伴って発見された向の畑遺跡（1）のように、大規模な開発に伴う遺跡の発見があり、街に隣接する段丘周縁部では、現在も未発見の遺跡が存在する可能性がある〔佐渡市教育委員会 2005〕。

## 4 上相川地区に関する史料

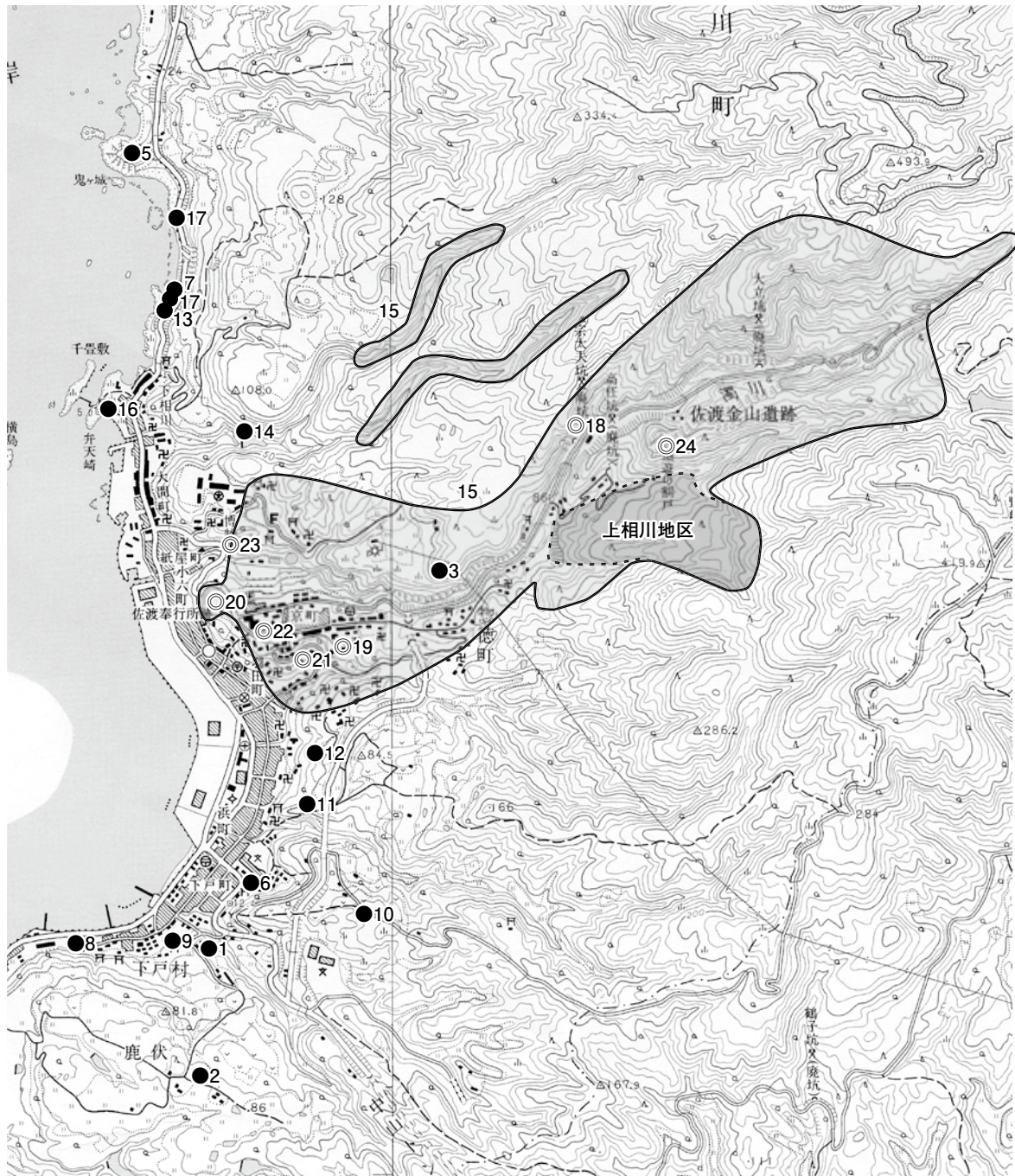
佐渡金山遺跡（相川金銀山）は、島内の他の鉾山遺跡に比べると関連する文献・絵図等の資料が多く残されていることが特徴である。ここでは、代表的な文献や絵図の概要を述べ、巻末に上相川地区に関する記事が掲載された部分の史料を一括して掲載した。

佐渡の代表的な史書には『佐渡相川志』、『佐渡風土記』、『佐渡年代記』、『佐渡四民風俗』、『佐渡史』があり、これらは「佐渡の五史書」と呼ばれている。『佐渡相川志』は、相川町真宗永弘寺（現永宮寺）住職の松堂が、宝暦3年（1753）に著わしたもので、相川における文物について書かれている。『佐渡風土記』は、目付役であった永井次芳が、延享3年（1746）～寛延3年（1750）までの間に佐渡奉行所の記録を編集したもので、諸氏の書上げや各種年代記風の書写本によって構成されている。『佐渡年代記』は、佐渡奉行所の文書をもとに編纂されたもので、寛延年間を『佐渡風土記』にうけ、それ以後、文化年間に西川明雅、天保期に原田久通によって増補されている。『佐渡四民風俗』は、宝暦6年（1756）、佐渡奉行石谷清昌が広間役高田備寛に命じて撰述させ、天保11年（1840）、川路聖謨が原田久通に命じて追加編集させたもので、各村方の生産・生活や書上げを基にしている。『佐渡志』は、文化年間（1804～1818）に田中美清が編纂したもので、編纂の基礎に『佐渡相川志』がある。

『佐渡国略記』は、宝暦年間（1751～1763）に、佐渡奉行の命を受けて、相川町年寄伊藤三右衛門が編纂したもので、奉行所の記録を中心とした『佐渡年代記』と異なり、佐渡各地における記事や風聞などが多く掲載されており、上相川や他の鉾山に関係する記事も多い。

『川上家文書』〔相川町史編纂委員会 b1973〕は、両津の川上賢吉氏が蒐集した襖の下貼りから発見された慶長から元禄期の史料である。中でも鍛冶炭や蠟燭等の各間歩への渡帳などは、江戸時代における初期鉾山経営の根本史料と言えるものである。上相川に対する記述はないが、上相川の町名の由来になったと





第9図 相川周辺の遺跡分布図

| No. | 遺 跡 名    | 時 期   | 指定有無  | No. | 遺 跡 名     | 時 期 | 指定有無  |
|-----|----------|-------|-------|-----|-----------|-----|-------|
| 1   | 向の畑      | 縄文    |       | 14  | 水金沢窯跡     | 江戸  |       |
| 2   | 開        | 縄文    |       | 15  | 佐渡金山遺跡    | 江戸  |       |
| 3   | 中山之神     | 縄文    |       | 16  | 富崎不動磨崖仏   | 江戸  |       |
| 4   | イチカ潟     | 縄文・平安 |       | 17  | 吹上海岸石切場跡  | 江戸  |       |
| 5   | 鬼ヶ城・鬼ヶ城跡 | 平安・中世 |       | 18  | 宗太夫間歩     | 江戸  | 国指定史跡 |
| 6   | 下戸岩陰     | 古墳    |       | 19  | 南沢疎水道     | 江戸  | 国指定史跡 |
| 7   | 下相川吹上    | 古墳    |       | 20  | 佐渡奉行所跡    | 江戸  | 国指定史跡 |
| 8   | 野菰       | 平安    |       | 21  | 大久保長安逆修塔  | 江戸  | 国指定史跡 |
| 9   | 北野天神     | 平安    |       |     | 河村彦左衛門供養塔 | 江戸  | 国指定史跡 |
| 10  | 道達       | 平安    |       | 22  | 鐘楼        | 江戸  | 国指定史跡 |
| 11  | 羽田城      | 中世    |       | 23  | 御料局佐渡支庁跡  | 明治  | 国指定史跡 |
| 12  | 金太郎窯跡    | 江戸    | 市指定史跡 | 24  | 道遊の割戸     | 江戸  | 国指定史跡 |
| 13  | 鎮目奉行塚    | 江戸    | 県指定史跡 |     |           |     |       |

第2表 相川周辺の遺跡一覧表

推測される山師たちの名前が度々出てきている。

「相川町々書上げ帳」(史料10)は、相川町の規模について掲載されたもので、各町の長さ・御陣屋(佐渡奉行所)までの距離、田畑・町屋敷の面積が掲載されている。また、すでに存在していない町名やその所在場所についても書かれている。

上相川に関する記載のある検地帳等の史料では、元禄7年(1694)当時の各土地の間数・面積・利用状況・土地所有者名が書かれている「元禄七年五月 相川町田畑屋敷検地帳」(史料11)や相川町における地子銀のための帳面であるが、欠落している箇所が多く、上相川地区の鍛冶町の一部のみが残されている「相川町地子帳」(史料12)、安政5年(1858)における屋敷を記したもので、元禄7年の田畑屋敷検地の際の所有者及び安政5年現在の所有者、土地の面積や利用状況が書かれる「安政五年屋舗帳」(史料13)がある。「安政五年屋舗帳」における上相川の土地利用状況をみると、「屋敷畑成」や「下畑」等の表記が目立ち、居住者がいなくなり無人化したことで多くの屋敷地を畑に転用していることがわかる。

江戸時代の絵図をみると上相川地区が単独で描かれたものは少なく、岡山絵図と呼ばれる相川金銀山や相川市街地を描いたものの中に上相川の町並が描かれている例が多い。元禄7年(1694)に作成された「相川右沢左沢向山銀山図」(写真図版1)は、相川金銀山の間歩や周辺部の町並み、施設などが描かれるが、絵図中央やや左下に横向きの「Y」字状に描かれた町並に上相川地区を認めることができる。また、上相川地区以外にも間ノ山を始め、鉱石採掘地に近い河川沿いにいくつかの町並があったことがわかる。上相川のほぼ半分の区域が描かれた「上相川一筆絵図」(写真図版2)は、製作年代は書かれていないが、享保18年(1733)、羽田村喜右衛門が上相川の空地を畑に転用するため、地方役が見分する際(史料34)の資料として作成されたと考えられる絵図である。上相川地区のうち相川町・床屋町以東のみが描かれた部分図ではあるが、家並みや空地の間数、道脇に沿って町内を巡る水路が描かれており、当時の町並や土地利用状況を推測することができる。上相川のほぼ全域が描かれた「上相川絵図」(写真図版3)は、宝暦2年(1752)に作成され、文化9年(1812)に複製された絵図である。上相川地区16町の全域が短冊形の町割とともに描かれ、そこに当時の町名や寺社、町の境、土地所有者名が書かれている。絵図をみると空家を示す「上ヶ屋敷」や同一の所有者を示す「同人」といった表記が多く見られ、人口が減少したことによる空家・空地が目立ち、屋敷地であった地所を田畑として再利用していた町の様子がわかる。本絵図は町域のほぼ全域が描かれているため、分布調査の際の基礎資料として活用した。「文政九年相川町町墨引」(写真図版5)は、文政九年(1826)に作成された相川町全体の墨引のうち、上相川地区が描かれたものである。絵図には当時の町割や土地所有者名及びその職業が記されており、当時の住民構成を知るうえで貴重な資料である。また、この絵図は上相川地区のうち茶屋町、奈良町、柄杓町、相川町、小右衛門町、外記町、床屋町、九郎左衛門町の一部しか描かれていないことから、絵図に描かれていない部分は、すでに無人化していたものと推測される。江戸時代後期に描かれたと推測される「銀山岡絵図」・「鉱山金坑絵図」(写真図版4)のように、江戸時代中～後期の相川金銀山及び相川市街地の描かれた絵図は比較的多く残されている。これらの絵図中には、上相川地区の町並が描かれており、町並みのおおよその変遷を知ることができる。

明治時代に描かれた資料には、明治23年(1890)の「御料佐渡鉱山図」(写真図版5)がある。佐渡鉱山の近代化によって整備された鉱山施設群の下に上相川の町並が描かれており、終末期の様子を伝えている。

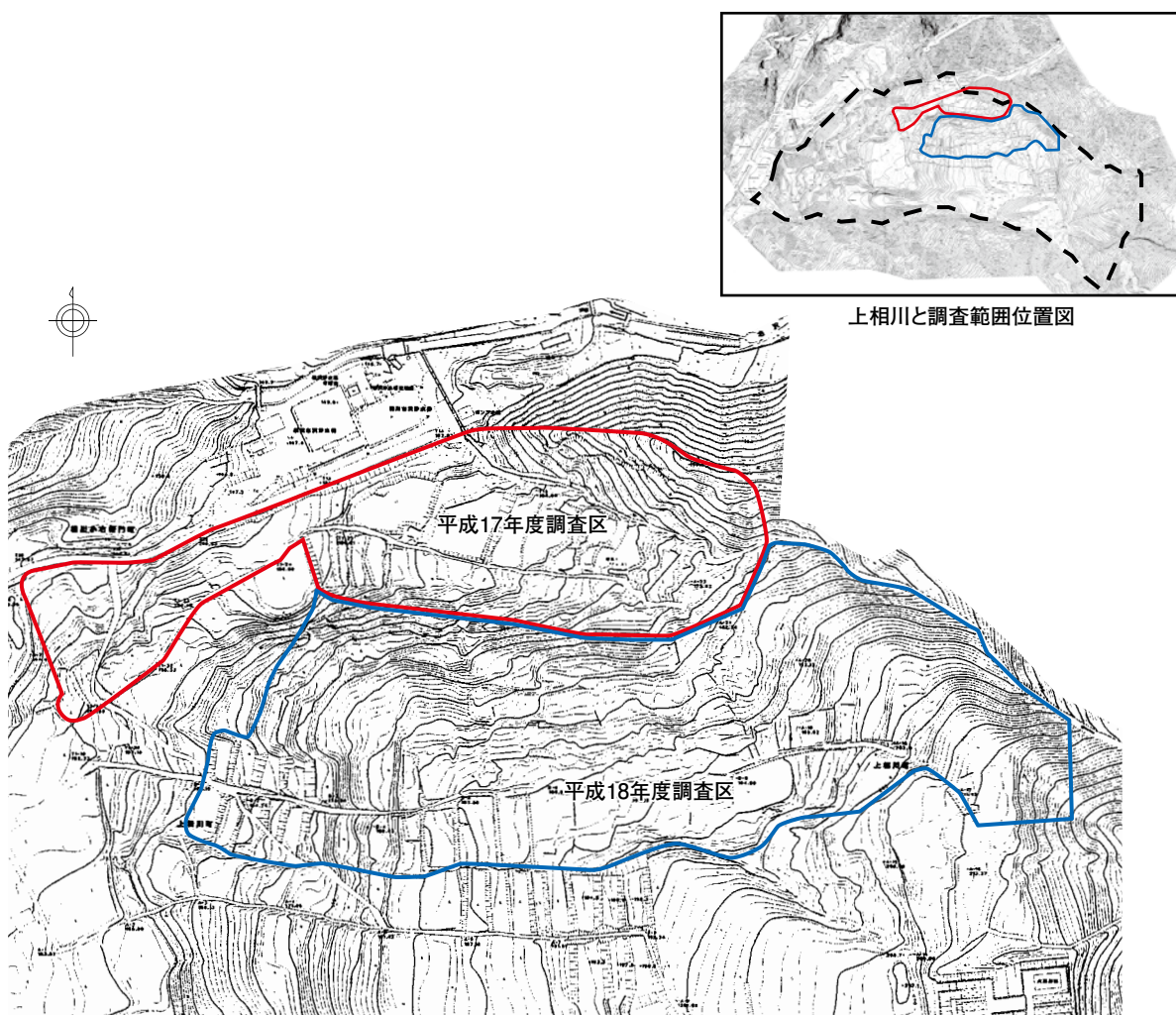


## 第Ⅲ章 調査の概要

### 1 各年度の調査方法の概要

上相川地区における当初の調査計画は、絵図に描かれた町割りや現在の地形をもとにこれを3分割し、3年間のトレンチ発掘調査及び1年間の報告書作成を含む整理作業を実施する合計4年間の調査計画であった。その後、平成18年度に文化庁から地表面で遺構が良好に確認できるため、現段階における発掘調査を伴う調査は必要無いのではないかと指導を受けたことにより、佐渡市教育委員会では、調査期間及び調査方法の再検討を行って、詳細分布調査の成果をもとにした遺跡全体の性格把握、今後の調査方針・調査方法を検討するための基礎的な調査と位置付け、現地調査期間を2年間、調査対象面積を約34,900㎡とし〔第9図〕、整理作業を1年間とする3年間の事業に計画を変更した。

また、平成16年度に地形測量を実施した際、基準杭を中心に幅15m四方のグリッドを上相川全域に設定したが、今回の調査では地表面における遺物の取り上げを確認されたテラスなどの遺構単位で実施しているため、グリッドを利用した遺物の取上げは行っていない。



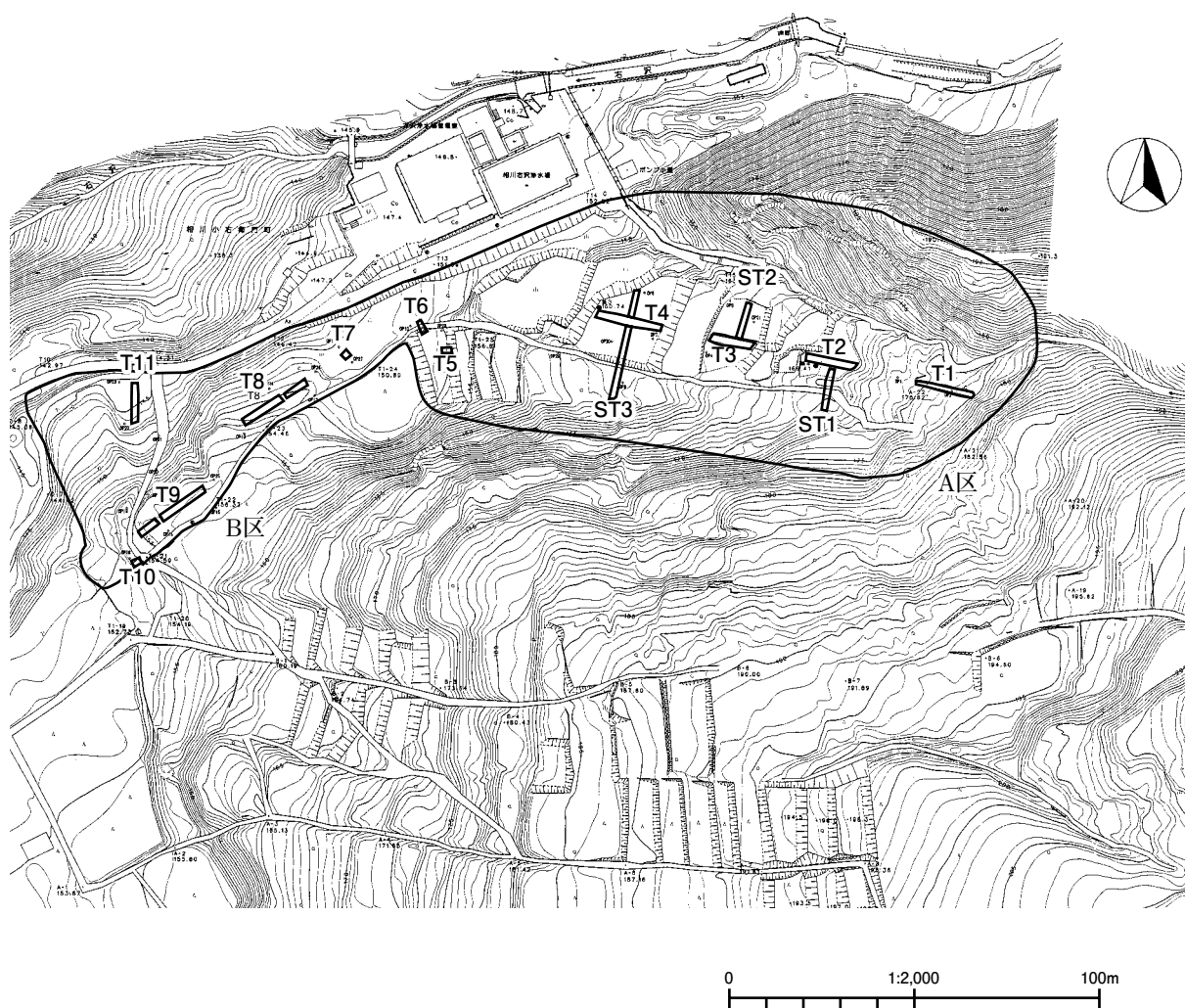
第10図 調査範囲図

## A 平成 17 年度調査方法の概要

平成 17 年度の調査対象となった地域は、右沢浄水場の南側にあたる江戸時代に小右衛門町、本町と呼ばれた 12,400 m<sup>2</sup>の範囲である（第 10 図）。調査方法は、下草等の樹木伐採後の分布調査及びトレンチ発掘調査の併用としている。

調査に先立ち、遺構が確認できない急斜面を除き、調査区内のテラスや石垣等の遺構の存在が想定されるすべての場所の木竹や下草の伐採・落葉等の除去作業を実施した。伐採作業にあたり、遺跡の景観に配慮するため、伐採対象とした樹木は、枯死しているものまたは直径が 10 cm 以下のものとした。作業後、確認されたすべてのテラス・石垣等の遺構の現況写真を撮影した。

トレンチの設定にあたり、県文化行政課の指導のもとに、確認されたテラスの中で遺存状態が比較的良好なものや樹木や壁面の崩落などにより調査に支障をきたさない場所のうち、任意の位置に総数 11 ヶ所、幅約 2m の調査トレンチを設定した。規模の大きいテラスでは、設定したトレンチに直交する形で幅 1.5 m のサブトレンチを 3 ヶ所設定した（第 11 図）。確認調査は、鍬や鋤簾等を使用した人力による表土剥ぎ作業を行った後に遺構の確認作業を実施し、遺構・遺物の有無、土層の堆積状況を確認した。土層の確認には、地山面まで掘削を行ったうえで、各トレンチの 1 層目にあたる遺構検出面で掘削を止めている。トレンチは必要な記録を取った後に埋め戻しを行った。



第 11 図 平成 17 年度トレンチ配置図

検出された遺構は、長軸が50 cm以上のものを土坑に、50 cm未満のものをピットとして分類した。検出された遺構のうち、特徴的なもの数基を半割して、遺構の内容確認を行った。

検出された遺構の番号は、テラス及び石垣は、検出順にそれぞれ「t（遺構番号）」、「No（遺構番号）」というように通し番号を付け、トレンチから検出された遺構については、検出順に「T 8（遺構番号）」というようにトレンチの遺構ごとに通し番号を付けた。

遺構の測量方法は、トレンチ内で検出された遺構については、トレンチごとに平板測量によって遺構平面図を作成した。検出された遺構のうち、特徴的なもの数基を半割し、土層断面図を作成した。これらの平面図・土層断面図は、縮尺 20 分の 1 で図化し、詳細な記録作成が必要と判断された遺構のみ縮尺 10 分の 1 で図化した。テラスの測量は、平板測量によって遺構の範囲を測量したうえで、縮尺 500 分の 1 の地形図に加筆した。石垣の測量は、株式会社セビアスに委託して、デジタル画像による写真解析図化によって立面図を作製した。

遺物の取上げ方法は、トレンチ内については 2 m 間隔で小グリッドを設定し、小グリッドごとに取上げた。地表面で採集できる遺物については、テラスなどの遺構ごとに取り上げた。

また、調査区内に散乱する石磨・扣石などの石製品の分布状況及びズリ（石英片）の散布状況を調査した。石製品については、種別・法量・特徴・石材・遺存状況等を記録し、個別に写真撮影を行って、平板測量によって縮尺 200 分の 1 の位置図を作成し、地形図に位置を合成させた。ズリの散布状況は、テラス・石垣・道を中心に任意に 1 m 四方の枠を設置し、その中での散布密度・ズリの大きさを計測した。

## B 平成 18 年度調査方法の概要

平成 18 年度の調査対象地は、平成 17 年度調査区の南側にあたる九郎左衛門町、九郎左衛門裏町、弥左衛門町と呼ばれた 22,500 m<sup>2</sup>の範囲である（第 10 図）。調査方法については、文化庁からの調査指導もあり、木竹や下草の伐採作業後、地表面で確認できる遺構の分布調査のみとした。

調査に先立ち、調査区内のテラス・石垣が存在するすべての場所の下草等の樹木伐採作業・落葉等の除去作業を実施した。ただし、伐採にあたり、遺跡の景観に配慮するため、伐採する樹木は枯死しているものまたは直径が 10 cm 以下のものとした。作業後、地表面において確認することのできたすべてのテラス・石垣等の遺構の現況写真を撮影した。

テラスの測量は、平板測量によって遺構範囲を測量して、縮尺 500 分の 1 の地形図に加筆した。また、九郎左衛門町周辺の石垣の測量及び一部テラスの測量・地形図作成を株式会社セビアスに委託して、デジタル画像による写真解析図化で行った。

分布調査のほかに、調査区内に散乱する石磨・扣石などの石製品の分布状況及びズリ（石英片）の散布状況を調査した。石製品については、種別・法量・特徴・石材・遺存状況等を記録し、個別に写真撮影を行ったうえで、平板測量によって縮尺 200 分の 1 で位置図を作成し、地形図に合成させた。ズリの散布状況は、テラス・石垣・道を中心に任意に 1 m 四方の枠を設置し、その中での散布密度・ズリの大きさを計測した。

遺物の取上げ方法は、地表面で採集できる遺物をテラス等の遺構ごとに取上げた。

また、調査区域外に残る道跡及び寺院跡、周辺部の採掘跡等の遺構の遺存状況や石造物等の遺構の分布状況を調査した。

## 2 基本層序 (図版 3)

平成 18 年度は発掘調査を実施していないため、現段階で判明している基本層序は、平成 17 年度の調査によるものである。

平成 17 年度のトレンチ発掘調査において、各トレンチ内に土層確認のためサブトレンチを入れて地山層まで掘削を行ったが、山間部の斜面であるため、各トレンチ間の土層の対比が難しく、基本層序を対応させることはできなかった。各トレンチとも薄い表土層の下層に遺構検出面・遺物包含層となる。本町跡に設定したトレンチ 2～4、サブトレンチ 1～3（北側部分）の土層では、旧耕作土や水田造成に伴うと考えられる盛土層がみられた。また、トレンチ 4 では、斜面掘削に伴う土砂や礫を北～西の斜面裾に盛ってテラスを拡大したと考えられる土層があり、現状で視認できる r 1 道跡の南側に残るマウンドの存在とともに、現在みられる規模の大きいテラスは、田畑造成の際の排土によって構築されたものと考えられる。r 1 道跡より南側のサブトレンチ 1 やサブトレンチ 3（南側）では、盛土の下層にユリカスと思われる幅約 10～20 cm のシルト層や幅約 10 cm の炭化物層がみられた。トレンチ 1・トレンチ 6・サブトレンチ 3 では r 1 の旧道跡、石垣跡が検出された。

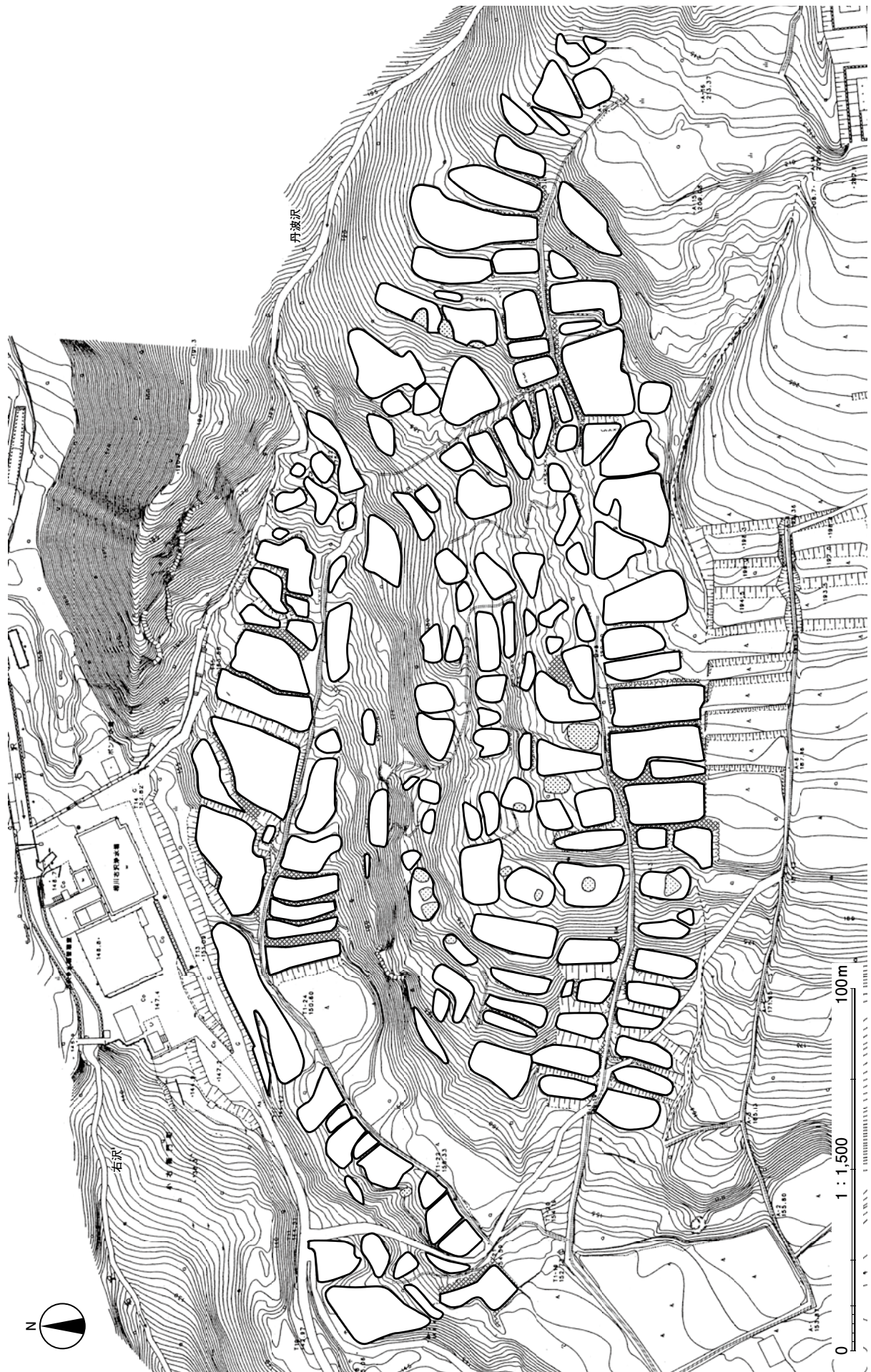
小右衛門町跡のトレンチ 8 やトレンチ 9 では、整地層と考えられる褐色土層や貼床と考えられる橙色の粘質土層などの生活面と考えられる地層が 2～3 面にわたり存在し、下層には、テラス造成に伴うにぶい黄褐色の砂礫による盛土層がみられたことから、複数の小規模なテラスが連続していたと考えられる。また、トレンチ 9 では、ユリカスと思われる幅約 10～25 cm のシルト層や幅 5～10 cm の炭化物を含む層が広範囲にみられるが、トレンチ 8・トレンチ 11 では、このシルト層や幅約 5～10 cm の炭化物層が部分的にみられるのみで、他のトレンチではみられなかった。

## 3 遺構・遺物の検出状況

平成 17 年度調査区では、分布調査によってテラス 47 基、石垣 51 基、石段 1 基、道跡 2 条、窪地 1 ヶ所が確認されており、トレンチ内での遺構確認作業によって炉跡 1 基、土坑 9 基、ピット 20 基、性格不明遺構 2 基、石垣 4 基が確認されている。平成 18 年度調査区では、分布調査によってテラス 118 基、石垣 103 基、石段 2 基、道跡 7 条、水路跡 1 条、窪地 15 ヶ所が確認されている。調査によって確認された遺構の総数は、テラス 164 基、石垣 158 基、石段 3 基、道跡 9 条、水路跡 1 条、炉跡 1 基、土坑 9 基、ピット 20 基、性格不明遺構 2 基、窪地 16 ヶ所である（第 12 図）。

トレンチ発掘調査で検出された炉跡、土坑、ピット、性格不明遺構を除くとテラス、石垣等の遺構の多くが地表面において確認されている。調査区外では、下草や樹木伐採が進んでいないため、現況での遺構の確認作業が困難な範囲もあるが、調査区内と同様なテラスや石垣等の遺構、寺院跡・番所跡等の絵図に描かれた構築物跡やそれに伴う石造物が存在していると考えられる。





第 12 図 調査区内遺構分布図

## 第Ⅳ章 遺 構

### 1 概 要

調査によって確認された遺構は、平成 17 年度調査区で、テラス 47 基、石垣 55 基、石段 1 基、道跡 2 条、炉跡 1 基、土坑 9 基、ピット 20 基、性格不明遺構 2 基、窪地 1 ヶ所、平成 18 年度調査区でテラス 118 基、石垣 103 基、石段 2 基、道跡 7 条、水路跡 1 条、窪地 15 ヶ所である。このうち、トレンチ発掘調査で検出された炉跡、土坑、ピット、性格不明遺構を除くテラス、石垣等の遺構が地表面において確認されている。総数は、テラス 164 基、石垣 158 基、石段 3 基、道跡 9 条、水路跡 1 条、炉跡 1 基、土坑 9 基、ピット 20 基、性格不明遺構 2 基、窪地 16 ヶ所である。

調査区外では下草等の樹木伐採作業を行っていないため、現地表面における遺構の確認作業が困難な範囲もあるが、絵図等の資料や現地での確認作業によって、テラスや石垣等の遺構や寺院跡・番所跡のテラス・石垣等の遺構及びそれに伴う石造物が確認されている。

### 2 平成 17 年度調査区

#### A テ ラ ス（図版 1・写真図版 7、11、13・別表 5）

確認されたテラスは 47 基である。

テラスの平面形状は、地形の制約を受けるため多種にわたるが、本町跡の西側部分の t 21～25 テラス及び小右衛門町跡の t 27-1～29-3 テラスでは、江戸時代の町割を示すような短冊形を呈するものが多くみられる。

本町跡で検出されたテラスのうち、SF1 より北側に立地する輪郭の明確な t 5～12・14・15 テラスには、畦畔跡と思われる微高の段差や石垣内に設けられた排水用の石製樋とそれを固定するためのレンガ、敷設された鉄管がみられ、テラスの傾斜角が水平に近いものが多い。このような遺構や遺物の存在は、昭和期まで水田耕作が行われていたことを示すものであり、聞き取り調査による水田利用の場所と合致している。これらのテラスに設定したトレンチ 2～4、サブトレンチ 1～3（北側）の土層では、水田の旧耕作土や崖側斜面付近での水田造成に伴う田面拡大のための盛土層が確認された。また、トレンチ 4 では、田面の拡大に伴って山側の斜面を掘削したことによって発生した土砂や礫を北～西の斜面に盛ってテラスを拡大したと考えられる土層が確認されている。また、t 20-1～2 テラスにかけて連続して存在する盛土層のマウンドやサブトレンチ 3 内で確認された旧 SF1 道跡が盛土されて現道面となっている t 20-1 付近の状況からこれらの本町跡のテラスは、水田造成に伴う改変を受けていると考えられる。

小右衛門町跡でみられるテラスは、本町跡でみられるもののような水平に近い傾斜角のものが少なく、緩やかな傾斜をもち、全体的に規模の小さいものが多い。中でも、緩やかな傾斜地のなかにわずかな段差が認められる範囲に設定したトレンチ 8 やトレンチ 9 の土層断面からは、複数の小規模なテラス t 27-1～4、29-1～3 テラスが連続していることが確認できた。トレンチ 8 では、生活層と考えられる褐色土や貼床と考えられる橙色粘質土による整地層が 2～3 面にわたって存在しており、土地造成が複数回にわたって



行われていたと考えられる。

調査区全体のテラス規模を見た場合、本町跡は100㎡以上の面積をもつものが多く、200㎡以上のものが4ヵ所で見られるのに対し、小右衛門町跡では、100㎡以上が3ヵ所、うち200㎡以上が1ヵ所であった。

右沢浄水場に面した番屋町跡付近のt 26テラスは、テラスの規模こそ大きいものの、テラス内に埋没したコンクリート基礎や大型重機の轍がみられたことから、右沢浄水場建設に伴って、土地の改変が行われている可能性が高いと考えられる。

## B 石垣・石段 (図版2・写真図版7、8、11～13・別表6)

確認された石垣は55基、石段は1基である。石垣の中には、不要な礫を斜面に廃棄したものか、石垣が崩落したものか判別のできないものも多い。石垣の構築年代は、現在までのところ、石の積み方等に明確な分類基準が設けられないため、時期を確定することは困難である。

石垣の規模は、地形上の制約からか、高さが1mを超えるものから30cm前後のものまで様々である。城郭や寺院等で見られるように整然と積まれたものはみられず、未加工の礫や破損した石製品を雑然と積み上げている印象を受ける。相川町跡の東端にあるNo.4-1石垣では、古い石垣の前面に新たに石垣を構築している例も見られた。

廃棄された石磨や扣石等の石製品が石垣石に転用された例も多く、本町跡西側の南北に長いテラスに伴うNo.22-1～25石垣や小右衛門町跡のNo.8-2石垣、相川町跡のNo.4-1～3・No.7石垣で確認できる。

No.3石段は、小右衛門町跡のt 45～t 47テラス間の斜面に見られる。石段は表面がやや平坦な礫をいくつかに並べ、5段で構成されたものである。周辺部の遺構の配置状況をみると東側を幅の広いSF2が通ることから、集落内の本道ではなくテラス間を結ぶ脇道的な性格が強いと考えられる。この石段から南側へ登る場所にあるt 45テラスは、周囲の斜面にNo.4-1～3石垣が構築されているP形状のテラスで、このテラスにあった建物に向かうために利用されていたと考えられる。

## C 道 跡 (図版1・写真図版19、20・別表7)

確認された道跡は2条である。

上相川地区では、平成15～16年度の事前調査により、地籍図や土地更正図等から里道（赤道）の存在が判明していた。こうした里道は、江戸時代の絵図と比較してもほぼ同じ位置を通るため、当時の町域を判断する資料となった。また、現況では確認できなかったが江戸時代の絵図や明治時代の地籍図からt 25～26テラス間のSF1より北側の番屋町跡・六十枚番所へ分岐する道があったと考えられる。

### SF1

地表面において確認された遺構である。小右衛門町跡から本町跡までを結び、小右衛門町跡でSF2に接続する幅1.5～2mの道路跡で、本町跡でW-E方向にのび、小右衛門町跡でSW-NE方向にのびる。この道跡は、「上相川一筆絵図」(写真図版2)・「上相川絵図」(写真図版3)等の絵図に表記されており、昭和期に作製された「相川町地籍図」においても里道として表記されている。この道跡に、トレンチ6、サブトレンチ1、サブトレンチ3を設定し、発掘調査を実施した結果、トレンチ6とサブトレンチ3において、旧道路面と推測される土層が確認された。いずれも、道幅は1m前後のもので、道跡と確定できる硬化面はみられないが、サブトレンチ3で検出された道跡は、道の脇にNo.45石垣が築かれており、現在の道路法線から南へ1m程度ずれていた。このことから、本来の道路面が昭和期の水田造成等に伴う盛

土によって法線が若干変更されていることがわかった。

## S F 2

小右衛門町跡と相川町跡を結ぶ、N－S方向にのびる幅1.5～2mの道路跡で、小右衛門町跡でS F 1が接続する。篠竹林を伐採した際に地表面で確認された遺構である。「上相川一筆絵図」（写真図版2）・「上相川絵図」（写真図版3）等の絵図に表記されている。絵図では、ここから下流部にある間ノ山地区の宗徳町方面へ下りることができたようであるが、現在では右沢浄水場へ向かう舗装道路が敷設されているため、この区間の遺構は確認できなかった。

## D 窪 地（図版1）

確認された窪地は1ヵ所である。

窪地は、小右衛門町跡のt 28とt 29－1テラス間の斜面上に立地している。遺構は、斜面上をU字状に掘り込んだもので、周縁部に集石が認められる。窪地の周囲の状況を見ると、石磨や扣石といった粉成用の石製品やズリの散布が確認でき、南側斜面上のt 29－1～3テラスに設定したトレンチ9ではユリカスと考えられるシルト層が検出されている。今回の調査では、窪地部分の発掘調査を実施していないことから、遺構の詳細は不明であるが、島根県の石見銀山跡千畳敷地区S B 02内S K 01の事例にみられるように、このような窪地において鉍石の粉碎が行われていた可能性がある〔島根県教育委員会・大田市教育委員会1999〕。

## E トレンチ検出遺構（第13図・写真図版23・別表8）

トレンチより検出された遺構は、石垣4基、道跡1条、土坑10基、ピット20基、性格不明遺構2基である。

遺構の検出状況を見ると、トレンチ8・トレンチ9で確認された遺構が多く、他のトレンチからは土坑や石垣、道跡等が数基確認できるだけであった。

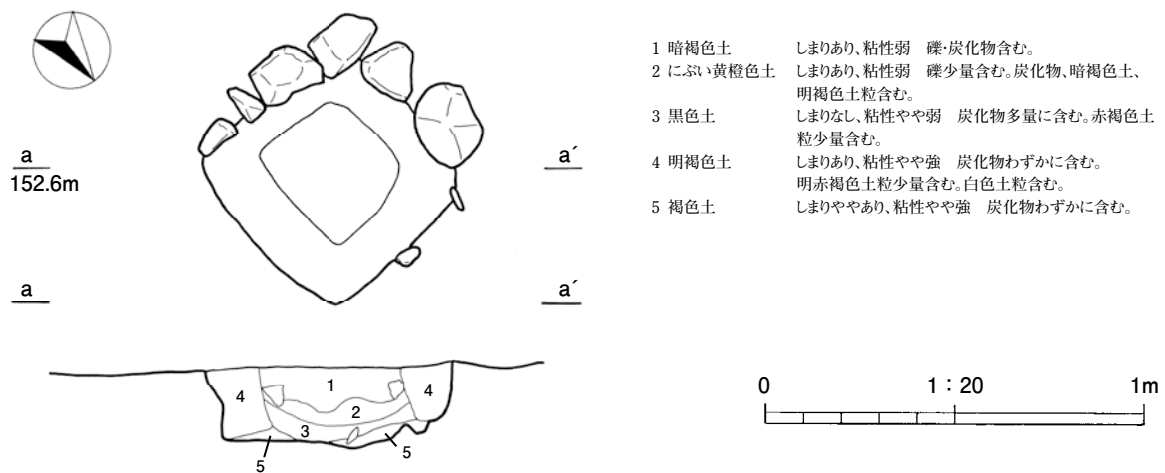
本町跡に設定したトレンチでは、表土層の下層に耕作土層がみられたが、トレンチ8・トレンチ9では、表土層の下層に遺構検出面があるため、集落廃絶後に水田耕作などの開発の影響を受けていないことが判明した。

トレンチ6・サブトレンチ3において、旧道路面（S F 1）と推測される土層が確認されている。いずれも、幅1m前後のもので、道跡と確定できる硬化面は見られなかったが、サブトレンチ3内では道跡の北側にNo.45石垣、トレンチ6では道跡の南側のt 25テラスの斜面上に伴うNo.46石垣が検出された。こうした石垣に伴う道跡が検出されたことで、S F 1は、サブトレンチ3付近で現在の道路法線から南へ1m程度ずれていたことがわかり、その後、盛土により現在の道路面が構築されたことが判明した。

トレンチ10では、No.47のS F 2に並行して石垣もしくはt 45テラスへ下りるための石段の基礎部分と思われる石列が検出されている。

トレンチ9において検出された正確不明遺構は、土層確認用のサブトレンチ壁面で検出されたもので、浅い掘り込みが不明瞭にみられ、底面は酸化鉄分が浮き出しており、覆土にはシルト層のみが見られる。周辺部においても石磨やシルト層が見られることから、付近で石磨による粉成作業が行われた可能性が高い。





第 14 図 トレンチ 8 炉跡平面図・断面図

#### トレンチ 8 炉跡（第 14 図・写真図版 23・別表 8）

トレンチ 8 東端に位置する。長径 54 cm、短径 52 cm のほぼ正方形の遺構で、側壁に沿って幅 20 cm の明褐色土が方形に巡り、中央部は平面円形である。また、遺構の南－西にかけての外縁には、直径 20 cm 前後の礫が巡るが、覆土内には礫が配置されていなかった。遺構深度は約 40 cm で、あまり深くない。底面には炭化物を含む層がみられたが、側壁を覆う覆土は被熱した形跡がなく、使用された可能性は低いと考えられる。覆土からの遺物の出土はなかった。

### 3 平成 18 年度調査区

#### A テラス（図版 1・写真図版 8、10、13～19・別表 5）

確認されたテラスは 117 基で、急斜面や丹波沢沿いを除く調査区内のほぼ全域に分布する。

テラスは、地形的な制約を受けるものが多いが、九郎左衛門町跡の t 91・95・99～120 テラスなどや弥左衛門町跡の t 43～45・49・50・60～65・147～151 テラスなどでは、道路跡に面して道両脇に短冊状を呈するものが配置されていることが多い。特に九郎左衛門町跡の t 103～120 テラスは、平成 16 年度に作製した縮尺 500 分の 1 地形図上においても明確に遺構プランが確認でき、周辺部にはほぼ同じような面積を持つテラスが連続している。

九郎左衛門町跡や弥左衛門町跡では、t 123・126・128～134・137 テラスのように規模の大きいものが多くみられた。また、遺構範囲の不明瞭なものもあるが、t 151・157 テラスなどのように、住居に使用されたと考えるには明らかに不自然な小規模なテラスもみられた。

テラスの規模を見た場合、調査範囲内の全域に 100 m<sup>2</sup>以上の面積を持つテラスが分布するが、うち 200 m<sup>2</sup>を超える大型のものは九郎左衛門町跡・弥左衛門町跡の町境付近、弥左衛門跡の S F 5 沿いの山側 2 ヶ所に集中する傾向が見られる。これらのテラスに伴う道沿いの No. 56・No. 112 石垣では、粉成用の石磨や扣石が多く見られる。

## B 石垣・石段 (図版2・写真図版9、14～17・別表6)

確認された石垣は103基、石段2基である。

石垣は弥左衛門町跡や九郎左衛門町跡との町境付近に多く見られる。石垣は整然と積まれたものではなく、多くのものが廃棄された石製品を再利用しながら雑然と積んだものである。したがって、石の積み方から年代を推定することは難しい。石垣に使用される石材は、周辺部から採取した安山岩質玄武岩や廃棄された石製品が使用されているほか、径の大きな石英塊なども使用されている。また、一部では崩落が進んでおり、石垣の形態を成していないものも見られ、家屋廃絶後の田畑への土地利用状況の変化に伴い、耕作時に不要な石を脇に集めたものとの判別が難しい状況である。

石垣の分布範囲や規模をみると、九郎左衛門町跡のSF5沿いのテラス周辺と九郎左衛門町跡と弥左衛門町跡の町境付近のt123テラスを中心とするSF5沿いの範囲、弥左衛門町跡のt137テラスを中心とするSF4・SF5沿いの範囲に集中する傾向がみられる。特にSF5に面した石垣の中には、長距離に渡って石垣が構築されたN56・112・119がある。

石段は、九郎左衛門町跡と弥左衛門町跡の町境付近、弥左衛門町跡と山之神町跡の町境付近でみられ、いずれも急傾斜地に構築されている。九郎左衛門町跡付近のN146石段は、土中に埋没している部分が多く、わずかに石段の角が出ているのみで、遺構範囲がやや不明瞭である。弥左衛門町跡～山之神町跡のN143石段では、扣石等の石製品を再利用し、一つの石材を使って一段ずつ構築している。

## C 道 跡 (図版1・写真図版9、10、17、20～22・別表7)

確認された道跡は7条である。

確認された道跡のなかで、E-W方向に伸びる道跡の多くは、絵図等にも表記され、現在も里道であることが多い。遺構は幅1～1.5mのことが多い。「上相川一筆絵図」(写真図版2)では、こうした道路に沿って水路が描かれているが、地表面では確認することができなかった。

### SF3

本町跡から九郎左衛門裏町跡・弥左衛門町跡へ向かう、E-W方向に伸びる道路跡で、地表面で確認できる。「上相川一筆絵図」(写真図版2)・「上相川絵図」(写真図版3)に表記されている。t71・72テラス付近で南側に折れてSF5方向に向かうが、15mほどで道としてのプランが不明瞭となる。

### SF4

本町跡と弥左衛門町跡を結ぶN-S方向に伸びる道路跡で、地表面で確認できる。北側でSF1と南側でSF5に接続している。絵図では位置を特定できない。西側には、道に面して石垣が設けられたテラスが連続して配置されている。

### SF5

相川町跡と九郎左衛門町跡の町境から山之神町へ向かって、E-W方向に伸びる道路跡で、地表面で道跡を確認できる。「上相川一筆絵図」(写真図版2)・「上相川絵図」(写真図版3)に表記されている。現在では弥左衛門町跡のt144～146テラス付近でプランが不明瞭となるが、全体的に道跡としての姿を良好に留めている。昭和48年(1973)の地番統一までは、里道(赤道)として表記されていた。九郎左衛門町跡では、道跡両側の急斜面に、短冊状のテラスが連続して配置されている。

### SF6

本町跡と九郎左衛門裏町跡を結ぶN-S方向に伸びる道路跡で、地表面で道跡を確認できる。絵図等で

は特定することができないが、「上相川一筆絵図」（写真図版 2）における本町～アイズ（会津）町を結ぶ道路が本遺構に該当する可能性がある。東側を S F 3 が通り、これに接続すると推測されるため、斜面下段の本町と上段の九郎左衛門町の居住域の変化によって、両者を結ぶ道筋が変化していった可能性がある。

#### S F 7

弥左衛門町跡の北側と南側のテラスを結ぶ N－S 方向に伸びる道路跡で、地表面で道跡を確認できる。絵図等では特定することができない。同じ町内のテラスでも南北に比高差があるため、これらを結ぶ小路として利用されていたものと考えられる。

#### S F 8

小右衛門町跡と九郎左衛門裏町跡を結ぶと推測される N－S 方向に伸びる道路跡で、「上相川絵図」（写真図版 3）で位置を特定できる。同絵図から推測すると、九郎左衛門町跡で S F 3 に接続し、弥左衛門町跡へ伸びているが、時期によっては道として利用されていない期間があったと考えられ、享保年間の「上相川一筆絵図」（写真図版 2）には描かれていない。また、小右衛門町跡の一部は調査範囲より外れているため、本遺構の全体像は不明であり、道跡としてのプランも不明瞭な箇所が多い。

#### S F 9

九郎左衛門町跡にある N－S 方向に伸びる距離の短い道路跡で、t 83 と t 90 テラスを接続する。比高差のあるテラス間を結ぶ小路と考えられる。

### D 水路跡（図版 1・写真図版 22・別表 7）

検出された水路跡は 1 条である。

平成 18 年度調査区範囲の南縁、弥左衛門町跡 - 九郎左衛門町跡と田町跡 - 床屋町跡の町境に沿って部分的に溝状の遺構が確認されている。このほかにも今回の調査では確認できなかったが、享保期の「上相川一筆絵図」（写真図版 2）に描かれるように、時期によっては、道に沿って水路が設置されていたと考えられる。

#### S D 1

山之神町跡を起点として、E－W 方向に伸びる水路跡である。大山祇神社後背を流れる丹波沢を水源とする水路で、上流部の弥左衛門町跡～田町跡間で最も溝状を呈する水路跡をよく留め、幅 1 m ほどの掘り込みが確認できる。ここから中流部の弥左衛門町跡～鍛冶町跡間で遺構が不明瞭になるが、下流部の九郎左衛門町跡～床屋町跡間で溝状の水路のプランが確認できる。江戸時代の文献に開削年代等の該当する記述はみられないが、「上相川絵図」（写真図版 3）に該当する水路が点線で描かれている。また同絵図上に「此度用水切通のヶ所筋長二百八十間」、「是より下四筆字小沢上地此度用水切通ヶ所傳十郎持ニ證文下ル」と水路の規模などが書かれている。同絵図は、後年に調製されたものであるためこの水路が加筆された可能性もあるが、絵図の作製された年代または調製された年代に開削したものであろう。また、明治 9 年（1876）に作製された地籍図の「相川町中部絵図」にも該当する水路の一部が表記されており、江戸期の S D 1 の一部が明治時代にも現存していたことが地籍図上からもわかる。遺構の性格については、鉾石紛成に際して多量の水を使用するために作業用として引かれたもの、周辺部に井戸が見られないことから、生活用水として利用されたもの、下流部の田畑へ引水するためのものといったいくつかの用途が考えられるが、現時点では不明である。

## E 窪 地 (図版 6・写真図版 16、18、19)

確認された窪地は 15 基である。

地表面において遺構が確認されているが、落葉や土砂等の堆積物があること、また、発掘調査を実施していないことから、実際の遺構数は増減する可能性がある。確認された窪地は、弥左衛門町跡の t 47・83・86・89・90・93・94、九郎左衛門裏町跡の t 116・117・125 テラス・124 テラスの西側で見られ、特に t 47、93、89、90 テラスに集中している。遺構の形状は、円形もしくは楕円形に地面を掘りくぼめた形状のものが多い。窪地の周囲や下部の斜面にはズリの散布が確認されることが多いが、窪地内には石磨や扣石のような粉成用の石製品はあまり見られない。

今回の調査では、発掘調査を実施していないことから遺構の内容を明らかにできなかったが、井戸跡または島根県の石見銀山跡千畳敷地区 S B 02 内の S K 01 の事例に見られるように〔島根県教育委員会・大田市教育委員会 1999〕、これらの窪地で鉱石の粉碎が行われた遺構の可能性がある。

## 4 調査区外で見られる遺構

### A 道 跡 (第 15 図・写真図版 2、3、24、25)

上相川地区で見られる遺跡の特徴として、江戸時代の道跡が現存していることがあげられる。特に「上相川一筆絵図」(写真図版 2)・「上相川絵図」(写真図版 3)等の現存する絵図に描かれた主要な道路は、明治期に作成された地籍図にも里道としてほぼその形状を留めており、昭和期の地字統一によって、里道の摘要から除外され、道の表記がされなくなったものでも現存していることが多い。絵図と現在の道跡が照合できるものは以下の通りである。

#### S F 10

「上相川絵図」(写真図版 3)に描かれる、E-W 方向に伸びる道跡である。山之神町跡の大山祇神社跡へ上る石段が残り、同神社へ向かう参道と考えられる。石段の石材には、福井県の笏谷石が使用されている。

#### S F 11

「上相川一筆絵図」(写真図版 2)や「上相川絵図」(写真図版 3)に表記される、N-S 方向に伸びる道跡である。山之神町跡の北側で道跡を確認できる。弥左衛門町跡から山之神町跡を経て鍛冶沢町跡、上相川番所跡を結ぶ道路で、上相川番所跡付近で「西五十里道」に接続する。S F 10 への分岐点付近から南側は、昭和期の上相川火薬庫建設や水田の造成に伴い、道跡の遺構はほぼ湮滅している。

#### S F 12

「上相川一筆絵図」(写真図版 2)や「上相川絵図」(写真図版 3)に表記される、E-W 方向に伸びる道跡である。床屋町跡から鍛冶町跡と田町跡を経て山之神町跡を結ぶ道路で、現在も里道として地籍図に表記されている。田町跡付近では道跡の遺構プランが不明瞭となるが、床屋町跡から鍛冶町跡間は道跡の遺構が地表面で確認できる。現況での道幅は 2 m 前後と他の遺跡と比較して規模が大きく、道の両側には短冊状のテラスやそれに付随する石垣が多く残る。S F 5 とともに上相川地区の主要道であったと考えられる。

#### S F 18

「上相川一筆絵図」(写真図版 2)や「上相川絵図」(写真図版 3)に表記される道跡で、N-S 方向に伸びる、九郎左衛門町跡と床屋町跡を結ぶ道路で、現在も地表面で確認できる。「上相川絵図」や明治期の地籍図、現在の地籍図においても屈曲した特徴的な道跡が描かれている。

## S F 19

「上相川絵図」(写真図版3)に表記される道跡で、NW－SE方向に伸びる、相川町跡と床屋町跡を結ぶ道路である。絵図によればこの付近は外記町を中心に「田」の字状に道が標記されるが、S F 12やS F 33の大規模な道を除くと、現在も地表面で確認できるものはこの道跡だけである。外記町周辺部は、昭和期の地番統一まで、地籍図上にも短冊状の町割の姿をよく残していた。

## S F 20

「上相川絵図」(写真図版3)や「文政九年相川町墨引」(写真図版4)に表記される絵図で、W－E方向に伸びる、床屋町と玄德寺方面を結ぶ道跡である。現在も地表面で道跡を確認でき、玄德寺へ至る石段が残る。

## S F 22

「上相川絵図」(写真図版3)や「文政九年相川町墨引」(写真図版4)に表記される絵図で、NW－SE方向に伸びる、S F 12と専念寺・玄德寺方面を結ぶ道跡である。現在も地表面で道跡を確認できる。

## S F 33

「上相川絵図」(写真図版3)に表記される道で、NE－SW方向に伸びる、相川町跡から鍛冶沢を渡り、茶屋町跡を結ぶ道路である。一部に水道施設が埋設されていることもあり、概ね全区間において道跡が確認できるが、絵図上で鍛冶沢を渡る橋が架けられている範囲のみ現在では盛土されている。昭和期の地籍図においても里道として描かれている。

## S F 35

「上相川絵図」(写真図版3)に表記される道跡で、NW－SW方向に伸びる、茶屋町跡と柄杓町跡・法花寺跡を結ぶ道跡で、現在も道跡に伴う石段が確認できる。絵図に描かれるように鉤手状に屈曲する形態は、明治期や昭和期の地籍図、現地形でも確認できることから、当時の形態をよく留めていることがわかる。

## S F 37

「上相川絵図」(写真図版3)や「文政九年相川町墨引」(写真図版4)に表記される絵図で、茶屋町でNW－SE方向に伸び、柄杓町内でNE－SW方向に伸びる茶屋町と柄杓町を結ぶ道跡である。現在も地表面で一部道跡を確認できる。

## S F 40

「上相川絵図」(写真図版3)や「文政九年相川町墨引」(写真図版4)に表記される絵図で、NE－SW方向に伸びる、奈良町にあった道跡である。現在も地表面で一部道跡を確認できる。

## S F 43 (西五十里道)

「上相川一筆絵図」(写真図版2)や「上相川絵図」(写真図版3)に表記され、上相川地区と鶴子銀山の屏風沢間を結んだ「西五十里道」と呼ばれた道跡である。相川地区内では一部区間のみ里道の表記がされているが、佐和田地区内では里道の表記がされている。この道から鶴子銀山鶴子沢や青野峠、金北山などの各方面へ向かうことができ、相川往還(中山街道)が整備されるまでの間、往還道の一つとして機能していたと考えられる。道跡は、部分的に斜面の崩落や水害によって遺構が湮滅している区間があるが、良好な状態で当時の道跡が残されている(写真図版30)。現在も道路脇には塚跡や石祠が残されている。

## S F 46

「上相川絵図」(写真図版3)に表記される道跡で、上相川地区と下流部の相川大工町を結ぶ道路である。現在では舗装されている箇所がほとんどであるが、間ノ山、上町地域へと向かう道中には、万照寺前の石段や道両側にテラスが残り、当時の形態を留めている。



## B 寺 社 跡 (第8図・別表4)

『佐渡国寺社境内案内帳』や『佐渡相川志』等の史料から推測される上相川地区所在の寺社は、1社25ヵ寺16院である(史料58、61、67、68)。位置の特定できる神社は、山之神町跡の大山祇神社跡で、位置の特定できる寺院は、鍛冶町跡の専念寺跡・玄德寺跡、茶屋町跡の専照寺跡、柄杓町跡の法花寺跡、奈良町跡の妙恩寺跡である。この他に、現段階での寺院名の特定は難しいが、茶屋町跡に地藏菩薩立像、山之神町跡に墓石が確認されており、なんらかの寺院があったと考えられる。現在も寺域の確認できるこれらの多くは、明治元年(1868)の「廃寺令」により、廃寺となったものか、その後再興されながらも檀家の減少に伴い維持が難しくなったため、合併・廃寺となった寺院である。こうした寺院跡には、寺院の石碑のほか、墓石や五輪塔等の寺院に関連する石造物が現在も散乱しており、大まかな寺域を推定することができる。

多くの寺院の位置が特定できないのは、相川金銀山の鉱石産出量の減少による鉱山の不景気や上町・下町地域への人口流出に伴う上相川地区の人口減少によって基盤を失った寺院が、同地区から転出・他の寺院との合併・廃寺となっていったことによるもので、文献史料によって寺院のあった町名は判明しているものの、その多くが寺域不明となっている。

## C 番 所 跡

上相川地区の周縁部に設けられた番所に、上相川南東部端に位置し、鶴子銀山との幹線道路が通る上相川番所と、六十枚間歩を始めとする右沢上流部の採掘場所へ向かう六十枚番所が史料から確認されている。

上相川番所は、慶長6年(1601)に成立し(史料36・37)、宝暦8年(1758)に同番所が廃止されたことが書かれている(史料47)。この番所は、鶴子銀山方面と相川を結ぶ西五十里道のへ向かう相川側の出入口となるため、人々の出入りや物資の往來を監視するために設置されたと考えられる。現在までのところ、発掘調査等によって番所の存在を示す痕跡は見つかっていないものの、「上相川絵図」(写真図版3)等の絵図資料から、上相川地区の南東端、山之神町跡・鍛冶沢町跡の南側、桐の木沢と河川の合流地付近が番所跡地と推定され、この付近では昭和期に水田となっていたものの、現在でも複数のテラスや石垣が残されている。

六十枚番所は、『佐渡相川志』に「当番所始りの年は金銀山開発の暦に同じ」とあり(史料38)、慶長6年(1601)頃に成立したものと考えられる。同番所は、右沢の六十枚間歩をはじめとする間歩の維持管理や物資の供給、出入りの監視を目的とする四ツ留番所として設置されたもので、番所跡よりわずかに登った右沢左岸の沢沿いに六十枚間歩跡がある(第6図)。六十枚番所跡は、現在の右沢浄水場からやや東側、右沢を登る場所にあったと考えられるが、地表面で確認できる遺構はなく、浄水場施設建設に伴って土地の造成が行われた形跡が見られるため、遺構は湮滅している可能性が高い。

## 第V章 遺 物

### 1 概 要

出土・表採した遺物は、中世末～近世にかけての土器・陶磁器類、土製品、石製品、金属製品、銭貨など約1万点を数える。このうち主体となるのが陶磁器類で、出土量は全体の約87パーセントにおよぶ。ここでは、遺構からの出土・地表面採集遺物を中心に上記種別の順に記述するが、出土量の多い土器・陶磁器類は各遺構ごとに、その他の遺物は出土量が少ないことから器種ごとに記述を行うこととした。また、平成17年度に刊行した『佐渡金銀山遺跡（上相川地区）確認調査概報』[佐渡市教育委員会2006]で取り扱った遺物についても、再度掲載することとした。

### 2 平成17年度調査区

#### A 土器・陶磁器類

出土量が最も多いのは肥前系の陶磁器で、調査区のほぼ全域に分布している。それ以外では、瀬戸美濃系の陶器や備前系の播鉢、中国産の磁器や土器では灯明皿などがみられる。以下、主要遺構であるテラスごとに出土・表採遺物の記述を行う。

##### t 1 テラス（図版7・写真図版33－1・2）

1・2ともトレンチから出土している。1は瀬戸美濃系の天目茶碗で、口縁部は上方へ屈曲し、口縁端部は外反する。内外面に錆釉を施すが、外面底部は露胎である。2は灯明皿で、底部に静止糸切り痕が残り、口縁端部は丸く仕上げる。

##### t 5 テラス（図版7・写真図版33－3～9）

灯明皿と肥前系の皿・甕などが出土している。3と6は灯明皿で、3の底部には静止糸切り痕がみえる。6の外面底部は丸く仕上げており、手づくね成形のものと考えられる。両者とも口縁部に煤が付着する。4・5は陶器の皿である。4は肥前系で、見込みには胎土目積み痕が、底部には兜巾高台がみられ、高台と高台脇の区分が明瞭でないことから、16世紀末の製品の可能性が高い。5は瀬戸美濃系で、内面に型押し菊花を象り、長石釉が厚く施され、釉には貫入が入る。7・9は肥前系陶器の甕で、7は口縁部を玉縁状に折り返し、9は口縁部を外方へ逆し字状につまみ出す。両者とも内外面に鉄釉を施すが、9の口縁頂部は釉剥ぎがなされている。8は備前系の播鉢で、口縁部が三角形に肥厚し、外面に二重沈線を張り巡らす。

##### t 10 テラス（図版7・写真図版33－10～12）

10は肥前系磁器皿で、内面に染付菊花文、外面に圈線がみられる。高台内の釉は黒っぽく発色し、高台畳付には砂が付着する。11は型打ち成形によりウサギの形を呈する水滴で、目・耳・口に色絵装飾が施される。外面底部は露胎で、布目痕が残る。12は中国磁器の皿で、内面には染付による圈線及び「壽」字を表す。高台内面には、釉を透かして放射状の削りを行った痕跡がみえる。

##### t 12 テラス（図版7・写真図版33－13～21）

13は瀬戸美濃系陶器の碗で、削り出し高台をもち、内外面に緑色の釉を施すが、外面底部は露胎である。14は灯明皿で、静止糸切り痕が残り、ほぼ全体に煤が付着する。15・17～19は肥前系の磁器である。

15・19は碗で、15は細身の高台をもち、器厚は薄く、外面体部及び高台内に染付による圈線を巡らす。19の外面には草花文、高台内には方形に「福」の文字がみられる。17・18は皿の底部で、ともに器厚は厚い。17の見込みには蛇の目状の釉剥ぎが、18の内面には意匠不明の装飾がみられる。16・21は肥前系陶器皿の底部で、いずれも外面底部は露胎である。16の見込み及び底部には胎土目積み痕が、21の見込みには砂目積み痕が残る。20は越中瀬戸の播鉢で、口縁端部がわずかに内湾し、外面に断面三角形の凸帯を貼り付ける。

**t 13・15・23 テラス (図版7・写真図版33－22～24)**

いずれも灯明皿である。22・23は底部に静止糸切り痕が残る、口縁部にわずかに煤が付着する。24は左回転の糸切り痕がみられ、ほぼ全体に煤が付着する。

**t 25 テラス (図版8・写真図版34－25～29)**

25・26は灯明皿で、25の底部には回転糸切り痕が、26の底部には静止糸切り痕が残る。両者とも全体的に煤が付着する。27・28は肥前系陶器である。27は播鉢の口縁部で、外面には帯状の凸帯を張り巡らし、端部はわずかに外反する。28は鉢で、口縁外面に白化粧土の刷毛目文を、外面体部下半には鉄釉を塗り分ける。29は肥前系磁器碗で、内面一重、外面二重の網目文が装飾される。

**t 26 テラス (図版8・写真図版34－30～33)**

30・33は肥前系陶器である。30は皿の底部で、内面には鉄釉を使用した意匠不明の文様が描かれ、見込みには胎土目積み痕が残る、高台は露胎である。33は播鉢で、口縁部のみに鉄釉を掛け、端部は内面に張り出す。31は筒型の磁器碗で、高台畳付に砂が付着する。32は灯明皿。底部に回転糸切り痕が残る。

**t 27 テラス (図版8・写真図版34－34～39)**

34・39は瀬戸美濃系陶器の碗である。34は器厚が厚く、高台内部を浅く削り出す。体部上半をやや内湾させた後、口縁端部を外反させる。39も厚手の碗で、高台畳付を蛇の目状に削り出し、口縁はやや外反する。内外面に白色の釉を掛けるが、外面に装飾的に銅緑釉を施す。35は灯明皿で、口縁部にわずかに煤が付着する。36・37は肥前産陶器。36は鉢の口縁部で、内面は白化粧土による刷毛目文を施し、口縁端部を「く」の字状につまみ出す。37は甕の胴部で、内面に青海波文状の当て具痕が認められる。38は青磁の皿で、器厚は厚く、高台内に砂が付着する。内面にはヘラ削りによる草花文が陰刻される。

**t 29 テラス (図版8・写真図版34－40～44)**

40・44は肥前系磁器碗である。40は広東碗風の器形をもち、外面に染付による草花文が表される。44の外面には、コンニャク印判による菊花文がみえる。41は陶器灯明皿。内面に透明釉が掛かるが、外面は無釉で、底部は糸切り後無調整である。42は肥前系陶器の壺で、外面頸部に藁灰釉、外面体部に鉄釉を掛け分ける、いわゆる朝鮮唐津の技法が窺える。43は須佐唐津の播鉢で、内外面に錆釉が施される。口縁端部はやや外反し、外面に断面三角形の凸帯を張り巡らす。

**t 32 テラス (図版9・写真図版35－45～48)**

45は肥前系磁器の碗で、外面に染付による二重網目文が表される。46は土製の十能で、炭入れ部と柄の接続部分が残る。内外面ともミガキやナデ成形が施され、炭入れ部内面には煤が付着する。47は肥前系陶器の皿で、内面は銅緑釉、外面は透明釉を掛け分けている。内面見込みは蛇の目釉剥ぎ、外面底部は露胎である。48は板状の土器である。底部の器厚は薄く、口縁端部は断面三角形の形状をなし、わずかに上方へ摘み出される。全体的に黒く煤けている。平成6～10年度にかけて発掘調査された佐渡奉行所跡の寄勝場炉跡から、同型の土器が出土しており〔相川町教育委員会2001〕、金銀の精錬に関係する遺物の可

能性がある。

#### t 35 テラス (図版 9・写真図版 35－49～50)

49は陶器の碗で、器厚は薄く、轆轤成形による凹凸がみられる。体部は透明釉、口縁部は銅緑釉が掛かる。50は在地産陶器の土瓶口縁部で、折縁口縁端部をさらに上方へつまみ出す。内外面とも鉄釉が掛かる。

### B 土製品

羽口や五徳などが出土しており、10点を図示した。このうち羽口の出土は、調査区内で金属製の採掘道具の製造・修理を行う鍛冶作業、あるいは精錬作業が行われていたことを推測させる。

#### 羽口 (図版 13・写真図版 39－1～7・9)

鍛冶作業や精錬作業用の炉の内部温度を上昇させるために、強制的に酸素を送り込む送風口として使用する土製品である。

採集した羽口はすべて破片であり、断面円形の孔が貫けている。1は外面の送風口が被熱により溶融し、金属の溶融物が付着する。外郭の断面は角形を呈する。2は末口部で、外面は被熱により器壁が剥離している。3・4は先端部で、3は内外面とも暗赤色のガラス質の溶融物が、4は外面に炭化物が付着する。5の外面は被熱により溶融し、先端部には金属の溶融物が付着する。外郭断面は1と同様に円形である。6・7の外面および9の内外面には溶融物が付着し、7の内面は被熱により赤色化している。いずれも外郭断面は角形である。

#### 五徳 (図版 13・写真図版 39－8)

火鉢や囲炉裏など炉の中で鉄瓶や鍋などを乗せるための器具で、円形の輪に3本または4本の足が付いた架台である。

8は脚部で、手づくね成形が施され、表面に煤が付着している。

#### 不明品 (図版 13・写真図版 39－10)

断面は凸型を呈する。何らかを塞ぐ栓のようなものと推測できるが、中央部に直径10mm程の小孔が穿たれており、用途は不明である。

### C 石製品

石製品は、砥石・扣石・石磨・硯・碁石の5種類が出土・採集されている。特に石磨は、上相川で鉾石の粉成作業が行われていたことを示す重要な遺物である。t 29 テラスの T9 から5点の石磨が集中して出土しており、この付近に選鉾作業施設が存在していた可能性がある。

#### 砥石 (図版 14・写真図版 40－1・10)

刀剣・包丁や鎌など、日常的に使用する刃物の切断機能の復元のために使用されたと考えられる。

1・10とも上面に使用痕が残り、10は厚さ15mm程の板状の形式のものである。砥石は材質により、荒砥(砂岩)、中砥(凝灰岩)、仕上げ砥(泥岩)の3種に大別され、1・10ともきめの細かい泥岩が用いられていることから、仕上げ砥として使用されたと推測される。

#### 扣石 (図版 14・写真図版 40－2・3・6、図版 15・写真図版 41－18)

扣石は鉾石の荒割りに用いられる。比重の高い石材に、半球形または箱型の窪みを2～4箇所ほど穿いている。この扣石に鉾石を入れて、鉄製のハンマーで砕いている光景が、江戸時代の佐渡奉行所内の様子を描いた絵図にみられる。

2は破片であるが、上面に一辺10cm程の方形の窪みが2個穿たれている。3・6・18は半球形の窪みを持つ。3は上・下面それぞれ2個の穴があり、両面で使用された痕跡が窺える。6・18はともに上面に1箇所窪みが認められる。この窪みの形状の差異については不明な点が多いが、碎石に使用したハンマーの形状や時代差などの要因が考えられる。

#### **石磨（図版14・写真図版40－8・9・12～16、図版15・写真図版41－17）**

鉱石を粉砕する道具で、上臼と下臼が一对となって動き、下臼の上に上臼が乗って、上臼の重みで鉱石を磨り潰す。

9・12・14・15は上臼で、材質は下相川産の球顆状流紋岩である。9は側面に3個の柄穴が掘られ、2個は上面側に、1個は磨面側に開口している。磨り減った磨を重量がかかるように幾つも重ね、ずれないように溝の位置を合わせ、留め木を噛ませて再利用したと考えられる〔今村1990〕。12の磨面には鉱石を磨り潰すときにできる回転痕がみられ、磨面の中央に供給孔があり、1条の物配とリンズ痕が供給孔に接して刻まれている。側面には挽木孔を設置した柄穴が彫られている。14・15は破片で、磨面には回転痕が残る。15の側面には柄穴がみられる。

8・13・16・17は下臼で、材質は相川北部の片辺・鹿野浦海岸産の花崗岩質礫岩である。8・13・17は破片で、磨面に回転痕がみられる。側面は成形されず、荒割りされたままである。16の磨面には、供給孔から側面に向かって1条の物配が彫られる佐渡特有の形態を持つ。

#### **硯（図版14・写真図版40－5・11）**

5は摺り面中央部に、幅30mm程の浅い墨溜まりがみられる。石材は頁岩を用いている。10は練り物の硯である。

#### **碁石（図版14・写真図版40－7）**

灰色を呈しており、白碁石に用いられたと考えられる。

#### **不明品（図版14・写真図版40－4）**

4は箱型の形状を呈しており、中央に直径12cm程の孔が開けられている。側面に削り痕がみられることから、上臼の未製品の可能性がある。

### **D 金属製品**

煙管・鋸・釘・銅器の片口が出土した。図示した8点は、すべてトレンチ内から出土したものである。

#### **煙管（図版15・写真図版41－1・3～5）**

1・4は煙管の雁首である。火皿は円形で、直径は15～17mm程である。頸部径が細いことから、江戸時代前半のものと考えられる。2・3は煙管の吸口である。吸口径が小さく、細身であることから、江戸時代前半頃の所産であろう。いずれも銅製で、表面に緑青が付着する。

#### **鋸（図版15・写真図版41－2）**

長さ112mmを測り、ほぼ左右対称の「コ」の字状の形状を呈する。建物など、木材と木材をつなぎ合わせるために使用されたものと考えられる。

#### **釘（図版15・写真図版41－6・8）**

6・8とも長さは80mm前後である。6の釘頭は六角形を呈するが、8の釘頭は殴打され潰れている。レー等留める犬釘と考えられるが、詳細な用途は不明である。

#### **銅器（図版15・写真図版41－7）**

器種は不明であるが、銅製の片口部が残る。注ぎ口の幅は18mmを測る。

## E 銭貨

永楽通宝・寛永通宝・雁首銭の3種類が確認された。図示したもの内、3点を除いて全てトレンチ内から出土しており、t 27 テラスの T8 と t 29 テラスの T9 からの出土が顕著である。

### 永楽通宝（図版 15・写真図版 41－9）

全体的に緑青に覆われており、文字は不鮮明である。厚みも薄く、重量も軽いことから、国内で模鑄された可能性が高い。16世紀後半～17世紀前半にかけてのものと考えられる。

### 寛永通宝（図版 15・写真図版 41－1～8・10～16・17～19・22・23）

ほとんどが銅製であるが、真鍮製のものが1点出土している。

銅製の寛永通宝（一文銭）は、寛永13年（1636）から天明元年（1781）まで鑄銭され、鑄造時期は大きく3期に大別される。1期は寛永13年～万治2年（1659）、2期は寛文8年（1668）～天和元年（1681）、3期は元禄10年（1697）～延享4年（1747）および明和4年（1767）～天明元年である。一方真鍮製（四文銭）は、明和5年（1768）以降に鑄造され、明治中期まで通貨として使用された。

内訳は1期5点、2期3点、3期6点、真鍮製1点、不明4点で、時期的には17世紀半ば～18世紀後半まで幅広く出土している。

### 雁首銭（図版 15・写真図版 41－17）

煙管の雁首を押し潰して銭貨に模した雁首銭である。近世墓への副葬品（六文銭）や、緡銭に紛れ込ませて使用されたと考えられる。

## 3 平成18年度の遺物

### A 土器・陶磁器類

平成18年度の調査では、発掘調査を実施しておらず、採集した遺物は全て地表面で採集されたものである。傾向としては、平成17年度と同様に、肥前系の陶磁器が主体であるが、仏飯器や香炉といった仏具が確認されている。その他に瀬戸美濃系の陶器や備前系の播鉢、土器では灯明皿などがみられる。以下、テラス、道、構造物の順に表採遺物の記述を行う。

#### t 42・43 テラス（図版 9・写真図版 35－51～53）

51・53は肥前産磁器である。51は皿の底部で、内面に意匠不明の染付文様が表される。53は碗で、外面体部に草花文、高台脇に二重圏線、高台内に一重圏線と判読不能な銘款が入る。52はほぼ完形の灯明皿で、底部には静止糸切り痕が残る、全体的に煤が付着する。

#### t 45 テラス（図版 9・写真図版 35－54・55）

54は肥前系陶器の碗で、内外面に灰釉が掛かるが、外面底部は露胎である。内面見込みに砂目積みの痕跡を残す。55は肥前系磁器の皿で、内外面とも染付による草文と圏線が描かれる。

#### t 47 テラス（図版 9・写真図版 35－56・57）

56は陶器播鉢で、底部に回転糸切り痕が残る。内面卸目の溝は浅く、使用によって摩滅したと考えられる。57は青磁の大皿で、器厚は厚く、高台内は浅く削り込まれている。内面見込みにヘラ削りによる印刻が施される。

**t 51・52 テラス (図版 9・写真図版 35－58～60)**

58は瀬戸美濃系陶器の皿で、内外面とも志野釉が厚く掛かり、貫入が入る。内面は菊花連弁型押し成形が施され、ヘラ削りによって口縁端部を調整する。59は磁器の猪口で、口縁部は外反し、外面にはコンニャク印判による菊花文が表される。60は肥前系陶器の皿で、内面見込みと底部外面に砂目積み痕が残る。底部は糸切り後、無調整で露胎である。

**t 54 テラス (図版 9・写真図版 35－61・62)**

61は肥前産陶器の甕で、外面に鉄釉を施し、口縁端部を外方へ折り曲げる。内面には同心円状の当て具痕、外面には平行上の叩き痕が窺える。62は磁器の小瓶で、底部外面は糸切り後、無調整で無釉である。

**t 57 テラス (図版 9・写真図版 35－63～65)**

63は灯明皿で、底部外面に静止糸切り痕が、口縁部に煤が残る。64・65は肥前系陶器の碗である。64は内外面に藁灰釉、65は灰釉を掛け、高台脇はヘラ削り成形、底部外面は露胎である。64は口縁部がやや外反する。

**t 61 テラス (図版 10・写真図版 36－66・67)**

66は陶器の甕である。手づくね成形で、口縁を外方へつまみ出した後、内面へ折り返す。67は白磁の皿で、内面に植物の線彫り彫刻が施される。高台と高台脇の区別は不明瞭である。

**t 63 テラス (図版 10・写真図版 36－68・69)**

68は陶器の火入で、外面に灰釉を施すが、内面及び外面底部は無釉である。高台から内湾気味に立ち上がり、口縁部は外反後、内側へ折り返す。69は陶器鉢の底部で、内面には銅緑釉、外面には鉄釉を塗り分け、高台内も施釉される。高台の削りもシャープで、高台内の深さは高台脇よりも深い。

**t 67 テラス (図版 10・写真図版 36－70)**

70は肥前系陶器の皿で、内外面とも灰釉が施されるが、底部外面は露胎である。高台畳付部分に、胎土目積みの痕跡が残る。

**t 71 テラス (図版 10・写真図版 36－71)**

71は陶器の皿で、全面に長石釉が掛かり、口縁部及び高台畳付部分はやや赤みをおびる。高台から緩やかに立ち上がり、外反する口縁をもつ。

**t 84 テラス (図版 10・写真図版 36－72～74)**

72は陶器の皿で、内面に意匠不明の鉄絵装飾が施される。また、高台から上方にかけて菊弁を模した型打ち成形がみられる。73は陶器甕の口縁部で、内外面とも鉄釉が掛かるが、口縁上面は釉剥ぎがなされている。口縁端部は外方へ折り曲げられ、内側へも若干張り出すT字型となる。74は磁器火入である。内面は無釉で、頸部外面には雷文と圏線が巡る。体部外面には草文と考えられる文様が表現され、型打ち成形による凹凸も顕著である。

**t 88 テラス (図版 10・写真図版 36－75)**

75は肥前系陶器の鉢である。内面は白化粧土を帯状に貼付け、縦方向に刷毛目文を施し、花卉を表現する。外面は横方向に刷毛目状の文様が描かれる。

**t 90 テラス (図版 10・写真図版 36－76・77)**

77は陶器の天目茶碗で、内外面に黒釉が掛かる。底部は露胎で、高台は糸切り後無調整で、砂が付着する。高台内の削りは浅く、兜巾状の突起物が残る。77は備前系の擂鉢で、口縁端部は三角形状に肥厚し、外面に三重の沈線が巡る。

**t 91 テラス (図版 10・写真図版 36－78～80)**

78は陶器の蓋で、器厚は薄く、接地面のみ釉剥ぎがなされる。79は陶器の皿で、口縁部は外反し、内面見込みには砂目積み痕が残る。体部は型打ち成形による菊弁が表現される。81は肥前系磁器の皿で、内面見込みに「福」、高台内に「大明」の銘款がみえる。

**t 96・98 テラス (図版 10・写真図版 36－81～83)**

81・82は肥前産陶器皿の底部である。81は内面見込みに砂目積み痕、82は胎土目積み痕が残る。底部外面はともに露胎で、兜巾高台である。83は陶器の杯。内外面に鉄釉を施す。

**t 101 テラス (図版 10・写真図版 36－84、図版 11・写真図版 37－85～90)**

84～86は土器灯明皿。84は口縁部に、85は内面全体に煤が付着し、底部外面には静止糸切りの痕跡が残る。86は手づくね成形。口縁部はナデられ、底部を丸く仕上げる。87は肥前系陶器の皿で、口縁を外方斜め上方へ折り曲げる。内面は、象嵌の文様に白化粧土を施した、いわゆる三島手の手法が用いられ、口縁部には剣先蓮弁文、体部には唐草文が陰刻される。88は機種不明の青磁製品で、内外面に釉が掛かり、底部は無釉。立ち上がり後、内面へやや傾斜する筒型の形状を呈する。89は磁器仏飯器の体部で、脚部は剥離している。胎土は陶質で、釉全体に貫入が入る。外面に染付による松文と圏線が描かれる。100は磁器の瓶で、内面は無釉である。高台畳付は釉剥ぎされ、高台内に重ね焼きの際に離剤として用いられたと考えられる大粒の砂が付着する。

**t 105 テラス (図版 11・写真図版 37－91～93)**

91は土器焙烙で、口縁部は上方へ屈曲し、外面には煤が付着する。92は磁器仏飯器で、脚部に二重圏線が巡る。底部は無釉で、浅く削り出す。93は肥前産の磁器皿で、内面は染付による二重圏線が描かれ、見込みは蛇の目釉剥ぎがなされる。釉剥ぎ部分はわずかに砂が付着する。

**t 107 テラス (図版 11・写真図版 37－94・95)**

94は青磁の香炉で、内面は釉剥ぎされ、底部外面は無釉である。三足付きの足の部分が欠損している。95は磁器杯で、外面にわずかに染付の文様がみえる。

**t 108 テラス (図版 11・写真図版 37－96)**

96は肥前産陶器の皿である。内面に意匠不明の鉄絵装飾が施され、見込み部分に胎土目積み痕が残る。高台はやや深めに削り出す。16世紀末のものと考えられる。

**t 109 テラス (図版 11・写真図版 37－97)**

97は土器灯明皿で、底部外面に静止糸切り痕が残る、内面全体と外面の一部に煤が付着する。

**t 113・115 テラス (図版 11・写真図版 37－98・99)**

98・99は肥前系磁器皿である。98は蛇の目高台をもち、高台内は無釉。内面には染付草花文が描かれ、葉の葉脈を墨弾き技法によって白く表現している。99の内面見込みに蛇の目釉剥ぎがみられ、釉剥ぎ部分に銹釉が塗布される。

**t 119 テラス (図版 11・写真図版 37－100)**

100は陶器の土瓶である。外面に体部は轆轤成形による凹凸が顕著にみられ、外面上部に把手の剥離痕が残る。口縁内部の蓋接地面は釉剥ぎ。底部外面は露胎で、高台畳付に煤が付着する。

**t 120 テラス (図版 11・写真図版 37－101・102)**

101は土器灯明皿で、右回転の糸切り痕をもち、全体的に煤が付着する。102は肥前系陶器の播鉢で、間隔の広い卸目をもつ。口縁部は、いったん外側へ湾曲した後、端部を外反させるS字状を呈する。鉄釉



を口縁部のみ掛ける。

**t 122 テラス (図版 11・写真図版 37－103)**

103 は肥前系陶器の皿で、内面には三島手による菊花文と剣先蓮弁文が表現される。内面見込みおよび高台畳付には砂目積みの痕跡が残る。

**t 123 テラス (図版 11・写真図版 37－104・105)**

104 は土器灯明皿。底部は静止糸切り痕がみえ、口縁部に煤が付着する。105 は陶器鉢で、内外面に鉄釉を掛けるが、体部外面下半は露胎である。底部は兜巾高台、蛇の目状高台の形状をとる。

**t 124 テラス (図版 11・写真図版 37－106)**

106 は肥前産磁器の皿で、内面見込みに意匠不明であるが、吹墨技法によって描かれた文様がみられる。

**t 126・127 テラス (図版 12・写真図版 38－107・108)**

107・108 は肥前系の磁器である。107 は丸みを帯びた碗で、体部外面に文が描かれる。108 は皿の底部で、内面見込み中央に菊花文、周囲に菊唐草文と二重圏線が巡る。

**t 128 テラス (図版 12・写真図版 38－109)**

109 は土器焙烙である。口縁部は横ナデされ、外面に煤が付着する。

**t 136 テラス (図版 12・写真図版 38－110)**

110 は肥前系磁器の大皿で、内面見込み中央には梅花文と考えられる装飾が施される。周囲には二重圏線と草文が染め付けられる。高台内に砂が付着する。

**t 142 テラス (図版 12・写真図版 38－111)**

111 は肥前産磁器碗である。内面見込みは蛇の目釉剥ぎされ、外面にはコンニャク印判がみられる。時期的には 18 世紀代のものと考えられる。

**t 148 テラス (図版 12・写真図版 38－112)**

112 は肥前産陶器の皿で、内外面とも灰釉が施釉される。底部は露胎で、兜巾高台をもつ。内面見込み及び高台畳付に胎土目積み痕が残ることから、16 世紀末のものと考えられる。

**t 150 テラス (図版 12・写真図版 38－113)**

113 は土器火鉢で、推定口径 31.0cm を測る。口縁頂部はヘラ削り調整される。

**t 151 テラス (図版 12・写真図版 38－114)**

114 は磁器火入。内面無釉で、底部は内外面とも煤が付着する。外面には二重圏線が描かれる。

**S F 3 (図版 12・写真図版 38－115・116)**

115・116 とも肥前系の陶器である。115 は碗で、全体に透明釉が掛かり、貫入が入る。高台畳付と体部上面割れ口に、煤状の付着物が残る。116 は皿で、内面は銅緑釉、外面は透明釉を掛け分けている。内面には横に流れる文様が彫られ、見込みは蛇の目釉剥ぎ。釉剥ぎ部分に砂目積み痕と、判読不能の墨書がみえる。

**S F 4 (図版 12・写真図版 38－117～122)**

117 は土器灯明皿で、底部には回転糸切り痕が残る。全面に煤が付着する。118 は磁器瓶で、内面無釉、高台畳付は釉剥ぎ。高台外面に染付による二重圏線が巡る。119 は機種不明磁器の体部で、外面に釣り人のような人物文と風景文が描かれる。120 は肥前系時期碗で、細身の高台をもち、釉内に気泡が入る。外面に草花文、高台内に一重方形「福」の銘款が表される。121・122 は磁器皿である。121 は濃い青みがかった呉須を用い、内面に樹木、外面に菊唐草文が描かれる。122 は陶質の胎土で、全面に貫入が入る。内面

は染付による圏線と意匠不明の文様が描かれ、口縁端部は外反する。

#### **S F 5 (図版 12・写真図版 38－123～126、図版 13・写真図版 39－127～132)**

123・124 は土器灯明皿である。123 は底部中央に直径 5mm 程の小孔が穿たれている。器具や灯心具の固定のためと考えられる。124 は下皿で、底部に回転糸切り痕が残る。125・126 は陶器の蓋。125 は外面のみ鉄釉を施し、内面は露胎。擬宝珠型の摘みをもち、底部に回転糸切り痕が残る。126 は全面に鉄釉が掛かり、口縁部は外方へつまみ出し、下方にのびる返しが付く。体部と返しの接続部には、蓋を持ち上げる際に用いたと思われる紐通しの孔が開く。127・128 は肥前産磁器皿である。127 は陶質の胎土で、釉薬に貫入が入る。内面見込みには昆虫や草花などが描かれる。128 は幅広な高台をもち、内面見込みには、魚文と雲文がみられる。129 は磁器碗で、口縁部にむかって丸みをおびながら立ち上がる。外面には、染付による笹文と圏線が表される。130 は筒型の磁器碗で、口縁部内面には四方櫛文、外面には菊花文と斜格子文がみられる。131 は磁器杯の底部。高台の削り出しは深く、高台外面に二重圏線が巡る。131 は竹筒型をした青磁の火入で、内面体部下半は無釉である。

#### **S F 6 (図版 13・写真図版 39－133・134)**

133 は土器灯明皿で、底部は回転糸切り。ほぼ全面に煤が付着し、外皿内面に灰がみられる。134 は肥前系陶器の大皿で、胴部上端で屈曲し、鐙縁状の口縁をもつ。

#### **S F 8 (図版 13・写真図版 39－135・136)**

135 は土器灯明皿で、底部に静止糸切り痕が残る。136 は磁器碗の蓋で、口縁部は外方へつまみ出し、下方へのびる返しがつく。外面は染付による網目文が表される。

#### **No.48 石垣 (図版 13・写真図版 39－137)**

137 は肥前系磁器皿で、内面見込みは蛇の目釉剥ぎされ底部は無釉である。17 世紀中頃のものとして想定される。

#### **No.56 石垣 (図版 13・写真図版 39－138)**

138 はほぼ完形の土器灯明皿で、底部は静止糸切り、体部は横ナデで仕上げる。

#### **No.64 石垣 (図版 13・写真図版 39－139)**

139 は土器灯明皿である。底部に回転糸切り痕が残り、ほぼ全面に煤が付着する。

### **B 土製品**

2 点の瓦を表採し、1 点を図示した。今回の調査では、瓦製品がほとんど確認されなかったことから、上相川地区周辺では、瓦葺の建物が少なかったことが想定される。

#### **瓦 (図版 13・写真図版 39－11)**

燻し瓦の丸瓦である。凹面には布目痕がみられる。

### **C 銭貨**

寛永通宝 2 点を採集した。

#### **寛永通宝 (図版 15・写真図版 41－20・21)**

20 は 3 期、21 は 1 期に分類される。

## 4 調査区内の石製品

上相川地区でみられる石製品には、鉾山臼（佐渡では石磨と呼ばれる、鉾石粉成用の回転臼）や扣石といった鉾山に関連するものが多く、地表には破損して廃棄されたものが散乱している。また、相川の市街地においても、石垣や建物の礎石・庭石などに転用され、再利用されているものも多く見られ、鉾山都市相川の独特な景観を形成している。市街地でみられるものは、上相川等の鉾山集落が廃絶した後に、山野に廃棄されていたものの中から遺存常態の良いものが搬出されて再利用されていることが、過去の聞き取り調査から判明しており、中には「湯之奥型」「黒川型」と呼ばれる中世の鉾山臼が見られる〔佐藤 1999〕。

### A 石材と産地

相川地区で見られる石材の産地については、平成 16 年度に刊行された『佐渡金山遺跡 相川地区石造物調査報告書』に詳しい〔佐渡市教育委員会 2005〕。相川金銀山の場合、鉾石粉成に使用された石磨は、石材がほぼ限定されている点に特徴がある。

石磨の石材には、佐渡市下相川でみられる吹上石とよばれる球顆状流紋岩や外海府の片辺・鹿野浦海岸（第 3 図）の片辺礫岩とよばれる花崗岩質礫岩が多くみられ、扣石の石材には下相川産の玄武岩質安山岩が多くみられる。下相川は江戸時代初期に石工専門の集落が形成された地域で、片辺・鹿野浦海岸における石切丁場の開発も江戸時代初期に遡ると言われている。周辺部一帯には下相川吹上海岸石切場跡、片辺・鹿野浦海岸の片辺・鹿野浦海岸石切場跡をはじめとする石切丁場が多く残されており、現在も矢穴列や鑿跡などの遺構が確認できる。

鉾石粉成用に使用される石磨の石材の特色は以下の通りである。

#### （1）吹上石（球顆状流紋岩）

造岩鉱物は石英、長石等が主に見える。多数の球顆を含む流紋岩である。球顆は一種または二種以上の繊維状鉱物が放射状または同心円状に集合したもので、球顆の間には緻密な隠微晶質の石基がある。美しい菊花状集合体のものもあり、淡桃色、淡褐色、緑色、またはそれらが混じり合っているものがある。硬くて風化しにくく、しみ割れ等も生じにくいいため、採石時における切り出し作業も難しい。したがって、細工は困難であるが、鉾山の鉾石粉成用の石磨の上臼に使用するほか、石垣、まれに墓、手洗い鉢用の石材として見られる〔相川町史編纂委員会 1973〕。

#### （2）片辺礫岩（礫岩）

片辺から鹿野浦に至る海岸には、花崗岩礫を多量に含む礫岩が分布している。この特殊な礫岩を片辺礫岩と呼び、片辺南海岸より鹿野浦に分布する塊状、無層理のものと、平根崎、戸中付近に分布する層理が発達し、砂岩、珪質細粒凝灰岩と互層するものがある。石材として切り出されたものは前者で、分布が海岸沿いに限られ、花崗岩礫がほぼ 80～90%を占める礫岩で、基質は灰緑岩、色調は帯黄緑色で、特に暗緑色を呈する花柱状節理がほぼ垂直に発達して断崖を造り、遠望すると火成岩体のような参状を示している。細工は比較的容易ではなく、用途は前述のように鉾山の鉾石粉成用の石磨（下臼）材として多量に使用され、その石切丁場は、海岸沿いの断崖、波打ち際等に美しいノミ跡を残している〔相川町史編纂委員会 a 1973〕。

## B 分布状況

平成 17～18 年度の調査区内における石製品の点数は、平成 17 年度が 172 点、平成 18 年度が 472 点であり、その多くが地表面で確認されたものである（図版 5・写真図版 32、33・別表 14）。このうち、種別ごとに石製品の数量及び比率を見ると（第 3 表）、石磨と扣石が全体のほぼ 99% を占めており、鉾山集落跡としての本遺跡の特徴を表している。確認された石製品は、完形品が少ないため形態的な分類が難しいが、石磨の種別を見ると、下臼に比べて上臼が多く見られる傾向にある。これは、石材の硬度差による磨耗速度が上臼の方が速いため、これが廃棄された数量に違いとなって表れているものと考えられる。

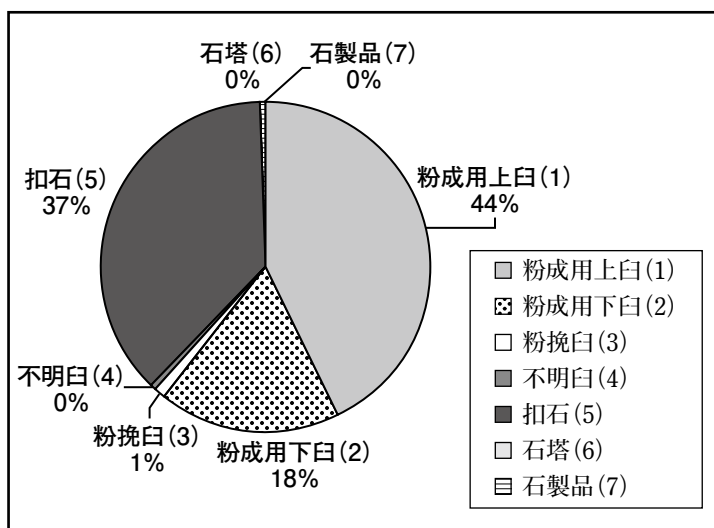
次に町ごとに数量及び組成比率を見ると（第 4 表）、弥左衛門町跡が 392 点と最も多く、次いで小右衛門町跡の 86 点、本町跡の 59 点、九郎左衛門町跡の 52 点、九郎左衛門裏町跡の 25 点であった。九郎左衛門裏町跡では、石製品の数量が少なく、組成比率も扣石に偏りが見られる。これらの分布状況を見ると、九郎左衛門町跡から弥左衛門町跡にかけての S F 5 周辺部や小右衛門町跡付近の S F 1 周辺部といった道沿いに集中する傾向がみられ、石垣石として再利用されているものも多い。

次に石磨の形状等の特徴をみると、現在までのところ、所有者からの聞き取り調査によって、おおよその採取地点が判明している「湯之奥型」「黒川型」の鉾山臼を除き〔佐藤 1999〕、平成 17 年度及び 18 年度の調査では、同型のものは発見されていない。上相川地区でよく見られるタイプは、供給孔が軸受けを兼ねる軸の回転痕の無い回転臼〔今村 1992〕である。調査区内で確認された石磨は、破片資料や石垣石として再利用されたものが多いため、特徴をとらえづらいものが多い。上臼では、リンズ痕を伴うものが多いみられ、物配を有するものや、複数の柄穴・柄溝を有するものがみられ、下臼では、物配を有するもの、または物配の認められないものがみられる。

佐渡における鉾山臼の変遷は、佐渡奉行所跡の発掘調査によっておおよその時期区分が成されており、寄勝場完成後の宝暦 9 年（1759）を境として、上臼にあった物配が下臼へ移行することがあげられる〔佐藤ほか 2001〕。これは、上臼の物配りの磨耗が激しく、磨面が磨耗するたびに新たに物配を彫らなくてはならなかったため、より硬度が高く、磨耗の少ない下臼へ物配が移行していったとされている。物配の本数も、初期には 1～8 本あって、物配の溝が外縁に達するもの、途中で切れるもの等、形状が様々であり、本数の定数が定められていない状態から、1 本へ定められていくとしている。上相川地区においても様々な形状の物配が見られるが、土中への埋没や破損資料であることが多いため、物配の有無を確認できないものがある。

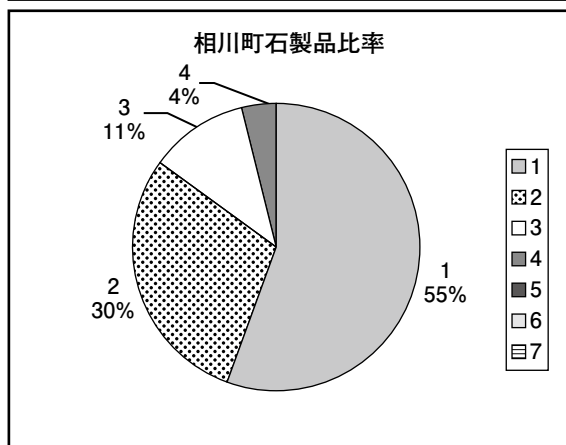
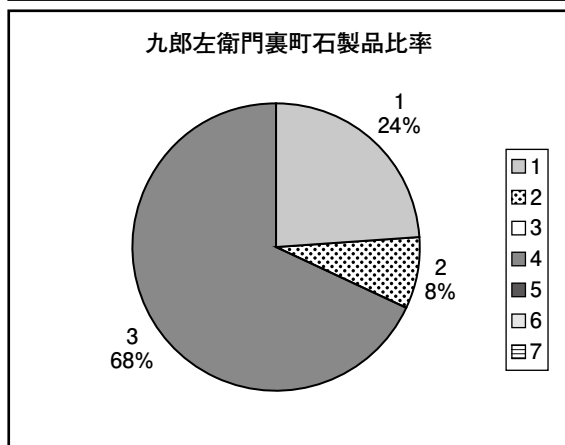
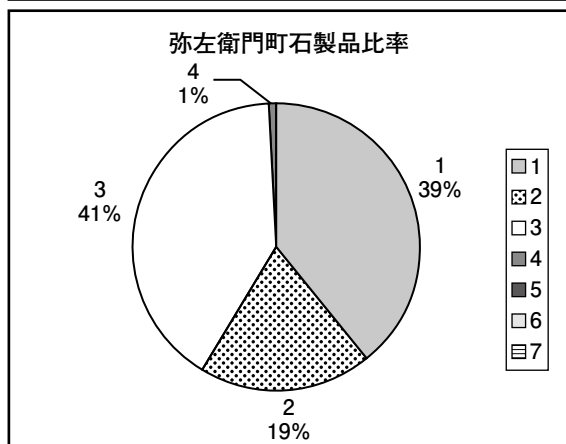
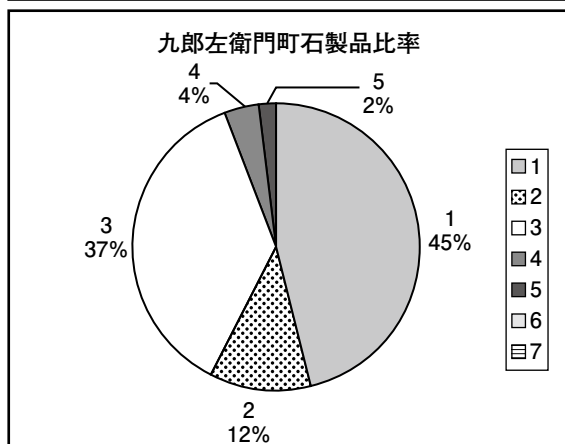
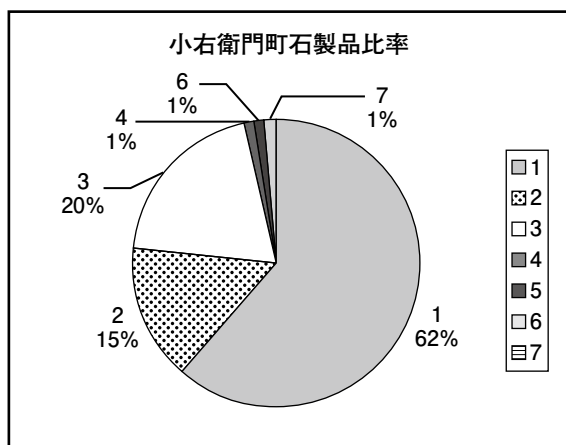
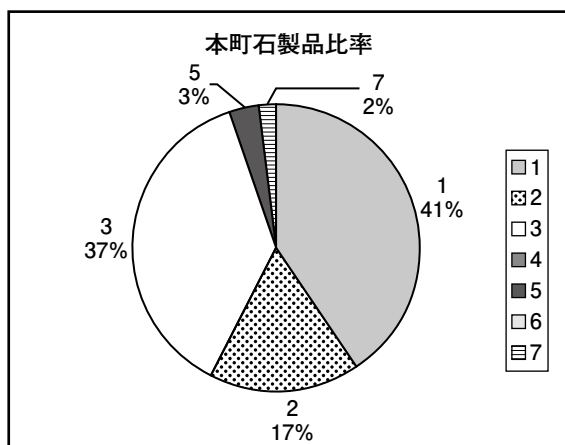
| 種 別              |           | 個数  |
|------------------|-----------|-----|
| 鉾 山 臼            | 粉成用上臼 (1) | 276 |
|                  | 粉成用下臼 (2) | 115 |
| その他の臼            | 粉 挽 臼 (3) | 7   |
|                  | 不 明 臼 (4) | 3   |
| 扣 石              | 扣 石 (5)   | 240 |
| そ の 他 の<br>石 製 品 | 石 塔 (6)   | 1   |
|                  | 石 製 品 (7) | 2   |
| 総 計              |           | 644 |

第 3 表 調査区内石製品種別比率表



| 町 名     | 粉成用上白 (1) | 粉成用下白 (2) | 扣石 (3) | 粉挽白 (4) | 不明白 (5) | 石塔 (6) | 石製品 (7) | 総数  | 備考         |
|---------|-----------|-----------|--------|---------|---------|--------|---------|-----|------------|
| 本町      | 24        | 10        | 22     | 0       | 2       | 0      | 1       | 59  |            |
| 小右衛門町   | 53        | 13        | 17     | 1       | 0       | 1      | 1       | 86  |            |
| 九郎左衛門町  | 24        | 6         | 19     | 2       | 1       | 0      | 0       | 52  |            |
| 九郎左衛門裏町 | 6         | 2         | 17     | 0       | 0       | 0      | 0       | 25  |            |
| 弥左衛門町   | 154       | 76        | 159    | 3       | 0       | 0      | 0       | 392 |            |
| 相川町     | 15        | 8         | 3      | 1       | 0       | 0      | 0       | 27  | 一部範囲のみ調査区域 |
| 床屋町     | 0         | 0         | 3      | 0       | 0       | 0      | 0       | 3   | 一部範囲のみ調査区域 |
| 総数      | 275       | 116       | 240    | 7       | 3       | 1      | 2       | 644 |            |

※町域の区分は明治期の「相川町字図」による



第4表 調査区内石製品分布比率表

確認される石磨は破片資料が多いため、形態的な分類が困難であるが、物配やリンズ痕の有無を調査区内の旧町ごとに見ると、物配りを持つ石磨は、相川町跡の一部で上臼3点・下臼1点、小右衛門町跡で上臼7点・下臼1点、本町跡で上臼3点・下臼2点、弥左衛門町跡で上臼19点・下臼6点、九郎左衛門町跡で上臼5点・下臼1点、九郎左衛門裏町で上臼1点が確認された。リンズ痕を有する上臼は、弥左衛門町跡で14点、相川町跡で1点、小右衛門町跡で2点である。上臼に設けられた軸固定のためのリンズ痕は、遺物が土中への埋没や石垣石に再利用されていることもあるため、全ての資料を見ることができなかったが、弥左衛門町跡で多く見られる傾向にある。

扣石は、円形の窪みから矩形状の方形の窪みへと変遷するとされ、佐渡奉行所跡出土の扣石では、前者をⅠ群、後者をⅡ群とし、Ⅰ群を再利用したと考えられる円形・方形の窪みが混在するものをⅠ・Ⅱ群混在型として分類し、Ⅰ群からⅡ群への転換期を江戸時代後期末としている〔佐藤ほか2001〕。上相川地区で見られる扣石の分布状況をみると、Ⅰ群がほぼ全域に分布し、Ⅱ群は弥左衛門町跡に多く、Ⅰ・Ⅱ群は本町跡、弥左衛門町跡で多く見られる傾向にある（別表14）。

## 第Ⅵ章 考 察

### 1 史料との比較

現在残されている相川金銀山や上相川地区に関連する絵図と現地形を比較すると、絵図に表記された道と現存する道跡が重複しているものが多いことがわかる（第16図）。現存する道跡についてはⅣ章において説明しているため割愛するが、このような道跡は、絵図に表記された道の形状と現在確認できる道跡の形状がほぼ一致しており、江戸時代からの姿を留めているといえる。調査に先立って、上相川地区内の各町域のおおよその境界を確定する際に、この道の形状や各道の位置関係が大変役立った。これとは逆に絵図に描かれる町割とテラスが符合する事例は意外に少ない（第17図）。また、今回の調査範囲には含まれておらず、伐採作業を行っていない範囲では、詳細な内容について不明な点があるものの大山祇神社、専念寺、玄德寺、法花寺、専照寺、妙音寺といった寺社跡や道跡などが絵図と同じ位置に残されている。

「上相川絵図」（写真図版3）に表記された道の形状や地割、石垣等の配置状況から判断して、現地形とほぼ一致するテラスは、小右衛門町跡（A・B）、本町跡付近（C）である。このほかに現段階では確証を得るまでに至っていないが、九郎左衛門町跡と相川町跡との町境付近（D・E）や弥左衛門町跡の丹波岩と呼ばれる岩付近（F・G）についても当時の景観を留めている可能性が高いと考えられる。現在では絵図に表記された丹波岩は確認できないが、弥左衛門町跡のt 51～52テラスで露岩が確認できることから、絵図に表記された場所と推測される。九郎左衛門町跡の東側及び弥左衛門町跡（D・E東部分）では、絵図上で短冊状に描かれた町割に対し、現地形では短冊状ではない規模の大きいテラスが見られる。こうした場所では、元来短冊状であった町割が、その後屋敷が廃絶したことにより合筆して田畑として再利用された可能性や絵図上では大きなテラスがコンパクトに表記されている可能性が考えられる。

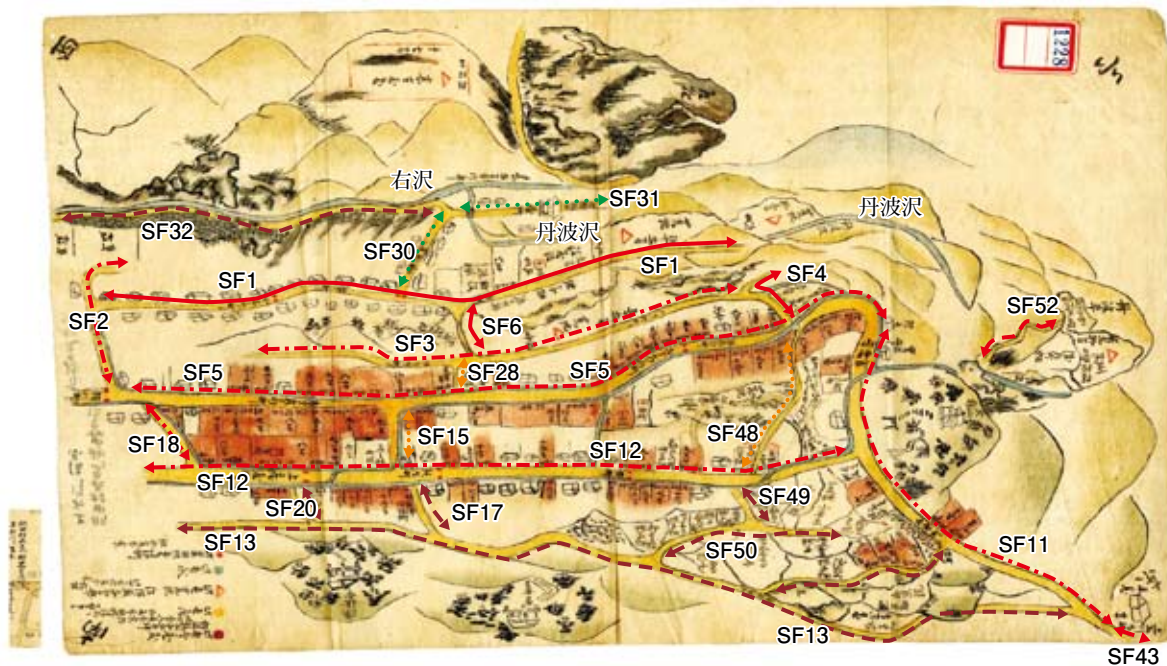
今回の調査では、絵図に表記されるN-S方向に伸びる道跡の遺存状態が悪く、地表面で確認できる道跡が少なかった。このため、絵図を基にした現地形における町境決定の際に道を指標とすることができないため、現況での絵図との符合作業を困難なものとしている。また、上相川地区における町並の規模も時期によって変動している可能性が高く、九郎左衛門町と弥左衛門町の例を見ると、「相川町々書上げ帳」（史料10）では、前者が97間（約176.3m）、後者が37間（約67.3m）と記載されているが、明治期の「相川町字図」では、前者が約120m、後者が200mほどの規模となり、両者の町の長さが逆転していることがわかる。こうした町域の変化は、文政9年（1826）の「相川町々墨引」（写真図版5）でみられるような、人口の減少に伴う集落範囲の縮小によって、享保期以降に無人化していった旧弥左衛門町に九郎左衛門町の東部の無人化した範囲が含まれていったことで、九郎左衛門町の規模が縮小したことによるものと考えられる。こうした事例も江戸時代の町域の特定を難しくしている要因の一つとなっている。

### 2 遺 構

#### A テラス・石垣

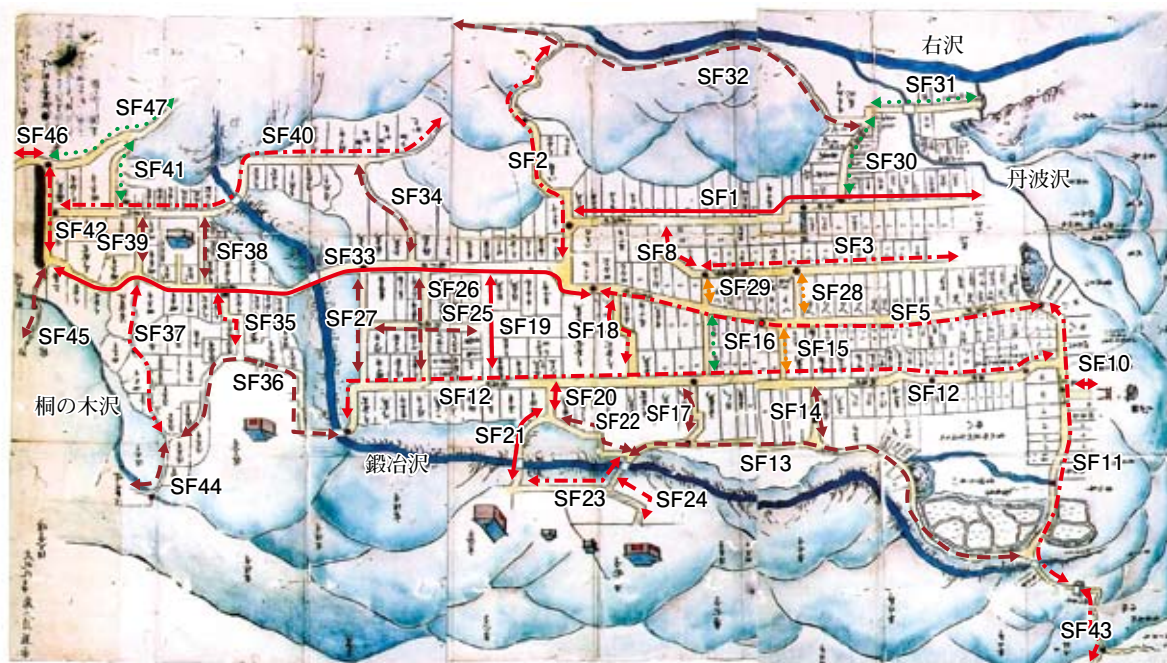
調査範囲内の地表面で164基のテラスが確認されている。これらの中には、小右衛門町のトレンチ8や





(「上相川一筆絵図」[欠年・舟崎文庫蔵]に加筆)

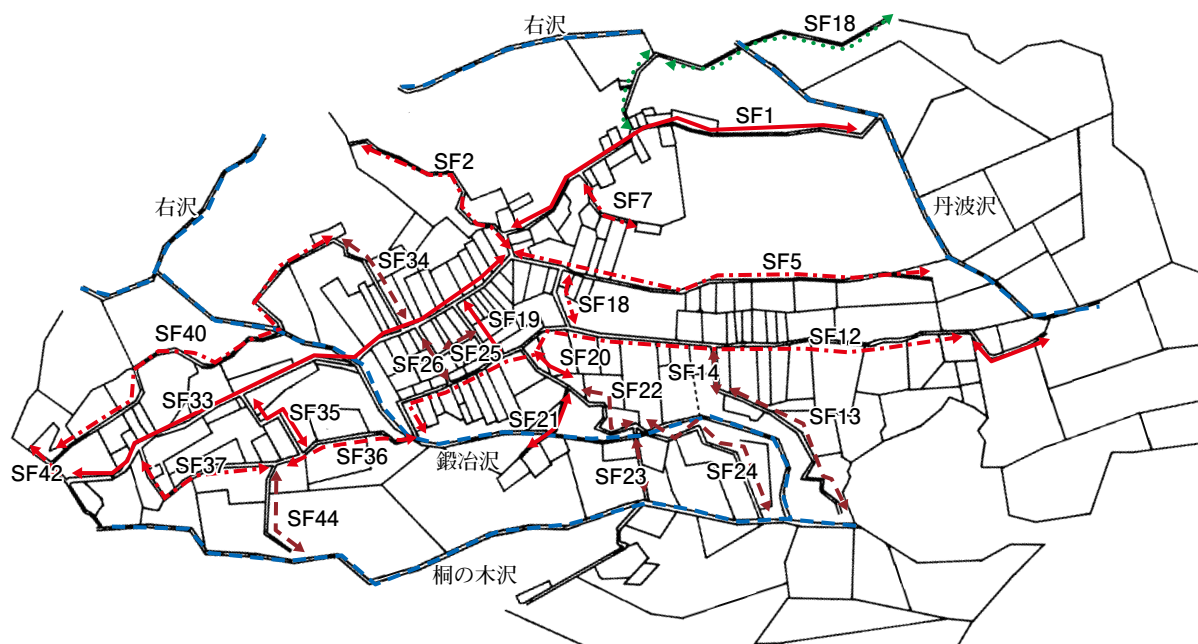
第 16 図 絵図及び地形図からみた道跡分布図 (1)



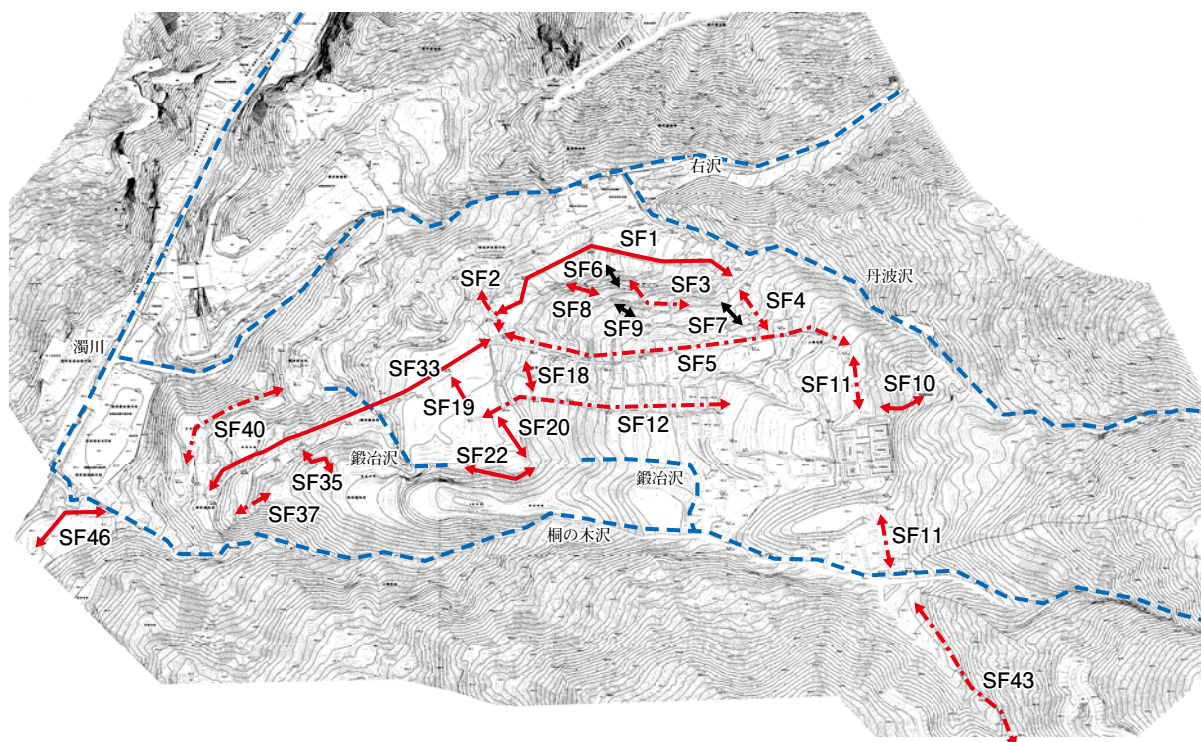
(「上相川一筆絵図」[宝暦2年作製、文化9年複製・相川郷土博物館蔵]に加筆)

第 17 図 絵図及び地形図からみた道跡分布図 (2)











(「相川町字図」[明治21年調製・相川郷土博物館蔵]を複写のうえ加筆)  
第 18 図 絵図及び地形図からみた道跡分布図 (3)

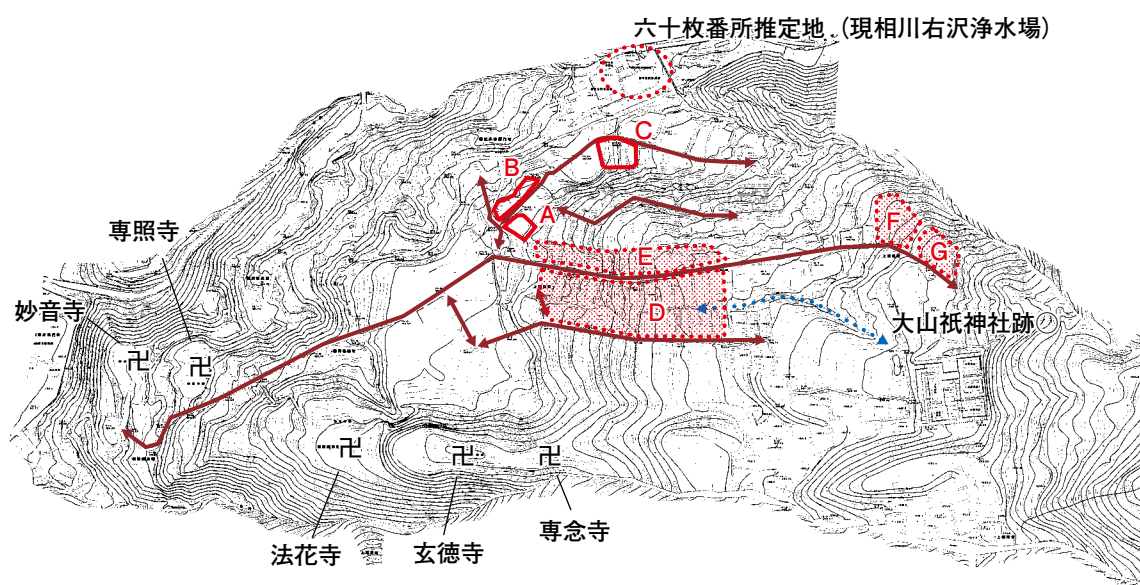
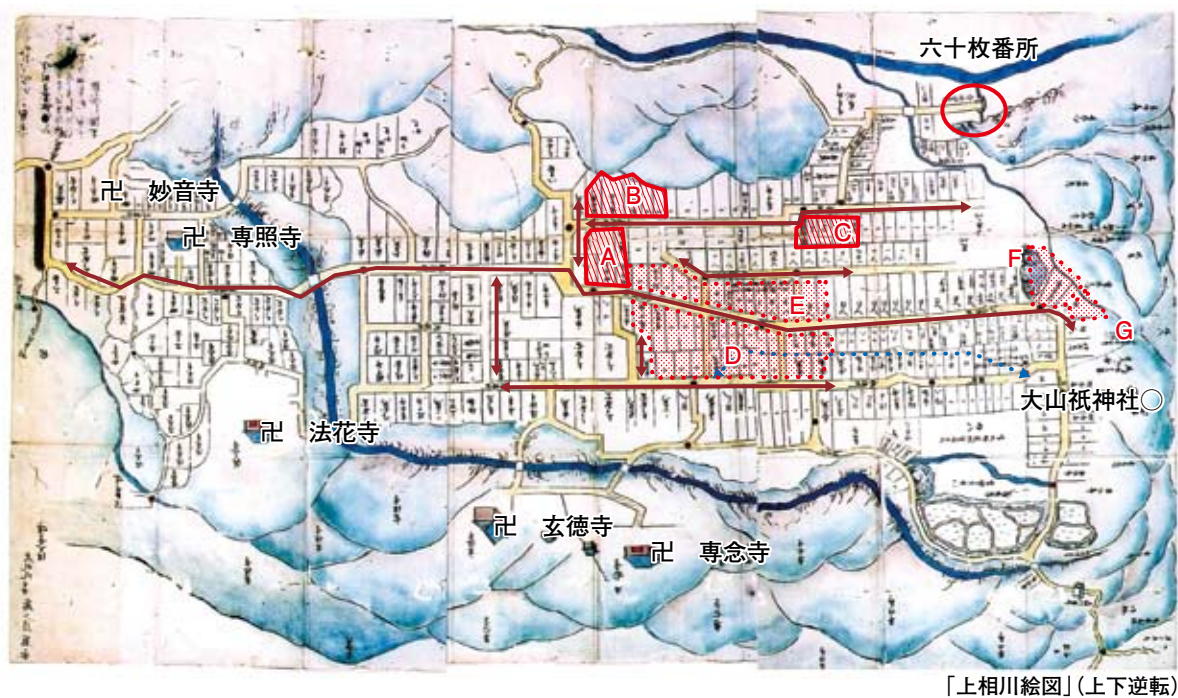


(「上相川地形図」[佐渡市教育委員会2001]の地形図に加筆)

| 凡 例                   |   |                       |   |                  |  |
|-----------------------|---|-----------------------|---|------------------|--|
| 絵図に掲載され、現在も旧態を残している道跡 |  | 絵図に掲載されるが、範囲が未特定の道跡   |  | 樹木等で現況での確認が困難な道跡 |  |
| 絵図に掲載されるが、一部湮滅している道跡  |  | 絵図に掲載されるが、湮滅の可能性が高い道跡 |  | 絵図未掲載の道跡         |  |

第 19 図 絵図及び地形図からみた道跡分布図 (4)





第 20 図 絵図史料と現地形比較図

トレンチ 9 で見られるような小規模のテラス群が連続している可能性もあり、現地形からの観察には限界がある。また、江戸時代の絵図や明治時代の地籍図でみられる短冊状を呈する地割は、昭和期の地番統一によってわからなくなり、家屋廃絶後に空地を田畑に再利用する例があることから、現在の地形と集落があった時期の地形には格差がある可能性も否定できない。

これまでの調査によって確認された最も規模の大きいテラスは長軸 32 m × 短軸 16 m、最も小さいテラスは長軸 5 m × 短軸 3 m で、面積は最大で 383 m<sup>2</sup>、最小で 9 m<sup>2</sup>、平均規模は長軸 13.8 m、短軸 6.95 m、面積 87 m<sup>2</sup> である。

文献史料を参考として、テラスの土地利用状況を見ると、弥左衛門町跡に見られるような SF 5 沿いの

規模の大きい t 123・126・128～134・137 テラスには、文献史料に弥左衛門町に寺院のあった記録が無いこと、山師に由来する町名であること、後述する石製品が多く分布する範囲であることから、山師などの有力者の屋敷地、又は山師が抱えていた技術者等による鉾石粉成や製錬等の作業場があった可能性が考えられる。「上相川一筆絵図」（写真図版 2）や「上相川絵図」（写真図版 3）等が作製された時代には、同一の所有者が土地を所有しており、元来はこのような屋敷地・作業場が、家屋廃絶後に田畑に転用されていることがわかる。

t 27-1 に設定したトレンチ 8 より検出された炉跡は、被熱の形跡がなく未使用と考えられるものであるが、掘り方の周囲を黄褐色粘土で囲み、さらに遺構周縁部を礫で囲んだもので、今後佐渡における炉跡の一形態として注目する必要がある。周辺部に同様の炉跡群があるかどうかについては、将来的な発掘調査の成果をまたなければならないが、鉾山集落内における製錬所の位置付けを考えるうえで、貴重な遺構であると考えられる。

## B 窪地・ズリ等の分布状況

窪地は、九郎左衛門町跡の t 89 テラス及びその北側に各 1 基・t 116・117 テラスで各 1 基、九郎左衛門町裏跡の t 93 テラスで 3 基・t 94 テラスで 1 基、弥左衛門町跡の t 46 テラスで 1 基・t 47 テラスで 2 基、t 83 テラスに 1 基、小右衛門町跡の t 29-1 テラスの北側斜面に 1 基が確認されている。

次にテラスごとにズリの散布状況をみると、本町跡の SF 1・t 15 テラスの一部・t 20-1～22・23 テラスの一部・25 テラス、小右衛門町跡の SF 1・t 28 テラス、弥左衛門町跡 t 47・67・73 テラスの一部、九郎左衛門町跡の t 84・85・93 テラスに多量に見られ、周辺部のテラスにおいても比較的多く見られる。特に t 28・84・85・93 テラス、小右衛門町跡の SF 1 では、直径 3 cm 以下の小さいズリが極めて多量に散乱している。

窪地とズリの分布状況を比較すると、窪地の周辺部にはズリの散布が認められる例が多いことがわかる（図版 6）。石見銀山遺跡の発掘調査事例を見ると、こうした窪地に扣石が置かれ、鉾石粉成が行われたと推測される遺構が検出されているため〔島根県教育委員会・大田市教育委員会 1999〕。上相川地区では、発掘調査をしていないため、窪地内における扣石の出土事例が無いが、窪地において扣石による鉾石の粉碎作業が行われていた可能性が高いと言える。

また、平成 17 年度調査区の本町跡の t 20-1 テラスや小右衛門町跡の t 29-2 テラスに設定したトレンチでは、ユリカスと考えられるシルト層が検出されている。ユリカスの検出されたテラスやその周辺部はズリの分布範囲と重なることが多い。平成 18 年度調査区では、発掘調査を実施していないため、ユリカスの分布状況は不明であるが、細かいズリの散乱する周辺部において、同様の事例が見られる可能性が高いと考えられる。前述する窪地とズリの関係と併せて、扣石・石磨による鉾石の粉成作業の一連の工程が行われる作業場が集中していた可能性が高い。

## 3 遺 物

### A 土器・陶磁器類

今回の調査では、16 世紀末～19 世紀にかけての遺物が調査区全体で確認されている。このうち中心となるのは、16 世紀末～17 世紀にかけての陶磁器類であり、上相川で人々が盛んに活動した時期を示すも

のと考えられる。

陶磁器類は肥前産のものが多く、陶器では鉄絵装飾のある古唐津の皿（30・72・82・96・134）や三島手の皿（87・103）、白化粧土に花状貼付文が装飾された鉢（75）などが、磁器では草花などの染付が施された初期伊万里の皿（10・55・110・122・127・128）や青磁の皿（38）などがみられる。このほか、明末清初の中国磁器（12）や桃山時代の瀬戸美濃の天目茶碗（1・13・34）などが出土していることから、周辺に山師などの有力者の住居の存在が想定される。

また、t 101・t 105・t 107 テラスからは、仏飯器（89・92）や香炉（94）、小型の瓶（90）や杯（95）などが採集されており、燻し瓦（土製品 10）も表採されている。仏飯器や瓦は、「元禄七年五月 相川町田畑屋敷検地帳」（史料 11）を見ると九郎左衛門町に修験者を示す「院」の名が多く見られ、九郎左衛門町には、同町で没した清音尼や修験者・比丘尼が多く住んでいたことを裏付ける遺物と考えられる。

土器類については、坑道内で使用したと考えられる灯明皿の割合が圧倒的に多く、戦国時代末～江戸時代初期にかけて鉱山労働者がこの付近に多く居住していたことをうかがわせる。

## B 石製品の分布状況

上相川遺跡の場合、地表面で多量の石製品が確認されている（図版 5）。平成 17 年度調査では、トレンチ内から石磨や扣石が出土しているため、実際には土中に相当量の石製品が埋蔵している可能性が高い。

確認された石製品の点数は、弥左衛門町跡が 392 点と最も多く、次いで小右衛門町跡の 86 点、本町跡の 59 点、九郎左衛門町跡の 52 点、九郎左衛門裏町跡の 25 点であった。この町域は、明治時代の地籍図をもとにしているため、九郎左衛門町と弥左衛門町間では、江戸時代の町並の間数と明治時代の地籍図での距離と食い違いを見せており、町並の消長とともに町域が変動していると推測される。このため、現在確認されている弥左衛門町跡と九郎左衛門町跡間における石製品の所在数も変化する可能性がある。

地表面における石製品の分布状況を見ると九郎左衛門町跡から弥左衛門町跡にかけての S F 5 周辺部や小右衛門町跡付近の S F 1 周辺部といった道沿いに集中する傾向が見られる。九郎左衛門裏町跡では石製品の総数は少ないが、組成比率を見ると扣石に偏りが見られる。これらの石製品の中には、特に石垣石として再利用されているものが多く、家屋廃絶後に田畑として再利用された際に耕作の邪魔となる石製品を集積した可能性がある。

これらが、そのまま同町において使用されたと考えるのは早急な考え方かもしれないが、こうした結果から職種による住み分けがあったことが想定され、弥左衛門町跡周辺の比較的規模の大きいテラスにおいて、鉱石粉成等の作業が行われていた工房の存在が推測される。

## C 鉱滓・羽口等の遺物の分布状況

テラスごとの鉱滓の採集状況をみると、鉱滓は本町跡の t 5・12・15・18～22 テラス、小右衛門町跡の t 27-1・27-4・29-1～3・32・37 テラス、弥左衛門町跡の t 42・65～67・124・125・151 テラス、九郎左衛門裏町跡の t 73・75・80・82・83・85・88・94・96 テラスでみられ（図版 8）、t 20-1・21・25～27-1 テラスでは羽口片が出土・採集されている。鉱滓の採集重量は、t 77・80 テラス及びその南側の土手において極めて多量であり、本町跡内の t 5～22 テラスで比較的多い。特に t 5～22 テラスは、t 77・80 テラスの斜面下段にあたるため、t 77・80 テラスから斜面下へ廃棄されたものが堆積している可能性がある。

鉾澤が検出された遺構のうち、実際に製錬もしくは鍛冶に関連する施設があった可能性の高い場所は、九郎左衛門裏町跡のt 77・80 テラス付近と平成 17 年度の発掘調査によって炉跡が検出され、鉾澤・羽口片の採集されている小右衛門町跡のt 27 - 1 テラス付近である。鉾澤等の資料の科学分析を行っていないため、現段階において金銀の製錬によるものか、鉄製品の鍛冶によるものかは不明であるが、前者であれば上相川の集落規模の変遷や正保 2 年（1645）の佐渡奉行所跡による床屋の取締りと選定があったことからみると、江戸時代初期に山師に属した小規模な製錬所があった可能性が高い。

## 4 まとめと今後の課題

上相川地区は、約 20ha もの広大な遺跡であり、その多くが山野に埋もれた状態である。調査は、約 1 / 5 に満たない面積ながら、本町跡・小右衛門町跡・弥左衛門町跡・九郎左衛門町跡・九郎左衛門裏町跡といった範囲の分布調査を実施してきた。一部範囲でトレンチによる発掘調査を行ったものの、分布調査を主体とした今回の調査では、地表面における遺物の分布状況やテラスや石垣などの遺構の位置など、同地区の遺跡内容を端的に示す資料を得ることができた。分布調査によって、窪地や石磨や扣石、ズリといった鉾石粉成にかかわる遺構や遺物、羽口・鉾澤といった製錬にかかわる遺物が集中して分布する範囲があること、また、絵図や文献史料の調査を通じて、寺院が集中する町や寺院の無い町があったことは、上相川地区でみられる鍛冶町や床屋町などの由来となった町単位での職種による住み分けのほかに、各町内においても小規模な職種によって居住域の住み分けが行われていたことを示すものであり、特に採集された陶磁器類には、天目茶碗や中国製の陶磁器などの山師などの有力者が所持していたと推測される遺物の存在と併せて、山師お抱えの技術者が各町にいたとも考えられる。各テラスにおける構造物の有無については、将来的な発掘調査の成果による部分が大きいですが、発掘調査を進めるうえでも、このような遺構や遺物の集中する区域を優先して調査することで、江戸時代初期における山師とそれにかかわる人々の居住・生業形態が判明する可能性が高いと思われる。

今後の課題として、同地区では地表面で遺構の有無を確認できるため、一般的な埋蔵文化財に比べて遺構の遺存状況は極めて良いと考えられるが、発掘調査を実施していないため、テラス等の遺構がいつ頃造成されたものなのかという年代の特定が困難という問題点がある。また、現在得られている遺跡の資料も地表面で観察されたものが多いため、今後、上相川という鉾山集落の成立年代を含め、こうした时期的な変遷を考える上で、資料収集や今回の調査成果によって得られたデータをもとに、一部範囲におけるテラスを対象とした全面の試掘調査の必要性が考えられる。

遺物の観点からみると、同地区内や佐渡島内の鉾山遺跡における調査を進めていくうえで、上相川地区内に分布する寺院の石造物調査による墓石や石造物の形状、刻銘を基にした編年体系の確立、地表面に散乱するズリと相川金銀山の各間歩のズリサンプルを採取し、ズリの科学分析によって間歩産出箇所の特定制をたううえで、山師の稼いだ場所と金銀の製錬までの工程を行った場所の特定、灯明皿等の土器や鉾山臼や扣石の編年的な分類、上相川全域での分布調査によって、「湯之奥型」「黒川型」などの中世の鉾山臼の有無の確認作業の必要性を感じており、特に遺物の編年体系の確立は急務であると考ええる。

これまで、日本国内では島根県の石見銀山や山梨県の湯之奥金山・黒川金山等で鉾山遺跡の調査が行われているが、佐渡市内では、相川金銀山に関連する鉾山集落のほか、鶴子銀山に伴う鶴子田中遺跡・鶴子荒町遺跡や新穂銀山における滝沢千軒と呼ばれた鉾山集落等、複数の鉾山集落跡の存在が確認されている

ものの、未調査である遺跡が多い。今後、上相川地区の調査を端緒として、佐渡市内で実施される予定の他の鉱山遺跡の調査も含め、佐渡島における鉱山遺跡や鉱山集落跡の調査を進めて行き、鉱山集落の規模や周辺部の寺社や町との関連等について、調査を進めていきたい。

## 《要 約》

1. 佐渡金山遺跡上相川地区は、佐渡市上相川町・相川小右衛門町・相川柄杓町・相川奈良町地内に所在し、現況は山林、原野等である。
2. 遺跡は、濁川左岸の標高 150 ～ 250 m の高位段丘及びその斜面に立地し、東西約 800 m、南北約 300 m、総面積は約 20ha を測る。
3. 遺跡は、戦国時代末に成立し、江戸時代初期にかけて最盛期を迎え、明治年間に廃絶したと考えられる、相川金銀山に伴う鉱山集落跡である。
4. 分布調査は、国史跡指定の基礎資料を得ることを目的とした遺跡の範囲内容を確認するため、平成 15 年度から平成 18 年度にかけて実施した。調査面積は 34,900 m<sup>2</sup> であり、このうち平成 17 年度に実施したトレンチ発掘調査による調査面積は 291 m<sup>2</sup> である。
5. 調査の結果、遺跡のほぼ全域から江戸時代の遺構・遺物が検出された。また、テラス状遺構や石垣等の遺構のほぼ全てを地表面において良好な状態で確認することができる。
6. 遺構は、テラス 165 基、石垣 158 基、石段 3 基、道跡 9 条、水路跡 1 条、炉跡 1 基、土坑 9 基、ピット 20 基、性格不明遺構 2 基である。このうち、トレンチより検出された遺構は、石垣 4 基、炉跡 1 基、土坑 9 基、ピット 20 基、性格不明遺構 2 基である。
7. 出土・採集した遺物は、遺物は 16 世紀末から 17 世紀を中心とする近世の碗、皿、すり鉢等の陶磁器や灯明皿等の土器、煙管・銭貨等の金属製品、石磨・扣石・硯等の石製品、羽口等の土製品、鉱滓である。
8. 同地区に関連する江戸時代の絵図が多く現存し、関連する記述が掲載された史料が多く残されている。
9. 検出されたテラス状遺構の中でも短冊状に地割された区域が多く見られ、江戸時代の生活区域形状が現在も良好に保存されている。
10. 江戸時代の絵図に描かれた道と現存する道跡の多くが重複することから、江戸時代の形状が現在も良好に保存されていることがわかる。
11. 石磨や扣石、ユリカス、ズリ、鉱滓、羽口等の鉱石粉碎・製錬工程に関連する遺物が集中する区域が見られ、職種別の住み分けがあったことを推測できる。また、江戸時代の検地帳や文献史料等の面からもこれを裏付けることができる。
12. 平成 17 年度のトレンチ発掘調査を除き、発掘調査を伴わない調査であったため、遺物の観点からみた遺跡の内容については不明な点が多いが、瓦や仏飯具、明末清初の中国磁器・初期伊万里の皿や天目茶碗等の陶磁器が採集されたテラス及びその周辺部では、寺院や山師等の有力者の屋敷跡が存在した可能性が高い。

## 《引用・参考文献》

- 相川町史編纂委員会 a 1973『佐渡相川の歴史』資料集2 墓と石造物 相川町
- 相川町史編纂委員会 b 1973『佐渡相川の歴史』資料集3 佐渡金山資料 相川町
- 相川町史編纂委員会 1983『佐渡相川の歴史』資料集5 二見相川近世文書 相川町
- 相川町史編纂委員会 1995『佐渡相川の歴史』通史編近・現代 相川町
- 相川町史編纂委員会 2002『佐渡相川郷土史事典』 相川町
- 相川町教育委員会 1992『金山の町相川 伝統的建造物群保存対策調査報告書』
- 相川町教育委員会 1994『史跡佐渡金山遺跡保存管理計画策定書』
- 相川町教育委員会 2001『相川町埋蔵文化財調査報告第3 佐渡金山遺跡（佐渡奉行所）（陣屋・役所・役宅・御金蔵・寄勝場）』
- 相川町教育委員会 2003『佐渡金銀山 間歩調査寺社分布調査報告書』
- 相川町郷土博物館 1977『佐渡の金銀山』
- 相川町郷土博物館 1986『金太郎窯発掘調査報告書』
- 磯部欣三 1962「六十枚の考証」『佐渡史学』第5集 佐渡史学会
- 今村啓爾 1990「鉱山臼からみた中・近世貴金属工業の技術系統」『東京大学文学部考古学研究所研究紀要』第9号 東京大学文学部考古学研究所
- 岩木文庫史料集編纂委員会 1994『佐渡近世・近代資料集－岩木文庫』上巻 金井町教育委員会
- 岩木文庫史料集編纂委員会 1995『佐渡近世・近代資料集－岩木文庫』下巻 金井町教育委員会
- 岩本 擴 1927『相川町誌』 相川町
- 大橋康二 1993『考古学ライブラリー 55 肥前陶磁』 ニューサイエンス社
- 株式会社TEM研究所 1985『図説佐渡金山』 株式会社ゴールデン佐渡
- 神蔵勝明・小林巖雄 1993「佐渡の自然誌 第五章 佐渡の生い立ち（地質）Ⅱ金鉱床のできかた」  
『図説佐渡島 自然と歴史と文化』 財団法人佐渡博物館
- 九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年 九州近世陶磁学会10周年記念』
- 計良勝範 1968「金銀山稼方取扱一件」『佐渡相川志』解題 佐渡高等学校同窓会
- 国立科学博物館 1996『日本の鉱山文化』 科学博物館後援会
- 小菅徹也 1995「佐渡の金・銀山」『中世の風景を読む 第4巻 日本海交通の展開』 新人物往来社
- 小菅徹也 2000「佐渡西三川砂金山の総合調査」『金銀山史の研究』 高志書院
- 小菅徹也 2000「佐渡—鉱山技術と近世産業都市」『日本歴史の原風景 別冊歴史読本41 第25巻5号』 新人物往来社
- 児玉信雄・田中圭一・本間寅雄 1998『図説佐渡島歴史散歩』 河出書房新社
- 坂井定倫・大場実 1977「佐渡鉱山の地質鉱床」『佐渡博物館研究報告第7号』 佐渡博物館
- 佐藤俊策 1994「相川・鶴子のやきもの」『第14回全国天領ゼミナール記録集』 金井町教育委員会
- 佐藤俊策 1999「相川浜石」会報7号 相川近世考古談話会
- 佐渡市教育委員会 2005『佐渡金銀山 相川地区石造物分布調査報告書』
- 佐渡市教育委員会 2006『佐渡金銀山 平成17年度佐渡金山遺跡（上相川地区）確認調査概報』
- 佐和田町史編さん委員会 1982『佐和田町史資料編』上巻 佐和田町教育委員会
- 佐和田町史編さん委員会 1991『佐和田町史通史編』Ⅱ 佐和田町教育委員会



- 佐和田町史編さん委員会 1996 『佐和田町史資料編』下巻 佐和田町教育委員会
- 式正英・鈴木秀夫 1964 「佐渡島の自然」『佐渡 自然・文化・社会』 平凡社
- 島根県教育委員会・大田市教育委員会 1999 『石見銀山遺跡発掘調査報告1－平成5～10年度調査・石銀地区－』
- 島根県教育委員会 1999 「第2章 歴史」『石見銀山遺跡総合調査報告書』第1冊 遺跡の概要
- 橘正隆編 1959 『河崎村史料編年志』 河崎公民館
- 橘 正隆 1964 『河崎村史料編年志－佐渡島中世迄のおいたち』上巻 両津市河崎公民館
- 田中圭一 1964 「銀山初期の集落について」『相川郷土博物館報』第3号 相川町教育委員会
- 田中圭一 1968 「鉾山都市相川の成立と展開」『佐渡相川誌』 新潟県立佐渡高等学校同窓会
- 田中圭一編 1968 『佐渡相川志』（復刻） 県立佐渡高等学校同窓会
- 田中圭一 1970 『佐渡金山史』 中村書店
- 田中圭一 1974 『佐渡金山と島社会』 日本放送出版協会
- 田中圭一 1984 『佐渡金銀山文書の読み方・調べ方』（古文書入門叢書5） 雄山閣出版
- 田中圭一 1986 『佐渡金銀山の史的研究』 刀水書房
- 永井次芳 1974 『佐渡風土記』 臨川書店
- 新潟県 1989 『新潟県地質図（改訂版）』
- 新潟県教育委員会 1998 「相川街道松ヶ崎街道」『歴史の道調査報告書』第12集
- 新潟県佐渡郡役所編 1973 『佐渡国誌』 名著出版
- 新潟県史編さん委員会 1981 『新潟県史資料編9』近世4佐渡編 新潟県
- 新潟県立佐渡高等学校同窓会 1986 『佐渡国略記』上巻（復刻）
- 新潟県立佐渡高等学校同窓会 1986 『佐渡国略記』下巻（復刻）
- 新潟県立相川高等学校郷土部 1964 『鉾山史報』第1号 夏季合宿調査特集
- 新潟県立相川高等学校郷土部 1965 『鉾山史報 二見半島鉾山報告』第2号
- 新穂村史編さん委員会 1976 「銀山と港」『新穂村史』新潟県佐渡郡新穂村
- 西川明雅・原田久通 1974 『佐渡年代記』 佐渡郡教育会
- 兵庫県埋蔵銭調査会 1996 『日本出土銭総覧』
- 文化財保存計画協会編 1994 『史跡佐渡金山遺跡保存管理計画策定書』相川町教育委員会
- 長谷川利平次 1991 『佐渡金銀山史の研究』 近藤出版社
- 麓 三郎 1956 『佐渡金銀山史話』 三菱金属鉱業
- 本間周敬 1950 『佐渡郷土辞典』 芸苑社
- 真野町史編纂委員会 1976 「西三川砂金山」『真野町史』上巻真野町教育委員会
- 矢野牧夫 1989 「Ⅱ－3（2）渡島半島における砂金採取のあゆみ」『今金町美利河1・2砂金採掘跡』  
（財）北海道埋蔵文化財センター
- 山室恭子 1992 『黄金太閤 夢を演じた天下びと』中央公論社
- 山本修之助編 1973 「佐渡志」「佐渡志附録図」『佐渡叢書』第2巻 佐渡叢書刊行会
- 山本修之助編 1973 「撮要佐渡年代記」『佐渡叢書』第4巻 佐渡叢書刊行会
- 山本修之助編 1974 「子山佐渡志」「佐渡国寺社境内案内帳」『佐渡叢書』第5巻 佐渡叢書刊行会
- 山本修之助編 1977 「佐渡四民風俗」『佐渡叢書』第8巻 佐渡叢書刊行会
- 山本修之助編 1978 「佐渡史苑第5号」『佐渡叢書』 佐渡叢書刊行会

## 《関連絵図》

- 「相川右澤左澤向山銀山図」 元禄7年(1694) ゴールデン佐渡株式会社 蔵
- 「佐州相川惣銀山敷岡振矩平絵図」 元禄8年(1695) ゴールデン佐渡株式会社 蔵
- 「御直山鉾山岡絵図」 延享4年(1747) 舟崎文庫No.1231 新潟県立佐渡高等学校同窓会 蔵
- 「銀山岡絵図」 延享4年(1747) 舟崎文庫No.1210 新潟県立佐渡高等学校同窓会 蔵
- 「銀山岡絵図」 延享4年(1747) 味方家資料No.109 味方重憲氏 蔵
- 「宝暦五年相川町絵図」 宝暦5年(1755) 小菅徹也氏 蔵
- 「佐渡相川志」巻2 宝暦6年(1756) 県立佐渡高等学校同窓会 蔵
- 「上相川絵図」 宝暦2年(1752) 作製、文化9年(1812)複製 相川郷土博物館 蔵
- 「相川銀山所敷岡絵図」 享和2年(1802) 相川郷土博物館 蔵
- 「相川之図」「佐渡志附録図」 文化13年(1816)カ 『佐渡叢書』第2巻所収
- 「相川町墨引」 文政9年(1826) 『佐渡相川の歴史』資料集5二見・相川近世文書付録
- 「相川諸方地理之図」 明治8年(1875)8月 『佐渡相川の歴史』通史編(近・現代)付録
- 「相川町中部絵図」 明治9年(1876) 相川郷土博物館 蔵
- 「相川町字図」 明治21年(1888) 相川郷土博物館 蔵
- 「佐渡国雑太郡相川 相川鉾区」 明治24年(1891) 相川郷土博物館 蔵
- 「相川町全図」 昭和27年(1952)頃
- 「相川町字図」 欠年 山田宣氏 蔵
- 「相川町図」 欠年 岩本文庫 蔵
- 「上相川一筆絵図」 欠年 舟崎文庫No.1228 新潟県立佐渡高等学校同窓会 蔵
- 「相川金銀山岡山絵図」 欠年 相川郷土博物館 蔵
- 「相川町々併銀山岡絵図」 欠年 長岡市立中央図書館 蔵
- 「相川金銀山立合岡絵図」 欠年 味方重憲氏 蔵
- 「佐渡金山金掘之図」 欠年 国立公文書館内閣文庫 蔵
- 「金銀採製図」 欠年 国立公文書館内閣文庫 蔵
- 「相川町々及銀山岡絵図」 欠年 九州大学工学部資源工学科 蔵
- 「立合引銀山岡絵図」 欠年 国立科学博物館 蔵
- 「相川町並銀山岡絵図」 欠年 日本銀行金融研究所貨幣博物館 蔵
- 「佐州相川鉾山一覽図」 欠年 日本銀行金融研究所貨幣博物館 蔵

## 〔巻末資料〕 上相川地区に関する史料

### A 鉱山集落上相川の成立

#### 史料一

慶長元丙申年

一、佐・渡・鮎・河、岩・崎・向・山に・銀・浦・上・る。鮎・河・沢・根・始・て・市・町・と・成・。今・相・川・始・は・鮎・河・と・い・ふ。〔後略〕

〔『撮要佐渡年代記』上巻〕

#### 史料二

佐州海府之内羽・田・村・金・山・町・当・起、 苅・高、 小前田主略ス 本  
以上式千五百拾九束苅 見以上九百五束 合三千四百式拾  
四束苅 此米式拾八石七斗六升壹合六勺

慶長五年九月廿四日

彦左衛門印

中使孫左衛門殿

#### 史料三

〔『佐渡故実略記』『佐渡国略記』上巻〕

相川銀山立始り之事 一、相川銀山ハ慶長六辛丑年七月十五日  
鶴子間歩稼方之者三浦治兵衛渡部儀兵衛渡部弥治右衛  
門山伝ヒ海辺ヨリ相川ニ至リ今ノ濁川ヲ伝ヒ登リ清治ト大  
切山トノ間ニ有父ト云所ニ登リ湧上リヲ穿出多ク金銀ヲ得  
タリ第一六拾枚第二道遊第三割間歩三ヶ所ヲ始トス又父ヨ  
リ南ニ当リ三方大山ニテ囲ヒ中ニ立タル高山アリ後ニ中山  
通リト云ハ是也本文ニ記相川・銀・山・立・始・慶・長・六・辛・丑・年・ト・緒・家・  
旧・記・ニ・候・得・共・慶・長・五・子・年・羽・田・村・竹・算・分・水・帳・ニ・金・山・町・ト・有・之・  
其・余・下・寺・町・銀・山・寺・慶・長・元・年・仏・具・ニ・金・山・町・ト・記・是・ヲ・以・相・考・ル・  
慶・長・以・前・ヨリ・金・銀・山・ハ・有・之・ト・相・見・

〔後略〕

〔『佐渡故実略記』『佐渡国略記』上巻〕

#### 史料四

慶長六辛丑年

一 相川 初は鮎河と云 の内羽田村 今の羽田町也銀山始まりてよ  
り百姓家は下戸村へ移る塩屋町にも塩畑ありて塩産明神の社ありといふ に  
百姓家十五軒ありしか今年銀山始まりてより上相川・間・山・な  
といふ所に小屋を作り他国のもの多く来り金銀山の稼をな  
す是を山小屋と云しと也此年上相川に大山祇の社を建て金  
銀山の鎮守とす五十里上相川に番所を立てといふ

〔『佐渡年代記』上巻〕

#### 史料五

相川府中開発之事 ○相川元ハ海府羽田村之内金山町ト云  
今ノ濁川筋ニ鮎有之依之其後惣名鮎川ト改或説二段々銀山

盛金水流鮎絶々ニ成相川ト改ルヨシ一説ニハ鮎ハ銀山ニハ  
不吉ニテ相川ト改ルトモ云 往古ハ人家モ無ク山林竹林茂  
リ羽田村當時羽田町ニテ百姓家五六軒アリ今御陣屋敷地字  
半田ト云地ニハ御門前大井戸之所清水ヶ窪ト云勘四郎町字  
世林新五郎町ヨリ大工町北側元妙円寺境内字世ヶ窪大工町  
八字大工町間山上相川字ひやう原系原ト云各田畑ノ由然所  
慶長六辛丑年銀山立始リ他国者大勢来リ銀山ノ稼所々ニテ  
は・木・を・伐・是・ヲ・以・穿・立・ニ・住・所・ヲ・拵・稼・所・ニ・変・アラハ崩シ又稼  
所・ニ・立・テ・居・住・セ・リ・是・ヲ・山・小・屋・ト・云・其・後・人・家・定・リ・府・中・に・成・事  
ハ大久保石見守長安御支配ニ成慶長八卯年宗岡弥右衛門渡  
海鶴子外山ノ陣屋ヲ相川ニ移シ長安翌辰年渡海此陣屋ニ移  
府中ニ開發シテ家来野田監物川村寛助町奉行ヲ定同心式拾  
人抱

○銀山立始り上相川間山開発ニ候哉其外ハ則住居之者ノ名  
ヲ以町ノ名トス庄右衛門町ハ山師大坂庄右衛門住居 〔後  
略〕

〔『佐渡故実略記』『佐渡国略記』上巻〕

※同様の記述が『佐渡風土記』巻之中にあり

#### 史料六

慶長九甲辰年

一 相川銀山初りてより他國もの夥敷来り住居す町々の名  
多くは住居の者の名を取て唱ふ〔中略〕郷中より相川迄の  
往・還・は・鶴・子・澤・より・山・越・に・て・あ・り・し・也・今・も・其・跡・残・れ・リ〔後略〕  
〔『佐渡年代記』上巻〕

### B 1 上相川の集落規模

#### 史料七

一、相川中往古家数並人数の義不分明に御座候。併故実者  
味噌屋町豊左衛門と申者 享保の末極老にて因果申候 の物語に、  
以前辻八郎左衛門え豊左衛門相尋候は、 此八郎左衛門は当時横  
尾六右衛門殿支配役人辻六右衛門其祖父留守居役相勘申候 往古繁昌の節  
は相川中の人数八万人程も有之候由及承候段申候へば、八  
郎左衛門即答に夫は遙に後の事にて候。大昔は相川町中に  
三十式万余有之候段及挨拶候由豊左衛門申之候。当時国  
中にて漸十万人に不及人数にては繁昌の節たりとも相川計  
の三十万人余は如何可有之哉と正偽の程人々無覺束存候義  
に御座候。然処私古書を以て相考候趣は、万治元戌年の中  
勘定 以前は中勘定と申事有之候 帳面に相川退転の体にて地子  
御免の義町人度々訴訟申上、依之戌四月より地子一円御免  
の由有之候。但正月より三月迄三ヶ月分銀三貫百四十八匁

二分に相見え候。是を以一ヶ年を積り候へば十二貫五百九十目余に見え申候。尤家数人別等は無之候に付、猶又十ヶ年前慶安二丑十一月分と有之、相川地子銀帳を見申候へば、上相川の分 上相川は別長にて此年分不見 相川六十七町 但横町

浜町等迄町敷に加へ候 此地子銀八百九十七匁八分六厘 外一匁六分四厘上ヶ屋敷分と有之 此家数千六百五十九軒 外六軒上ヶ屋敷

に相見え候。上相川は別帳故此年分の帳面不相見。依之四年後慶安五辰年四月分地子銀帳上相川二十二町此地子銀百六十六匁六分 外二分四厘上ヶ屋敷分と有之 此家数五百十三軒 外一軒上ヶ屋敷と有之 と有之を右に記し候。慶安二年の高え差加へ全一ヶ月分に積り町数八十九町地子銀都合一貫六十四匁四分六厘。家数都合二千七百七十二軒と相見え申候。右一ヶ月分の銀を一ヶ年に積り十二貫七百七十三匁五分二厘、但家一軒に付一ヶ年銀五匁八分八厘余平均に相当り候。

是は慶安年中之積り二御座候。此趣を以て往古繁花の節に引競候へば、慶長十八丑年相川地子銀高 家敷等は見江不申候 九十一貫五百六十目余の由、其後段々相川繁昌に罷成、元和四年地子銀高百三十八貫二百六十一匁九分 外一貫百十五匁三分相川上ヶ屋敷借賃と有之 と相見え候。但午年は閏月有之候に付一ヶ月分割合十貫六百三十五匁五分除之残銀百二十七貫六百二十六匁四分と相成申候。此高を前段に記し候慶安年中の家一軒一ヶ年の地子積り五匁八分八厘を以て平均候へば、元和四年の家数凡二万七千七百軒余と相見え申候。是を以て家一軒に人数十五人宛と相積り候へば三十二万五千五百人余に相当り候。尤一軒に十五人平均は多き積りの様に候へ共、諸士の部にも相記し候通り正保、慶安の頃迄も役人の手前に下人多く抱へ一人の家に二十人計も有之者多く候へば、増て元和年中抔は宜敷町人共の内には二十三人は抱候の義に奉存候間、前段に申上候辻八郎左衛門、豊左衛門え三十二万人程と相答候に符合仕候哉と奉存候。但在々地子銀は元和四年年分三十三貫四百五十七匁一分、屋敷年貢と前段に地方の部に有之候へば、相川地子に紛れ候義は無御座候。併三十万人の飯米過分の義にて其節の地方二万千石余の分にては一ヶ月の飯米にも届申間敷候。但右午年年分の帳面に銀六十四貫目余、越後米佐州え参り候役銀と有之候へ共、此元米の分にて是又中々及申間敷候。然は相川四ヶ所の番所 其節下戸番所は無之候 在々

五ヶ所 沢根小木赤泊松ヶ崎夷 午年の十分一 入御役銀の義十分一と唱へ申候 銀都合四百五貫六百七十九匁一分と相見え候。此内にも他国米入役籠り有之候哉。又は右越後米の外は無

役にて成とも他国より米買入候哉、旁以飯米の一件不分明に奉存候。且又右十分の一の内大間番所は百八十四貫目余、羽田番所は五十四貫七百目余何れも他国より諸色買入候御役銀に御座候。其外相川中小役銀九十八貫七百目余に相見え候。如此運上差上諸色買入候時節故、商家の賑ひ至て繁花の風俗中々當時の管見を以て愚察にも難及世柄に御座候。且又延宝二寅年曾根五郎兵衛殿江戸より佐州広間役え被遣候御用状に、相川中飯米一日に百石宛の積りにては、去年より只今まで米にて納り候高一万五千九百七十七石九斗九升有之候。此分にては相川中にて来る四五月中迄の飯米可有之と被存候。其上当夏他国米少宛も参り候はゞ手支申間敷候由の御紙面に候。慶安年中地子銀帳の趣にては、此節も家数二千軒余と相見え候間、右一日に百石積り相当と奉存候。往古地子銀高格別多く候に引合候ては、返々飯米の積り不分明に奉存候。

一、相川町並も寛永六七年に至り、一丁目より下戸町まで町割出来、正保二酉年羽田町札の辻より海府番所迄の町割出来候由古書に有之候。但元和年中の相川地子銀等の趣を以て相察候処、往古は一向銀山近辺の居住を第一に仕候て下通には銀山手寄無之者計り居住故町並も遅く出来候哉、去程に上相川千軒、北沢千軒抔と申伝候南沢、北沢は買石の者多く住居の所と承候。是は水の手宜き故に候哉、且往古淡路と申大買石の者北沢に罷在、銀山より鍵を買い下け候勝手に依り、當時の弥十郎町より北沢え通路の坂を開き

當時も淡路坂と唱へ申候 数百金之地代を屋敷主え相渡候旨申伝候。是は鍵持人の賃錢格別違候に付、当分地代を出し候ても年を歴候ては其費も補ひ候義故、如此目論見候由に御座候。勘四郎町、大阪町、東次助町、小沢、泉沢、諏訪町沢、庄右衛門後町、庄右衛門町沢、清右衛門町後町、下戸炭屋後町抔と申所に當時は一向人家無御座候。上相川二十二町抔は猶以多分明屋敷に相成候。其外元和の頃は南沢の上大沢の辺富士権現の辺、或は関東平向山平の方にも人数多く有之。増て銀山の方は当時人家無之深山迄も以前住居の古名申伝候ヶ所とも御座候。其後山手の不景氣に随ひ下町賑ひ候方に相成候義古今盛衰の変と奉存候。

#### 追 加

當時上相川の間に□に家数三十八軒に相成、其外間山庄右衛門町、次助町、六右衛門町、南沢辺抔明屋敷出来候へ共、下町え至り候ては以前有徳の者多分潰れ其大家を日雇取小商人抔え切売に致し竈敷相増、以前廻船開場に致候羽

田町浜地に家並出来、二丁目、三丁目、下戸町の大浜町は以前片側の処両側家並に相成、北沢は享保の洪水にて両側共家作押流し、北側計追々人家出来候処、文政七申年新帯刀坂御切開き多年塞り居候淡路坂も、翌年御取開相成候に付、南側えも家並出来、勘四郎町えも家並出来致し竈数人別相増候者銀山不盛にて薄鏈多く掘出金銀の高を成し候故、人歩余計相掛り候に付小前の者の多く相成候義にて、是亦宝暦の頃と当時との盛衰の変に御座候、元禄の度一國検地の節相川町検地帳の跋文に、屋敷の義末々随銀山盛衰町々上中下の品可相究、先此度は一同の石盛付致置者也と有之御尤なる御取極に御座候。

〔佐渡四民風俗〕『佐渡叢書』十卷)

史料八

寛永六己巳年

一 陣屋下通りの町割を (中略) 但相川の町数七十二町に新地を加へて八十町なり上相川にも山の神外記町鍛冶町番屋町鍛冶澤町本町田町小右衛門町彌左衛門相川町九郎左衛門町柄杓町同裏町茶屋町上床屋町奈良町岩崎町會津町九郎左衛門後町外記裏町鍛冶裏町田町後町新境澤など云町々ありと聞ゆ

〔佐渡年代記』上巻)

史料九

慶長九甲辰年

一 山崎町は今の會津町の事なれ共其古老の物語には慶長のころ山崎町と云しは今の上相川茶屋坂の邊を山崎町といふて繁昌なりしを寛永の頃にもありけん今の會津町へ移して山崎町と云しと也

〔佐渡年代記』上巻)

史料一〇

(欠年)「相川町々書上げ帳」

(表紙)

相川町々書上

上 相 川 上相川ハ、十六丁惣名ナリ、山之神町・鍛冶町・田町・弥左衛門町・九郎左衛門町・同裏町・上床屋町・外記町・番屋町・本町・小右衛門町・相川町・柄杓町・茶屋町・奈良町、以上  
山崎町 茶屋平ノ出崎ノ由、今ノ会津町ヲ先年山崎町ト言ヘリ

松入町 或家ノ記ニ上相川松入町某トアリ、其ノ実跡知レズ

七軒町 越中庄右衛門一棟ニ家七軒ヲ立続ク、仍テ七軒町ト言フ、実跡知レズ

尾張町 九郎左衛門町ノ沢

岩崎町 茶屋平ノ下

山之神町 町長サ七十六間、御陣屋迄十九丁十四間

鍛冶沢 三尺五寸、元禄七年戌検地、畑五畝九歩・

屋敷三反七畝十二歩

鍛冶沢 町長サ七十五間、御陣屋迄廿丁廿二間三尺

五寸、元禄検地 畑七畝五歩・町屋敷五反

五寸、元禄検地 畑七畝五歩・町屋敷五反

屋敷三反三畝七歩

鍛冶沢裏町

鍛冶沢 町長サ七十五間、御陣屋迄十七丁十四間三尺

五寸、元禄検地 畑七畝五歩・町屋敷五反

七畝五歩、先年他国ヨリ鍛冶多ク来リ、此

所ニ住居ス、銀山入用ノ細工ラス、是、町

鍛冶ト言、鍛冶沢ノ鍛冶ヲ沢鍛冶ト言ヘリ

田町 町長 廿七間

御陣屋迄 十八丁廿九間三尺

町屋敷 一反八畝廿七歩

畑 二畝三歩

田町裏町

町長 卅七間

御陣屋迄 十七丁卅間五尺三寸

町屋敷 二反七歩

町長 九十七間

九郎左衛門町 御陣屋迄 十七丁五尺五寸

下 畑 廿八歩

町長 (記載なし)

畑 七畝歩

町屋敷 一反一畝五歩

町長 六十九間

上床屋町 御陣屋迄 十五丁五間三尺五寸

町屋敷 四反五畝一歩

畑 三歩

外記町 町長 十五間

御陣屋迄 十五丁十六間三尺五寸

町屋敷 九畝廿六歩

番屋町 町長 十五間

|      |            |   |     |   |   |    |        |
|------|------------|---|-----|---|---|----|--------|
| 御陣屋迄 | 十七町十五間五尺五寸 | 同 | 九×四 | 同 | 一 | 六  | 惣左衛門後家 |
| 町屋敷  | 一反二畝十五歩    | 同 | 六×三 | 同 | 一 | 一八 | 三右衛門後家 |
| 畑    | 一畝廿四歩      | 同 | 九×五 | 同 | 一 | 一五 | 清兵衛    |

本町

|      |         |     |     |     |   |    |      |
|------|---------|-----|-----|-----|---|----|------|
| 町長   | 三十間     | 同   | 七×六 | 同   | 一 | 一二 | 巳之助  |
| 御陣屋迄 | 十七丁五尺五寸 | 丹波沢 | 五×三 | 下々畑 | 一 | 一五 | 惣右衛門 |
| 町屋敷  | 三反二畝廿四歩 | 同   | 六×四 | 同   | 二 | 四  | 同    |
| 畑    | 二畝三歩    | 長沢  | 五×二 | 同   | 一 | 〇  | 同    |

小右衛門町

|      |             |     |       |    |   |      |     |
|------|-------------|-----|-------|----|---|------|-----|
| 町長   | 六十七間        | 丹波谷 | 三×一・五 | 同  | 五 | 惣右衛門 |     |
| 御陣屋迄 | 十五丁五十三間五尺五寸 | 同   | 五×四   | 屋敷 | 二 | 〇    | 伊兵衛 |

相川町

|      |           |     |         |  |  |  |  |
|------|-----------|-----|---------|--|--|--|--|
| 町長   | 五十一間二尺    | 右之寄 |         |  |  |  |  |
| 御陣屋迄 | 十五丁二間三尺五寸 | 下々畑 | 一畝二四歩   |  |  |  |  |
| 町屋敷  | 四反五畝廿六歩   | 屋敷  | 一反二畝一五歩 |  |  |  |  |
| 町長   | 十五間       | 畑屋鋪 | 合一反四畝九歩 |  |  |  |  |

勺瓢町

御陣屋迄 十五丁卅間三尺五寸

小右衛門町

|     |         |    |         |    |   |   |     |
|-----|---------|----|---------|----|---|---|-----|
| 町屋敷 | 一反一畝十二歩 | 縦間 | 横間      | 畝  | 歩 |   |     |
| 畑   | 一反四畝二歩  | 南側 | 六・五×五・五 | 屋敷 | 一 | 六 | 甚兵衛 |

先年此所遊女町ノ事、水金町ノ部ニ記ス

茶屋町

町長 (記載なし)

|     |         |    |         |   |   |    |       |
|-----|---------|----|---------|---|---|----|-------|
| 町屋敷 | 二反四畝十一歩 | 同  | 一〇×四    | 同 | 一 | 一〇 | 茂七    |
| 畑   | 五畝一歩    | 同  | 一〇×四・五  | 同 | 一 | 一五 | 同     |
| 同   |         | 同  | 九×三     | 同 | 二 | 七  | 吉右衛門  |
| 同   |         | 同  | 四・五×二   | 同 | 九 | 吉  | 兵衛    |
| 同   |         | 同  | 一〇×四    | 同 | 一 | 一〇 | 半左衛門  |
| 同   |         | 同  | 七×二・五   | 同 | 一 | 一八 | 久右衛門  |
| 同   |         | 同  | 九×三・五   | 同 | 一 | 二七 | 兵衛    |
| 同   |         | 同  | 九×二     | 同 | 一 | 一八 | 市兵衛   |
| 同   |         | 同  | 九・五×五・五 | 同 | 一 | 一二 | 伊左衛門  |
| 同   |         | 同  | 八・五×二   | 同 | 一 | 一七 | 儀兵衛   |
| 同   |         | 同  | 九×二・五   | 同 | 二 | 三  | 五郎助   |
| 同   |         | 同  | 九×四     | 同 | 一 | 六  | 佐次兵衛  |
| 同   |         | 同  | 一二×三    | 同 | 一 | 六  | 長左衛門  |
| 同   |         | 北側 | 三×三     | 同 | 九 | 九  | 兵衛    |
| 同   |         | 同  | 八・五×六   | 同 | 一 | 二一 | 七右衛門  |
| 同   |         | 同  | 一四×六    | 同 | 二 | 二四 | 喜左衛門  |
| 同   |         | 同  | 一三×八    | 同 | 三 | 一四 | 八兵衛   |
| 同   |         | 同  | 八×四     | 同 | 一 | 二  | 庄兵衛   |
| 同   |         | 同  | 七・五×四   | 同 | 一 | 〇  | 喜兵衛   |
| 同   |         | 同  | 八×三・五   | 同 | 二 | 八  | 惣兵衛後家 |
| 同   |         | 同  | 五・五×四   | 同 | 二 | 二  | 惣右衛門  |
| 同   |         | 同  | 五・五×二   | 同 | 一 | 一  | 同     |

奈良町

町長 (記載なし)

|     |         |   |         |   |   |    |      |
|-----|---------|---|---------|---|---|----|------|
| 畑   | 五畝廿一歩   | 同 | 九×二     | 同 | 一 | 一八 | 市兵衛  |
| 町屋敷 | 二反二畝廿五歩 | 同 | 九・五×五・五 | 同 | 一 | 一二 | 伊左衛門 |

(『佐渡相川志』)

史料二

「元禄七年五月 相川町田畑屋敷検地帳」

番屋町

|    |        |    |    |     |      |
|----|--------|----|----|-----|------|
| 縦間 | 横間     | 畝  | 歩  |     |      |
| 西側 | 四×四    | 屋敷 | 一六 | 仁兵衛 |      |
| 同  | 八×八・五  | 同  | 一  | 二二  | 惣右衛門 |
| 同  | 一〇×三   | 同  | 一  | 〇   | 五郎助  |
| 同  | 七・五×二  | 同  | 一  | 五   | 太右衛門 |
| 東側 | 一四×三・五 | 同  | 一  | 一九  | 権兵衛  |
| 同  | 九×四    | 同  | 一  | 六   | 藤兵衛  |
| 同  | 四×四    | 同  | 一  | 六   | ま    |

|   |        |   |    |       |                    |        |   |   |   |       |
|---|--------|---|----|-------|--------------------|--------|---|---|---|-------|
| 同 | 六×二    | 同 | 一二 | 伝兵衛後家 | 同                  | 一二×五・五 | 同 | 二 | 六 | 三右衛門  |
| 同 | 六×二    | 同 | 一二 | 石松    | 同                  | 一二×三   | 同 | 一 | 六 | 惣兵衛   |
| 同 | 五・五×三  | 同 | 一七 | 吉兵衛   | 同                  | 一二×二・五 | 同 | 一 | 〇 | 長左衛門  |
| 同 | 三×四    | 同 | 一二 | 仁右衛門  | 同                  | 一二×二   | 同 | 二 | 四 | 忠兵衛   |
| 同 | 八×二・五  | 同 | 二〇 | 久右衛門  | 同                  | 一一・五×三 | 同 | 一 | 五 | 治右衛門  |
| 同 | 六×二・五  | 同 | 一五 | 七兵衛   | 同                  | 一一×二   | 同 | 二 | 二 | 長三郎後家 |
| 同 | 一二×二   | 同 | 二四 | 庄兵衛   | 同                  | 九・五×三  | 同 | 二 | 九 | 佐兵衛   |
| 同 | 一二×四   | 同 | 一八 | 市郎兵衛  | 同                  | 六×二・五  | 同 | 一 | 五 | 九兵衛   |
| 同 | 一二×二・五 | 同 | 〇  | 同 人   | 右之寄<br>屋敷 合四反五畝二六歩 |        |   |   |   |       |
| 同 | 一二×三・五 | 同 | 一二 | 庄左衛門  |                    |        |   |   |   |       |
| 同 | 一二×四・五 | 同 | 一二 | 同 人   |                    |        |   |   |   |       |
| 同 | 一〇×四・五 | 同 | 一五 | 武兵衛   |                    |        |   |   |   |       |

茶屋町

縦間 横間 畝 歩

屋鋪 合三反八畝三歩

相川町

縦間 横間 畝 歩

|    |          |    |     |     |       |     |         |    |    |        |      |
|----|----------|----|-----|-----|-------|-----|---------|----|----|--------|------|
| 南側 | 八・五×四    | 屋敷 | 一   | 四   | 惣兵衛   | 同   | 八×六     | 上畑 | 一  | 八      | 妙音寺  |
| 同  | 五・五×四・五  | 同  | 二五  | 同   | 人     | 同   | 一四×六    | 屋敷 | 二  | 二四     | 同寺   |
| 同  | 七・五×六    | 同  | 一   | 一五  | 市左衛門  | 同   | 五×二     | 中畑 | 一〇 | 同      | 同寺   |
| 同  | 七・五×二    | 同  | 一五  | 一五  | 孫兵衛後家 | 同   | 七×一・五   | 同  | 一一 | 同      | 同寺   |
| 同  | 七・五×二    | 同  | 一五  | 一五  | 仁右衛門  | 同   | 三×一・五   | 同  | 五  | 同      | 同寺   |
| 同  | 一一・五×三   | 同  | 一   | 一五  | 半四郎   | 同   | 五・五×四   | 屋敷 | 二二 | 善吉後家   |      |
| 同  | 六×五      | 同  | 一〇  | 〇〇  | 伝右衛門  | 同   | 八×三     | 同  | 二四 | 甚兵衛    |      |
| 同  | 六×四・五    | 同  | 二七  | 二七  | 甚兵衛   | 同   | 七×五     | 上畑 | 一  | 五      | 同 人  |
| 同  | 九×二・五    | 同  | 二三  | 二三  | 伊兵衛   | 同   | 五×三     | 屋敷 | 一五 | 庄兵衛    |      |
| 同  | 九×二・五    | 同  | 二三  | 同   | 人     | 同   | 四・五×三   | 上畑 | 一四 | 同 人    |      |
| 同  | 九×二・五    | 同  | 二三  | 二三  | 清右衛門  | 同   | 五・五×二   | 屋敷 | 一一 | 弥三兵衛後家 |      |
| 同  | 一四×三     | 同  | 一二  | 一二  | 喜左衛門  | 同   | 五・五×二   | 同  | 一一 | 喜右衛門後家 |      |
| 同  | 一四×三     | 同  | 一二  | 一二  | 同 人   | 同   | 八×七・五   | 同  | 〇  | 長吉     |      |
| 同  | 一四×三     | 同  | 一二  | 一二  | 同 人   | 同   | 六×四     | 同  | 二四 | 勘九郎    |      |
| 同  | 五×四      | 同  | 二〇  | 二〇  | 善兵衛後家 | 同   | 四×二     | 中畑 | 八  | 万宝院    |      |
| 同  | 一五・五×四・五 | 同  | 二一〇 | 二一〇 | 仁兵衛   | 同   | 二・五×二   | 同  | 五  | 同 人    |      |
| 北側 | 二〇×五・五   | 同  | 三二〇 | 三二〇 | 同 人   | 同   | 一〇・五×八  | 屋敷 | 二  | 二四     | 上やしき |
| 同  | 一九×四・五   | 同  | 二二六 | 二二六 | 勘右衛門  | 同   | 一〇・五×八  | 同  | 二二 | 二四     | 同    |
| 同  | 一七・五×三   | 同  | 一二三 | 一二三 | 甚兵衛   | 北側  | 一〇・五×八  | 同  | 二二 | 二四     | 同    |
| 同  | 一七・五×三   | 同  | 一二三 | 一二三 | 勘兵衛   | 同   | 五・五×四   | 同  | 二二 | 二二     | 同    |
| 同  | 一九×四     | 同  | 二一六 | 二一六 | 安兵衛   | 同   | 九×三・五   | 同  | 一一 | 二二     | 同    |
| 同  | 一〇×二     | 同  | 二〇  | 二〇  | 惣吉    | 南側  | 五・五×二・五 | 同  | 一四 | 一四     | 同    |
| 同  | 三〇×七     | 同  | 七〇  | 七〇  | 長兵衛   | 右之寄 |         |    |    |        |      |



上 畑 三畝二二歩  
中 畑 一畝九歩  
屋 敷 二反四畝一七歩  
畑屋敷 合二反九畝一八歩  
〔中略〕

堺 沢  
縦間 横間  
畝 歩

南 側 一四×七 屋敷 三 八 妙法寺  
同 一三・五×五 同 二 八 法久寺  
反 畝 歩

同北沢側 四二×二八 同 三 九 六 同 寺

柄 杓 町

縦間 横間  
畝 歩

南 側 二四×二 屋敷 一 一八 法花寺

同 二四×二 同 一 一八 同 寺

同 二四×二 同 一 一八 同 寺

同 二四×二 同 一 一八 同 寺

同 二四×二 同 一 一八 同 寺

同 二四×二 同 一 一八 同 寺

同 二四×二 同 一 一八 同 寺

同 二四×二 同 一 一八 同 寺

同 二四×二 同 一 一八 同 寺

同 二四×二 同 一 一八 同 寺

同 二四×二 同 一 一八 同 寺

同 二四×二 同 一 一八 同 寺

同 二四×二 同 一 一八 同 寺

同 二四×二 同 一 一八 同 寺

同 二四×二 同 一 一八 同 寺

同 二四×二 同 一 一八 同 寺

同 二四×二 同 一 一八 同 寺

同 二四×二 同 一 一八 同 寺

同 二四×二 同 一 一八 同 寺

同 二四×二 同 一 一八 同 寺

同 二四×二 同 一 一八 同 寺

同 二四×二 同 一 一八 同 寺

同 二四×二 同 一 一八 同 寺

同 二四×二 同 一 一八 同 寺

同 二四×二 同 一 一八 同 寺

同 二四×二 同 一 一八 同 寺

同 二四×二 同 一 一八 同 寺

同 二四×二 同 一 一八 同 寺

同 二四×二 同 一 一八 同 寺

同 二四×二 同 一 一八 同 寺

同 二四×二 同 一 一八 同 寺

同 二四×二 同 一 一八 同 寺

同 二四×二 同 一 一八 同 寺

同 二四×二 同 一 一八 同 寺

同 二四×二 同 一 一八 同 寺

同 二四×二 同 一 一八 同 寺

同 二四×二 同 一 一八 同 寺

|     |          |    |   |      |      |      |          |       |    |        |        |
|-----|----------|----|---|------|------|------|----------|-------|----|--------|--------|
| 同   | 一六×九・五   | 屋敷 | 五 | 二    | 権    | 助    | 同        | 九・五×二 | 同  | 一九     | 伊左衛門   |
| 同   | 七×四      | 同  | 二 | 二八   | 長左衛門 | 同    | 九・五×二    | 同     | 一九 | 同 人    |        |
| 同   | 八・五×八    | 同  | 二 | 八    | 市左衛門 | 同    | 九・五×二・五  | 同     | 二四 | 同 人    |        |
| 同   | 六×四      | 同  | 二 | 二四   | 三右衛門 | 同    | 一一×三・五   | 同     | 九  | 半軒役熊之助 |        |
| 山ノ内 | 三×二      | 下畑 | 六 | 長左衛門 | 同    | 一一×三 | 同        | 一一×三  | 同  | 一      | 半軒役伊兵衛 |
| 同   | 七×三・五    | 中畑 | 二 | 五    | 市左衛門 | 同    | 一一・五×四   | 同     | 一一 | 一六     | 権四郎    |
| 同   | 一二・五×三・五 | 屋敷 | 一 | 一四   | 長左衛門 | 同    | 一一×二・五   | 同     | 二  | 八      | はる     |
| 鍛冶沢 | 九×三      | 下畑 | 二 | 七    | 権    | 助    | 一〇・五×四・五 | 同     | 一  | 一七     | 佐次兵衛   |
| 同   | 一四×七・五   | 同  | 三 | 一五   | 権兵衛  | 同    | 一一×五     | 同     | 一  | 二五     | 新左衛門   |
| 同   | 一〇×三     | 同  | 一 | 〇    | 権    | 助    | 一一×三・五   | 同     | 一  | 九      | 吉兵衛    |
| 山ノ下 | 三×一      | 同  | 三 | 同    | 人    | 同    | 一二×五・五   | 同     | 二  | 六      | 四兵衛    |
| 同   | 六×三      | 同  | 一 | 八    | 大光院  | 同    | 一四・五×四・五 | 同     | 二  | 五      | 万宝院    |
| 同   | 一三×六     | 同  | 二 | 一八   | 同 寺  | 南側   | 七×三      | 同     | 二  | 一      | 又兵衛    |
| 鍛冶沢 | 一一×四     | 屋敷 | 一 | 一四   | 上屋敷  | 同    | 一八×五     | 同     | 三  | 〇      | 藤右衛門   |
| 同   | 一〇×三・五   | 同  | 一 | 一五   | 同 断  | 同    | 一二×四     | 同     | 一  | 一八     | 権兵衛    |
| 同   | 八×九      | 同  | 二 | 一二   | 同 断  | 同    | 一八×五     | 同     | 三  | 〇      | 三十郎    |
| 同   | 七×六      | 同  | 一 | 一二   | 同 断  | 同    | 一七・五×四・五 | 同     | 二  | 一      | 九 庄吉   |
| 同   | 四・五×六・五  | 同  | 二 | 二九   | 同 断  | 同    | 一六×四     | 同     | 二  | 四      | 弥次右衛門  |
| 同   | 六×五      | 同  | 一 | 〇    | 同 断  | 同    | 一六×六     | 同     | 三  | 六      | 弥次兵衛   |
| 同   | 三・五×三    | 同  | 一 | 一一   | 同 断  | 同    | 九・五×三・五  | 同     | 一  | 三      | 市兵衛    |
| 同   | 六・五×四    | 同  | 二 | 二六   | 同 断  | 同    | 一五×三     | 同     | 一  | 一      | 五 宇兵衛  |
| 同   | 四×三・五    | 同  | 一 | 一四   | 同 断  | 同    | 一四×四     | 同     | 一  | 二      | 六 同 人  |
| 同   | 六×四      | 同  | 二 | 二四   | 同 断  | 同    | 一六×二     | 同     | 一  | 二      | 喜左衛門   |
| 同   | 七・五×六    | 同  | 一 | 一五   | 同 断  | 同    | 一五×三     | 同     | 一  | 一      | 五 宇兵衛  |
| 同   | 一二×七・五   | 同  | 三 | 〇    | 同 断  | 同    | 一二×二・五   | 同     | 一  | 〇      | 惣兵衛    |
| 右之寄 |          |    |   |      |      |      | 一〇・五×三   | 同     | 一  | 二      | 佐兵衛    |
| 上畑  | 三畝二九歩    |    |   |      |      |      | 一一×三     | 同     | 一  | 三      | 德兵衛    |
| 中畑  | 二五歩      |    |   |      |      |      | 一二×三     | 同     | 一  | 六      | 助左衛門   |
| 下畑  | 一反一畝一九歩  |    |   |      |      |      | 一三×四     | 同     | 一  | 二      | 二 德兵衛  |
| 屋敷  | 三反三畝一歩   |    |   |      |      |      | 一二×三     | 同     | 一  | 六      | 次郎兵衛   |
| 畑屋敷 | 合四反九畝一四歩 |    |   |      |      |      | 一六×五・五   | 同     | 二  | 二      | 八 三右衛門 |

鍛冶町

|    |         |    |   |   |   |      |   |       |   |    |       |
|----|---------|----|---|---|---|------|---|-------|---|----|-------|
| 北側 | 縦間      | 横間 | 畝 | 歩 |   |      | 同 | 五×二   | 同 | 一〇 | 同 人   |
| 同  | 九×六     | 屋敷 | 一 | 二 | 四 | 助左衛門 | 同 | 二×一   | 同 | 二  | 同 人   |
| 同  | 九・五×七・五 | 同  | 二 | 一 | 同 | 人    | 同 | 五×三   | 同 | 一  | 五 同 人 |
| 同  | 九・五×三   | 同  | 二 | 九 | 覚 | 兵衛   | 同 | 五×二   | 同 | 一  | 〇 同 人 |
| 同  | 六・五×三・五 | 同  | 二 | 三 | 惣 | 兵衛   | 同 | 四×二   | 同 | 八  | 同 人   |
| 同  | 五×四     | 同  | 二 | 〇 | 庄 | 兵衛   | 同 | 三×一・五 | 同 | 五  | はる    |
| 同  | 八×四     | 同  | 一 | 二 | 同 | 人    | 同 | 一〇×一  | 同 | 一〇 | 権兵衛   |

[illegible]

|     |          |     |    |   |     |
|-----|----------|-----|----|---|-----|
| 同   | 八×七・五    | 同   | 二  | 〇 | 妙音寺 |
| 同   | 一二×八     | 同   | 三  | 六 | 專照寺 |
| 同   | 四×三      | 下畑  | 一二 | 二 | 同寺  |
| 同   | 八×四      | 同   | 一  | 二 | 同寺  |
| 同   | 一一×三     | 屋敷  | 一  | 三 | 六兵衛 |
| 同   | 一四・五×四・五 | 同   | 二  | 五 | 同   |
| 同   | 二×一・五    | 中畑  | 三  | 同 | 人   |
| 同   | 一〇×二     | 下々畑 | 二〇 | 治 | 兵衛  |
| 同   | 一三×八     | 下畑  | 三一 | 四 | 与兵衛 |
| 右之寄 |          |     |    |   |     |
| 中畑  | 三步       |     |    |   |     |
| 下畑  | 四畝二八歩    |     |    |   |     |
| 下々畑 | 二〇歩      |     |    |   |     |
| 屋敷  | 二反二畝二五歩  |     |    |   |     |
| 畑屋敷 | 合二反八畝一六歩 |     |    |   |     |

相川本町

|    |          |    |   |    |      |
|----|----------|----|---|----|------|
| 北側 | 一二×四     | 屋敷 | 一 | 一八 | 惣兵衛  |
| 同  | 六×二・五    | 同  | 一 | 一五 | 伊兵衛  |
| 同  | 一二×二     | 同  | 二 | 二四 | 徳兵衛  |
| 同  | 一〇・五×一・五 | 同  | 一 | 一六 | 同    |
| 同  | 一二×二・五   | 同  | 一 | 〇  | 助右衛門 |
| 同  | 一二×五     | 同  | 二 | 〇  | 同    |
| 南側 | 二〇・五×三   | 同  | 一 | 二  | 徳兵衛  |
| 同  | 一二・五×二・五 | 同  | 一 | 一  | 長左衛門 |
| 同  | 一〇・五×四・五 | 同  | 一 | 一七 | 長兵衛  |
| 同  | 四×四      | 同  | 一 | 一六 | まさ   |
| 同  | 八・五×二・五  | 同  | 二 | 二  | 吉右衛門 |
| 同  | 一三・五×一〇  | 同  | 四 | 一五 | 源右衛門 |
| 同  | 九×七      | 下畑 | 二 | 三  | 同    |
| 同  | 一〇×八     | 屋敷 | 二 | 二〇 | 同    |
| 同  | 九×四      | 同  | 一 | 一六 | 源右衛門 |
| 同  | 六×二      | 同  | 一 | 一二 | 三十郎  |
| 同  | 一〇×二     | 同  | 二 | 二〇 | 上屋敷  |
| 同  | 八・五×八    | 同  | 二 | 八  | 同    |
| 同  | 三・五×二    | 同  | 七 | 七  | 同    |
| 同  | 一四×八     | 同  | 三 | 二二 | 同    |
| 同  | 一二×六     | 同  | 二 | 一二 | 同    |
| 同  | 一四・五×七   | 同  | 三 | 一二 | 同    |

右之寄  
下畑 二畝三步  
屋敷 三反二畝二四歩  
畑屋敷 合三反四畝二七歩

九郎左衛門町

|    |         |    |   |    |       |
|----|---------|----|---|----|-------|
| 南側 | 一〇×三    | 屋敷 | 一 | 〇  | 久左衛門  |
| 同  | 一一×四    | 同  | 一 | 一四 | 半右衛門  |
| 同  | 一〇×二・五  | 同  | 二 | 二五 | 市左衛門  |
| 同  | 一〇・五×六  | 同  | 二 | 三  | 茂兵衛   |
| 同  | 一一×三・五  | 同  | 一 | 九  | 玄悦    |
| 同  | 一一×四    | 同  | 一 | 一四 | 七兵衛   |
| 同  | 一〇・五×四  | 同  | 一 | 一二 | 三右衛門  |
| 同  | 一〇×四    | 同  | 一 | 一〇 | 市学院   |
| 同  | 一〇×五    | 同  | 一 | 二〇 | 助左衛門  |
| 同  | 九・五×五・五 | 同  | 一 | 一二 | 弥市右衛門 |
| 同  | 六×六     | 同  | 一 | 六  | 吉右衛門  |
| 同  | 六×三・五   | 同  | 一 | 二一 | 庄兵衛   |
| 同  | 六×五     | 同  | 一 | 〇  | 与十郎   |
| 同  | 七・五×二・五 | 同  | 一 | 一九 | 喜兵衛   |
| 同  | 七×二     | 同  | 一 | 一四 | 甚十郎   |
| 同  | 一二×二・五  | 同  | 一 | 〇  | 四郎右衛門 |
| 同  | 一二×三・五  | 同  | 一 | 一二 | 権兵衛   |
| 同  | 一二×六    | 同  | 二 | 二二 | 福正院   |
| 同  | 一四×四・五  | 同  | 二 | 二三 | 常学院   |
| 同  | 一五・五×四  | 同  | 二 | 二  | 佐兵衛   |
| 同  | 一五・五×八  | 同  | 四 | 四  | 佐兵衛   |
| 同  | 一〇×五・五  | 同  | 一 | 二五 | 同     |
| 同  | 八×三・五   | 同  | 二 | 二八 | 同     |
| 同  | 一〇×三    | 同  | 一 | 〇  | 同     |
| 同  | 一〇・五×五  | 同  | 一 | 二三 | 半右衛門  |
| 同  | 一六×五    | 同  | 二 | 二〇 | 廣圓寺   |
| 同  | 一六×二    | 同  | 一 | 二  | 同     |
| 同  | 一六×二    | 同  | 一 | 二  | 同     |
| 同  | 一六×二    | 同  | 一 | 二  | 同     |
| 同  | 七・五×七   | 同  | 一 | 二三 | 教学院   |
| 同  | 八×四     | 同  | 一 | 二  | 万宝院   |
| 同  | 八×三・五   | 同  | 二 | 二八 | 長兵衛   |
| 同  | 六・五×三   | 同  | 二 | 二〇 | ひん    |
| 同  | 七×四・五   | 同  | 一 | 二  | 長左衛門  |

|     |        |    |    |      |             |        |      |    |      |
|-----|--------|----|----|------|-------------|--------|------|----|------|
| 同   | 六・五×四  | 同  | 二六 | 又兵衛  | 同           | 七×五    | 下々畑一 | 五  | 半右衛門 |
| 同   | 八×四    | 同  | 二  | 同    | 同           | 三×二    | 同    | 六  | 孫兵衛  |
| 同   | 八×五    | 同  | 一〇 | 市学院  | 同           | 四×三    | 同    | 二  | 同    |
| 同   | 九×三    | 同  | 二七 | 長三郎  | 山神の上        | 五×二    | 中畑   | 一〇 | 右京   |
| 同   | 一一×五・五 | 同  | 二一 | 同    | 南側          | 三×四    | 屋敷   | 一二 | 上ヶ屋敷 |
| 同   | 一〇×二・五 | 同  | 二五 | 甚十郎  | 同           | 六×二・五  | 同    | 一五 | 同    |
| 同   | 六・五×六  | 同  | 九  | 七郎兵衛 | 同           | 五×三    | 同    | 一五 | 同    |
| 同   | 一一×三   | 同  | 三  | 六右衛門 | 同           | 七×三    | 同    | 二一 | 同    |
| 同   | 七×四・五  | 同  | 二  | 善兵衛  | 同           | 五×二    | 同    | 一〇 | 同    |
| 同   | 七×六    | 同  | 一二 | 福正院  | 同           | 六×四    | 同    | 二四 | 同    |
| 同   | 三・五×三  | 同  | 一一 | 常学院  | 同           | 七×一・五  | 同    | 一一 | 同    |
| 同   | 一〇×六・五 | 同  | 二五 | 半右衛門 | 同           | 四×二    | 同    | 八  | 同    |
| 同   | 四×三    | 同  | 一二 | 新兵衛  | 同           | 六×三    | 同    | 一八 | 同    |
| 同   | 六・五×四  | 同  | 二六 | 三右衛門 | 右之寄         | 中畑 一〇歩 |      |    |      |
| 同   | 一〇×四・五 | 同  | 一五 | 孫兵衛  | 下畑 二畝九歩     |        |      |    |      |
| 同   | 四×三    | 同  | 一二 | 三十郎  | 下々畑 四畝一歩    |        |      |    |      |
| 同   | 四×三    | 同  | 一二 | はつ   | 屋敷 一反一畝五歩   |        |      |    |      |
| 丹波平 | 七×四    | 下畑 | 二八 | 甚助   | 畑屋敷 合一反八畝五歩 |        |      |    |      |

右之寄  
下畑 二八歩  
屋敷 六反五畝七歩  
畑屋敷 合六反六畝五歩

九郎左衛門裏町

| 縦間  |       | 横間  |    | 畝    |     | 歩       |   |    |      |
|-----|-------|-----|----|------|-----|---------|---|----|------|
| 南側  | 三×一・五 | 屋敷  | 五  | 市学院  | 同   | 六×三・五   | 同 | 二一 | 弥五兵衛 |
| 同   | 六×五・五 | 同   | 三  | 常学院  | 同   | 九・五×三・五 | 同 | 一三 | 佐之助  |
| 同   | 七×五   | 同   | 五  | 福正院  | 同   | 六×四     | 同 | 二四 | 三右衛門 |
| 同   | 八×七   | 同   | 二六 | 半右衛門 | 同   | 九・五×五・五 | 同 | 一二 | 吉兵衛  |
| 同   | 四×八   | 同   | 二  | 伝兵衛  | 同   | 七×二     | 同 | 一四 | 長兵衛  |
| 同   | 六×二   | 同   | 一二 | 佐兵衛  | 同   | 二〇×六    | 同 | 〇  | 茂兵衛  |
| 同   | 七×四   | 同   | 二八 | 三十郎  | 同   | 七×四・五   | 同 | 一二 | 甚右衛門 |
| 同   | 六×四   | 下畑  | 二四 | 半右衛門 | 同   | 一〇・五×七  | 同 | 二一 | 茂兵衛  |
| 丹波平 | 五×三   | 下々畑 | 一五 | 同    | 同   | 九・五×五   | 同 | 一八 | 金十郎  |
| 同   | 六×三・五 | 下畑  | 二一 | 鳥之助  | 同   | 五×四     | 同 | 二〇 | 市郎兵衛 |
| 同   | 七×四   | 下々畑 | 二八 | 同    | 同   | 一〇×一・五  | 同 | 一五 | 甚十郎  |
| 同   | 八×三   | 同   | 二四 | 佐兵衛  | 同   | 一四×五    | 同 | 二一 | 伝十郎  |
| 同   | 三×二   | 同   | 六  | 同    | 右之寄 |         |   |    |      |
| 同   | 五×一   | 同   | 五  | 同    | 屋敷合 | 二反七歩    |   |    |      |
| 同   | 八×三   | 下畑  | 二四 | 源太郎  | 外記町 |         |   |    |      |

| 縦間  | 横間      | 畝  | 歩 | 同 | 一    | 一    | 四   | 吉       | 左衛門 |
|-----|---------|----|---|---|------|------|-----|---------|-----|
| 南側  | 八×五・五   | 屋敷 | 一 | 一 | 四    | 佐    | 兵衛  | 同       | 一   |
| 同   | 五・五×三・五 | 同  | 一 | 九 | 次郎   | 兵衛   | 同   | 同       | 二   |
| 同   | 四×三・五   | 同  | 一 | 四 | 太郎   | 右衛門  | 同   | 三       | 一   |
| 同   | 三・五×二・五 | 同  | 九 | 惣 | 兵衛   | 同    | 同   | 二       | 二   |
| 東側  | 五×三     | 同  | 一 | 五 | 佐次   | 兵衛   | 同   | 同       | 〇   |
| 同   | 五×三     | 同  | 一 | 五 | 伝右衛門 | 同    | 同   | 一       | 一   |
| 同   | 一一×四    | 同  | 一 | 一 | 四    | 覚左衛門 | 同   | 同       | 二   |
| 北側  | 一二×六    | 同  | 二 | 二 | 庄    | 兵衛   | 同   | 同       | 一   |
| 同   | 四×三     | 同  | 二 | 二 | しやうぶ | 同    | 同   | 一       | 二   |
| 同   | 七×三・五   | 同  | 二 | 五 | 権太郎  | 同    | 同   | 同       | 一   |
| 南側  | 三×三     | 同  | 九 | 上 | 屋敷   | 同    | 同   | 一       | 七   |
| 同   | 四・五×四   | 同  | 一 | 八 | 同    | 断    | 同   | 三       | お   |
| 右之寄 |         |    |   |   |      |      | 右之寄 | 下畑      | 三   |
| 下畑  |         |    |   |   |      |      | 三歩  |         | お   |
| 屋敷  | 合九畝二六歩  |    |   |   |      |      | 屋敷  | 四反五畝一步  |     |
| 畑屋敷 | 合四反五畝四歩 |    |   |   |      |      | 畑屋敷 | 合四反五畝四歩 |     |

床屋町

縦間 横間

畝 歩

外二

境内

間 間

〔中略〕

〔後略〕

|    |          |    |   |   |     |      |                       |              |      |       |
|----|----------|----|---|---|-----|------|-----------------------|--------------|------|-------|
| 北側 | 三×四・五    | 屋敷 | 一 | 四 | 六   | 兵衛後家 | 大光院                   | 上相川          | 山神町  | 二〇×一五 |
| 同  | 七・五×三    | 同  | 二 | 三 | 忠   | 次郎   | 山神社                   | 同            | 所    | 二〇×一一 |
| 同  | 四×三・五    | 同  | 一 | 四 | 仁   | 兵衛   | 妙恩寺                   | 奈良町          | 鍛冶町  | 二二×一六 |
| 同  | 五×四      | 同  | 二 | 〇 | 次郎  | 兵衛   | 玄徳寺                   | 鍛冶町          | 同    | 四六×二〇 |
| 同  | 四×二      | 同  | 八 | 長 | 右衛門 | 同    | 専念寺                   | 同            | 町    | 二五×二四 |
| 同  | 四×二      | 同  | 八 | 善 | 兵衛  | 法花寺  | 床屋町                   | 同            | 町    | 一三×二〇 |
| 同  | 八×三      | 同  | 二 | 四 | 甚   | 右衛門  | 〔中略〕                  |              |      |       |
| 同  | 八×二・五    | 同  | 二 | 〇 | 同   | 人    | 〔除地以外の寺社〕(各町から抜すい)    |              |      |       |
| 同  | 四・五×四    | 同  | 一 | 八 | 久   | 兵衛   | 万宝院                   | 鍛冶町          | 〔屋敷〕 |       |
| 同  | 六×四      | 同  | 二 | 四 | し   | ま    | 田町                    | 〔屋敷〕         |      |       |
| 同  | 八×六      | 同  | 一 | 一 | 八   | 長    | 兵衛                    | 九郎左衛門町       | 〔屋敷〕 |       |
| 同  | 八×六・五    | 同  | 一 | 二 | 三   | 市    | 兵衛                    | 山神町          | 〔屋敷〕 |       |
| 同  | 七・五×六    | 同  | 一 | 一 | 五   | 三    | 右衛門                   | 〔後略〕         |      |       |
| 同  | 七×五・五    | 同  | 一 | 九 | 同   | 人    | 〔相川郷土博物館蔵〕            |              |      |       |
| 同  | 一一×三     | 同  | 一 | 九 | 吉   | 兵衛   | 〔新潟県史 資料編9 近世4 佐渡編〕所収 |              |      |       |
| 同  | 一一・五×六   | 同  | 二 | 九 | 徳   | 兵衛   |                       |              |      |       |
| 同  | 一六・五×二・五 | 同  | 一 | 一 | 一   | 久    | 兵衛                    |              |      |       |
| 同  | 一六×三     | 同  | 一 | 一 | 八   | 与次   | 兵衛                    | 〔欠年〕「相川町地子帳」 |      |       |
| 同  | 一六×三     | 同  | 一 | 一 | 八   | 権    | 兵衛                    | 〔前欠〕         |      |       |
| 同  | 一六×三     | 同  | 一 | 一 | 八   | 同    | 人                     | 一            | 八    | 匁分    |
| 同  | 一六×三     | 同  | 一 | 一 | 八   | 同    | 人                     | 一            | 九    | 匁八分   |
| 同  | 二〇×四     | 同  | 二 | 二 | 〇   | 庄    | 兵衛                    | 一            | 九    | 匁五分   |
|    |          |    |   |   |     |      |                       | 拾三坪半         | い    | 七     |
|    |          |    |   |   |     |      |                       |              | 喜    | 右衛門   |
|    |          |    |   |   |     |      |                       |              | 喜    | 右衛門   |

史料二二

〔欠年〕「相川町地子帳」

〔前欠〕

〔後略〕

〔中略〕

〔後略〕

|           |     |     |     |           |       |
|-----------|-----|-----|-----|-----------|-------|
| 一 三匁貳分    | 四坪半 | 越中惣 | 七 ⑩ | 検地請 惣兵衛   | 常学院   |
| 小以貳百五十匁五分 |     |     |     | 一屋舗 表口四間半 | 町役目老軒 |

〔中略〕

|       |            |       |    |      |   |                 |           |
|-------|------------|-------|----|------|---|-----------------|-----------|
| 鍛冶町   | 一 貳拾八匁四分   | 七拾壹坪  | 橋や | 重右衛門 | ⑩ | 代銭七拾六貫五百文       | 買主        |
|       | 一 五匁六分     | 拾四坪   | 大和 | 作十郎  | ⑩ |                 | 相川町       |
|       | 一 五匁貳分     | 拾三坪   | 近江 | 加右衛門 | ⑩ | 文久二戊年九月十四日      | 栄 助       |
|       | 一 六匁四分     | 拾六坪   | 奈ら | 善 助  | ⑩ | 南側 町役目老軒        | 御検地請 市左衛門 |
|       | 一 拾匁       | 貳拾五坪  | 越前 | 彦右衛門 | ⑩ | 一屋舗 表口六間        | 老畝拾五歩     |
|       | 一 八匁       | 貳拾坪   | 越前 | 弥兵衛  | ⑩ | 後江七間半           |           |
|       | 一 拾匁       | 二拾五坪  | 越前 | 市右衛門 | ⑩ | 内訳              |           |
|       | 一 八匁       | 貳拾坪   | 堺ノ | 善左衛門 | ⑩ | 宝暦以前切畝歩之分       |           |
|       | 一 拾匁       | 貳拾五坪  | 近江 | 数右衛門 | ⑩ | 町役目半軒           | 当持        |
|       | 一 五匁八分     | 拾四坪半  | 近江 | 新 助  | ⑩ | 表口三間            | 貳拾三歩      |
|       | 一 拾三匁七分五リン | 三拾四坪半 | 大坂 | 五郎兵衛 | ⑩ | 後江七間半           |           |
|       | 一 拾四匁八分    | 三拾七坪  | 佐渡 | 忠二郎  | ⑩ | 此境西者常学院、東者広次屋敷切 |           |
|       | 一 六匁八分     | 拾七坪   | 加、 | 又兵衛  | ⑩ | 宝暦以前切畝歩之分       |           |
|       | 一 五匁       | 拾貳坪半  | 越中 | 清左衛門 | ⑩ | 町役目半軒           | 当持        |
| 是□羽田町 |            |       |    |      |   | 表口三間            | 貳拾貳歩      |

〔後略〕

〔『新潟県史 資料編9 近世四 佐渡編』〕

史料一三

〔表紙〕

安政五年十月

大工町方  
上相川迄 屋 舗 帳  
廿六ヶ町

相川 町

南側 町役目老軒 御検地請 惣兵衛

一屋舗 表口四間 老畝四歩 当持 常学院

後江八間半

此境西者道切、東者同院屋敷切

〔南側 町役目老軒 御検地請 惣兵衛

一屋舗 四間半 貳拾五歩 当持 常学院

五間半

此境西者同院、東者伊左衛門屋敷切

〔貼紙〕

相川町南側

当持

|           |       |
|-----------|-------|
| 検地請 惣兵衛   | 常学院   |
| 一屋舗 表口四間半 | 町役目老軒 |

後江五間半

内建坪拾貳坪

代銭七拾六貫五百文 買主

相川町

文久二戊年九月十四日 栄 助

南側 町役目老軒 御検地請 市左衛門

一屋舗 表口六間 老畝拾五歩

後江七間半

内訳

宝暦以前切畝歩之分

町役目半軒 当持

表口三間 貳拾三歩 伊左衛門

後江七間半

此境西者常学院、東者広次屋敷切

宝暦以前切畝歩之分

町役目半軒 当持

表口三間 貳拾貳歩 広 次

後江七間半

此境西者伊左衛門、東者道切

ノ

南側 町役目半軒 御検地請 孫兵衛後家

一屋舗 表口貳間 拾五歩 当持

後江七間半 伊 八

此境西者川切、東者同人屋敷切

同側 町役目半軒 御検地請 仁右衛門

一屋舗 表口貳間 拾五歩 当持

後江七間半 同 人

此境西者同人、東者吉助屋敷切

同側 町役目老軒 御検地請 半四郎

一屋舗 表口三間 老畝五歩

後江七拾老間半

内訳

宝暦以前切畝歩之分

町役目半軒 当持

表口老間半 拾八歩 吉 助

後江拾老間半

此境西者伊八、東者武右衛門屋敷切

右同断



|                    |                 |   |                 |                  |
|--------------------|-----------------|---|-----------------|------------------|
| 町役目半軒              | 当持              | 右同断                                     | 町役目老軒半          | 当持               |
|                    | 表口老間半 拾七步       |   | 表口四間半 貳畝三步      | 武右衛門             |
| 後江拾老間半             |                 |   | 後江拾四間           |                  |
| 此境西者吉助、東者武右衛門屋敷切   |                 |   |                 |                  |
| 南側                 | 町役目老軒 御檢地請 伝右衛門 | 此境西者十藏、東者竹次郎屋敷切                         | 南側              | 町役目老軒 御檢地請 善兵衛後家 |
| 一屋舗                | 表口五間 老畝歩 当持     | 一屋舗                                     | 表口四間 貳拾歩 当持     | 竹次郎              |
| 後江六間               |                 | 後江五間                                    |                 |                  |
| 此境西東共同人屋敷切         |                 |   |                 |                  |
| 南側裏二而              | 町役目老軒 御檢地請 甚兵衛  | 此境西者武右衛門、東者代藏屋敷切                        | 南側              | 町役目半軒 御檢地請 仁兵衛   |
| 一屋舗                | 表口四間半 貳拾七歩 当持   | 一屋舗                                     | 表口四間半 貳畝拾歩 当持   |                  |
| 後江六間               |                 | 後江拾五間半                                  |                 |                  |
| 此境                 |                 |   |                 |                  |
| 南側                 | 町役目老軒 御檢地請 伊兵衛  | 此境西者竹次郎、東者九郎左衛門町仙次郎屋敷切                  | 北側              | 町役目老軒 御檢地請 仁兵衛   |
| 一屋舗                | 表口貳間半 貳拾三步 当持   | 一屋舗                                     | 表口五間半 三畝貳拾歩 当持  |                  |
| 後江九間               |                 | 後江貳拾間                                   |                 |                  |
| 此境西者小路道切、東者奥右衛門屋敷切 |                 |   |                 |                  |
| 同側                 | 町役目老軒 御檢地請 伊兵衛  | 此境西者沢切、東者同人屋敷切                          | 北側              | 町役目老軒 御檢地請 勘左衛門  |
| 一屋舗                | 表口貳間半 貳拾三步 当持   | 一屋舗                                     | 表口四間半 貳畝貳拾六歩 当持 | 代藏               |
| 後江九間               |                 | 後江拾九間                                   |                 |                  |
| 此境西者三十郎、東者右次郎屋敷切   |                 |   |                 |                  |
| 南側                 | 町役目老軒 御檢地請 清右衛門 | 此境西者同人、東者伊三郎屋敷切                         | 同側              | 町役目老軒 御檢地請 甚兵衛   |
| 一屋舗                | 表口貳間半 貳拾三步 当持   | 一屋舗                                     | 表口三間 老畝貳拾三步 当持  | 伊三郎              |
| 後江九間               |                 | 後江拾七間半                                  |                 |                  |
| 此境西者奥右衛門、東者十藏屋敷切   |                 |   |                 |                  |
| 同側                 | 町役目 御檢地請 嘉左衛門   | 此境西者代藏、東者長八屋敷切                          | 北側              | 町役目老軒 御檢地請 勘兵衛   |
| 一屋舗                | 表口三間 老畝拾貳歩      | 天保三 <sup>(朱)</sup> 辰年十二月二十五日、こんろ伊八跡伊三郎江 | 一屋舗             | 表口三間 老畝貳拾三步 当持ち  |
| 後江拾四間              |                 | 後江拾七間半                                  |                 |                  |
| 同側                 | 町役目 御檢地請 同 人    | 此境西者伊三郎屋敷切、東者小路道切                       | 同側              | 町役目老軒 御檢地請 安兵衛   |
| 一屋舗                | 表口三間 老畝拾貳歩      | 一屋舗                                     | 表口四間 貳畝拾六歩 当持   | 広次               |
| 後江拾四間              |                 | 後江拾九間                                   |                 |                  |
| ノ三筆                |                 |   |                 |                  |
| 町役目三軒              |                 | 此境西者小路道切、東者川切                           | 同側              | 町役目老軒 御檢地請 惣 吉   |
| 内訳                 |                 | 一屋舗                                     | 表口貳間 貳拾歩 当持     | 九兵衛              |
| 宝曆以前切畝歩之分          |                 |   |                 |                  |
| 町役目老軒半             | 当持              | 此境西者川切、東者川吉太屋敷切                         | 北側              | 町役目老軒 御檢地請 長兵衛   |
| 表口四間半 貳畝三步         | 十 藏             | 一屋舗                                     | 表口七間 七畝歩 当持     |                  |
| 後江拾四間              |                 |   |                 |                  |
| 此境西者右次郎、東者武右衛門屋敷切  |                 |   |                 |                  |

|   |                   |      |                      |          |
|---|-------------------|------|----------------------|----------|
| 此境西者九兵衛、東者茂作屋敷切                           | 後江三拾間             | 吉 太  | 表口壱間半 拾五歩            | 伊 太 郎    |
|   | 町役目壱軒 御檢地請 三右衛門   |      | 後江九間半                |          |
| 同側  | 一屋舗 表口五間半 貳畝六歩 当持 | 茂 作  | 北側 町役目壱軒 御檢地請 九兵衛    |          |
| 此境西者吉太、東者武右衛門屋敷切                          | 後江拾貳間             | 武右衛門 | 一屋舗 表口貳間半 拾五歩 当持     | 伊 太 郎    |
| 北側  | 町役目壱軒 御檢地請 惣兵衛    |      | 後江六間                 |          |
| 一屋舗 表口三間 壱畝六歩 当持                          |                   |      | 此境西者同人、東者道切          |          |
| 後江拾貳間                                     | 武右衛門              |      | 間 口 百四間              |          |
| 此境西者茂作、東者岩次郎畑屋敷切                          |                   |      | 合 町役目 貳拾六軒半          |          |
| 同側  | 御檢地請 長左衛門         |      | 反 歩 四反五畝貳拾六歩         |          |
| 一貳間半 屋敷畑成 壱畝歩 当持                          |                   |      | 内 壱畝貳拾四歩 新畑成         |          |
| 拾貳間                                       | 岩 次 郎             |      |                      |          |
| 此境西者武右衛門、東者同人屋敷切                          |                   |      | 小右衛門町                |          |
| 同側  | 御檢地請 忠兵衛          |      | 町役目壱軒                | 御檢地請 甚兵衛 |
| 一貳間 屋敷畑成 貳拾四歩 当持                          |                   |      | 南側之内二而東側             | 当持       |
| 拾貳間                                       | 同 人               |      | 一屋舗 表口五間半 壱畝六歩 や よ   |          |
| 此境西者同人屋敷切、東者溝川切                           |                   |      | 後江六間半                |          |
| 同側  | 町役目壱軒 御檢地請 治右衛門   |      | 此境南者九郎左衛門町道切、北者同人屋舗切 |          |
| 一屋舗 表口三間 壱畝五歩 当持                          |                   |      | 町役目半軒                |          |
| 後江拾壱間半                                    | 善 十 郎             |      | 南側之内二而東側             | 御檢地請 甚兵衛 |
| 此境西者溝川切、東者庄次郎屋敷切                          |                   |      | 一屋舗 表口貳間 拾貳歩 当持      |          |
| 北側  | 町役目半軒 御檢地請 長三郎後家  |      | 後江六間                 | や よ      |
| 一屋舗 表口貳間 貳拾貳歩 当持                          |                   |      | 此境南者同人、北者道切          |          |
| 後江拾壱間                                     | 庄 次 郎             |      | 南側 町役目半軒 御檢地請 茂 七    |          |
| 此境西者善十郎、東者同人屋敷切                           |                   |      | 一屋舗 表口四間 壱畝拾歩 当持     |          |
| 同側  | 町役目半軒 御檢地請 作兵衛    |      | 後江拾間                 | な か      |
| 一屋舗 表口三間 貳拾九歩 当持                          |                   |      | 此境西者やよ、東者同人屋敷切       |          |
| 後江九間半                                     | 伊 太 郎             |      | 同側 町役目半軒 御檢地請 同 人    |          |
| 此境東西共庄次郎屋敷切                               |                   |      | 一屋舗 表口四間半 壱畝拾五歩 当持   |          |
| 内 訖                                       |                   |      | 後江拾間                 | な か      |
| 宝曆以前切畝歩之分                                 |                   |      | 此境西者同人、東者丹藏屋敷切       |          |
| 町役目貳歩五厘 当持                                |                   |      | 南側 町役目壱軒 御檢地請 吉右衛門   |          |
| 表口壱間半 拾四歩 庄次郎                             |                   |      | 一屋舗 表口三間 貳拾七歩 当持     |          |
| 後江九間半                                     |                   |      | 後江九間                 | 丹 藏      |
| 此境西者同人、東者伊太郎屋敷切                           |                   |      | 同側 町役目壱軒 御檢地請 吉兵衛    |          |
| 文政十二 <sup>(朱書)</sup> 丑年六月十六日、伊兵衛方百次郎跡庄次郎江 |                   |      | 一屋舗 表口貳間 九歩 当持       |          |
| 右同断                                       |                   |      | 後江四間半                | 同 人      |
| 町役目貳歩五厘 当持                                |                   |      | 此境西者同人、東者新兵衛屋敷切      |          |
|   |                   |      | 同側 御檢地請 半左衛門         |          |



|       |       |       |      |       |      |        |        |      |      |   |
|-------|-------|-------|------|-------|------|--------|--------|------|------|---|
| 此境    | 同側    | 町役目半軒 | 御檢地請 | 伝兵衛後家 | 此境   | 同側     | 町役目老軒  | 御檢地請 | 同    | 人 |
| 一屋鋪   | 表口貳間  | 拾貳步   | 当持   |       | 一屋鋪  | 表口四間半  | 壹畝貳拾四步 | 当持   |      |   |
| 此境    | 後江六間  |       | 同    | 人     | 此境   | 後江拾貳間  |        |      | 伊太郎  |   |
| 同側    | 町役目半軒 | 御檢地請  | 石    | 松     | 同側   | 町役目老軒  | 御檢地請   | 仁右衛門 |      |   |
| 一貳間   | 屋敷畑成  | 拾七步   | 当持   |       | 一四間半 | 屋鋪畑成   | 壹畝拾五步  | 当持   |      |   |
| 六間    |       |       | 同    | 人     | 拾間   |        |        |      | 伊太郎  |   |
| 此境    |       |       |      |       | 此境   |        |        |      |      |   |
| 同側    | 町役目老軒 | 御檢地請  | 吉    | 兵衛    | 間    | 口      | 九拾五間半  |      |      |   |
| 一三間   | 屋敷畑成  | 拾七步   | 当持   |       | 合    | 町役目    | 貳拾三軒半  |      |      |   |
| 五間半   |       |       | 同    | 人     | 反    | 步      | 三反八畝三步 |      |      |   |
| 此境    |       |       |      |       | 内    | 壹反貳拾三步 | 新畑成    |      |      |   |
| 北側    | 町役目老軒 | 御檢地請  | 仁右衛門 |       | 番屋町  |        |        |      |      |   |
| 一屋鋪   | 表口四間  | 拾貳步   | 当持   |       | 西側   | 町役目老軒  | 御檢地請   | 仁    | 兵衛   |   |
| 後江三間  |       |       | 岩    | 次郎    | 一屋鋪  | 表口四間   | 拾六步    | 当持   |      |   |
| 此境    |       |       |      |       | 後江四間 |        |        |      | 三之助  |   |
| 同側    | 町役目半軒 | 御檢地請  | 久右衛門 |       | 此境   |        |        |      |      |   |
| 一屋鋪   | 表口貳間半 | 貳拾步   | 当持   |       | 西側   | 町役目老軒  | 御檢地請   |      |      |   |
| 後江八間  |       |       | さ    | き     | 一屋鋪  | 表口六間半  | 壹畝貳拾貳步 | 当持   | 共    |   |
| 此境    |       |       |      |       | 後江八間 |        |        |      | 惣右衛門 |   |
| 同側    | 町役目半軒 | 御檢地請  | 七    | 兵衛    | 此境   |        |        |      |      |   |
| 一屋鋪   | 表口貳間半 | 拾五步   | 当持   |       | 同側   |        |        |      |      |   |
| 後江六間  |       |       | 同    | 人     | 一三間  | 屋鋪畑成   | 壹畝步    | 当持   |      |   |
| 此境    |       |       |      |       | 拾間   |        |        |      | 三之助  |   |
| 北側    |       | 御檢地請  | 庄    | 兵衛    | 此境   |        |        |      |      |   |
| 一貳間   | 屋鋪畑成  | 貳拾四步  | 当持   |       | 同側   |        |        |      |      |   |
| 拾貳間   |       |       | 岩    | 次郎    | 一貳間  | 屋鋪畑成   | 拾五步    | 当持   |      |   |
| 此境    |       |       |      |       | 七間半  |        |        |      | 同    | 人 |
| 同側    | 町役目老軒 | 御檢地請  | 市郎兵衛 |       | 此境   |        |        |      |      |   |
| 一屋鋪   | 表口四間  | 壹畝拾八步 | 当持   |       | 東側   |        |        |      |      |   |
| 後江拾貳間 |       |       | 新    | 兵衛    | 一三間半 | 屋鋪畑成   | 壹畝拾九步  | 当持   |      |   |
| 此境    |       |       |      |       | 拾四間  |        |        |      | 惣右衛門 |   |
| 北側    |       | 御檢地請  | 同    | 人     | 此境   |        |        |      |      |   |
| 一貳間半  | 屋敷畑成  | 壹畝步   | 当持   |       | 同側   |        |        |      |      |   |
| 拾貳間   |       |       | 新    | 兵衛    | 一四間  | 屋鋪畑成   | 壹畝六步   | 当持   |      |   |
| 此境    |       |       |      |       | 九間   |        |        |      | 伊太郎  |   |
| 北側    | 町役目老軒 | 御檢地請  | 庄左衛門 |       | 此境   |        |        |      |      |   |
| 一屋鋪   | 表口三間半 | 壹畝拾貳步 | 当持   |       | 同側   | 町役目老軒  | 御檢地請   | ま    | さ    |   |
| 後江拾貳間 |       |       | 新    | 兵衛    |      |        |        |      |      |   |

|     |         |       |        |     |        |        |
|-----|---------|-------|--------|-----|--------|--------|
| 一屋舗 | 表口四間    | 拾六歩   | 当持     | 合   | 町役目    | 四軒     |
| 此境  | 後江四間    |       | 三之助    | 反   | 歩      | 壹反四畝九歩 |
| 北側  | 町役目壹軒   | 御檢地請  | 惣左衛門後家 | 内   |        |        |
| 一屋舗 | 表口四間    | 壹畝六歩  | 当持     |     | 壹畝貳拾四歩 | 古畑     |
| 此境  | 後江九間    |       | 竹次郎    |     | 八畝拾五歩  | 新畑     |
| 東側  |         | 御檢地請  | 三右衛門後家 | 外記町 |        |        |
| 一三間 | 屋舗畑成    | 拾八歩   | 当持     | 南側  |        | 御檢地請   |
| 六間  |         |       | 三之助    | 一五間 | 屋舗畑成   | 壹畝拾四歩  |
| 此境  |         |       |        | 八間  |        | 当持     |
| 同側  |         | 御檢地請  | 清兵衛    | 此境  |        | 常学院    |
| 一五間 | 屋舗畑成    | 壹畝拾五歩 | 当持     | 同側  | 町役目壹軒  | 御檢地請   |
| 九間  |         |       | 法花寺    | 一屋舗 | 表口三間半  | 拾六歩    |
| 此境  |         |       |        | 此境  | 後江五間半  | 当持     |
| 東側  |         | 御檢地請  | 巳之助    | 南側  | 町役目壹軒  | 御檢地請   |
| 一六間 | 屋舗畑成    | 壹畝拾貳歩 | 当持     | 一屋舗 | 表口三間半  | 拾四歩    |
| 七間  |         |       | 惣右衛門   | 此境  | 後江四間   | 当持     |
| 丹波谷 |         | 御檢地請  |        | 同側  | 町役目壹軒  | 御檢地請   |
| 一三間 | 下々畑拾五歩  | 当持共   |        | 一屋舗 | 表口貳間半  | 九歩     |
| 五間  |         | 同人    |        | 此境  | 後江三半   | 当持     |
| 同所  |         | 御檢地請  |        | 東側  | 町役目壹軒  | 御檢地請   |
| 一四間 | 下々畑貳拾四歩 | 当持共   |        | 一屋舗 | 表口三間   | 拾五歩    |
| 六間  |         | 同人    |        | 此境  | 後江五間   | 当持     |
| 長沢  |         | 御檢地請  |        | 同側  | 町役目壹軒  | 御檢地請   |
| 一貳間 | 下々畑拾歩   | 当持共   |        | 一屋舗 | 表口三間   | 拾五歩    |
| 五間  |         | 同人    |        | 此境  | 後江五間   | 当持     |
| 丹波谷 |         | 御檢地請  |        | 東側  | 町役目壹軒  | 御檢地請   |
| 一三間 | 下々畑五歩   | 当持共   |        | 一屋舗 | 表口四間   | 壹畝拾四歩  |
| 六間  |         | 惣右衛門  |        | 此境  | 後江拾老間  | 当持     |
| 同所  |         | 御檢地請  | 伊兵衛    | 同側  | 町役目壹軒  | 御檢地請   |
| 一四間 | 屋舗畑成    | 貳拾歩   | 上ヶ屋敷   | 一屋舗 | 表口六間   | 貳畝拾貳歩  |
| 五間  |         |       |        | 此境  | 後江拾貳間  | 当持     |
| 此境  |         |       |        | 北側  |        | 御檢地請   |
| 間   | 口       | 拾八間半  |        |     |        | しゅうふ   |

|     |      |     |     |    |     |
|-----|------|-----|-----|----|-----|
| 一三間 | 屋鋪畑成 | 拾貳步 | 当持  | 四間 | 三十郎 |
| 四間  |      |     | 三十郎 | 此境 |     |

此境  
北側  
町役目壹軒  
御檢地請  
善兵衛

同側  
町役目壹軒  
御檢地請  
権太郎

一屋舗  
表口弐間  
八歩  
当持

一屋舖 表口三間半 貳拾五步 当持 後江四間 広 次

後江七間  
玄德寺  
此境

|    |       |       |      |      |      |    |
|----|-------|-------|------|------|------|----|
| 此境 | 同側    | 町役目壹軒 | 御檢地請 | 甚右衛門 |      |    |
| 南側 | 御檢地之節 | 上ヶ屋敷  | 一三間  | 屋鋪畑成 | 貳拾四步 | 当持 |

一三間 屋舗畑成 九歩 当持 八間 玄徳寺

三間  
三十郎  
此境

|    |     |      |      |
|----|-----|------|------|
| 此境 | 同側  | 御檢地請 | 甚右衛門 |
| 同側 | 右同斷 | 一貳間  | 屋鋪畑成 |
|    |     | 貳拾歩  | 当持   |

一四間 屋舖畑成 拾八步 当持 八間 三十郎

|    |     |    |    |    |         |
|----|-----|----|----|----|---------|
| 此境 | 四間半 | 同人 | 此境 | 同側 | 御檢地請久兵衛 |
|----|-----|----|----|----|---------|

間口 貳拾九間  
一四間 屋舖畑成 拾八步  
当持

合町役目 八軒 四間半 吉太

反歩 九畝貳拾六歩  
此境  
内 北側  
御檢地請し ま

式畝式拾三步 新畑成

床屋町

北側 町役目壱軒 御檢地請 六兵衛後家 同側 御檢地請 長兵衛

一屋舖 表口四間半 拾四步 当持 一六間 屋舖畑成 壹畝拾八步 当持

|      |      |    |    |
|------|------|----|----|
| 後江三間 | 仲右衛門 | 八間 | 同人 |
|------|------|----|----|

|                |       |
|----------------|-------|
| 此境西者道切、東者つま屋敷切 | 此境    |
| 北側             | 町役目老軒 |
|                | 御檢地請  |
|                | 忠次郎   |
|                | 同側    |
|                | 御檢地請  |
|                | 甚右衛門  |

一屋舖 表口三間 貳拾三步 当持 一六間半 屋舖畑成 壹畝貳拾貳步 当持

後江七間半  
つ ま  
八間  
吉 太

西者仲右衛門、東者つま屋敷切

此境

同側  
御檢地請 仁兵衛  
文政十二<sup>丑</sup>年六月十七日、十左衛門後家とわる幸右衛門跡吉太江

二三間半 屋舖畑成 拾四步 当持 同側 御檢地請 三右衛門

四間 同 人 一六間半 屋舖畑成 壹畝拾五步 当持

此境西者同人屋敷切、東者道切  
七間半  
同人

東側  
御檢地請 次郎兵衛  
此境

一四間 屋舖畑成 貳拾步 当持 右同斷

五間  
市左衛門  
北側  
御檢地請  
三右衛門

此境 一五間半 屋舖畑成 壹畝九步 当持

側  
御檢地請 長右衛門  
七間  
吉 太

〔金書〕  
文政十二丑年六月十七日、十左衛門後家とわろ幸右衛門跡吉太江

同側 御檢地請 吉兵衛

一三間 屋舖畑成 忒畝九步 当持 篤兵衛

拾三間 此境

南側 町役目忒軒 御檢地請 善兵衛

一屋舖 表口六間 忒畝九步 当持 篤兵衛

後江拾忒間半

此境

南側 町役目半軒 御檢地請 久兵衛

一屋舖 表口忒間半 忒畝拾忒步 当持 法花寺

後江拾六間半

此境

同側 町役目忒軒 御檢地請 与次兵衛

一屋舖 表口三間 忒畝拾八步 当持 鉄三郎

後江拾六間

此境

同側 町役目忒軒 御檢地請 権兵衛

一屋舖 表口三間 忒畝拾八步 当持 同人

後江拾六間

此境

同側 町役目忒軒 御檢地請 権兵衛

一屋舖 表口三間 忒畝拾八步 当持 市左衛門

後江拾六間

此境

南側 町役目忒軒 御檢地請 権兵衛

一屋舖 表口三間 忒畝拾八步 当持 十藏

後江拾六間

此境

同側 町役目忒軒 御檢地請 庄兵衛

一屋舖 表口四間 忒畝忒拾步 当持 仲右衛門

後江忒拾間

此境

同側 御檢地請 吉左衛門

一四間 屋舖畑成 忒畝拾四步 当持 三十郎

拾忒間

此境

南側 町役目忒軒 御檢地請 五兵衛

一屋舖 表口四間 忒畝忒步 当持 篤兵衛

後江拾五間半

此境

同側 御檢地請 吉左衛門

一七間 屋舖畑成 三畝拾五步 当持 伊八

拾五間 此境

同側 町役目忒軒 御檢地請 七兵衛

一屋舖 表口四間半 忒畝拾忒步 当持 代藏

後江拾六間

此境

南側 御檢地請 子之助

一五間 屋舖畑成 忒畝步 当持 仲右衛門

拾忒間

此境

南側 御檢地請 長兵衛

一六間 屋舖畑成 忒畝拾八步 当持 専念寺

八間

此境

同側 町役目忒軒 御檢地請 長次郎

一屋舖 表口四間 忒畝忒拾六步 当持 伊八

後江拾四間

此境

南側 御檢地請 長左衛門

一三間 屋舖畑成 忒畝拾忒步 当持 伊八

拾四間

此境

同側 御檢地請 吉左衛門

一四間 屋舖畑成 忒畝忒拾忒步 当持 市左衛門

拾三間

此境

同側 御檢地請 太兵衛

一四間 屋舖畑成 忒畝忒拾忒步 当持 市左衛門

拾三間

此境

〔朱書〕  
文政十二丑年六月十七日、十左衛門後家とわろ幸市左衛門江

同側 御檢地請 権助

一六間 屋舖畑成 拾五步 当持 仲右衛門

忒間半

〔朱書〕  
文政十二丑年六月十七日、十左衛門後家とわろ長右衛門跡仲右

衛門江

此境



|  |        |       |      |       |        |
|--|--------|-------|------|-------|--------|
| 南側                                       | 御檢地請   | 吉左衛門  | 此境   | 後江八間  | 同寺     |
| 一三間                                      | 屋鋪畑成   | 拾七步   | 此境   |       |        |
| 五間半                                      |        | 当持    |      |       |        |
| 此境                                       |        | 仲右衛門  | 北側   | 町役目忝軒 | 御檢地請   |
|  |        |       | 一屋鋪  | 表口式間  | 拾六步    |
|  |        |       |      |       | 当持     |
|  |        |       |      | 後江八間  | 法花寺    |
| 〔永享〕<br>文政十二丑年六月十七日、十左衛門後家とわゐる長右衛門跡仲右衛門江 |        |       | 此境   |       |        |
| 北側                                       | 御檢地請   | ちよ    | 同側   | 町役目忝軒 | 御檢地請   |
| 一沓間                                      | 下畑     | 三步    | 一屋鋪  | 表口四間  | 沓畝式步   |
|  |        | 当持    |      |       | 当持共    |
| 三間                                       |        | 同人    | 此境   | 後江八間  | 同寺     |
| 此境                                       |        |       |      |       |        |
| 間口                                       | 四拾六間半  |       | 北側   | 町役目忝軒 | 御檢地請   |
| 合  | 町役目    | 拾式軒半  | 一屋鋪  | 表口式間  | 拾四步    |
| 反歩                                       | 四反五畝四歩 |       |      |       | 当持     |
| 内  |        |       | 此境   | 後江七間  | 法花寺    |
| 三步                                       |        | 古畑    |      |       |        |
| 二反四畝拾四歩                                  | 新畑     |       | 北側   |       | 御檢地請   |
|  |        |       | 一三間  | 中畑    | 沓畝拾歩   |
|  |        |       |      |       | 当持     |
|  |        |       | 拾式間  |       | 安兵衛    |
| 柄杓町                                      |        |       | 此境   |       |        |
| 南側                                       | 町役目忝軒  | 御檢地請  | 南側   |       | 御檢地請   |
| 一屋鋪                                      | 表口式間   | 沓畝拾八歩 | 一式間  | 中畑    | 拾六歩    |
|  |        | 当持共   |      |       | 当持共    |
| 此境                                       | 後江式拾四間 | 法花寺   | 八間   |       | 万法院    |
|  |        |       | 此境   |       |        |
| 同側                                       | 町役目忝軒  | 御檢地請  | 同側   |       | 御檢地請   |
| 一屋鋪                                      | 表口式間   | 沓畝拾八歩 | 一四間  | 上畑    | 沓畝式拾式歩 |
|  |        | 当持共   |      |       | 当持共    |
| 此境                                       | 後江式拾四間 | 同寺    | 拾三間  |       | 法花寺    |
|  |        |       | 此境   |       |        |
| 南側                                       | 町役目忝軒  | 御檢地請  | 同側   |       | 御檢地請   |
| 一屋鋪                                      | 表口式間   | 沓畝拾八歩 | 一五間  | 上畑    | 沓畝式拾歩  |
|  |        | 当持共   |      |       | 当持共    |
| 此境                                       | 後江式拾四間 | 法花寺   | 拾間   |       | 同寺     |
|  |        |       | 此境   |       |        |
| 同側                                       | 町役目忝軒  | 御檢地請  | 南側   |       | 御檢地請   |
| 一屋鋪                                      | 表口式間   | 沓畝拾八歩 | 一式間  | 上畑    | 拾歩     |
|  |        | 当持共   |      |       | 当持共    |
| 此境                                       | 後江式拾四間 | 同寺    | 五間   |       | 法花寺    |
|  |        |       | 此境   |       |        |
| 同側                                       | 町役目忝軒  | 御檢地請  | 同側   |       | 御檢地請   |
| 一屋鋪                                      | 表口式間   | 沓畝拾八歩 | 一三間  | 下々畑   | 沓畝歩    |
|  |        | 当持共   |      |       | 当持     |
| 此境                                       | 後江式拾四間 | 同寺    | 拾間   |       | 安兵衛    |
|  |        |       | 此境   |       |        |
| 同側                                       | 町役目忝軒  | 御檢地請  | 同側   |       | 御檢地請   |
| 一屋鋪                                      | 表口三間   | 式拾四歩  | 一式間半 | 中畑    | 式拾五歩   |
|  |        | 当持    |      |       | 当持     |

|     |      |       |         |      |       |       |      |        |       |        |
|-----|------|-------|---------|------|-------|-------|------|--------|-------|--------|
| 茶屋町 | 拾間   |       | 同       | 人    | 南側    | 一貳間半  | 屋舖畑成 | 貳拾三步   | 当持    | 半左衛門後家 |
|     | 此境   |       |         |      | 九間    | 此境    |      |        |       | 武右衛門   |
|     | 同側   | 一三間   | 上畑      | 拾八歩  | 当持    |       |      |        |       |        |
|     | 六間   |       |         | 法花寺  | 同側    | 一六間半  | 屋舖畑成 | 貳畝八歩   | 当持    |        |
|     | 此境   |       |         |      | 拾間半   | 此境    |      |        |       | 庄次郎    |
|     | 南側   | 一貳間   | 中畑      | 貳拾貳歩 | 当持    |       |      |        |       |        |
|     | 拾壹間  |       |         | 法花寺  | 同側    | 一三間   | 上畑   | 拾五歩    | 当持    |        |
|     | 此境   |       |         |      | 五間    | 此境    |      |        |       | 庄次郎    |
|     | 同側   | 町役目壹軒 | 御検地請    |      | 此境    |       |      |        |       |        |
|     | 一屋舗  | 表口貳間  | 拾六歩     | 当持共  | 南側    | 一六間半  | 屋舖畑成 | 貳畝拾五歩  | 当持    |        |
|     | 後江八間 |       |         | 同    | 寺     | 御検地請  | 卜    | 心      |       |        |
|     | 此境   |       |         |      | 拾壹間半  | 此境    |      |        |       | 同      |
|     | 同側   | 一四間   | 中畑      | 貳拾四歩 | 当持共   |       |      |        |       | 人      |
|     | 六間   |       |         | 同    | 寺     | 同側    | 一六間  | 上畑     | 壹畝拾八歩 | 当持共    |
|     | 此境   |       |         |      | 八間    | 此境    |      |        |       | 妙音寺    |
|     | 同側   | 一壹間   | 下畑      | 五歩   | 当持    |       |      |        |       |        |
|     | 五間   |       |         | 西光寺  | 同側    | 一屋舗   | 表口六間 | 貳畝貳拾四歩 | 当持共   |        |
|     | 此境   |       |         |      | 後江拾四間 | 此境    |      |        |       | 同      |
|     | 南側   | 一六間   | 中畑      | 三畝歩  | 当持    |       |      |        |       | 寺      |
|     | 拾五間  |       |         | 西光寺  | 同側    | 一貳間   | 中畑   | 拾歩     | 当持共   |        |
|     | 此境   |       |         |      | 五間    | 此境    |      |        |       | 妙音寺    |
|     | 同側   | 一五間   | 中畑      | 壹畝拾歩 | 当持    |       |      |        |       |        |
|     | 八間   |       |         | 同    | 寺     | 同側    | 一壹間半 | 中畑     | 拾壹歩   | 御検地請   |
|     | 此境   |       |         |      | 七間    | 此境    |      |        |       | 当持共    |
|     | 間    | 口     | 貳拾三間    |      | 同側    | 一壹間半  | 中畑   | 五歩     | 当持共   |        |
|     | 合    | 町役目   | 拾軒      |      | 此境    |       |      |        |       | 同      |
|     | 反    | 歩     | 貳反五畝拾四歩 |      | 同側    | 一壹間半  | 中畑   | 五歩     | 当持共   |        |
|     | 内    |       |         |      | 三間    | 此境    |      |        |       | 同      |
|     | 上畑   | 四畝拾歩  |         |      | 同側    | 町役目壹軒 | 御検地請 | 善吉後家   | 当持    |        |
|     | 中畑   | 八畝拾七歩 |         |      | 一屋舗   | 表口四間  | 貳拾貳歩 |        |       | 町預り    |
|     | 下畑   | 五歩    |         |      | 後江五間半 |       |      |        |       |        |
|     | 下々畑  | 壹畝歩   |         |      |       |       |      |        |       |        |





鍛冶町

北側 御検地請 助左衛門

一六間 屋鋪畑成 壹畝貳拾四歩 当持

九間 吉 太

此境

〔朱巻〕  
文政十二丑年六月十七日、十左衛門後家とわろ幸右衛門跡吉太江

同側 御検地請 同 人

一七間半 屋鋪畑成 貳畝拾壹歩 当持

九間半 同 人

〔朱巻〕  
右同断

此境

北側 御検地請 覚兵衛

一三間 屋鋪畑成 貳拾九歩 当持

九間半 吉 太

此境

〔朱巻〕  
文政十二丑年六月十七日、十左衛門後家とわろ幸右衛門跡吉太江

同側 御検地請 惣兵衛

一三間半 屋鋪畑成 貳拾三歩 当持

六間半 同 人

此境

〔朱巻〕  
右同断

同側 御検地請 庄兵衛

一四間 屋鋪畑成 貳拾歩 当持

五間 同 人

此境

〔朱巻〕  
右同断

同側 御検地請 同 人

一四間 屋鋪畑成 壹畝貳歩 当持

五間 吉 助

此境

〔朱巻〕  
文政十二丑年六月十七日、十左衛門後家とわろ吉助江

北側 御検地請 伊左衛門

一式間 屋鋪畑成 拾九歩 当持

九間半 吉 助

此境

〔朱巻〕  
右同断

同側 御検地請 同 人

一式間 屋鋪畑成 拾九歩 当持

九間半 同 人

此境

〔朱巻〕  
右同断

同側 御検地請 伊左衛門

一式間半 屋鋪畑成 貳拾四歩 当持

九間半 同 人

此境

〔朱巻〕  
右同断

同側 町役目老軒 御検地請 熊之助

一屋鋪 表口三間半 壹畝九歩 当持

後江拾壹間 同 人

〔朱巻〕  
右同断

此境

同側 御検地請 伊兵衛

一三間 屋鋪畑成 壹畝三歩 当持

拾壹間 吉 助

此境

〔朱巻〕  
文政十二丑年六月十七日、十左衛門後家とわろ吉助江

同側 町役目老軒 御検地請 権四郎

一屋鋪 表口四間 壹畝拾六歩 当持

後江拾壹間半 同 人

此境

〔朱巻〕  
右同断

同側 御検地請 は る

一式間半 屋鋪畑成 貳拾八歩 当持

拾壹間 伊 三郎

〔朱巻〕  
文政十二丑年六月十七日、十左衛門後家とわろ伊八跡伊三郎江

此境

北側 御検地請 佐次兵衛

一四間半 屋鋪畑成 壹畝拾七歩 当持

拾間半 伊 八

此境

同側 町役目老軒 御検地請 新左衛門

一屋鋪 表口五間 壹畝貳拾五歩 当持

後江拾壹間 鉄 三郎

此境

北側 御検地請 吉兵衛

一三間半 屋鋪畑成 壹畝九歩 当持

拾壹間 仙 次郎

〔朱巻〕  
文政十二丑年六月十七日、十左衛門後家とわろ長左衛門跡仙次郎江

此境

北側 御検地請 四兵衛

|  |       |       |       |   |       |        |      |
|--|-------|-------|-------|---|-------|--------|------|
| 一五間半                                   | 屋鋪畑成  | 式畝六步  | 当持    | 同側                                      | 町役目老軒 | 御檢地請   | 市兵衛  |
| 拾貳間                                    |       |       | 仙次郎   | 一屋鋪                                     | 表口三間半 | 壺畝三步   | 当持   |
| 此境                                     |       |       |       | 後江九間半                                   |       |        | 元四郎  |
| 〔朱書〕<br>文政十二丑年六月十七日、十左衛門後家とわゝ長左衛門跡仙次郎江 |       |       |       |   |       |        |      |
| 同側                                     |       | 御檢地請  | 万法院   | 同側                                      |       | 御檢地請   | 宇兵衛  |
| 一四間半                                   | 屋鋪畑成  | 式畝五步  | 当持    | 一三間                                     | 屋鋪畑成  | 壺畝拾五步  | 当持   |
| 拾四間半                                   |       |       | 伊三郎   | 拾五間                                     |       |        | 仲右衛門 |
| 此境                                     |       |       |       | 此境                                      |       |        |      |
| 〔朱書〕<br>文政十二丑年六月十七日、十左衛門後家とわゝ伊八郎跡伊三郎江  |       |       |       |   |       |        |      |
| 同側                                     |       | 御檢地請  | 又兵衛   | 衛門江                                     |       |        |      |
| 一三間                                    | 屋鋪畑成  | 式拾壹步  | 当持    | 同側                                      |       | 御檢地請   | 同 人  |
| 七間                                     |       |       | 伊 八   | 一四間                                     | 屋鋪畑成  | 壺畝貳拾六步 | 当持   |
| 此境                                     |       |       |       | 拾四間                                     |       |        | 同 人  |
| 南側                                     | 町役目老軒 | 御檢地請  | 藤右衛門  | 此境                                      |       |        |      |
| 一屋鋪                                    | 表口五間  | 三畝步   | 当持    | 〔朱書〕<br>右同断                             |       |        |      |
| 後江拾八間                                  |       |       | 新兵衛   | 同側                                      |       | 御檢地請   | 喜左衛門 |
| 此境                                     |       |       |       | 一貳間                                     | 屋鋪畑成  | 壺畝貳步   | 当持   |
| 南側                                     | 町役目老軒 | 御檢地請  | 権兵衛   | 拾六間                                     |       |        | 同 人  |
| 一屋鋪                                    | 表口四間  | 壺畝拾八步 | 当持    | 此境                                      |       |        |      |
| 後江拾貳間                                  |       |       | 玄徳寺   | 〔朱書〕<br>右同断                             |       |        |      |
| 此境                                     |       |       |       | 同側                                      |       | 御檢地請   | 宇兵衛  |
| 同側                                     | 町役目老軒 | 御檢地請  | 三十郎   | 一三間                                     | 屋鋪畑成  | 壺畝拾五步  | 当持   |
| 一屋鋪                                    | 表口五間  | 三畝步   | 当持    | 拾五間                                     |       |        | 同 人  |
| 後江拾八間                                  |       |       | 常学院   | 〔朱書〕<br>右同断                             |       |        |      |
| 此境                                     |       |       |       | 此境                                      |       |        |      |
| 同側                                     |       | 御檢地請  | 庄 吉   | 南側                                      |       | 御檢地請   | 惣兵衛  |
| 一四間半                                   | 屋鋪畑成  | 式畝拾九步 | 当持    | 一貳間半                                    | 屋鋪畑成  | 壺畝步    | 当持   |
| 拾七間半                                   |       |       | 庄次郎   | 拾貳間                                     |       |        | 仲右衛門 |
| 此境                                     |       |       |       | 〔朱書〕<br>文政十二丑年六月十七日、十左衛門後家とわゝ長右衛門跡仲右衛門江 |       |        |      |
| 同側                                     |       | 御檢地請  | 弥次右衛門 | 此境                                      |       |        |      |
| 一四間                                    | 屋鋪畑成  | 式畝四步  | 当持    | 同側                                      |       | 御檢地請   | 佐兵衛  |
| 拾六間                                    |       |       | 同 人   | 一三間                                     | 屋鋪畑成  | 壺畝貳步   | 当持   |
| 此境                                     |       |       |       | 拾間半                                     |       |        | 同 人  |
| 〔朱書〕<br>右同断                            |       |       |       | 此境                                      |       |        |      |
| 同側                                     |       | 御檢地請  | 弥次兵衛  | 〔朱書〕<br>右同断                             |       |        |      |
| 一六間                                    | 屋鋪畑成  | 三畝六步  | 当持    | 同側                                      |       | 御檢地請   | 徳兵衛  |
| 拾六間                                    |       |       | 同 人   | 一三間                                     | 屋鋪畑成  | 壺畝三步   | 当持   |
| 此境                                     |       |       |       | 拾壹間                                     |       |        | 同 人  |
| 〔朱書〕<br>右同断                            |       |       |       | 此境                                      |       |        |      |

|                                 |       |        |        |                          |        |       |      |
|---------------------------------|-------|--------|--------|--------------------------|--------|-------|------|
| 右同斷                             | 同側    | 御檢地請   | 助左衛門   | 同側                       | 御檢地請   | 同     | 人    |
| 一三間                             | 屋鋪畑成  | 壹畝六歩   | 当持     | 同側                       | 一三間    | 屋鋪畑成  | 壹畝六歩 |
| 拾貳間                             |       |        | 同      | 人                        | 此境     |       |      |
| 右同斷                             | 同側    | 御檢地請   | 同      | 人                        | 同側     | 御檢地請  | 同    |
| 此境                              | 同側    | 御檢地請   | 德兵衛    | 同側                       | 一貳間    | 下々畑   | 八歩   |
| 南側                              | 一四間   | 屋鋪畑成   | 壹畝貳拾貳歩 | 当持                       | 四間     |       |      |
| 拾三間                             |       |        | 仲右衛門   | 同側                       | 此境     |       |      |
| 文政十二丑年六月十七日、十左衛門後家とわろ長右衛門跡仲右衛門江 |       |        |        | 同側                       | 一壹間半   | 下々畑   | 五歩   |
| 衛門江                             | 此境    |        |        | 三間                       |        |       |      |
| 同側                              | 町役目老軒 | 御檢地請   | 次郎兵衛   | 同側                       | 此境     |       |      |
| 一屋鋪                             | 表口三間  | 壹畝六歩   | 当持     | 一壹間                      | 下々畑    | 拾歩    | 御檢地請 |
| 後江拾貳間                           |       |        | 專念寺    | 拾間                       |        |       | 權兵衛  |
| 此境                              |       |        |        | 此境                       |        |       | 同    |
| 同側                              | 町役目老軒 | 御檢地請   | 三右衛門   | 同側                       | 一貳間    | 下々畑   | 拾貳歩  |
| 一屋鋪                             | 表口五間半 | 貳畝貳拾八歩 | 当持     | 一貳間                      | 下々畑    | 拾貳歩   | 当持   |
| 後江拾六間                           |       |        | 奥右衛門   | 六間                       |        |       | 同    |
| 此境                              |       |        |        | 此境                       |        |       |      |
| 南側                              | 御檢地請  | 地藏寺    |        | 同側                       | 御檢地請   | 同     | 人    |
| 一八間                             | 下々畑   | 三畝貳拾六歩 | 当持     | 一貳間                      | 下々畑    | 八歩    | 当持   |
| 拾四間半                            |       |        | 相運寺    | 四間                       |        |       | 同    |
| 此境                              |       |        |        | 此境                       |        |       |      |
| 同側                              | 御檢地請  | 三右衛門   |        | 間口                       | 三十八間半  |       |      |
| 一貳間                             | 下々畑   | 拾貳歩    | 当持     | 合                        | 町役目    | 九軒    |      |
| 六間                              |       |        | 奥右衛門   | 反歩                       | 六反四畝拾歩 |       |      |
| 此境                              |       |        |        | 内                        |        |       |      |
| 同側                              | 御檢地請  | 三右衛門   |        | 六畝貳拾八歩                   | 古畑     |       |      |
| 一貳間                             | 下々畑   | 拾歩     | 当持     | 三反九畝貳拾歩                  | 新畑     |       |      |
| 五間                              |       |        | 同      | 人                        |        |       |      |
| 此境                              |       |        |        | 田町                       |        |       |      |
| 同側                              | 御檢地請  | 同      | 人      | 北側                       | 御檢地請   | 万法院   |      |
| 一壹間                             | 下々畑   | 貳歩     | 当持     | 一貳間半                     | 屋鋪畑成   | 壹畝五歩  | 当持   |
| 貳間                              |       |        | 同      | 人                        | 拾四間    |       | 吉助   |
| 此境                              |       |        |        | 文政十二丑年六月十七日、十左衛門後家とわろ吉助江 |        |       |      |
| 南側                              | 御檢地請  | 三右衛門   |        | 此境                       |        |       |      |
| 一三間                             | 下々畑   | 拾五歩    | 当持     | 同側                       | 御檢地請   | 太兵衛   |      |
| 五間                              |       |        | 奥右衛門   | 一三間半                     | 屋鋪畑成   | 壹畝拾貳歩 | 当持   |
| 此境                              |       |        |        | 拾貳間                      |        |       | 同    |
| 右同斷                             |       |        |        | 同                        |        |       | 人    |





山之神町

同側 御検地請 仁兵衛

一三間半 屋鋪畑成 貳畝三步 当持 伊三郎

拾八間

文政十二丑年六月十七日、十左衛門後家とわろ伊八跡伊三郎江

此境

同側 御検地請 同 人

一四間 屋鋪畑成 壹畝貳步 当持 同 人

八間

此境

右同断

南側 御検地請 佐次右衛門

一五間 屋鋪畑成 壹畝拾五步 当持 伊三郎

九間

文政十二丑年六月十七日、十左衛門後家とわろ伊八跡伊三郎江

此境

同側 御検地請 市兵衛

一四間 下畑 拾六步 当持 同 人

四間

此境

右同断

同側 御検地請 広円寺

一八間 屋鋪畑成 四畝八步 当持 同 人

拾六間

此境

右同断

同側 御検地請 宇兵衛

一六間 下々畑 壹畝貳拾壹步 当持 熊次郎

八間半

文政十二丑年六月十七日、十左衛門後家とわろ熊次郎江

此境

南側 御検地請 か め

一八間 屋鋪畑成 三畝貳拾貳步 当持 権四郎

拾四間

文政十二丑年六月十七日、十左衛門後家とわろ川原田裏町権四郎江

此境

同側 御検地請 清兵衛

一七間 屋鋪畑成 三畝八步 当持 熊次郎

拾四間

文政十二丑年六月十七日、十左衛門後家とわろ熊次郎江  
此境

同側 御検地請 勘兵衛

一壹間 下畑 五步 当持 同 人

五間

此境

右同断

同側 御検地請 清兵衛

一四間 屋鋪畑成 貳拾六步 当持 同 人

六間半

右同断

南側 町役目壹軒 御検地請 六右衛門

一屋鋪 表口四間 貳拾四步 当持 町預り

後江六間

此境

同側 御検地請 六右衛門

一六間半 下畑 壹畝貳拾貳步 当持 熊次郎

八間

此境

文政十二丑年六月十七日、十左衛門後家とわろ熊次郎江

南側 町役目壹軒 御検地請 市兵衛

一屋鋪 表口六間半 壹畝貳拾九步 当持 町預り

後江九間

此境

南側 町役目壹軒 御検地請 忠兵衛後家

一屋鋪 表口七間 壹畝貳拾六步 当持 町預り

後江八間

此境

同側 御検地請 勘兵衛

一六間 屋鋪畑成 壹畝九步 当持 熊次郎

六間半

此境

文政十二丑年六月十七日、十左衛門後家とわろ熊次郎江

同側 御検地請 清兵衛

一壹間 下畑 貳步 当持ち 同 人

貳間

右同断

此境

南側 御検地請 清兵衛

|  |             |      |                                       |             |      |
|--|-------------|------|---------------------------------------|-------------|------|
| 一棧間                                    | 下々畑 貳歩      | 当持   | 一貳間                                   | 屋鋪畑成 拾歩     | 仲右衛門 |
| 貳間                                     |             | 熊次郎  | 五間                                    | 此境          |      |
| 此境                                     |             |      | 同側高外                                  |             | 当持   |
| 〔実書〕<br>文政十二丑年六月十七日、十左衛門後家とわゐる熊次郎江     |             |      | 一三間                                   | 屋鋪畑成 拾貳歩    | 同人   |
| 同側                                     | 御検地請 六 兵衛   |      | 四間                                    | 此境          |      |
| 一五間                                    | 下畑 貳拾五歩     | 当持   | 間 口 拾七間半                              |             |      |
| 五間                                     | 同人          |      | 合 町役目 三軒                              |             |      |
| 此境                                     |             |      | 反歩 三反七畝拾三歩                            |             |      |
| 〔実書〕<br>右同断                            |             |      | 内                                     |             |      |
| 同側                                     | 御検地請 長 兵衛   |      | 五畝九歩                                  | 古畑          |      |
| 一八間                                    | 屋鋪畑成 貳畝拾貳歩  | 当持   | 貳反七畝拾五歩                               | 新畑          |      |
| 九間                                     |             | 仲右衛門 |                                       |             |      |
| 此境                                     |             |      |                                       |             |      |
| 同側                                     | 御検地請 常宝院    |      |                                       |             |      |
| 一貳間                                    | 下々畑 六歩      | 当持   | 鍛冶沢                                   |             |      |
| 三間                                     |             | 常学院  | かち沢                                   | 御検地請 権兵衛    |      |
| 此境                                     |             |      | 一七間                                   | 下畑 壹畝貳拾六歩   | 当持   |
| 南側                                     | 御検地請 多十郎後家  |      | 八間                                    | 此境          | 専念寺  |
| 一三間半                                   | 屋鋪畑成 壹畝拾貳歩  | 当持   | 同所                                    | 御検地請 玄光院    |      |
| 拾貳間                                    |             | 熊次郎  | 一貳間                                   | 下畑 拾壹歩      | 当持   |
| 〔実書〕<br>文政十二丑年六月十七日、十左衛門後家とわゐる熊次郎江     |             |      | 五間半                                   |             | 市左衛門 |
| 此境                                     |             |      | 〔実書〕<br>文政十二丑年六月十七日、十左衛門後家とわゐる市左衛門江   |             |      |
| 同側字炭灰谷                                 | 御検地之節上ヶ屋敷   |      | 此境                                    |             |      |
| 一貳間                                    | 屋鋪畑成 拾歩     | 当持   | 同所                                    | 御検地請 権兵衛    |      |
| 五間                                     |             | 常学院  | 一棧間                                   | 下畑 三歩       | 当持   |
| 此境                                     |             |      | 三間                                    | 此境          | 専念寺  |
| 同側右同断                                  | 御検地之節上ヶ屋敷   |      |                                       |             |      |
| 一三間                                    | 屋鋪畑成 拾貳歩    | 当持   | 同所                                    | 御検地請 弥市右衛門  |      |
| 四間                                     |             | 同 院  | 一五間                                   | 下畑 三歩       | 当持   |
| 此境                                     |             |      | 拾五間                                   |             | 仲右衛門 |
| 同側右同断                                  | 御検地之節右同断    |      | 此境                                    |             |      |
| 一三間                                    | 屋鋪畑成 拾貳歩    | 当持   | 〔実書〕<br>文政十二丑年六月十七日、十左衛門後家とわゐる長右衛門跡仲右 |             |      |
| 四間                                     |             | 同 院  | 衛門江                                   |             |      |
| 此境                                     |             |      | 字山之内                                  | 御検地請 喜左衛門後家 |      |
| 南側                                     | 御検地請 本典寺    |      | 一四間                                   | 上畑 貳拾四歩     | 当持   |
| 一八間                                    | 屋鋪畑成 三畝貳拾貳歩 | 当持   | 六間                                    | 此境          | 専念寺  |
| 拾四間                                    |             | 吉 太  |                                       |             |      |
| 此境                                     |             |      | 同所                                    | 御検地請 五右衛門   |      |
| 〔実書〕<br>文政十二丑年六月十七日、十左衛門後家とわゐる辛右衛門跡吉太江 |             |      | 一五間                                   | 上畑 壹畝歩      | 当持   |
| 同側高外                                   | 当持          |      |                                       |             |      |



[illegible]



|   |       |        |  |      |        |
|---|-------|--------|--|------|--------|
| 同側  | 御檢地請  | 伝兵衛    | 後江八間   | 同    | 人      |
| 一五間半                                      | 屋鋪畑成  | 忝畝貳拾五歩 | 此境   | 同    | 人      |
| 拾間  |       | 当持     | 北側   | 御檢地請 | ひん     |
| 此境  |       | 同      | 一三間  | 屋鋪畑成 | 貳拾歩    |
| 右同断 <sup>(朱巻)</sup>                       |       | 人      | 六間半  | 当持   | さき     |
| 同側  | 御檢地請  | 同      | 此境   | 同    | 人      |
| 一三間半                                      | 屋鋪畑成  | 貳拾八歩   | 文政十二丑年六月十七日、十左衛門後家とわる善兵衛跡さき江 <sup>(朱巻)</sup> |      |        |
| 八間  |       | 当持     | 同側   | 御檢地請 | 長左衛門   |
| 此境  |       | 同      | 一四間半   | 屋鋪畑成 | 忝畝貳歩   |
| 右同断 <sup>(朱巻)</sup>                       |       | 人      | 七間   | 同    | 人      |
| 同側  | 御檢地請  | 同      | 此境   | 同    | 人      |
| 一三間                                       | 屋鋪畑成  | 忝畝歩    | 右同断 <sup>(朱巻)</sup>                          |      |        |
| 拾間  |       | 当持     | 同側   | 御檢地請 | 又兵衛    |
| 右同断 <sup>(朱巻)</sup>                       |       | 人      | 一四間  | 屋鋪畑成 | 貳拾六歩   |
| 此境  |       | 同      | 六間半  | 同    | 人      |
| 南側  | 御檢地請  | 半右衛門   | 此境   | 同    | 人      |
| 一五間                                       | 屋鋪畑成  | 忝畝貳拾三步 | 右同断 <sup>(朱巻)</sup>                          |      |        |
| 拾間半                                       |       | 当持     | 同側   | 御檢地請 | 同      |
| 文政十二丑年六月十七日、十左衛門後家とわる熊次郎江 <sup>(朱巻)</sup> |       | 熊次郎    | 一屋鋪  | 表口四間 | 忝畝貳拾三步 |
| 此境  |       | 同      | 後江八間   | 当持   | 鉄三郎    |
| 同側  | 御檢地請  | 広円寺    | 此境   | 御檢地請 | 市学院    |
| 一五間                                       | 屋鋪畑成  | 貳畝貳拾歩  | 同側   | 一五間  | 屋鋪畑成   |
| 拾六間                                       |       | 当持     | 八間   | 屋鋪畑成 | 忝畝拾歩   |
| 右同断 <sup>(朱巻)</sup>                       |       | 同      | 此境   | 同    | 人      |
| 同側  | 御檢地請  | 同      | 文政十二丑年六月十七日、十左衛門後家とわるさき江 <sup>(朱巻)</sup>     |      |        |
| 一武間                                       | 屋鋪畑成  | 忝畝貳歩   | 同側   | 一三間  | 屋鋪畑成   |
| 拾六間                                       |       | 当持     | 九間   | 屋鋪畑成 | 貳拾七歩   |
| 此境  |       | 同      | 此境   | 同    | 人      |
| 右同断 <sup>(朱巻)</sup>                       |       | 人      | 右同断 <sup>(朱巻)</sup>                          |      |        |
| 同側  | 御檢地請  | 同      | 同側   | 御檢地請 | 甚十郎    |
| 一武間                                       | 屋鋪畑成  | 忝畝貳歩   | 一武間半   | 屋鋪畑成 | 貳拾五歩   |
| 拾六間                                       |       | 当持     | 拾間   | 同    | 人      |
| 北側  | 町役目忝軒 | 御檢地請   | 此境   | 同    | 人      |
| 一屋鋪                                       | 表口七間  | 忝畝貳拾三步 | 右同断 <sup>(朱巻)</sup>                          |      |        |
| 後江七間半                                     |       | 当持     | 同側   | 御檢地請 | 長三郎    |
| 此境  |       | 安岡石見   | 一五間半   | 屋鋪畑成 | 貳畝忝歩   |
| 同側  | 町役目忝軒 | 御檢地請   | 拾忝間  | 同    | 人      |
| 一屋鋪                                       | 表口三間半 | 貳拾八歩   |  |      |        |



|                                      |      |      |     |       |      |           |      |
|--------------------------------------|------|------|-----|-------|------|-----------|------|
| 〔金書〕<br>文政十二丑年六月十七日、十左衛門後家とわろ善兵衛跡さき江 |      |      |     | 同所    |      |           |      |
| 同側                                   | 御檢地請 | 伝兵衛  | 一貳間 | 下々畑   | 六歩   | 御檢地請      | 孫兵衛  |
| 一八間                                  | 屋舖畑成 | 壹畝貳歩 | 当持  | 同     | 同    | 同         | 人    |
| 四間                                   | 同    | 同    | 同   | 同所    | 同    | 御檢地請      | 同    |
| 〔金書〕<br>右同断                          | 御檢地請 | 佐兵衛  | 一三間 | 下々畑   | 拾貳歩  | 当持        | 人    |
| 同側                                   | 屋舖畑成 | 拾貳歩  | 当持  | 同     | 同    | 同         | 人    |
| 一貳間                                  | 同    | 同    | 同   | 字山之神上 | 一貳間  | 中畑        | 拾歩   |
| 六間                                   | 同    | 同    | 同   | 五間    | 同    | 代         | 藏    |
| 〔金書〕<br>右同断                          | 御檢地請 | 三十郎  | 同側  | 南側    | 一四間  | 屋舖畑成      | 拾貳歩  |
| 同側                                   | 屋舖畑成 | 貳拾八歩 | 当持  | 同     | 三間   | 同         | 三十郎  |
| 一四間                                  | 同    | 同    | 同   | 同側    | 一貳間半 | 屋舖畑成      | 拾五歩  |
| 七間                                   | 同    | 同    | 同   | 六間    | 同    | 同         | 人    |
| 〔金書〕<br>右同断                          | 御檢地請 | 半右衛門 | 同側  | 南側    | 一三間  | 屋舖畑成      | 拾五歩  |
| 同側                                   | 下畑   | 貳拾四歩 | 当持  | 同     | 五間   | 御檢地之節上ヶ屋敷 | 三十郎  |
| 六間                                   | 同    | 称名寺  | 同   | 同側    | 一三間  | 屋舖畑成      | 拾五歩  |
| 丹波平                                  | 御檢地請 | 同    | 同   | 同     | 同    | 同         | 同    |
| 一三間                                  | 下々畑  | 拾五歩  | 当持  | 同側    | 一三間  | 屋舖畑成      | 貳拾壹歩 |
| 五間                                   | 同    | 同    | 同   | 同     | 七間   | 御檢地之節右同断  | 同    |
| 同所                                   | 御檢地請 | 鳥之助  | 同   | 同側    | 一三間  | 屋舖畑成      | 貳拾壹歩 |
| 一三間半                                 | 下畑   | 貳拾壹歩 | 当持  | 同     | 一貳間  | 屋舖畑成      | 拾歩   |
| 六間                                   | 同    | 代    | 藏   | 同側    | 五間   | 御檢地之節上ヶ屋敷 | 三十郎  |
| 同所                                   | 御檢地請 | 同    | 人   | 同     | 一四間  | 屋舖畑成      | 貳拾四歩 |
| 一四間                                  | 下々畑  | 貳拾八歩 | 当持  | 同側    | 六間   | 御檢地之節右同断  | 同    |
| 七間                                   | 同    | 同    | 同   | 同     | 一四間  | 屋舖畑成      | 貳拾四歩 |
| 同所                                   | 御檢地請 | 佐兵衛  | 同側  | 同     | 七間   | 屋舖畑成      | 拾壹歩  |
| 一三間                                  | 下々畑  | 貳拾八歩 | 当持  | 同     | 一三間  | 屋舖畑成      | 拾壹歩  |
| 八間                                   | 同    | 伊    | 八   | 同側    | 一三間  | 屋舖畑成      | 拾壹歩  |
| 同所                                   | 御檢地請 | 佐兵衛  | 同側  | 同     | 一三間  | 屋舖畑成      | 拾壹歩  |
| 一貳間                                  | 下々畑  | 六歩   | 当持  | 同     | 一三間  | 屋舖畑成      | 拾壹歩  |
| 三間                                   | 同    | 伊    | 八   | 同側    | 一三間  | 屋舖畑成      | 拾壹歩  |
| 同所                                   | 御檢地請 | 同    | 人   | 同     | 一三間  | 屋舖畑成      | 拾壹歩  |
| 一三間                                  | 下々畑  | 五歩   | 当持  | 同     | 一三間  | 屋舖畑成      | 拾壹歩  |
| 五間                                   | 同    | 同    | 人   | 同     | 一三間  | 屋舖畑成      | 拾壹歩  |
| 同所                                   | 御檢地請 | 源太郎  | 同   | 同     | 一三間  | 屋舖畑成      | 拾壹歩  |
| 一三間                                  | 下々畑  | 貳拾四歩 | 当持  | 同     | 一三間  | 屋舖畑成      | 拾壹歩  |
| 八間                                   | 同    | 奥右衛門 | 同   | 同     | 一三間  | 屋舖畑成      | 拾壹歩  |
| 同所                                   | 御檢地請 | 半右衛門 | 同   | 同     | 一三間  | 屋舖畑成      | 拾壹歩  |
| 一五間                                  | 下々畑  | 壹畝五歩 | 当持  | 同     | 一三間  | 屋舖畑成      | 拾壹歩  |
| 七間                                   | 同    | 奥右衛門 | 同   | 同     | 一三間  | 屋舖畑成      | 拾壹歩  |



弥左衛門町

|                                    |      |       |      |      |       |     |
|------------------------------------|------|-------|------|------|-------|-----|
| 北側                                 | 御検地請 | 半兵衛   | 同側   | 拾間半  | 同     | 人   |
| 一三間半                               | 屋鋪畑成 | 式畝三步  | 同側   | 一五間  | 屋鋪畑成  | 惣兵衛 |
| 拾八間                                |      | 当持    | 一五間  | 屋鋪畑成 | 惣畝拾八歩 | 当持  |
|                                    |      | 熊次郎   | 九間半  |      |       | 同   |
| 文政十二丑年六月十七日、<br>十左衛門後家とわろ熊次郎江      |      |       | 右同断  |      |       | 人   |
| 同側                                 | 御検地請 | 甚右衛門  | 同側   | 御検地請 | 市郎兵衛  |     |
| 一三間                                | 屋鋪畑成 | 式拾七歩  | 一四間  | 屋鋪畑成 | 式拾歩   | 当持  |
| 七間                                 |      | 当持    | 五間   |      |       | 同   |
| 右同断                                |      | 同     | 右同断  |      |       | 人   |
| 北側                                 | 御検地請 | 弥五兵衛  | 同側   | 御検地請 | 甚十郎   |     |
| 一三間半                               | 屋鋪畑成 | 式拾七歩  | 一七間半 | 屋鋪畑成 | 拾五歩   | 当持  |
| 六間                                 |      | 当持    | 拾間   |      |       | 同   |
| 文政十二丑年六月十七日、<br>十左衛門後家とわろ熊次郎江      |      | 熊次郎   | 右同断  |      |       | 人   |
| 同側                                 | 御検地請 | 佐之助   | 同側   | 御検地請 | 伝十郎   |     |
| 一三間半                               | 屋鋪畑成 | 壹畝三步  | 一五間  | 屋鋪畑成 | 式畝拾歩  | 当持  |
| 九間半                                |      | 当持    | 拾四間  |      |       | 同   |
| 右同断                                |      | 同     | 右同断  |      |       | 人   |
| 同側                                 | 御検地請 | 三右衛門  | 合    | 反歩   | 式反七歩  |     |
| 一六間                                | 屋鋪畑成 | 式拾四歩  |      |      |       |     |
| 四間                                 |      | 当持    |      |      |       |     |
| 右同断                                |      | 同     |      |      |       |     |
| 同側                                 | 御検地請 | 吉兵衛   | 北側   | 御検地請 | 惣兵衛   |     |
| 一五間半                               | 屋鋪畑成 | 式拾式歩  | 一四間  | 屋鋪畑成 | 惣畝拾八歩 | 当持  |
| 九間半                                |      | 当持    | 拾式間  |      |       | 法花寺 |
| 右同断                                |      | 同     | 同側   | 御検地請 | 伊兵衛   |     |
| 同側                                 | 御検地請 | 長兵衛   | 一七間半 | 屋鋪畑成 | 拾五歩   | 当持  |
| 一七間                                | 屋鋪畑成 | 拾四歩   | 六間   |      |       | 鉄三郎 |
| 七間                                 |      | 当持    | 北側   | 御検地請 | 徳兵衛   |     |
| 右同断                                |      | 同     | 一七間  | 屋鋪畑成 | 式拾四歩  | 当持  |
| 南側                                 | 御検地請 | 茂兵衛   | 拾式間  |      |       | 鉄三郎 |
| 一六間                                | 屋鋪畑成 | 四畝歩   | 北側   | 御検地請 | 同     | 人   |
| 式拾間                                |      | 当持    | 一七間半 | 屋鋪畑成 | 拾六歩   | 当持  |
| 文政十二丑年六月十七日、<br>十左衛門後家とわろ川原田裏町権四郎江 |      | 権四郎   | 拾間半  |      |       | さき  |
| 同側                                 | 御検地請 | 甚右衛門  | 北側   | 御検地請 | 助右衛門  |     |
| 一四間半                               | 屋鋪畑成 | 壹畝式歩  | 一七間半 | 屋鋪畑成 | 惣畝歩   | 当持  |
| 七間                                 |      | 当持    | 拾式間  |      |       | 法花寺 |
| 文政十二丑年六月十七日、<br>十左衛門後家とわろ川原田裏町権四郎江 |      | 権四郎   | 南側   | 御検地請 | 同     | 人   |
| 同側                                 | 御検地請 | 茂兵衛   | 一五間  | 屋鋪畑成 | 式畝歩   | 当持  |
| 一七間                                | 屋鋪畑成 | 式畝拾四歩 | 拾式間  |      |       | 同   |
|                                    |      | 当持    | 同側   | 御検地請 | 徳兵衛   |     |

本町

|  |           |       |     |
|--|-----------|-------|-----|
| 一三間  | 屋鋪畑成      | 忝畝式歩  | 当持  |
| 拾間半  |           |       | 三十郎 |
| 同側   | 御検地請      | 長左衛門  |     |
| 一式間半   | 屋鋪畑成      | 忝畝忝歩  | 当持  |
| 拾式間半   |           | 鉄三郎   |     |
| 南側   | 御検地請      | 長兵衛   |     |
| 一四間半   | 屋鋪畑成      | 忝畝拾七歩 | 当持  |
| 拾間半  |           | 法花寺   |     |
| 同側   | 御検地請      | ま さ   |     |
| 一四間  | 屋鋪畑成      | 拾六歩   | 当持  |
| 四間   |           | 三之助   |     |
| 文政十二 <sup>(朱書)</sup> 年六月十七日、十左衛門後家とわろ三左衛門事三之助江 |           |       |     |
| 同側   | 御検地請      | 吉右衛門  |     |
| 一式間半   | 屋鋪畑成      | 式拾忝歩  | 当持  |
| 八間半  |           | 同 人   |     |
| 右同断 <sup>(朱書)</sup>                            |           |       |     |
| 同側   | 御検地請      | 源右衛門  |     |
| 一拾間  | 屋鋪畑成      | 四畝拾五歩 | 当持  |
| 拾三間半   |           | 同 人   |     |
| 右同断 <sup>(朱書)</sup>                            |           |       |     |
| 南側   | 御検地請      | 同 人   |     |
| 一七間  | 下畑        | 式畝三步  | 当持  |
| 九間   |           | 同 人   |     |
| 右同断 <sup>(朱書)</sup>                            |           |       |     |
| 同側   | 御検地請      | 同 人   |     |
| 一八間  | 下畑        | 式畝式拾歩 | 当持  |
| 拾間   |           | 同 人   |     |
| 右同断 <sup>(朱書)</sup>                            |           |       |     |
| 同側   | 御検地請      | 源右衛門  |     |
| 一四間  | 屋鋪畑成      | 忝畝六歩  | 当持  |
| 九間   |           | 三十郎   |     |
| 文政十二 <sup>(朱書)</sup> 年六月十七日、十左衛門後家とわろ三左衛門事三千郎江 |           |       |     |
| 同側   | 御検地請      | 三十郎   |     |
| 一式間  | 屋鋪畑成      | 拾式歩   | 当持  |
| 六間   |           | 同 人   |     |
| 右同断 <sup>(朱書)</sup>                            |           |       |     |
| 同側   | 御検地之節上ヶ屋敷 |       |     |
| 一式間  | 屋鋪畑成      | 式拾歩   | 当持  |
| 拾間   |           | 竹次郎   |     |
| 同側   | 御検地之節上ヶ屋敷 |       |     |

|  |                  |        |    |
|--|------------------|--------|----|
| 一八間  | 屋鋪畑成             | 式畝八歩   | 当持 |
| 八間半  |                  | 同 人    |    |
| 同側   | 御検地之節右同断         |        |    |
| 一式間  | 屋鋪畑成             | 七歩     | 当持 |
| 三間半  |                  | 鉄三郎    |    |
| 同側   | 御検地之節右同断         |        |    |
| 一八間  | 屋鋪畑成             | 三畝式拾式歩 | 当持 |
| 拾四間  |                  | 同 人    |    |
| 南側   | 御検地之節上ヶ屋敷        |        |    |
| 一六間  | 屋鋪畑成             | 式畝拾式歩  | 当持 |
| 拾式間  |                  | 三十郎    |    |
| 文政十二 <sup>(朱書)</sup> 年六月十七日、十左衛門後家とわろ三左衛門事三千郎江 |                  |        |    |
| 同側   | 御検地之節右同断         |        |    |
| 一七間  | 屋鋪畑成             | 三畝拾式歩  | 当持 |
| 拾四間半   |                  | 同 人    |    |
| 右同断 <sup>(朱書)</sup>                            |                  |        |    |
| 合 反歩   | 三反四畝式拾七歩         |        |    |
| 間口   | 四百九拾六間半          |        |    |
| 惣寄 軒役  | 百式拾軒             |        |    |
| 反歩   | 五町四反八畝拾七歩        |        |    |
| 安政五年十月   |                  |        |    |
| 名主   | 鉄三郎 <sup>⑨</sup> |        |    |
| 史料一四   |                  |        |    |
| 天和元年   |                  |        |    |
| 一 鈴木三郎九郎家来柳川儀右衛門と云もの〔中略〕此節町見をなしたる里数左の如し        |                  |        |    |
| 〔中略〕   |                  |        |    |
| 一同所（大門）より上相川番所迄二十三町拾壹軒高サ六拾壹丈一尺六寸四分             |                  |        |    |
| 一羽田町より上相川番所迄高サ七拾貳丈八尺五寸壹分                       |                  |        |    |
| 〔中略〕   |                  |        |    |
| 一六拾枚番所より甚五釜ノ口迄三町壹間三尺                           |                  |        |    |
| 一同所より孫兵衛釜ノ口迄四町三拾八間壹尺壹寸                         |                  |        |    |
| 一同所より雲子釜ノ口迄六町三拾八間壹尺壹寸                          |                  |        |    |
| 〔中略〕   |                  |        |    |

一 上相川番所より金北山へ三里貳拾壹町

一同所より和泉へ三里三拾町

〔後略〕

〔『佐渡年代記』上巻〕

## 史料一五

寛保三癸亥年

一 九月中町方役へ申渡相川町筋の間数相改左の如し

同所〔御役所〕より六拾枚口番所迄間数 拾八町五拾

三間餘

同所〔御役所〕より上相川番所迄間数 貳拾貳町六間

餘

〔『佐渡年代記』上巻〕

※同様の記述が『佐渡国略記』にあり

## 史料一六

〔正保二年〕酉年六月晦日、小床屋ニ而者筋金山吹銀脇江

散候儀無心元候間、町床屋相止慥成者五六人ニ申付、忝ケ

所ニて為吹毎日吹申候、金銀帳面ニ記、月切ニ御勘定所江

差出シ、床屋ニ者扶持人式人横目申付可然由、尤後藤銀ハ

極印座床屋ニ而吹候得者、此度公儀床上後藤銀為吹被中間

敷由、勿論床屋役茂前々之通り相勤候様ニ江戸へ被仰遣

床主

浅岡善兵衛

松木長右衛門

山田次左衛門

柏原善左衛門

此節大床屋六件、吹分床屋八軒、小床屋五拾四軒、何連

茂御役銀忝ケ月ニ大床屋忝ケ軒ニ付八拾目、小床屋同四拾目、

吹分床屋同三拾五匁

〔『佐渡国略記』上巻〕

## 史料一七

〔享保八年〕卯、諸買石銘々吹立候灰吹銀、買石之内床屋

六軒ニ御定役人立合ニ而吹立可申由、其後享保十巳五月よ

り相川三ヶ所寄床御立、諸買石銀山ニ而値入不仕候安鏈御

直粉成ニ被成候、則粉成所左ニ記、此節之諸買石人別者別

冊買石名寄帳ニ記上爰ニ記ヌ

一、床屋六軒

鍛冶町買石

坂下買石

三右衛門

藤四郎

大工町買石

忝町目買石

伊兵衛

八兵衛

夕白町買石

同浜町銅床買石

次郎右衛門

伊右衛門

坂町東側忠右衛門持分享保九辰五月御買上

粉成所役

一、鏈粉成所忝ケ所 面五間半

橋本権平

後へ拾四間 井上茂兵衛

坂町東側源右衛門市右衛門持分享保十巳四月同十五戌九月両度御買上

一、寄床屋忝ケ所 面七間半 後へ拾四間半

大床屋町東側鉄三郎持分享保十巳三月御買上

一、同〔寄床屋〕忝ケ所 面九間 後江貳拾三間

茶屋町太郎兵衛長喜持分享保十巳三月御買上

一、同〔寄床屋〕忝ケ所 面拾間半 後江六間

此床屋享保十九寅四月五郎右衛門町江引、右坂町、大床屋

町、茶屋町、巳三月十一日ニ被仰付、四月十一日より金銀

吹立申候

〔『佐渡国略記』上巻〕

## 史料一八

〔享保九年八月〕同廿五日、茶屋町市平上ヶ屋敷表四間後

江七間之内、表忝間半後江七間法花寺浦道濃水ニ而痛候間、

御頼可被下由法花寺願ニ付被仰付

〔『佐渡国略記』上巻〕

## 史料一九

宝曆九己卯年

一 金銀山鏈石粉成吹立をなす勝場床屋と云所相川町々の

内所々に散在し不締たるにより去年十二月石谷備後守伺の

上御役所内空地六百五拾坪餘の所へ引移し吹所小判所とも

一曲輪に構たきよしを伺ひし處同年二月伺の通りたるへき

旨御沙汰により同廿六日より普請に取掛る是よりして一曲

輪の内を寄勝場と唱ふ

〔『佐渡年代記』上巻〕

## 史料二〇

〔延宝五年〕当巳十一月七日、分床屋上相川三郎兵衛ニ被

仰付、十二月朔日金銀吹立申候得共、諸買石致難儀候故

二軒ニ罷成候、其節江戸より之御状、家之儀者清左衛門床

屋すくニ可申付由、少々痛申所普請出来次第為吹可申候

〔『佐渡国略記』上巻〕

## 史料二一

〔『佐渡国誌資料集』巻二〕

年不詳〔宝曆以後〕相川町々屋敷・畑反別集計〔巻二〕

町屋敷

畑

山神町

一畝十二歩

五畝九歩

鍛冶沢

三段三畝一步

一段六畝十三歩

鍛冶町

五段七畝五歩

七畝五歩

田町

一段八畝廿七歩

二畝三歩

弥左衛門町

二段七歩

|        |         |        |
|--------|---------|--------|
| 九郎左衛門町 | 六段五畝二歩  | 廿八歩    |
| 同裏町    | 一段一畝五歩  | 七畝歩    |
| 上床屋町   | 四段五畝一歩  | 三歩     |
| 外記町    | 九畝廿六歩   | 一畝廿四歩  |
| 番屋町    | 一段二畝十五歩 |        |
| 本町     | 三反二畝廿四歩 | 二畝三歩   |
| 小右衛門町  | 三反八畝三歩  |        |
| 上相川町   | 四反五畝廿六歩 |        |
| 柄杓町    | 一反一畝十二歩 | 一反四畝二歩 |
| 茶屋町    | 二反四畝十七歩 | 五畝一歩   |
| 奈良町    | 二反二畝廿五歩 | 五畝廿一歩  |

以上上相川

〔後略〕

〔『佐渡近世・近代資料集―岩本文庫―』下〕

## B 2 遊女町の成立

### 史料二二

相川遊女町之事 一、慶長年中小六町ニ遊女有之元和ノ此上相川柄杓町ニ遊女出来両所ニテ轡ノ数三拾人壹軒ニ遊女三四拾人程宛召抱惣高千二百人余有之太夫花代一夜五匁宛並遊女ハ直段高下有扱又銀山繁盛之節ニテ他国ヨリ山稼致者大勢来リ着類洗濯等ニ差支候故聞及又々他国ヨリ女数多来ル壹人ノ代銀貳百目位ヨリ四百目迄ニ買此内ニ耳ニくわんノ付タル女モ有此者ハ主人ノ持雇女ト云壹町ニ五人七人或ハ拾人式拾人別テ下通り坂下町ト三丁目ヲ水町ト云雇女ノ役銀壹ヶ月ニ壹人ニ付壹匁宛遊女之内太夫者役銀五匁並遊女ハ花代ニ准シ相納扱又元和未寛永ノ比山崎町ニ遊女出来殊外繁盛ニテ小六町柄杓町遊女段々減シ尤慶安万治ノ比迄少々ハ有之勿論町々雇女モ減シ山先町次第第二繁盛罷成正保四亥年迄此所ニモ遊女之外雇女モ有之寛文五巳年町々之雇女之内宜女ハ山先町江引取遊女に成残ハ御家中並町々江奉公ニ出ル正保元申二月町々雇女之數百四拾九人勿論其節山先町ノ遊女モ減シ太夫ノ數四拾式人其後年々増減有之其節ノ山先町主人並太夫の名所左ニ記ス あまつ夜見世の事 ○山先町ノ者享保二酉年水金町江引越候件ハ略記九ノ卷ニ記ス ○小六町ニ道伝ト云轡有遊女モ大勢抱身上モ宜居屋敷之内座敷モ数多有坪は大キ成山ヲ築泉水ヲ穿是ニ橋ヲ掛向ニ茶屋ヲ立此築山ノ形地天和、貞享ノ比迄有之道伝或時伊勢參宮致候処故有而伊勢路ヨリ引帰則右持參之金子ニテ下寺町右坂ヲ寄進ス

山先町太夫並主人名前 正保三戌六月

金作・龍立・伏見・一鶯 主加賀平兵衛こわた・あさじ・たね・三笠・とら・長津・小藤・りん・主越後屋嘉左衛門小ぎん・左馬助・早雲・馬間 主外山与八郎 石州・小垣 主外山次郎七 み屋・つる 主越後九郎兵衛 成身 主三川十右衛門 ろく・くゆ・かめ鶴 主意仙 長門・紅葉 主外山伝次郎 長くら・尾山・たんか・くに 主伊勢三郎右衛門 いち・ふじ・はなみ 主佐渡伝十郎 小太夫・數馬・吉野 主佐渡甚右衛門 せん 主佐渡五郎助 まん・まき・はる 主越後徳右衛門 日向・伊折 主大坂庄右衛門 女合四拾式人 主合拾四人

〔『佐渡故実略記』『佐渡国略記』上巻〕

### 史料二三

右御支配之節、銀山大盛ニ付此節越前孤カブリ出羽庄内ヨリ駄賃持大勢来リ北沢ニ住居ス

慶長十九甲寅年

### 史料二四

〔『佐渡故実略記』『佐渡国略記』上巻〕

〔承応三年〕午十二月廿七日、上相川九郎左衛門町熊野比丘尼清音尼死去、法号観宝清音大姉、此二代清宝寛永三寅年当国江来ル

〔『佐渡国略記』『佐渡国略記』上巻〕

### 史料二五

一、伝説に上相川柄杓町と申所に以前は比丘尼数多居候て相川中勸進等致し、内々は売女同前の義にて柄杓役と申を公納致し、其後山崎町へ引移り、当時の会津町 此時は並の売女を抱へ、山崎役と申を公納致し、其後享保の始水金町へ引移候段申伝候処、古来の書物を見申候へば伝説の相違も御座候。慶長十八丑年の書物に銀十六貫八百四十目余山崎ひさく役と有之。夫より元和元卯年迄年々ひさく役相見え候。元和二辰年より山崎町役と名目改り夫より年々如此有之候。是を以て相察候処、慶長年中より元和元卯年迄は山先町にて比丘尼を抱へ翌辰年より上相川柄杓町へ引移り其跡山先町にては売女を抱え御役差出候事と相見え申候。其証は明暦二申年三月の宗門改上相川九郎左衛門町並後町の帳面に、熊野比丘尼三十人有之此内生国分け伊勢十四人、遠江一人、伊賀七人、佐渡八人は等の趣に御座候。此時節は柄杓町には一人も見え不申候へ共、上相川の内隣町にて御座候。如此、往古は僧尼遊民の類迄他国より多く入込居申候。享保の中頃迄も勸進小比丘尼町々を相廻り近年迄も

老尼一兩人も死残候者有之候処、當時は絶果申候。但道心尼は當時も多く有之候。是等も古今転変の風俗に御座候故書記申候。

〔佐渡四民風俗〕『佐渡叢書』十卷)

## 史料二六

正徳五丁未年

一 山崎町の賣女屋を水金澤へ引移す 相川立始りの頃は上相川茶屋坂の邊を山崎町と唱へて遊女あり又小六町邊にも賣女屋ありて轡預を道傳と云ふ壹軒に三四拾人宛抱へて太夫と云ふもの壹人の役銀五匁宛出せしと云ふ新町 今の三丁目 には雇ひ女あり夥敷他國より来たり縫物洗濯物等をなし後には山崎町遊女とも成しと云

〔佐渡年代記』上卷)

## B3 上相川の御米藏

### 史料二七

(元禄元年)辰二月十五日、夜九郎左衛門町清十郎、上相川御米藏ノ家尻ヲ切、御米ヲ盗出候所、藏番見付捕出、御吟味之上清十郎父子弑人死罪

〔佐渡国略記』上卷)

※同様の記述が『佐渡年代記』にあり

### 史料二八

承応二癸巳年

一 相川四町目〔中略〕此節御米藏山之神愛宕町に弑軒須灰谷に三軒石扣町に壹軒鹿伏村に壹軒上相川に壹軒都合八軒ありしと云

〔佐渡年代記』上卷)

## 史料二九

御米藏

慶長年中始リテ左門町西側二五間七間ノ藏ヲ立ッ。(中略)寛永ヨリ承応迄五間二十八間ト五間二十五間トノ藏下山之神愛宕町ニ有之。其頃上相川今ノ法花寺境内ノ藏万治二己亥年水金沢へ移ストモ言フ。上相川番所、下鹿伏、下相川両村此三ヶ所ノ藏米ハ其近辺町へ御払ヒ上相川鹿伏ノ藏、元禄年中コボチ取ル下相川村ノ郷藏ハ享保年中墮テリ。

〔後略〕

〔佐渡相川志』)

## B4 集落の道・坂普請

### 史料三〇

(寛延二年十月)同廿一日、上相川茶屋坂橋御普請、御目付役藤浪次郎兵衛、人足百七人、公儀、勿論留木上相川御林ニ而御伐被成、残枝木七拾六束三步御勝、町同心吉村儀市郎・藤井伊七郎

〔佐渡国略記』上卷)

※同様の記述が『佐渡風土記』巻之中にあり

### 史料三一

(宝暦七年一月)同十六日、〔中略〕外茶屋坂道普請人足賃銭貳貫九百七拾六文御広間より町年寄仲間へ借用、人足共江相渡、町々小間割壱間二付三文五分壱厘宛取立、御広間へ相納

〔佐渡国略記』下卷)

### 史料三二

(天明五年二月)廿一日、庄右衛門町与左衛門角、上相川茶屋坂上ノ口之所、石垣よこ式間三尺程、高八尺程損所有之二付、町役人、書付を以相届候二付、御普請場所二付御目付役柿浪市之丞・御ふしん所より下山左太夫・人足頭久右衛門見分積リ立二付、立会小頭萩野喜左衛門・我等罷越

〔佐渡国略記』下卷)

### 史料三三

(寛政三年六月)六日、今般上相川所々道普請、先達而見分願出候、則被仰付候二付、右ふしん懸リ町同心中川丈右衛門ト渡部覚左衛門兩人江八太夫様被仰付候、町人足百九拾四人

〔佐渡国略記』下卷)

## B5 上相川の絵図作成

### 史料三四

(享保十八年六月十三日)同日、羽田村喜右衛門、上相川上ヶ地畑三願、地方役見分

〔佐渡国略記』上卷)

※舟崎文庫所蔵「上相川一筆絵図」(欠年)裏書に「羽田村喜左衛門、新田畑望場所、上相川絵図、味方孫太夫扣」とある。

### 史料三五

宝暦二壬申年

一 正月廿日を限り在々并相川町々より絵図を記して出さしむ

〔佐渡年代記』上卷)

※「上相川絵図」の作成された年代

C 上相川・六十枚番所

〔『佐渡風土記』 卷之中〕

史料三六

慶長六辛丑年

一 相川 初は鮎河と云 の内羽田村〔中略〕 此年上相川に大山祇の社を建て金銀山の鎮守とす五十里上相川に番所を立るといふ

史料三七

〔慶長六辛丑年〕

一 下戸五十里上相川 十分一始ル

〔『佐渡風土記』 卷之中〕

史料三八

上相川番所

当役所慶長年中ヨリ  
五味伊太夫

〔中略〕

相川各番所

〔中略〕

六十枚番所

当役始リノ年曆銀山開発ノ年ニ同ジ。

渡部甚兵衛

赤江橋樞右衛門

〔『佐渡相川志』〕

史料三九

上相川番所

慶長年中ニ始ル。此所ヨリ金北山へ三里廿一丁。道筋二石像ノ地藏菩薩正徳二壬辰年六月廿四日造立セリ。願主勘四郎町治左衛門、二丁目甚兵衛。

〔『佐渡相川志』〕

史料四〇

〔聞見録〕

元和八年相川番所、大間・羽田・上相川・材木町・海府ノ五ヶ所ナリ

〔『佐渡近世・近代資料集―岩木文庫』 上巻〕

史料四一

一ヶ年分諸番所御役并諸役納り覚

〔前略〕

一 四貫八百八拾七匁壹分 上相川番所

〔中略〕

上相川

一 七拾貳匁

柴札

〔後略〕

史料四二

〔天和元年〕 西六月、御奉行手廻り代官柳川儀右衛門、一

国町見致絵図仕立、〔中略〕 其節町見ノ道法左ニ記、〔中略〕 同所〔大門〕より上相川番所迄式拾三町拾壹間高サ六十一丈壹尺六寸四歩・羽田町より上相川番所迄高サ七拾式丈八尺五寸壹歩間数ニ直シ百式拾壹間式尺五寸壹歩〔中略〕 上相川番所より金北山江三里廿壹町・同所より祓川エ三十五丁三十五間〔後略〕

〔『佐渡国略記』 上巻〕

史料四三

寛政七乙卯年

一 去年中江戸表え伺し甚五雲子両間歩休山外吹買石差止の儀伺済に付両間歩番所役六十枚口番所役坂本え定番役外吹床屋番等拾餘人不用になり銀山定雇の者十四人外吹床屋下改小遣等も暇遣す

〔『佐渡年代記』 中巻〕

史料四四

享保十乙巳年

一 上相川番所役野上孫右衛門事青盤間歩穿子請直右衛門と云町人を討捨しにより孫右衛門並引合町人共吟味之上山岡傳五郎松平平蔵より伺し処孫右衛門御構無之其儘可為相勤旨御差図あり〔中略〕

〔『佐渡年代記』 上巻〕

史料四五

〔寛延三年八月〕 同十一日、町方御役所より町々江御触之趣

申触候

一、当御収納米、郷藏詰不相済候内、在々より相川江持出売買之事停止ニ被仰付候間、下戸・海府・上相川、右三ヶ所之番所口留ニ候間、此以後自然隠買等致候者後日ニ相知レ候ハバ、越度可被仰付候条、堅此旨を相守可申候、然共米並作徳米なり共、無摠儀有之取寄度筋有之候ハハ、別度可願出候、伺之上、御広間より之切手を以通用可為致候間、不隠置有躰ニ可願出候事、右之通、早速町々江相触可申候

午八月十一日

町方役両人名印

〔『佐渡国略記』 上巻〕

史料四六

宝暦三癸酉年

一 八月四日脇坂主計より御代官へ郷村引渡の事を達す  
〔中略〕

佐州奉行附之分

〔中略〕

上相川御番所役貳人 五味半十郎 中山四郎右衛門

〔後略〕

〔『佐渡年代記』上巻〕

#### 史料四七

〔宝暦八年九月〕同十六日、大間・羽田・上相川三ヶ所御番所相止、十月廿六日右御番所役御引、則役替

〔『佐渡国略記』下巻〕

#### 史料四八

宝暦九己卯年

一 生魚商賣の事〔中略〕上相川口よりも商ひ物入来るに付六拾枚口番所役改之 上相川口番所止しに依て也 折々見廻り例年九月より翌正月迄は通米有之時節に付別而度々見廻上相川武右衛門中使伊兵衛通役を取立油断無之様聲を掛尤心附たる筋於有之は早速可申聞旨を沙汰す

〔『佐渡年代記』上巻〕

#### 史料四九

〔宝暦十年六月〕同廿三日、左之通御役替

〔中略〕

六十枚 中山四郎右衛門・井戸多兵衛

〔後略〕

〔『佐渡国略記』下巻〕

#### 史料五〇

〔天明六年八月〕廿五日、御役替

〔中略〕床や定役より六十枚口定役格水品安右衛門、〔後略〕

〔『佐渡国略記』下巻〕

#### 史料五一

〔寛政五年十二月〕三日、御役替、〔中略〕六十枚鹿野源右衛門、〔後略〕

〔『佐渡国略記』下巻〕

#### 史料五二

〔寛政七年〕甚五間歩・雲子間歩両山共御差上、山師下田利左衛門・大坂惣左衛門兩人共割間歩へ被仰付、式人扶持計、六十枚口御番所・雲子御番所詰合無之ニ付、上相川町役人見廻り被仰付

両山掛り合之者御暇被仰付候者共

上相川山留伊太郎・同所帳付藤左衛門、〔中略〕

メ拾四人浪人

〔『佐渡国略記』下巻〕

#### 史料五三

〔安永四年〕未八月廿八日、役替、〔中略〕六十枚江藤浪次郎兵衛、〔後略〕

〔『佐渡国略記』下巻〕

#### 史料五四

六十枚番所ヨリ道法

甚五間歩釜口へ 三丁 壱間三尺

弥兵衛間歩へ 四丁卅八間一尺

雲鼓間歩へ 六丁卅八間一尺一寸

甚五間歩ヨリ向山甚右衛門上口へ南北ノ開キ六丁五拾八間

同所向山甚右衛門上口へ式丁 廿九間余

〔『佐渡相川志』〕

#### 史料五五

〔欠年〕相川町夜番詰会所書上

夜番詰会所

〔中略〕

一 上相川二ヶ所 メ式拾八ヶ所

〔相川町甲賀家文書〕明治大学刑事事博物館蔵

『新潟県史 資料編9 近世四』所収

#### D1 上相川の神社

#### 史料五六

慶長六辛丑年

一 相川 初は鮎河と云 の内羽田村 〔中略〕 此年上相川に大山祇の社を建て金銀山の鎮守とす五十里上相川に番所を立るといふ

〔『佐渡年代記』上巻〕

#### 史料五七

〔宝暦六年五月〕同十七日、上相川山ノ神町大山祇二能有之所、故有而相止

〔『佐渡国略記』上巻〕

#### 史料五八

大山 祇

社地十二間二十間 七畝拾歩除地上

山之神町

抑当社ノ濫觴ハ慶長六辛丑年銀山始リノ時也。即当社ヲ金銀山の鎮守トス。正保年中迄毎年神事能アリ。山之内常太夫是ヲ勤ム。其後中絶ス。元禄宝永ノ頃能或ハ松囃アリ。正徳年中ヨリ金銀山の衰ヘニ依テ社破損ニ及ブ。享保癸卯

年八月十七日御奉行小浜志摩守久隆金子奉納アリ。是ヲ以テ再ビ破損ヲ修復セリ。同十月十五日夜遷宮アリ。夫ヨリ毎年祭礼アリ。毎年五月十六日ナリ。

本社 鳥居ノ額ハ金津山永弘寺十二世順水松堂楚璞ノ蹟  
社司 下山之神安岡長門、宮守 九郎左衛門町定学院

〔佐渡相川志〕

## 史料五九

相川大山祇勸請之事 一、慶長六・丑・年上相川山之神町二・一・社・建・立・シ・テ・銀・山・鎮・守・ト・ス・同・十・年・巳・五・月・大・久・保・石・見・守・当・時・下・山・神・ニ・社・堂・建・立・同・十・二・未・年・台・命・ニ・依・テ・京・都・唯・一・神・道・ノ・官・領・吉・田・家・五・十・二・世・ト・部・兼・治・当・国・ニ・渡・海・シ・テ・大・山・祇・ヲ・勸・請・社・領・五・十・俵・毎・月・御・祈・禱・料・米・三・石・五・斗・印・附・銀・一・貫・目・宛・寄・附・此・銀・相・川・町・之・家・一・軒・ニ・一・匁・二・分・宛・電・役・ト・名・付・山・繕・同・心・毎・月・取・立・当・社・工・納・来・リ・其・後・電・役・相・止・銀・山・出・鍵・二・五・荷・之・外・一・荷・宛・山・ノ・神・鍵・ト・云・其・売・代・銀・ヲ・被・下・万・治・三・年・ヨ・リ・山・ノ・神・鍵・公・納・ニ・成・一・月・ニ・印・銀・百・目・宛・其・外・正・五・九・月・印・銀・八・十・一・匁・宛・被・下・社・堂・ハ・代々御上ヨリ御修復

〔佐渡故実略記』『佐渡国略記』上巻〕

## 史料六〇

十九、能 師  
慶長九辰年大久保石見守殿舞楽ヲ好ミ和州ヨリ常太夫、奈太夫二人ヲ召ス。其外脇師謡笛太鼓大小鼓狂言師等ニ至ル迄渡海シ来リ、山之内弥兵衛ト言フ処ニ住ス。石見殿陣屋ニテ能アリ。或ハ上相川大山祇等ニモアリ。〔中略〕

〔佐渡相川志〕

## 史料六一

相川上山之神

一、山 之 神 祠 官 安岡長門（守）成保

当社慶長六丑年相川銀山立始、則銀山山之鎮守として当社勸請と云。社地七畝拾歩、先年神事は山之内常太夫能を勤、寛永之頃中絶。元禄十五年午年鳥越間歩大盛に依て、湯上村本間左太夫能を勤。宝永之頃、中絶、明和八卯年九月廿六日、安永五申年八月三日舞囃子を勤。正徳之頃より銀山の変に仍て社頭損じ、享保八卯年八月十七日御奉行小浜志州久隆御参詣有て金子を奉納、仍て造営。十月十五日新に遷宮。是より毎年五月十六日祭礼相勤。明和八卯年八月十一日再建立。

〔佐渡国寺社境内案内帳〕中『佐渡叢書』第五巻〕

## 史料六二

（元禄元年）辰、上相川山ノ神町八幡ニテ囃子有之、是者

先年も相勤候得共中絶致、此度大村庄兵衛・荒川仁兵衛・夕白町大行院・勘四郎町山本次左衛門・南沢買石作右衛門取持ニ而相勤

〔佐渡国略記』上巻〕

## 史料六三

元禄元戊辰年

一 上相川山の神町八幡の社に於て先年は神事囃子ありしか久敷中絶せし処今年銀山の様子も宜敷故を以夕白町大行院勘四郎町山本仁右衛門など云町人より願ひて再び囃子を再興す

〔佐渡年代記』上巻〕

## 史料六四

（明和八年）卯八月十一日、上相川大山祇鳥居、本社拝殿再建立ニ付今日棟上、番匠小六町嘉兵衛、同九月廿六日舞囃子湯上村本間右内相勤、番組、弓八幡・熊野・春栄・加茂・竜田

〔佐渡国略記』下巻〕

## 史料六五

（安永五年八月）同三日、上相川大山祇ニテ舞・囃子、九ツ時方大雨降相止、番組、囃子高砂・同森久・能シテ右内実盛、是ニテ相止

〔佐渡国略記』下巻〕

## 史料六六

天保三壬申年

一 五月十八日上相川大山祇社修復に取掛候處天井に死骸有之旨訴出に付出役の者見分の處年を経候様子に而面鉢其外其枯腐不相分候へ共七ヶ年以前出奔いたし候上相川太三次死骸の旨着用物等に見覚有之無相違段俣岩次郎申立に付引渡遣す

一 右に付大山祇社は再建之積り壊取不浄の木品焼捨社人安岡石見不浄場所え立入候に付日数十日社役遠慮いたす旨を届る

〔佐渡年代記』中巻〕

## D2 上相川の寺院

### 史料六七

〔真言宗〕

曼荼羅寺末寺

雑太郎相川南沢

延命山 相 運 寺



当寺開基慶長七寅年、中興尊誓、先年は相運寺門徒に地藏寺、金剛院、慈眼寺と云ふ三ヶ寺あり。本寺相運寺慶安年中に退転に依て、右三ヶ寺曼荼羅寺門徒になり、正徳五末年九月曼荼羅寺江戸四ヶ寺え願、翌六申年五月地藏寺を相運寺と改名し、即ち末寺に改、慈眼寺は寛文年中退転。宝暦二申年本寺境内に一字建立、本山を限り右の寺号を用る。地藏寺即ち当寺相運寺境内壹反五畝廿六歩、慈眼寺境内貳拾歩、相運寺境内に組入、合壹反六畝拾六歩各々御除、相運寺もと境内上相川鍛冶町八間に貳拾四間半、下々畑三畝廿六歩、元禄七戌年御高入りに成る。地藏寺は慶長十二末年開基祐遍、相運寺の弘法大師の尊像は大師直作にして、讃州誕生寺より吉田作兵衛と云者故ありて守り来り当寺に納る。

〔中略〕

雑太郡西五十里村

吉祥寺

当寺正徳六申年末寺に改、開基宥天文廿一子年建立と元禄の寺社帳に有之。一説には寛永拾酉年上相川常徳寺退転により、右寺を以て秋田権右衛門建立とも云。境内壹町四反七畝廿七歩、各々除、当寺同村北山権現別当、当社天文十八酉年勧請、社地貳反七畝拾八歩除。

〔禪宗〕

総源寺末寺

相川町奈良町

桐谷山 妙音寺

当寺相川総源寺末、慶長十一年開基、往古は無本寺中頃退転に依て総源寺種翁再建して本寺の隠居地に定め、明和七年寅年五月廿八日焼失。同十月十一日建立、境内壹反壹畝貳貳歩御除。

〔法華宗〕

相川下寺町

普光山

本典寺

当寺京都要法寺末、元和九亥年四月本山廿一世日鉢上人渡海、当寺境内に庵を結び、寛永六丑年三月廿八日寺山号を改めこれを建立。本願主山田吉左衛門由重、是は京都の産にて要法寺の檀那、寛永十八巳年九月廿六日に死す。同日日鉢上人は慶安四卯年十一月廿日遷化、各々当寺に葬る。境内貳反八畝拾壹歩御除、同末上相川本行寺退転しその境内三畝貳貳歩を本典寺へ被下。享保廿卯年四月廿五日当国御奉行荻原源八郎乗秀卒去、当寺に葬。法号は覚夢院殿日

到と号す。亡父近江守重秀の石塔も当寺にあり、法号至誠院殿日秀、正徳三巳年十月廿五日卒す。

〔中略〕

相川下寺町

妙法山 蓮長寺

当寺京都妙覚寺末、開基円諦院日円、元和五末年二月上相川に建立、寺号を蓮林寺と云。第二世花徳院今の墓所の地に遷す。蓮長寺と改。延宝二寅年十一月当寺の境内に遷す、宝永六丑年八月再建立。境内六畝貳拾壹歩御除。

上相川柄杓町

経王山 法華寺

当寺京都妙覚寺末、開基恵性院日遊、寛永十八巳年建立。第七世日達貞享元子年五月今の地へ遷す。是れ迄は専念寺の後に有之、享保年中心善院再建立、境内四畝拾歩御免の外門前柄杓町々役拾軒の分の内宝永四亥年より四軒役御免。

〔中略〕

相川中寺町字大沢

得栄山 善行寺

当寺阿仏房村妙宣寺末、本山十三世日遵上人開基にして上相川に建立、其の後寛永五辰年善行坊日進今の地え遷す。享保十九寅年再建立。明和七寅年永聖免許、境内三反貳畝歩御除。

〔中略〕

相川上寺町字境沢

妙耀山 法久寺

当寺大野村根本寺末、開基日貞、元和八戌年六月上相川岩崎町に建立、此の所今は茶屋平出崎の由、寺号を法円寺と云、後法休寺と云ふ。寛永六巳年境沢へ移す。当寺京都妙覚寺末、寛文十一亥年根本寺末になる、此の節法久寺と書き改る。先年は円乗院と云寺家有之、貞享元子年十月、元禄十丑年十月両度再建。境内壹反歩御除。

相川上寺町字禪畑

法栄山 妙法寺

当寺大野村根本寺末、開基慶長九辰年日清といふ層撰州より渡海、上相川岩崎町に庵を建て法花堂と云ふ。能州金栄山妙成寺末にて、寛永六巳年寺地を今の妙法寺の上へ遷す。寺山号を改め根本寺末となる。其後大工町北側の下大坂町へ遷す。享保二酉年今の地へ遷す。此所南沢妙円寺もとの境内、反歩三反貳畝八歩、大坂町に貳反八畝歩、各々御除。

〔一向宗〕

相川六右衛門町

真宗山 広 円 寺

当寺京都西本願寺末、元和元卯年上相川九郎左衛門町に開基す。境内四畝廿四歩、元和七酉年越後国高田より空漸と云ふ僧渡海して、当時の地に善宗寺を開基、元禄十二卯年両寺一寺にして広円寺相統す。境内五畝九歩に町屋鋪。

〔中略〕

相川奈良町

專 照 寺

当寺京都東本願寺末、開基祐恩播州の産、元和元卯年渡海して当寺を建立、元和九亥年正月三日遷化、境内三畝六歩町屋鋪。

〔中略〕

相川紙屋町

称 念 寺

当寺京都東本願寺末、開基寛永八末年山之内左り沢に建立。延宝年中上相川に移す。境内老畝歩町屋鋪、正徳三巳年今の地へ移す。境内四畝六歩町屋鋪、是大間町願立寺のも

と境内。

〔中略〕

〔浄土宗〕

法界寺末寺

相川下寺町

鉄壁山 銀 山 寺

当寺相川法界寺末、往古は無本寺にて開基合譽永正四卯年十月十五日遷化。仏具に相川金山町銀山寺とあり、此所不知。中興林貞慶長十一年入院して再建立。慶安四卯年四月廿五日遷化。境内式畝三步御除、元禄四未年一誉観音堂建立。

〔中略〕

相川鍛冶町

光明山 專 念 寺

当寺京都知恩院末、開基大超寺とく慶長元申年の建立、義白は寛永十七辰年五月七日当寺に於て遷化。当寺の善導大師は海中より出現の由、形像の裏に小貝等有之、当寺釈迦涅槃形像七尺八寸、当寺三世本誉作、或る夜靈夢に依て改めて作る。境内式反歩、屋鋪老畝拾式歩、畑式畝四歩、各々御除。

相川鍛冶町

金亀山 玄 徳 寺

当寺京都知恩院末、開基然譽寿洼、生国和州、慶長十七子年建立。宝永四亥年八月、宝永七丑年七月、両度再建立、境内老反五畝拾歩御除。

〔天台宗〕

教寿院末寺

相川上山之神町

大 光 院

当寺相川教寿院末、慶長十三未年建立、境内老反歩御除。元禄年中退転。境内今の教寿院より支配。

〔佐渡国寺社境内案内帳〕中 『佐渡叢書』第五卷)

史料六八

天台宗

大光院 境内 十五間二十間 老反歩除地 上山之神町

下山之神教寿院末寺慶長十二丁未年開基ヨリ四世元禄八巳亥年十二月廿八日物故以後無住ニテ破壊セリ。寺地ハ本寺ヨリ支配ナリ。

禪宗

相谷山

妙音寺 境内十六間廿二間 一反一畝廿二歩除地 奈良町

町

下山之神町総源寺之隠居所即チ末寺也。慶長十一年丙午年開闢ス。中頃本寺四世積翁再興セリ。貞享三丙寅年朔日没ス。本堂五間。現住。

浄土宗

光明山

專念寺 境内廿四間廿五間 式反歩除地 鍛冶町

京知恩院末寺也。慶長元丙申年開基。但州出石ノ産。単譽義白中寺町大超寺ト両寺建立セリ。寛永十七庚辰年五月七日化ス。当時釈迦涅槃像長サ四尺八寸。当寺三世本誉の彫刻シ奉ル所也。願主山田村宗吟或夜ノ靈夢ニ仏像ノ御枕五寸下リシ由。其夜本譽夢想アルニ符合ス。急ギ拝シ奉ルニ靈告ニ違フ事ナシ。善導大師アリ。海中ヨリ出現ノ由。年月不知。像ノ背後二貝アリ。

金龍山

玄德寺 境内十間四十六間 一反五畝十歩除地 鍛冶町  
京知恩院末。慶長十七壬子年三月四日化ス。

一向宗（浄土真宗）

東

專照寺 境内八間十二間 三畝六歩 奈良町

洛陽本願寺末。元和元乙卯年開基。摂州ノ産。

御堂 六間七間 現住。

## 東

願泉寺 境内十一間八間余 式畝廿八歩 米屋町  
本願寺末。慶長十一年九郎左衛門町ニ建立ス。開基不詳ニ  
世法見寛永十六己卯年朔化ス。元文二丁巳年六月三日再建  
ス。寛保二壬戌年正月廿九日夜類焼ス。其後再建。宝曆四  
甲戌閏二月九日入仏。供養アリ。

本堂 現住法順元禄十五壬午年入院。

## 西

広円寺 境内九間五間半 一畝廿歩十三間二間半 一畝三  
歩九間半八間 二畝十六歩元禄七戌年檢地水請帳 善宗  
寺 丸山六右衛門町

西本願寺末。元和元己卯年開基九郎左衛門町々ニ建立ス。  
境内四畝廿四歩元和七辛酉年越後高田ヨリ空衛ト言フ僧渡  
リ今ノ境内ニ善宗寺ヲ開基ス。寛文十二壬子年八月九日没  
ス。元禄十二年己卯年広円寺空恵九郎左衛門町ヨリ今ノ地  
ヘ移シ両寺ヲ一寺トシテ相統ス。

御堂 方五間

法華日蓮宗

経王山

法華寺 境内十間十三間 四畝拾歩除地 水勺町

京妙覚寺末。慶長年中日源ト言フ僧鍛冶町今ノ専念寺後ニ  
庵ヲ結ブ。日源ヨリ三代恵性院日槌同十八年寺号ヲ開発ス。

寛永十甲戌年五月七日没ス。第七世日達貞享元甲子年夏五  
月今ノ地ヘ移ス。同四丁卯年九月四日ニ逝ス。今ノ本堂ハ  
享保年中心善院日勝再建セリ。此境内先キニ御米蔵地ニシ  
テ門前ノ町役十軒分ノ内宝永年中ニ四軒分ノ町役御免ナリ。  
法栄山

妙伝寺 境内廿二間四十四間 三反式畝八歩除地 治助

町稗畑

大野村根本寺末。慶長九甲辰年摂州ヨリ円清日時ト言ヘル  
僧来タリ。上相川岩崎町ニ庵ヲ結ビテ後法花寺ト名ケテ能  
州金栄山妙成寺末寺トナル。寛永六己巳年今の妙法寺ノ上  
ノ台ヘ建立ス。〔中略〕

妙法山

覚性寺 境内間廿二間 町屋敷 治助町

阿仏坊村妙宣寺末寺。寛永七庚午年本山十七世日迫開基。  
延享三乙卯年十月廿三日化ス。願主覚性院日ギ初メ上山之  
神ニ建立ス。境内六間七間壹畝十三歩除地。元禄年中今ノ

地ヘ移ス。

妙法山

蓮長寺 境内十一間半十七間半 六畝廿一步除地 下寺町  
京妙覚寺末。元和五己未年二月十二日開基円諦院日円上相  
川ニ建立ス。寺号ハ蓮久寺ト名ク。二世華徳院日泉今当寺  
ノ墓所ヲ移ス。〔中略〕

修験

当山方

万宝院

相川大行院末。山号円乗山普門寺同行近江国岩本院盤道寺。

奈良町

本山方聖護院末河原田千手院袈裟下相川修験

定学院 直末。同行京都六角堂住心院 九郎左衛門町

相川廃退ノ寺院或ハ両寺ヲ一寺ト為シ當時寺号相統モアリ。

日蓮宗 本行寺、上相川境内八間十四間京要法寺末。開基  
妙法院日詮寛永四丁卯年七月十一日没ス。四世寿玄院日忠  
寛文五己年五月十日ニ卒ス。以後退破セリ。寺地同末下寺  
町本典寺支配ナリ。祖師像今下寺町妙輪寺ヘ納ム。

宗旨不明 淨福寺 田町当寺教円延宝二と寅年六月十四日  
没ス。其後退転。

宗旨不明 敬音寺 鍛冶町 願泉寺 鍛冶町

宗旨不明 證誠寺 九郎左衛門町 光源寺 本町

長楽寺 小右衛門町 林光寺 茶屋町

〔佐渡相川志〕

## 史料六九

〔寛文四年〕塚原山 正教寺・御松 法性寺・川原田 法  
福寺・相川 蓮久寺・同 法花寺・同 瑞仙寺、右何も京  
都妙覚寺末之由訴訟候、公儀御帳ニも有之候間、本寺可相  
随、於付随者寺ニ付来り候仏像経巻什物等無相違寺中無恙  
寺ヲ本寺江可相渡、若申分於有之者、来ル八月中致参府可  
遂対決者也〔中略〕

〔佐渡国略記〕上卷

## 史料七〇

不受不施一乱之事

〔寛文六年〕午四月、諸国日蓮宗不受不施ノ僧徒御吟味ニ  
付、寛文九四年六月京都妙覚寺方末寺改ニ来ル、其節当国  
ニテ上相川法花寺下寺町蓮長寺上寺町法久寺下寺町妙輪寺  
大野村根本寺松ヶ崎村本行寺各妙覚寺末寺ニテ、〔中略〕

〔佐渡国略記〕上卷

## 史料七一

（延宝五年）巳七月八日、京都妙覚寺日充聖人阿仏坊江落着、同十五日下寺町蓮長寺江逗留、当寺并上相川法花寺下寺町妙輪寺ニテ説法之節四年以前從江戸来リ候流人僧林残ト法門有之候江共、御停止之間指而取合も無ク日充翌日出立此聖人ハ妙覚寺再住

末寺蓮長寺・同法花寺

（『佐渡国略記』上巻）

#### 史料七二

（貞享元年）子五月、上相川法花寺、今ノ所江引、此屋敷之訳寺社帳ニ記故爰ニ略ス

（『佐渡国略記』上巻）

#### 史料七三

（享保十年三月）同八日ハ十四日迄、上寺町法花寺説法、千座之供養

（『佐渡国略記』上巻）

#### 史料七四

（享保十七年）子四月六日ハ十六日迄、上相川専念寺観音開帳

（『佐渡国略記』上巻）

#### 史料七五

（享保十年三月）同八日ハ十四日迄、上寺町玄徳寺ニ而樂師開帳

（『佐渡国略記』上巻）

#### 史料七六

（元文三年）同年、法花宗上相川法花寺本堂建立

（『佐渡国略記』上巻）

#### 史料七七

（元文三年一月）同五日、上寺町法花寺ニテ寺建立鉦始、番匠下戸町長兵衛

（『佐渡国略記』上巻）

#### 史料七八

（宝暦六年三月六日）同日ハ同日迄、上相川専念寺ニ而観音開帳

（『佐渡国略記』上巻）

#### 史料七九

（延享四年）卯九月七日夜、上相川玄徳寺遷化、年四十二

（『佐渡国略記』上巻）

#### 史料八〇

（宝暦七年）丑三月十五日ハ十九日迄、上寺町法花寺七面開帳

（『佐渡国略記』下巻）

#### 史料八一

（宝暦八年四月朔日）同日、上相川玄徳寺入佛供養

（『佐渡国略記』下巻）

#### 史料八二

（宝暦十一年）同十一月朔日、上相川法花寺、宮浦村慶宮寺入寺目見江

（『佐渡国略記』下巻）

#### 史料八三

（宝暦十三年）未五月十二日、九郎左衛門町常学院相川町江所替願被仰付

（『佐渡国略記』下巻）

#### 史料八四

（明和二年三月）同五日ハ十一日迄、上相川専念寺観音開帳、同妙音寺同断、（後略）

（『佐渡国略記』下巻）

#### 史料八五

（明和三年四月）同十四日、上相川法花寺上京、是者当寺并本敬寺諸尊調ニ罷越、法花寺ハ七月廿日帰国、則諸尊調来ル

（『佐渡国略記』下巻）

#### 史料八六

（明和三年）同七月朔日、上相川専照寺入寺目見江

（『佐渡国略記』下巻）

#### 史料八七

（明和四年）亥四月八日ハ十五日迄、上相川法花寺ニ而諸尊開眼供養

（『佐渡国略記』下巻）

#### 史料八八

（明和五年二月）十一日、初午年賀、（中略）上相川法花寺

（『佐渡国略記』下巻）

#### 史料八九

（明和五年）子三月廿二日、上相川専念寺遷化、年四十一

（『佐渡国略記』下巻）

#### 史料九〇

（明和七年五月）同廿八日明六つ時、なら町妙音寺出火

（『佐渡国略記』下巻）

#### 史料九一

（明和七年十月）同十一日、上相川妙音寺建立棟上ケ

（『佐渡国略記』下巻）

史料九二

（明和八年三月）同八日<sup>ろ</sup>十五日迄、上相川・妙音寺・入仏供養有之

〔『佐渡国略記』下巻〕

史料九三

（明和九年三月）同十一日より十五日迄、上相川・なら町・万宝院・ニテ入仏法事

〔『佐渡国略記』下巻〕

史料九四

（安永四年十一月）同廿日、上相川・専念寺・入寺

〔『佐渡国略記』下巻〕

史料九五

（安永七年八月）同廿日夜、弥十郎町・権兵衛女房、上相川・常学院・井戸へ落死

〔『佐渡国略記』下巻〕

史料九六

（天明元年五月）同廿九日、上寺町・法花寺・十四世信解院遷化

〔『佐渡国略記』下巻〕

史料九七

（天明四年七月）十三日、御目付役西川長左衛門祖母死去、上相川・法花寺・ニ葬ル

〔『佐渡国略記』下巻〕

史料九八

（明和九年五月）同廿四日より廿八日、上相川・法久寺・ニ而番神堂供養、廿八日夜遷宮并開山百五十年忌法事相勤

〔『佐渡国略記』下巻〕

史料九九

（安永三年）午三月四日より八日迄、上相川・法花寺・ニ而七面大明神・稲荷大明神各遷宮、堂ハ去年作事、相殿ニ建立、法事中天氣不宜、六日雪ふり

〔『佐渡国略記』下巻〕

史料一〇〇

（文化十一年二月）上相川・法花寺・ニ而、法衣并衣類等去月十六日夜被盜取、鎮守稲荷神鏡大小弐ツ当月七日被盜取、此品々二月廿六日夜地内ニ有之

〔『佐渡国略記』下巻〕

史料一〇一

（文政六年二月）廿三日、元北河内村助右衛門弟助次郎儀、〔中略〕上相川・法花寺・仮旦那ニ相成、然処此度下相川村小

左衛門方へ養子ニ罷越候ニ付、離旦之儀法花寺へ申入候処、彼是申、取合不申候間、離旦之儀願出、双方御呼出之上、離旦いたし遣候様法花寺へ被申渡

〔『佐渡国略記』下巻〕

史料一〇二

（寛政元年六月）廿一日昼九ツ前、下山ノ神教寿院納屋焼失、〔中略〕右納屋ヲ大光院と申由教寿院申上候ニ付、〔中略〕大光院と申ハ上相川・山ノ神町ニテ、教寿院の末寺ニ候得共、年久敷退転ニテ、今ハ上相川・山ノ神ニハ無之候、〔後略〕

〔『佐渡国略記』下巻〕

史料一〇三

（享和元年十二月）廿一日、間山五ヶ町宗門人別ニ不正之筋有之、〔中略〕

妙法寺 専照寺 法花寺 玄德寺 法久寺 西光寺 興

禪寺 相運寺 瑞仙寺 善行寺 広源寺 〔中略〕

右式十六ヶ寺戊正月廿日逼塞御免、〔後略〕

〔『佐渡国略記』下巻〕

史料一〇四

〔佐渡国誌資料集〕巻四

二二 寛保元年 宿切手

申遣候

上相川 常学院

右者在々旦那廻り致度□□申付候、木質相對を以宿賃可申

〔庄實〕

候、尤此切手手当十二月切ニ用ひ申間鋪候、以上

〔寛元〕  
酉二月

地方役

矢渡孫左衛門 印

竹本市右衛門 印

宮崎七右衛門 印

河住傳藏 印

小崎十郎左衛門 印

市川孫惣 印

藤木武兵衛 印

柴田惣左衛門 印

野田左次馬 印

浅村小左衛門 印

須田両右衛門 印

西村徳右衛門 印

四組村々 名主

組頭

〔『佐渡近世・近代資料集―岩木文庫』下〕

## E 上相川の災害

### 史料一〇五

〔佐渡国誌資料集〕巻二

四 元和元年〔明治三十七年 大風・高浪による被害の記録〕

大風・高浪

〔中略〕

○慶安二年七月七日、大雨、連峰ノ土砂流れ出テ山内地方ニ氾濫シ、各坑口へ侵入シ、一方低地及沿川ノ地、即宗徳町、嘉左衛門町、清右衛門町、庄右衛門町、北沢町、坂下町、濁川町等、家屋ハ悉ク流失シ、宅地ニハ土砂堆積一丈二尺に及び、上相川ニ於テモ六十枚番所ヲ始メ番屋町、本町、鍛冶沢、桐木沢等ノ各戸ハ過半破損シタリ、其ノ他町内ノ橋梁ハ一モ全キモノナク、交通全ク遮断セリ

○寛永四年、八月二十三日、夜、大雨洪水出デ、山ノ内、濁川通大破、割間歩又墳塋シ、復タ一時廃タル〔名〕

○慶安二年、七月七日、暴雨洪水、未曾有ノ被害左ノ如シ〔年・略〕

〔中略〕

一、上相川方面ハ六十枚口番所ノ外、番屋、鍛冶沢、本町、桐木沢ノ各町ハ、濁川柄山押込、家屋過半損壊ス

一、右流出の箇所中、死人モアリ 人員不詳 鍵モ七、八十荷流出ス

〔中略〕

○同〔延宝〕八年、八月六日、大雨洪水、青盤間歩ノ堤潰エ、〔中略〕 同月十一日暁、又大雨洪水、前日より更ニ甚シク、清次間歩内ニテ男六人溺死シ、山ノ内ヨリ濁川通りノ家屋敷過半損害セラル、〔中略〕

○同〔延享〕三年、六月二十二日、暁ヨリ大雨ニテ水出デ、山ノ内ヨリ間ノ山川通大破、流出家屋二十七軒 年代記二十九戸 濁川ハ橋際ヨリ海浜迄所々崩潰、〔中略〕

○寛延元年、六月十六日、大雨洪水、銀山川通六十四箇所破壊、濁川通亦所々損壊ス、〔中略〕

○同〔天明〕七年、六月十三日、大雨洪水、山ノ内ヨリ濁川通及南沢川所々破損ス〔年〕

○同〔寛政〕六年、七月中屢大雨、山ノ内ヨリ濁川通り損所多クアリ〔年〕

○享和二年、八月三日、大雨洪水、山ノ内其他各町所々損

所アリ〔年〕復旧工事人夫千八百六拾人ノ内六百人ハ町内ヨリ廿昼夜ニ割合出ス〔年〕

○同〔文政〕十一年、〔中略〕 八月六日・七日大雨洪水、山ノ内、川通道、橋・石垣・川杵等損害多シ、〔中略〕

○弘化元年、五月二十三日ヨリ二十五日迄大雨洪水、山ノ内道路・橋梁・杵類流失、石垣所〔々〕崩潰、其他町内所々損害 郷村ニモ所々被害多カリシ〔年〕

○安政元年、七月六日、大雨洪水、町内諸川沿岸崩潰、殊ニ山ノ内ヨリ濁川通甚シク、人家ノ流失セルアリ 小倉・金丸亦家屋流失ス〔浮〕 国府・落合・石田等其他ノ橋梁多ク流失ス〔浮〕

○同〔安政〕三年、閏五月十三日夜、大雨洪水、山ノ内損害アリ〔浮〕

〔佐渡近世・近代史料集 ―岩木文庫―〕下巻〕

### 史料一〇六

承応三甲午年之賦

午年、相川間山ノ出火、上相川本町・治助町・南沢迄類焼之由、松木迄ト有之候間、何方ニ候哉難知、但一説ニ寺町円徳寺ノ出火共云

〔佐渡国略記〕上巻〕

### 史料一〇七

天保五甲午年

一 三月十五日夜上相川町岩次郎納屋より出火本家焼失外類焼なし

〔佐渡年代記〕下巻〕

### 史料一〇八

〔宝暦十二年〕午九月十五日八つ時、地震、〔中略〕相川ニ而怪我人左之通〔中略〕

小右衛門町 孫七

是者六十枚御番所外ニおいて柴刈居候所、落石ニ而両足ヲ打痛致出来候

〔後略〕

〔佐渡国略記〕下巻〕

### 史料一〇九

〔天保五年三月〕十五日夜、九時頃、上相川岩次郎納屋出火、本家過半焼失

〔佐渡国略記〕下巻〕

### 史料一一〇

〔天保五年七月〕十一日夜五時、上相川与吉屋敷裏差掛小

屋・出・火・有・之、外類焼なし

〔『佐渡国略記』下巻〕

#### 史料一一一

（安永二年三月十四日）同日昼、上相川・オノ・神ノ・山・大・焼、羽田村・方・人・足、地方懸り・町同心・町年寄罷越

〔『佐渡国略記』下巻〕

#### 史料一二二

（安永二年六月）同七日九ツ時、上寺町法久寺畑ヲ焼候ヲ火事と申、町々より人足相詰、依之向後者畑ヲ焼候節者先達而役所江相届候様被仰付

〔『佐渡国略記』下巻〕

#### 史料一二三

一 八月六日大雨にて青盤間歩の邊にありし壽貞堤押流し〔中略〕此時鈴木三郎九郎も登山せしかとも間山は水下となりし故上相川茶屋坂の邊にありて人夫を下知せしと云

〔後略〕

〔『佐渡年代記』上巻〕

### F 上相川の衰亡と奉行所の救済政策

#### 史料一二四

（文化二年六月）廿一日、大工町・右・上・相・川・迄、右町々後家住之者共義、近年打続銀山不盛、別而去夏以来米値段高値二而、営ミ方難渋いたし、是迄ハ少々所持之家財売払身命相送候処、此末暮方手段尽果候ニ付、米直段御引下ケ之御歎願、御奉行御発駕之御通訴可差上旨、一同申合居候趣町役人共承之指留候処、同文言之通訴両通町役人江相渡、右之段町役人差添御役所へ願具候様申之ニ付役目之もの御歎之願書相添、小前惣代七人召連罷出候間、右貧窮人四十七電、一家内每人別書相添、平野仁左衛門殿江差出ス〔後略〕

〔『佐渡国略記』下巻〕

#### 史料一二五

文化六己巳年

一 銀山最寄大工町より上相川迄町々寡女共近年打続銀山不景氣にて渡世を失ひ其去年以来米直段高直にて難渋に迫り少き家財をも売払是迄身命取繋候處此末手段に盡果候に付米直段引下の歎訴を柳澤八郎右衛門銀山え見廻の節通訴可致旨一同申合候趣町役人とも承り差留候處右願書町役人より差出し呉候様申候に付役目のもの願書相添御役所へ

出に付相糺候處難渋の躰相違無之に付人数八十人餘のものとえ五十日分飯米を遣す右飯米は御払米の内より相渡代錢別廉にて立替る

〔『佐渡年代記』中巻〕

#### 史料一二六

（文化八年七月）九日、上相川・益・蔵・祖父・与・左・衛・門・祖父・并・小・前・惣・代・留・七・外・五・人・之・者・共・連・印・ニ・而・願・出・候・者、上相川之儀ハ一町引離候場所ニ有之、商い方も薄く重ニ銀山方へ立入渡世いたし、勿論前廉方商人ハ武右衛門・与・左・衛・門・兩人之処、先年右沢御休山と相成候後は商い方も猶更劣り渡世相成兼、武右衛門義ハ去年下町へ引渡、當時与左衛門一人ニ而搦米并小間物類商ひ致候処、町内及困窮、追々他町江引移り、年々人数も相減、夫丈ケ商ひ向も手狭ニ相成、与左衛門義も元手薄ニ付夫々行届兼候間、引分れ下町江罷出度旨町内へ及相談候処、外品ハ格別町内ニ米商人無之候而ハ小前之もの共一日之貯さへいたし兼、仕事場を違く罷帰リ庄右衛門町迄飯米買入ニ罷出候而ハ、余程隔り候故至而差支難義ニ付、歩引錢貳百貫文御貸附被下候様願出候処、無扨筋ニハ相聞へ候得共、當時溜り之分無之、五拾貫文ニ而も不苦候ハハ御貸附可被下段御尋ニ付、町内小前相談之上五拾貫文致拝借ス

〔『佐渡国略記』下巻〕

#### 史料一二七

（文化十年）上相川・家・数・人・数・高・御・尋・ニ・付、寛政四子年之分書上ル、御下ケ金御書付此中入置

上相川町家数并人数覚

寛政四子年

一、人数貳百貳人

同五丑年

一、人数百九拾人

同寅年

一、人数百八拾七人

同卯年

一、人数百八拾壹人

同辰年

一、人数百八拾壹人

同巳年

一、家数四拾八軒

同午年

一、家数四拾八軒

一、人数百六拾四人

同十一未年

一、家数四拾八軒

一、人数百六拾三人

同十二申年

一、家数四拾六軒

一、人数百五拾五人

享和元酉年

一、家数四拾六軒

一、人数百五拾七人

同二戌年

一、家数四拾六軒

一、人数百貳拾壹人

同三亥年

一、家数四拾六軒

一、人数百拾八人

文化元子年

一、家数四拾五軒

一、人数百貳拾七人

同二丑年

一、家数四拾三軒

一、人数百貳拾四人

同三寅年

一、家数四拾三軒

一、人数百貳拾七人

同四卯年

一、家数四拾三軒

一、人数百貳拾四人

同五辰年

一、家数四拾三軒

一、人数百貳拾四人

同六巳年

一、家数三拾九軒

一、人数百貳拾五人

同七午年

一、家数三拾九軒

一、人数百貳拾三人

同八未年

一、家数三拾六軒

一、人数百六人

同九申年

一、家数三拾四軒

一、人数百拾人

同十酉年

一、家数三拾四軒

一、人数百拾人

ノ

右之通御座候、以上

酉閏十一月

町年寄 岩佐丈左衛門

伊藤三右衛門

(別紙)

当国之儀者金銀山稼ニ而成立候国柄故、金銀山之衰微者則国中之衰微ニ而終ニ者地役人といへども一統難儀ニ迫り候道理分明之事ニ付、先達而地役人共并市中之者ともまで夫々出錢いたし、古敷取明穿鑿等當時専ら取計候儀、畢竟者銘々之困窮眼前之事ながら、既に窮し候中□格別

之出錢いたし候故、尤以殊勝之事に候、右ニ付別段金銀山御仕入として、此度金五百両御下ヶ有之候、右者當時格別之御儉約中にて万事御入用向専ら相省候と頃、全クもつて金銀山及衰廢候得者一國中之潤助を失ひ、指当り末々之者とも今日之稼ニ離れ困窮ニ迫り可申儀を乍恐深く被思召候雖有御仁慈之及所ニ而、国中之ものとも冥加之程可申様も無之事ニ候、仍而者右御下金を加へ、いかにもして金銀山出方取直し、天明中寛政之始ニ茂出方立戻候様厚く心掛、一統可尽精力候、差当右御下ヶ金之驗も相見候様古敷取明穿鑿方等工夫いたし、何れにも先ツ来月中ニハ一十日鏈代三貫目も売立候積り一統採立可相励候、右之趣広間役以下掛り之者勿論、都而山方ニ携候末々之者迄も御仁慈之届候様厚く可被申渡候

西十一月

(裏)

御下金五百両之義ニ付御書付 組頭衆

〔佐渡国略記〕下巻)

史料一一八

文化八辛未年

一 上相川住居の者とも右澤御稼相止候以來渡世を失ひ追々下町に散乱いたし米商人有之處是又及困窮下町え罷出渡世いたし度旨小前の者共及相談候處米商人無之候ては当然の差支に相成候趣を以町内一同の者より米商人え拜借錢願出に付貸渡す

〔佐渡年代記〕中巻)

史料一一九

文化八辛未年

一 近年上相川最寄銀山稼相止一郷難立行跡に付御救旁最寄雲子間歩古敷取明青柳間歩穿鑿稼始る

〔佐渡年代記〕中巻)

史料一二〇

(文化八年十二月)十五日、御藏御払米貳拾石、為御救上相川町中江此度限り貳割安ニ而御払被下置、左之通り御受書上ル

一、御藏御払米貳拾石

右者上相川町之儀、市中とハ年申引離候町方ニ而、往古より金銀山江立入渡世仕罷在候処、近年上相川最寄銀山御稼無御座、渡世営方相成兼候ニ付、追々家数相減、當時者明家又ハ後家暮之者多ク人数少ニ相成候故、新古畑共追々荒所出来仕候得共起返之手段も無御座、畑方銀納



一ヶ年錢拾三貫文程つつ當時作付いたし候ものゝ年々償上納仕、彼是品々難渋之筋有之困窮相嵩、町内難成立体二付、御慈悲を以御救被成下候様、先達而願書奉差上候処、其後町内為御救、元雲子間歩御取明并青柳間歩御稼入之上、町内之者共右御場所へ御遣被下候二付、一同身命取統難有奉存候処、猶又今般被召出、右御稼入等者漸当秋より相始り月数も之義二付、格別之御義を以書面之御払米御藏御相場式割安御直段を以当年限買請被仰付候旨被仰渡、重々難有奉存候、然上ハ右代錢御藏江上納仕御米請取候ハハ町内人数二応シ早速割渡候様可仕、尤以来之例二者不相成、当年限之義二付、此後年々買請候義と心得違申間敷旨被仰渡、奉畏候、依之御請一札差上申所如件

文化八末年十二月 上相川町  
町代 太惣次  
中使 益藏  
名主 立右衛門  
御奉行所

右小前割当方ハ、案内人数高之内式才并年切他国出・年越在出省キ、敷役人家内をも組込買請之事  
但修験者差除候事

## 史料一二一

文化九壬申年

〔佐渡国略記〕下巻)

一金銀山出方寛政の頃迄は本途御入用にて稼候間歩五ヶ所にて山出金銀上納高三萬兩餘より壹萬八千兩餘宛有之候追々間歩數相減青盤鳥越二ヶ間歩に相成出方四千兩餘より三千兩程ならては無之古来不承及不盛に付市中は勿論在方迄も困窮におよひ就中上相川の儀は以前家数三百軒程の處當時三拾軒餘に成度々救の義願出候に付上相川最寄雲子間歩本口享保五子年迄出方稼有之洪水にて廢候場所取明其外青柳間歩手近く鏈引も有之候に付右場所取明人足上相川町の者雇入諸品等も右町内より買上の取統方御救に相成若不遠鏈附追々本途稼も相立候得は上相川の困窮眼前に立直り山出金銀上納高も相増両全の義に付去未九月よりせんさく御入用繰合両間歩取明に掛り候處上相川の者共一同入はまり格別抄取青柳間歩は一ヶ月三百目餘の出方に相成雲子間歩も五拾間程取明古来の稼所へ至り追々代銀壳立候様罷成可申處青盤鳥越両間歩鏈引薄目に相成損所等も有之餘程御入用相掛り可申脉に付青柳雲子御入用繰合相成兼候間当申

年より三ヶ年の間御金藏除金請取遣弘の積り牧野備前守殿え相伺候處伺之通被仰渡

〔佐渡年代記〕中巻)

## 史料一二二

〔文化十年〕上相川畑田成場所、左之通願主

本町  
一、下畑式畝三步 源右衛門 一、屋敷畑成式畝式拾歩  
同人  
一、屋敷畑成四畝拾五歩 同人 一、同式拾壹分 吉右衛門  
四口ノ九畝廿九分  
弥左衛門町  
一、屋敷畑成四畝分 茂兵衛 一、同式畝三分 半兵衛  
一、同式拾壹分 甚右衛門 一、同壹畝三分 左之助  
一、同式拾四分 三右衛門 一、同壹廿式分 吉兵衛  
一、同拾四分 長兵衛  
七口ノ壹反式拾七分  
合式反拾六分  
但畑取米壹斗九升六合当酉る減  
田取米九斗四合当取る増

〔佐渡国略記〕下巻)

## 史料一二三

〔文化十五年三月〕市中町役人一同・町代之者共願出候者、上相川町之儀者一郷立離れ候場未之町方ニ有之、往古者右町附右沢ニ数ヶ所敷所御稼御座候故、右御潤助を以渡世相営、家数も相応ニ有之、人数多ニ相暮居候処、中古る追年御休山等ニ相成、一郷致衰微、渡世ニ離難儀ニ迫り、外町へ立逃候もの多有之、漸當時家数三拾軒、人数百人余住居仕罷在、渡世営方無御座、先年方度々御救等右町方る願出、其時々御手当被成下取凌罷在、別而八年以前未年、青柳・雲子間歩御再興被成下、一郷之者共産業ニ有附難有奉存候、然處青柳之義者去々子年る御稼方御見合ニ相成、雲子之儀ハ引統御稼相立罷在候得共、未々盛をも得不申、何となく渡世薄ニ罷成候故、追々下町之方へ離散いたし候者も有之、自然与一郷断絶可仕、依右町内之者共一同連印を以此未取統方之義市中一同江談判致呉候様相歎候二付、右沢之内江新切山二三ヶ所も御取立被成下、多分上相川之者御遣ひ被成下候様願出、依之新切山一ヶ所御取立ニ相成、来卯六月を為右御入用钱御払米壹石二付三拾六文宛御取立ニ相成ル

〔佐渡国略記〕下巻)

#### 史料一二四

文化十三丙子年

一 去ル申年上相川町御救旁青柳雲子ニケ間歩取明の義相伺青柳は早速取明雲子は手広の敷所にて捗取兼去亥十二月迄延長九百九拾間餘取明穿鑿いたし候餘一ヶ月鏈代壹貫五百目程出来立一ヶ年百九拾両餘御益も有之積りに付本途稼に申付惣間歩大工御改高貳萬人にては不足可致哉に付取調申上候積り牧野備前守殿へ伺候處当子年より来る辰年迄五ヶ年之間本途稼申付年季明の節尚又可相伺旨被仰渡

〔『佐渡年代記』中巻〕

#### 史料一二五

文化十三年丙子年

一 雲子間歩年限本途稼八月二日より始ル

〔『佐渡年代記』中巻〕

#### 史料一二六

（文政二年）六月朔日、上相川救之ため、市中金三万貫文御払ニ割合出錢可致候間、右沢之内新切山御立、上相川町之もの共御遣被下候様去寅四月市中願出候処、江戸表江被仰立之上、此度上相川之内字小丸ト申所丹波沢与字改、右場所者大山祇上ハ方、当日釜ノ口結び有之、右掛り山方役柴野平兵衛・御目付役山下仁兵衛・其外せんさく掛り一統、山師大坂市郎右衛門・味方孫太夫・嶋川惣兵衛・下田利三郎、右下世話として上相川名主平四郎被仰付、右ニ付市中町役人一統右御場所江罷越

〔『佐渡国略記』下巻〕

#### 史料一二七

文政二己卯年

一 雲子間歩去冬以来新規の鏈引取出方連綿いたし候に付褒置

〔『佐渡年代記』中巻〕

#### 史料一二八

文政二己卯年

一 上相川大山祇社脇澤下岡山より新切山一ヶ所取建ル右入用は市中より出す

〔『佐渡年代記』中巻〕

#### 史料一二九

文政三庚辰年

一 雲子間歩御直山の儀并せんさく御入用の儀相場違ひ増納錢御益の内五分通請取方外吹稼金銀御買上代本途大工貳萬五千人分請取方去ル子年相伺候處為御試同年より当辰年

迄五ヶ年の間伺の通被仰渡年限相立候に付引統是迄の通り被仰付右の内外吹稼御買上代三段有之揚柄山出から山御買上代は以来請取不申拾ひ石鏈御買上代の儀は本途薄鏈御買上代と銘目御改替の儀水野出羽守殿え相伺候處来已より酉迄五ヶ年の間伺の通被仰渡ル

〔『佐渡年代記』中巻〕

#### 史料一三〇

文政四辛巳年

一 上相川新切山を止甚五間歩源太郎間切え移す

〔『佐渡年代記』中巻〕

#### 史料一三一

（文政八年七月）初摺立米並困窮人壹人江式升八合宛、極困窮人壹人へ四升五合宛、味噌屋町より上中通り上相川迄当日広恵倉ニおいて御渡有之、下通り町々者同十一日於右御場所御渡有之

〔『佐渡国略記』下巻〕

#### 史料一三二

（文政九年七月）九日、左之者共当戌正月困窮二付、御救願差上置候処、被召出銘々江御救米於広恵倉被下之（申略）上相川まさ、メ八人 壹人ニ付五斗宛

〔後略〕

〔『佐渡国略記』下巻〕

#### 史料一三三

（天保六年八月）上相川仲右衛門、御救として米壹石・錢貳貫文被下之

十八日、上相川仲右衛門儀、昨夜病死いたし候旨届書差出ス

廿二日、上相川仲右衛門厄介之者江、御救として錢拾貫文被下之

〔『佐渡国略記』下巻〕

#### 史料一三四

（天保六年十二月）廿五日、上相川ふよ困窮御救願差出候処、当日為御手当米五斗被下之

〔『佐渡国略記』下巻〕

#### 史料一三五

（天保七年八月）十二日、上相川仲右衛門困窮二付、為御救米壹石・錢壹貫文被下、同十七日夜同人病死之旨、翌十八日届書差出ス

〔『佐渡国略記』下巻〕

#### 史料一三六

（文化十三年八月）七日、材木町助左衛門持所上相川田地高式反式拾六分有之処、六月廿日頃る虫附相見、其上此間之長照故生立候稲穂出兼、一円用達不申、御收納米無心元候段訴出ル

〔『佐渡国略記』下巻〕

## G 1 上相川の事件・事故

### 史料一三七

（承応元年）辰二月十三日、上相川鍛冶町次郎三郎小脇差ニ而女房ヲ切殺ス

〔『佐渡国略記』上巻〕

### 史料一三八

（承応元年）辰九月、茶屋町ニ山稼致候五助ト云者有、女房おしやくト云、男子式人有之、惣領年十歳、弟九つ、五助病氣ニ罷成候間惣領ヲ出家ニシ在郷寺ニ遣、下人九兵衛ニ山稼為致候処、女房此者ニ申合五助ヲ切殺シ孤ニ包縁ノ下ニ入置病死之様ニ小僧方へ申遣、小僧来り候へハ弟父者縁ノ下ニ居候ト申候間、小僧見届早速御訴申上候処、御吟味之上女房髪剃り落シ馬に乗セ九兵衛ト兩人御仕置被仰付候

〔『佐渡国略記』上巻〕

※同様の記述が『佐渡年代記』にあり

### 史料一三九

（明暦三年）西正月十八日、江戸大火事ニ付、〔中略〕此節御城御金蔵焼失、金銀焼流、砂交り被成候間、北沢買石若狭源兵衛、同清兵衛、濁川勘兵衛、上相川庄兵衛、右之金銀流ニ掛、吹分ニ罷越候処、右之内悪敷儀有之、式三人死罪ニ被仰付、〔後略〕

〔『佐渡国略記』上巻〕

※同様の記述が『佐渡年代記』にあり

### 史料一四〇

（宝暦八年）寅五月廿日、式町目表町徳次郎、羽田村之内上相川御林ニ而横死、年四十三

〔『佐渡国略記』下巻〕

### 史料一四一

拔筋金御吟味一件  
近年相川町人之内、於内々買石共より筋金を買請、他国江致持参商ひ候儀達御聞、今般御吟味ニ付白状いたし、巳二月廿三日御仕置

獄門拾四人

一、卯九月朔日入牢、家財改御目付役  
上相川床屋町 伊兵衛

〔中略〕

一、卯九月朔日入牢、家財改御目付役  
同外記町 権十郎

〔中略〕

引廻シ三人

一、辰七月六日入牢 上相川田町 長八

〔中略〕

所払八人

一、上相川伊兵衛倅 伊太郎

〔後略〕

〔『佐渡国略記』下巻〕

### 史料一四二

（明和五年）子十月廿一日、上相川子之助・四十物町伊左衛門、各於山内落山ニ而死、伊左衛門年五十三

〔『佐渡国略記』下巻〕

### 史料一四三

（天明二年五月）廿一日、江戸水替与作・忠八外地水替四丁目留助・上相川市三郎、此四人非人へ御渡被成候、此もの共乗逃いたし候相談頭候ニ付、御吟味之上如斯被仰付、其節上相川武右衛門方へ寄居酒ヲのミ相談之所、武右衛門聞捨ニ致候由ニ付押込被仰付、六月十一日御免

〔『佐渡国略記』下巻〕

### 史料一四四

（天明三年六月）七日、拔筋金一件片付、〔中略〕共二ハ上相川武右衛門倅武吉罷越

〔『佐渡国略記』下巻〕

### 史料一四五

（文化六年二月）上相川大工留七衣類四品、紙屋町大工吉之助五品、炭屋町穿子石三品、当月晦日夜青盤建場ニ而被盜取候

〔『佐渡国略記』下巻〕

### 史料一四六

（文化十年三月）同十八日、元上相川長左衛門貸家、当時六右衛門町つね宿借青盤大工八助西三十歳、行衛不相知旨相届ル

〔『佐渡国略記』下巻〕

### 史料一四七

（文化十年九月）同廿三日、元上相川八助、是迄尋被仰付

有之処、不尋出ニ付、五人組長ハ・名主・中使急度御叱、八助者帳外被仰付候

〔『佐渡国略記』下巻〕

#### 史料一四八

〔文化十年〕十一月二日、元上相川・當時六右衛門町・つね・宿・借八・助義、先達而逃去、度々尋被仰渡候得共見当り不申ニ付、九月廿三日帳外被仰付候処、此節新穂村ニ而見当り候間、捕来候段届之

〔『佐渡国略記』下巻〕

#### 史料一四九

〔元文五年一月〕同廿二日、上相川・買石与・右衛門、山吹銀上納ニ付怪敷儀有之、買石商売被召上

〔『佐渡国略記』上巻〕

#### 史料一五〇

〔文化十一年四月〕十九日、当正月、市中名主・中使方願立候町年寄買請米拾石之儀、小前及シ方不行届不埒ニ付、名主式拾人江過料三拾貫文、中使拾七人江過料拾貫文被仰付候、但味噌屋町名主・中使。上中京町名主・中使、諏訪町名主・上相川・中使、右四ヶ町ハ小前江申聞不念之筋無之ニ付無構、〔後略〕

〔『佐渡国略記』下巻〕

#### 史料一五一

〔文化十一年五月〕十八日、雲子間歩大工上相川・かね・夫・松兵衛・戌三十二歳、四月十日山元江罷越候鉢ニ而家出いたし山元江も相詰不申候ニ付、是迄所々相尋候得友、何分行衛相知不申段届之

〔『佐渡国略記』下巻〕

#### 史料一五二

〔文化十一年十一月廿三日〕同日、上相川・松兵衛、是迄度々尋被仰付候処、不尋出ニ付、松兵衛帳外、宿・町役人御叱

〔『佐渡国略記』下巻〕

#### 史料一五三

〔文政七年六月〕廿二日、上相川・伊八・宿道心順心・千本村木挽嶋助兩人共村々徘徊いたし、風聞不宜、召捕出ニ付、牢預ケ被仰付

〔『佐渡国略記』下巻〕

#### 史料一五四

〔文政九年八月〕十七日、雲子間歩荷之番上相川・新兵衛儀、当月二日在方江用事之趣ニ而家出、妻りや義も同四日在中親族の方へ追善有之趣ニ而相越、其後兩人共不罷帰ニ付、

在方江申遣候処、其頃杯不来趣故、是迄相尋候江共行衛不相知段、養母かや・親類同所三太次・町役人加印ニ而訴書出ス

〔『佐渡国略記』下巻〕

#### 史料一五五

〔文政九年八月〕上相川・新兵衛・同人妻りや・下戸浜町勘六質屋いと、三人とも三十日尋被仰付ル

〔『佐渡国略記』下巻〕

#### 史料一五六

〔文政九年十二月〕五日、中山茶店ニ而盜賊いたし候江戸水替勘藏・大坂水替亥之助之兩人共牢内死罪、右勘藏質使いたし候上相川・たの娘むめ二十一歳鷺崎村江御渡ニ成ル、〔中略〕上相川・たの儀勘藏より借用錢三貫文并娘質使等いたし候質錢百文共御役所江可差出旨被仰付

〔『佐渡国略記』下巻〕

#### 史料一五七

〔文政十年〕上相川・たの・むめ・去戌年鷺崎村預ケ之処、当日御免之上、名主立右衛門江御引渡ニ相成

〔『佐渡国略記』下巻〕

#### 史料一五八

〔天保五年二月〕晦日、上相川・綱次郎儀、去十二月出奔いたし候旨訴書差出ス

〔『佐渡国略記』下巻〕

#### 史料一五九

〔天保五年〕羽田町佐五郎・南沢代次郎・上相川・縄次郎、右三人共六度目三十日尋相済候ニ付、帳外被仰付

〔『佐渡国略記』下巻〕

#### 史料一六〇

〔天保六年七月〕十三日、上相川・畑百姓・仲右衛門儀、年来羽田村役目之者江被頼、上相川・上羽田村御林世話いたし来り、昨十二日見廻リニ罷越候処、御林木伐採候者有之ニ付見答候処、仲右衛門ニ取掛り組伏、鈍ニ而左耳之上式ヶ所切付逃去候旨届書差出、〔中略〕

〔『佐渡国略記』下巻〕

#### G2 上相川の名主・中使

##### 史料一六一

〔明和四年二月〕同十七日、夷町八左衛門・悻源三郎、上相川・名主・武右衛門・方へ名跡ニ指越、湯上村・間右内妹ニ目合

〔『佐渡国略記』下巻〕

#### 史料一六二

（明和八年）卯十月廿五日、上相川名主武右衛門二代源三郎死去、是ハ夷町八左衛門実子、年廿七

〔『佐渡国略記』下巻〕

#### 史料一六三

（安永三年十月）同十七日、三町目中使、塩屋町名主、〔中略〕各是迄兼帶勤来り候所、向後者一町切ニ町役人相定候由被仰付、併六右衛門町・次助町・諏訪町・間山四町・上相川者は迄之通

〔『佐渡国略記』下巻〕

#### 史料一六四

（天明二年十月）七日、上相川名主武左〔右カ〕衛門世話煎名主被仰付、三町目吉左衛門跡役

〔『佐渡国略記』下巻〕

#### 史料一六五

（文化十三年九月）十日、上相川中使益藏儀、雲子間歩帳附・油番兼職被仰付候に付、町用難相勤退職願出ニ付以來ハ中使差止、名主相定可願出旨申渡ス

〔『佐渡国略記』下巻〕

#### 史料一六六

（文化十三年九月）十四日、上相川名主之儀、平四郎与申者当子五十一歳ニ罷成実跡成者ニ付、町中一同連印願書差出、即被仰付候

〔『佐渡国略記』下巻〕

#### 史料一六七

（文政二年一月）同日、上相川番屋町之内、東側屋敷畑成宅畝拾九分、平四郎所持の場所、去月十八日大雨之節水損いたし、其節訴出、当月九日見分、〔後略〕

〔『佐渡国略記』下巻〕

#### 史料一六八

（文政四年三月）廿九日、十ヶ年御定免切替ニ付、左之通相認、地方御役所江差出ス

〔中略〕

相川町惣代

諏訪町名主 立右衛門

庄右衛門名主 増右衛門

上相川名主 平四郎

〔『佐渡国略記』下巻〕

#### 史料一六九

町々 名主中使

往古ハ町々ニ名主モナク中使モナシ。家屋敷等売買ノ時町中ニテ証人ヲ立ツ。是ヲ月行事ト言フ。其後地子山崎雇役ノ公納始リ一、二町或ハ二、三町組合ニ中使ヲ定ム。其外町中ニテ重立タル町人ヲ其処ノ町年寄ト言フ。当時ノ町年寄ニハ異リ寛文四甲辰年六月十日町名主ヲ定ム。是ヨリ町名主中使ノ名アリ。

山之神町 鍛冶町 鍛冶沢 田町  
弥左衛門町 九郎左衛門町 上床屋町 外記町  
番屋町 本町 小右衛門町 相川町  
勾瓢町 勾瓢裏町 奈良町 茶屋町

相川町名主伝右衛門

相川町中使伊兵衛

〔後略〕

〔『佐渡相川志』〕

#### G3 その他

##### 史料一七〇

元和八戌年分諸運上覚〔中略〕 上相川・同（銀）百五貫八百五十三匁二分〔後略〕

〔『佐渡国略記』上巻〕

##### 史料一七一

（明暦二年）同六月、上相川柄杓町ニテ茄子ノ木ニ弦出ル

〔『佐渡国略記』上巻〕

##### 史料一七二

（寛文十二年）子四月廿三日、山主大工町松木八郎右衛門・米屋町宗岡安右衛門・上相川大村庄兵衛相州小田原江罷越、是者小田原方五里山奥ニ銀山ヲ見立候得共其所ノ者不功者故領主大久保加賀守様方御奉行五郎兵衛様江御頼ニ付、右三人被遣、道中少茂指支無之様ニ迎、加賀様方路金等被下候由

〔『佐渡国略記』上巻〕

##### 史料一七三

（寛文十二年）子四月六日、上相川大村庄兵衛麻五ツ時洗場江参候処、同所買石与右衛門屋敷之杉木之上ニ鴟老羽泊リ見る内に人ノ形に成立付ヲ着トキンヲ掛山伏ノ姿ニ成四方ヲ見廻シ愛宕山ノ方ヘ飛行ス、庄兵衛馳行方前、右之外愛宕山ノ事延宝四辰年ノ賦ニ記ス

〔『佐渡国略記』上巻〕

#### 史料一七四

(天和元年) 御上使御渡海之事 (中略) 五日、上相川・右相川・江御入、(中略) ○用人 宮下弥太夫 町奉行 内藤兵衛門・藤浪太郎左衛門・山師・買石 右ハ五月五日、上相川・戈(才?) 神迄出迎 ○諸役人 右ハ五月五日、上相川・御米蔵前江出迎

(『佐渡国略記』上巻)

※同様の記述が『佐渡年代記』にあり

## 史料一七五

寛永十二乙亥年

一 二月廿九日、三鬼猪兵衛海老名九右衛門か出せし相川地子銀高を記せし書物に家数千五百五拾六軒とあり是本家計りを記して借家小屋等は除きし故と見ゆれとも慶長元和の頃より代大に衰えしと見えたり 但相川の内を引分け地子銀を取立たる事かも忘れず

(『佐渡年代記』上巻)

## 史料一七六

(寛政二年九月) 廿五日、諏訪町立右衛門・上相川与十郎、右兩人銀山御入用諸品買入方御請負申上、前拝借六拾五貫文借請候二付、兩人所持之家屋敷質物ニ差上、代錢八拾貫文、見分御目付役西川鉄三郎様・小頭中川和久右衛門・我等罷越

(『佐渡国略記』下巻)

## 史料一七七

(寛政四年) 八月十四日、上相川・徳兵衛・屋敷之内ニ、石脂有之由ニ付見分、山方役柿浪市之丞・小頭山本徳左衛門・町年寄岩佐丈左衛門・山師秋田権之助・村上善十郎

表口六間・後拾壹間半 主徳兵衛

内三間二十壹間半分ケ 作兵衛

(『佐渡国略記』下巻)

## 史料一七八

寛政四壬子年

一 上相川・徳兵衛と云ふもの屋敷の内に石脂有之を見出す

(『佐渡年代記』中巻)

## 史料一七九

(寛政七年四月) 廿九日、上相川・床屋町・作兵衛・徳兵衛・地所裏通り・沢合之所・石脂有之ニ付御見分、山方役柿浪市之丞様御出ニ付、小頭山本徳左衛門殿・我等立合、石脂穿取被遊候得者、立合之程も難相知御座候二付、右兩人之ものへ御代地被下、其上引越をも被下置候様書付さ差出候二付、御糺之上相川ニ而武右衛門持町屋敷と畑成之処と兩所地代

武右衛門へ被下候得者引替可申由、此代錢五貫文引越料式拾貫文被下候様書付差上ル

(『佐渡国略記』下巻)

## 史料一八〇

石脂 方言いしわた

赤石脂・雑太郎相川の東・上相川といふところより出るもの・桃花色及び黄白の石脂も交れり〔後略〕

(『佐渡志』巻之十五)

※石脂＝硬質の粘土。様々な色があり、五色石脂とも呼ばれ、漢方薬(止瀉薬)として用いられた。

## 史料一八一

(寛政八年二月) 廿日、上相川・かぢ町・くめ立家破損二付、去冬より相川江出、相合住二居候処、同俸吉之助中尾間歩荷揚致候二付、右明家見廻り候所、叭包入置有之、(中略) 御役所へ指上ル、右之品山ノ内(欠) 盗まれ候由、盗賊ハ大工町附木留と申大工ノ由、廿九日御吟味之上追込水替被仰付候

(『佐渡国略記』下巻)

## 史料一八二

(寛政八年三月) 上相川・床屋町・作兵衛・徳兵衛・屋敷・尻・石脂有之場所、長九間・横三間・御買上ケ被仰付、地代錢五貫文被下、地方御役所ニ而御渡被成、右地所御見分山方役井口吉左衛門御出被成、仲間より藤沢罷越縄引致候処、兩人持分表口六間之外三間ハ徳兵衛持分屋敷畑成之尻ニテ、余間少々在之ニ付、絵図認、翌廿五日和太夫様へ藤沢申上候処、縄余り之所は可有之筈ニ候間、聞届候由被仰付候、尤右地所ニ付御用地ニ差上候段、名主・中使請印御取、町年寄も奥印差上ル

(『佐渡国略記』)

## 史料一八三

寛政八丙辰年

一 上相川・屋敷の内に石脂有之場所買上になる

(『佐渡年代記』中巻)

## 史料一八四

(寛政八年) 青盤敷役人八人不埒之筋有之取放シニナル、甚五元敷役人之内八人右替り帰投ス、(中略) 上相川・伊太郎・庄右衛門町・徳十郎・五郎左衛門町・幸右衛門・米屋町・喜右衛門・四十物町・三十郎・上京町・三左衛門・中京町・喜久右衛門・上相川・茂左衛門、メ八人帰投

(『佐渡国略記』下巻)

史料一八五

文化七庚午年

一 河原田町名主〔中略〕上相川寡女まさ養母へ孝行に付是又鳥目を遣す

〔『佐渡年代記』中巻〕

史料一八六

天保十一庚子年

一 上相川町熊次郎孝心奇特之趣相聞るに付鳥目を為取

〔『佐渡年代記』下巻〕

史料一八七

〔享保十七年九月〕同廿二日、相川質屋之内上相川惣兵衛・

庄右衛門町治左衛門・大工町權八・四十物町四兵衛・石扣

町勘兵衛・式町目治兵衛・合六人者当正月廿七日より町々

質屋二而質物二取候脇差類書付可差出由被仰付

〔『佐渡国略記』上巻〕

史料一八八

〔元文四年二月〕同七日、上相川長三郎死去、年五十七

此者大野村根本寺。竹田村妙宣寺・一ノ谷妙照寺各永地之

田地ヲ相納申候、其上相川式拾ヶ寺之寺院江も去巳年より

壹ヶ寺へ米壹俵宛毎年相納、追而ハ田地ヲ寄附可致由

〔『佐渡国略記』上巻〕

史料一八九

〔安永二年十月〕同廿九日、上相川与十郎死去、年六十三

〔『佐渡国略記』下巻〕

史料一九〇

〔天明三年八月〕廿三日、相川町々新規二御組分相成、町々

役人不残被召出、町方懸リ・広間役立会被仰付、組分左之

通

〔中略〕

上相川十六丁

〔『佐渡国略記』下巻〕

史料一九一

〔天明六年三月〕廿七日、相川町々宗門改有之、〔中略〕

南沢方大工町通り・上相川迄御目付役井上權右衛門・町年

寄岩佐七郎兵衛相改、〔後略〕

〔『佐渡国略記』下巻〕

史料一九二

〔天明七年三月〕廿五日、町々宗門改、南沢より大工町通り・

間山・上相川迄御目付役山本七太夫・村田七左衛門、

〔後略〕

史料一九三

〔天明八年三月〕廿日、町々宗門改、上式組、下四組

〔中略〕

御目付役

堀内台助 南沢

藤沢清右衛門 大工町

次助町

諏訪町

庄右衛門町

清右衛門町

嘉左衛門町

宗徳町

上相川

〔後略〕

〔『佐渡国略記』下巻〕

史料一九四

〔天明九年三月〕廿四日、宗門改、〔中略〕南沢より大工町

通り間山・上相川迄中川・藤沢、〔後略〕

〔『佐渡国略記』下巻〕

史料一九五

〔文化五年〕辰正月

相川町方江被仰出候御書付

露西亜船蝦夷地嶋々江来り狼藉ニおよび候ニ付、向後何れ

之浦方ニ而も露西亜船と見積候ハハ嚴重ニ打払、〔中略〕

右人足四百人割付方ハ、去卯年町々宗門男人数三千八百拾

六人ニ割、左之通手配致置

一、高四百人

〔中略〕五人上相川、

一、非常為御備竹鑓百五拾本市中ニ而仕立、人足百五拾人

手配り致置、万一異国船渡来之節ハ浜手三御番所江五拾人

ツツ為相詰候様被仰付、右人足割付方左之通り

〔中略〕式人上相川、メ五拾人海府御番所詰

〔『佐渡国略記』下巻〕

史料一九六

〔文化七年〕上相川かね養娘まさ義、かね姪ニ有之処、幼

年より養娘ニ相成、俱々相稼、極老之養母を相勞り何事も

心を不背、諸事孝行致段奇特ニ付、為御褒美鳥目五貫文被

下置候

右御奉行被仰渡候

（『佐渡国略記』下巻）

#### 史料一九七

（文化十年十一月）同廿一日、町医師松岡友肅義、旧来家伝之紫金丹売払候処、当年元祖二百年忌正當ニ付、為冥加大工町より上相川銀山内迄之内銀山稼之ものへ紫金丹八百包、其外在方医師手遠之村方江茂夫々施薬いたし度段届書差出、即被御聞置候、但在々江者九百包出ス

（『佐渡国略記』下巻）

#### 史料一九八

（文化十二年八月）廿日、青盤敷役人頭南沢理兵衛儀、〔中略〕上相川吉太兩人ハ穿鑿雇穿子遣被仰付候

（『佐渡国略記』下巻）

#### 史料一九九

（文化十三年八月）廿二日、雲子間歩御直山ニ相成候ニ付、帳附油番兼帶上相川益藏、〔中略〕小遣上相川栄吉

（『佐渡国略記』下巻）

#### 史料二〇〇

（文化十三年）青盤間歩山留上相川丹次郎被仰付

（『佐渡国略記』下巻）

#### 史料二〇一

（文政六年七月）廿一日、上相川長左衛門儀、青盤間歩山留頭被仰付候ニ付、外並之通町役宅軒分御免被仰付候旨、益田丹右衛門殿を御相談有之

（『佐渡国略記』下巻）

#### 史料二〇二

（文政七年八月）十一日、御奉行泉本正助様帶刀坂新道御見分、〔中略〕雲子越より上相川茶屋坂通り諏訪町万行寺脇道へ御懸り、〔後略〕

（『佐渡国略記』下巻）

#### 史料二〇三

（文政七年十二月）九日、御林朶木、羽田町を北下通り不残、大工町・間山・上相川、右町々小前之者共、於上相川御林被下之、地方を藏田太中出役有之

（『佐渡国略記』下巻）

#### 史料二〇四

（文政八年）三月二日、諸色直段之儀ニ付御書付を以被仰出、町々ヲ四組ニ引分ケ、町年寄耆人ニ町役人之内并重立ヲも差加へ下懸り申付、一ヶ月分宛四組分帳面ニ相認メ可差出旨、才右衛門殿より被申渡候ニ付〔中略〕

下京町 八百屋町 会津町 中京町 上京町 左門町

大床屋町 新五郎町 六右衛門町 南沢 大工町

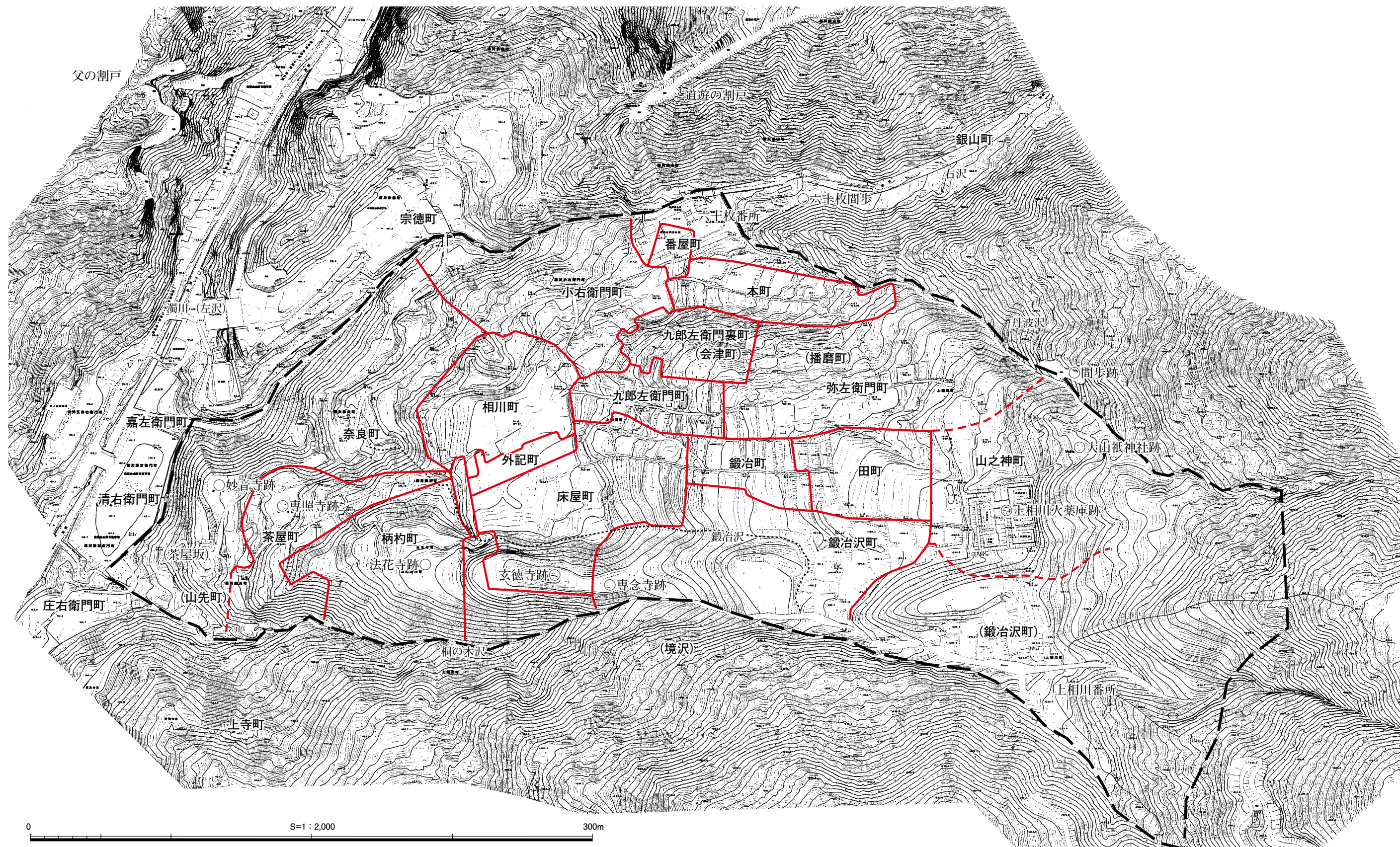
諏訪町 次助町 庄右衛門町 清右衛門町

嘉左衛門町 五郎右衛門町 惣徳町 上相川

右町々藤沢虎之助・新五郎町名主久兵衛・嘉左衛門町名主増右衛門・新五郎町甫助・下京町与右衛門・大工町李十郎・諏訪町立平

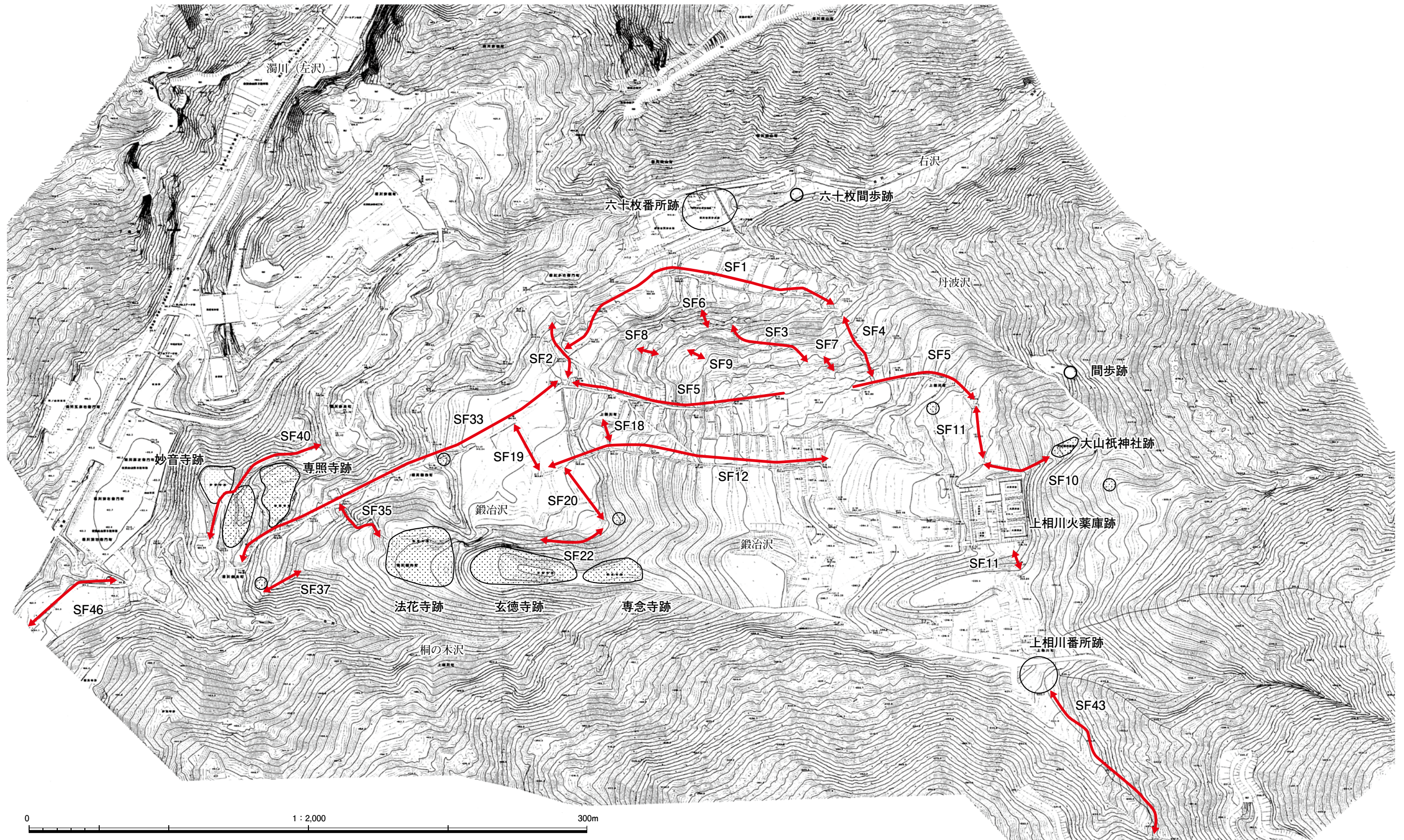
（『佐渡国略記』下巻）





第 6 図 上相川町域範囲図 (上相川地形図 [佐渡市教育委員会 2007] に明治 21 年の「相川町字図」を合成)





0 1 : 2,000 300m

| 凡 例 |  |           |
|-----|--|-----------|
| 道跡  |  | 寺社・石造物分布域 |

第 15 図 調査区外 道跡・寺社・番所・石造物分布図